名古屋市文化財調査報告62

埋蔵文化財調査報告書48

尾張元興寺跡（第10次）
伊勢山中学校遺跡（第10次）
津賀田古墳
戸田遺跡
NN319号窯群

2003

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書 48　正誤表

頁	行	誤	正
例言	28	堀木恵美子	堀木真美子
例言	28	名古屋市戸田小学校	名古屋市立戸田小学校
P20	2	SK5[右手前]	SK6[右手前]
P81	第 7 図 ④－④'壁西面	L=16.5m	L=17m
P83	第 8 図　第 2 主体部内副葬品	F	刀
P90	19~22		刀子（第 9 図 2）の条の全ての記述を、P88 鹿角装刀子の条の後（P88 の 22 行目以下）へ挿入 （※第 2 主体部ではなく第 1 主体部の遺物であったため。）
P87	第 11 図		図の縮尺は 1：2
P118～120	第 2･4･5 図		図の縮尺は 1：80
P119	第 3 図		図の縮尺は 1：40
巻末報告書抄録	「津賀田」（古墳名・町名とも）のふりがな	つがた	つかた

埋蔵文化財調査報告書48

尾張元興寺跡（第10次）
伊勢山中学校遺跡（第10次）
津賀田古墳
戸田遺跡
NN319号窯群

2003

名古屋市教育委員会

例　言

1．本書は、名古屋市教育委員会が実施した市内５箇所の発掘調査の報告である。

2．収載した遺跡は尾張元興寺跡・伊勢山中学校遺跡・津賀田古墳・戸田遺跡・NN319号窯群であり、各調査の概要は以下のとおりである。

尾張元興寺跡第10次

調査期間　2002年１月10日～２月26日
調査位置　名古屋市中区正木四丁目908
調査原因　個人住宅建設
調査面積　約120㎡
担 当 者　木村有作、伊藤正人

伊勢山中学校遺跡第10次

調査期間　2002年７月17日～８月16日
調査位置　名古屋市中区正木三丁目901-４
調査原因　個人住宅建設
調査面積　約110㎡
担 当 者　服部哲也、藤井康隆

津賀田古墳

調査期間　1998年６月１日～８月28日
調査位置　名古屋市瑞穂区津賀田町二丁目75･76
調査原因　土地造成
調査面積　約290㎡
担 当 者　伊藤厚史、伊藤正人（整理　藤井康隆）

戸田遺跡

調査期間　2002年11月５日～12月６日
調査位置　名古屋市中川区戸田二丁目2016-１
調査原因　個人住宅建設
調査面積　約80㎡
担 当 者　纐纈茂、伊藤正人

NN319号窯群

調査期間　2002年４月１日～５月24日
調査位置　名古屋市天白区土原１丁目
調査原因　病院建設
調査面積　約300㎡
担 当 者　服部哲也、田原和美

3．調査に関する調整事務は、名古屋市教育委員会文化財保護室が、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。

4．現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々からご協力・ご教示を得た。記して謝意を表します。（敬称略、順不同）

尾野善裕・丸山竜平・鈴木敏則・加納俊介・伊藤雅乃、上村喜久子、小野映介、鬼頭剛、金原恵二、金原昌代、鈴木正貴、樋上昇、堀木恵美子、藤澤良祐、村岡幹生、新美倫子、名古屋市戸田小学校、愛知県埋蔵文化財センター

5．発掘調査および資料整理参加者。藤沢忠裕、山口香代子、大矢頭、小浦美生、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木佳子、山本雅代、杉浦綾子、稲田望子、樋上佐知子、岡地田津、川島剛紀、東夕子、水野悦子、東谷桂子、亀谷真弓、三輪美恵子、藤村文子、安藤幸江、野邊地章太、市橋久美子、石田悦子、恩田知美、倉井孝博、福浦由美、野尻久貴、関田有美子、大井勇人

6．本書の基準高は東京湾平均海水面（T.P）を、平面直角座標は、2002年４月１日の測量法改正以後の調査である伊勢山中学校遺跡第10次・戸田遺跡・NN319号窯群については新基準による値を、それ以前の尾張元興寺跡第10次・津賀田古墳については旧基準の数値を使用している。ただし、巻末の報告書抄録の緯度経度については新基準に統一した。

7．図・表・写真の番号は各調査ごととした。

8．出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

9．本章の執筆者名は目次に記したが、戸田遺跡６は新美倫子氏（名古屋大学博物館）、同７は小野映介氏（名古屋大学大学院生）・鬼頭剛氏（㈶愛知県教育サービスセンター）に、また津賀田古墳Ⅴは藤根久・古橋美智子氏（㈱パレオラボ）による。

目　次

尾張元興寺跡第10次

Ⅰ　調査の経過……3
　1　「尾張元興寺跡」と過去の調査……3
　2　調査の経過……3
　3　日誌抄……5
Ⅱ　調査の内容……5
　1　基本層序……5
　2　遺構……5
Ⅲ　遺物……21
　1　土器類……21
　2　瓦類……21
　3　近世遺物……39
Ⅳ　結語……51
（執筆　木村）

伊勢山中学校遺跡第10次

Ⅰ　はじめに……54
　1　位置と立地……54
　2　周辺の遺跡……54
　3　遺跡の概要……54
Ⅱ　調査の経過……55
　1　調査に至る経過……55
　2　日誌抄……56
Ⅲ　調査の内容……56
　1　基本層序……56
　2　遺構と遺物……56
Ⅳ　おわりに……60
（執筆　服部）

津賀田古墳

Ⅰ　位置と環境……72
　1　古墳の位置と立地　（伊藤）……72
　2　周辺の遺跡　（伊藤・藤井）……74
Ⅱ　調査の経過　（伊藤）……76
Ⅲ　遺構と遺物……78
　1　古墳の遺構　（伊藤・藤井）……78
　2　埋葬施設出土遺物　（藤井）……84
　3　古代～中世の遺構と遺物
　（伊藤）……90
　4　近世～近代の遺構と遺物
　（伊藤）……92
Ⅳ　後論　（藤井）……94
Ⅴ　津賀田古墳出土須恵器内残留物の検討
　（藤根・古橋）……98
（執筆　伊藤厚、藤井、藤根・古橋）

戸田遺跡

1　戸田遺跡について　（伊藤）……114
2　調査の経過　（伊藤）……115
3　土層　（伊藤）……116
4　遺構　（伊藤）……117
5　遺物　（伊藤）……126
6　戸田遺跡出土の動物遺体
　（新美）……134
7　濃尾平野南部に立地する戸田遺跡の地形環境
　（小野・鬼頭）……135
8　小結　（伊藤）……137
（執筆　伊藤正、新美、小野・鬼頭）

NN319号窯群

Ⅰ　はじめに……140
　1　位置と立地……140
　2　調査の経過……140
Ⅱ　調査の内容……141
　1　遺構……141
　2　遺物……143
Ⅲ　おわりに……145
付　緊急調査……160
（執筆　服部）

付　記

測量基準の世界測地系移行について

平成14年（2002年）４月１日、測量法が改正され、測量の基準が日本測地系から世界測地系へと移行した。これにより、日本経緯度原点の原点数値が変わり、経緯度の数値やこれに基づく国土座標数値も変更された。埋蔵文化財の調査に伴う測量も例外ではなく、平成14年３月以前の旧基準による測量データは、４月以降の新基準によるものとは同じ数値が別地点を示すこととなった。

つまり、「どこの場所を調査したか」の最も正確に記録保存されなければならないデータの基本に関わる変更であり、今後、近接地で実施した調査との位置関係の確認や、複数の調査地点の集成図作成等の作業にあたっては、十分な注意が必要となる。

世界測地系に統一され、旧データは、変換しなければ基本的に使用できなくなることを考えれば、原則的には、すべての従来記録を新基準に変換・改訂すべきであろう。しかし、膨大な作業を直ちにおこなう余裕がないことや、例えば地図類は、旧基準で作成されたものを用いざるを得ない場合が多い。現実的には、すでに報告書等の印刷物に掲載された記録類の使用に際して、旧基準であることを理解し、必要に応じて変換することになるであろう。

さて、本書で報告する各調査の測量は、測量法改正以前と以後のものがあり、報告にあたっても基本的には当時のデータのままとしたため、新旧基準のデータが混在することとなった。例言にも記したが今後の混乱を招かないためにも再度ここに明示しておく。

【旧基準による国土座標数値】

尾張元興寺跡第10次・津賀田古墳

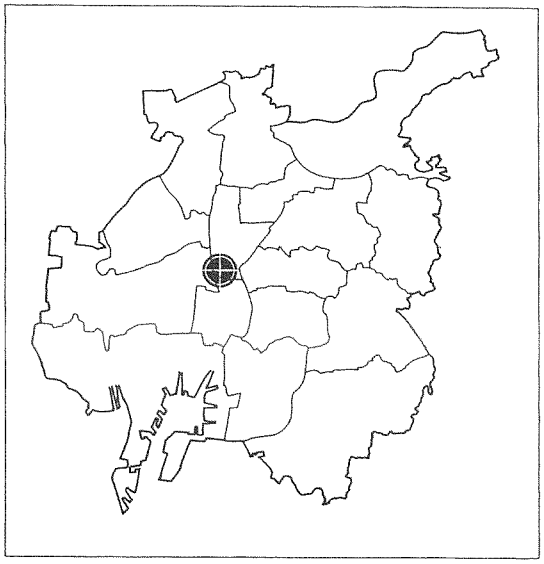
【新基準による国土座標数値】

伊勢山中学校遺跡第10次・戸田遺跡・NN319号窯群

尾張元興寺跡
第10次発掘調査

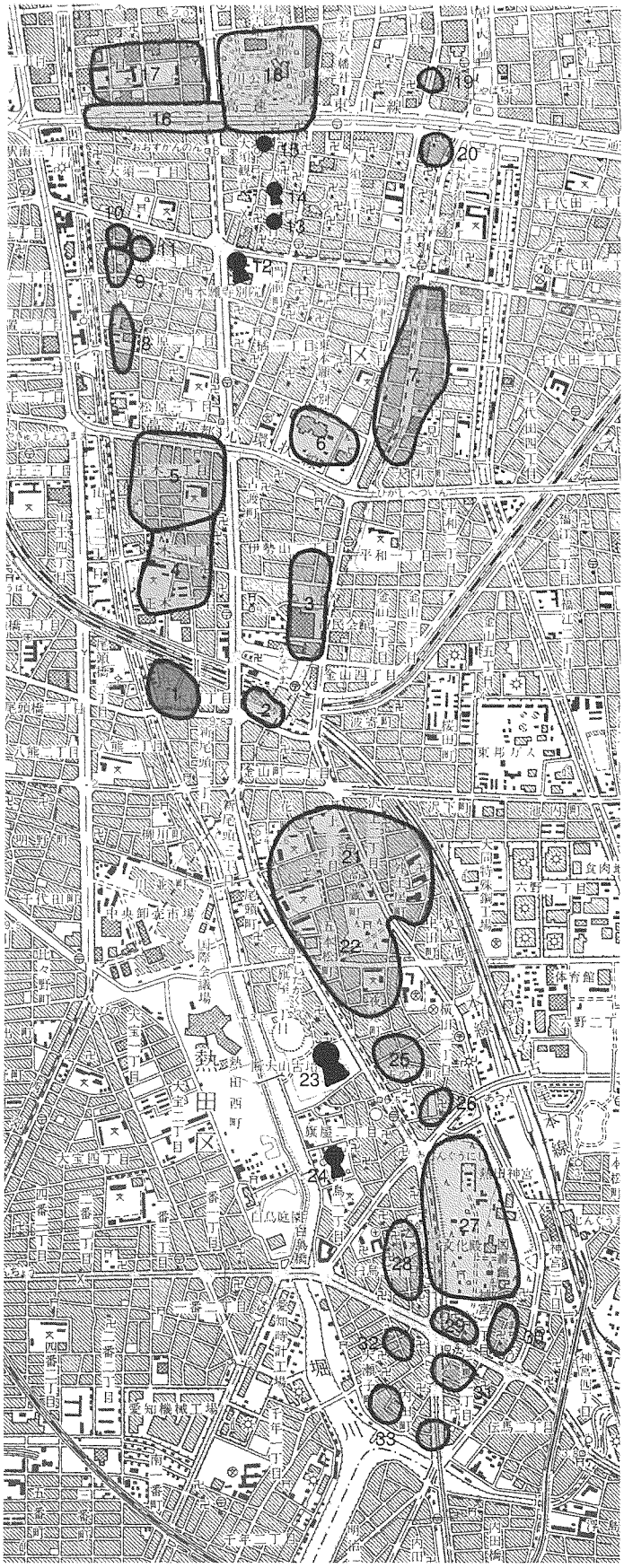
写真１　「パルメット」紋瓦当
（SK30出土）

写真２　SK７南端の瓦だまり



第１図　尾張元興寺の位置

番号	遺　跡　名	種　　別	時　　代
1	尾張元興寺跡	寺院跡	古墳～近世
2	東古渡町遺跡	散布地・貝塚	弥生～中世
3	古沢町遺跡	散布地・貝塚	縄文～奈良
4	伊勢山中学校遺跡	散布地・集落跡	弥生・古墳・中世
5	正木町遺跡	散布地・貝塚	弥生～江戸
6	古渡城跡	城跡	戦国
7	富士見町遺跡	散布地・貝塚	弥生・古墳・中世・近世
8	松原遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
9	旅篭町遺跡	散布地	縄文・古墳・中世
10	岩井通貝塚	貝塚	縄文・弥生・中世
11	西脇町遺跡	散布地	弥生
12	大須二子山古墳	古墳	古墳
13	浅間神社古墳	古墳	古墳
14	那古野山古墳	古墳	古墳
15	日出神社古墳	古墳	古墳
16	旧柴川遺跡	散布地	縄文～江戸
17	竪三蔵通遺跡	散布地・集落跡	旧石器～江戸
18	白川公園遺跡	散布地	古墳・平安～江戸
19	南大津通遺跡	散布地	弥生
20	小林城跡	城跡	戦国
21	高蔵遺跡	貝塚・集落跡	弥生～中世
22	高蔵古墳群	古墳	古墳
23	断夫山古墳	古墳	古墳
24	白鳥古墳	古墳	古墳
25	玉ノ井遺跡	散布地	弥生～中世
26	森後町遺跡	散布地	弥生～中世
27	熱田神宮遺跡	散布地	弥生～中世
28	熱田Ｃ遺跡	散布地	中世
29	熱田神宮南門前貝塚	貝塚	弥生～近世
30	新宮坂貝塚	貝塚	縄文～中世
31	熱田Ｂ遺跡	散布地	中世～近世
32	熱田Ｄ遺跡	散布地	中世
33	御浜御殿跡	館跡	江戸



第２図　周辺の遺跡

（国土地理院１/25,000「名古屋南部」使用）

Ⅰ　調査の経過

1　「尾張元興寺跡」と過去の調査

「尾張元興寺跡」とは現在名古屋市において登録されている遺跡名であり、７～９世紀頃存在した古代仏教寺院の推定地一帯を指す。この古代寺院は、『日本紀略』元慶八（884）年八月二十六日甲寅の条に記された「尾張国愛智郡定額願興寺」であった可能性が高い。「願興寺」とする理由や寺院の変遷については、すでにこれまでの報告書で詳しく述べられている［名古屋市教委1994・2002］。

推定範囲内は、古代寺院建立以前や衰退以降の時期における良好な遺跡でもある。近代以降、市域中央部という絶好の立地条件が災いし、遺跡範囲の北端付近は旧国鉄や私鉄線による大規模な開削による破壊を受ける。戦後、急速な都市化がすすみ、遺跡は市街地の中に埋没していった。昭和55年の正木南公園での緊急調査を経て、昭和59年に市教育委員会による本格的な発掘調査が実施されることとなった。以来、19年間に10次の調査を数えるが、出土する大量の古瓦片に比べ肝心の伽藍に関わる手がかりは極めて少ない現状にある。わずかな光は、平成11年の７次調査における銅製「水煙」の発見であり、地面に突き刺さった状況から至近に「塔」の存在が指摘され、その位置は７次調査区の北西約50ｍ以内と推定される。地道な調査の積み重ねと地中に残された幸運のかけらから、長く「まぼろしの寺」といわれつづける「尾張元興寺跡」も復元への手がかりをつかみつつある。

2　調査の経過

10次調査地点である正木四丁目908番地は、遺跡範囲の中央からやや南東寄りに位置する。駐車場として利用されていたが、平成14年に個人住宅新築が計画されることになり、市教育委員会文化財保護室に埋蔵文化財の取扱についての照会があった。文化財保護室では早急に試掘調査を実施し、地下の埋蔵文化財が良好に依存すると判断し、発掘調査の必要性を事業者に伝えた。

事業者との協議調整の結果、地下の埋蔵文化財に影響をあたえる約110㎡の範囲についての発掘調査の実施が決定した。敷地内に排土を積み置きする必要から、調査範囲を南北に２分し、北半を前半区、南半を後半区として折り返し調査することとした。平成14年１月10日に発掘調査の排土工事に着手し、同年２月26日に現地での調査を完了した。

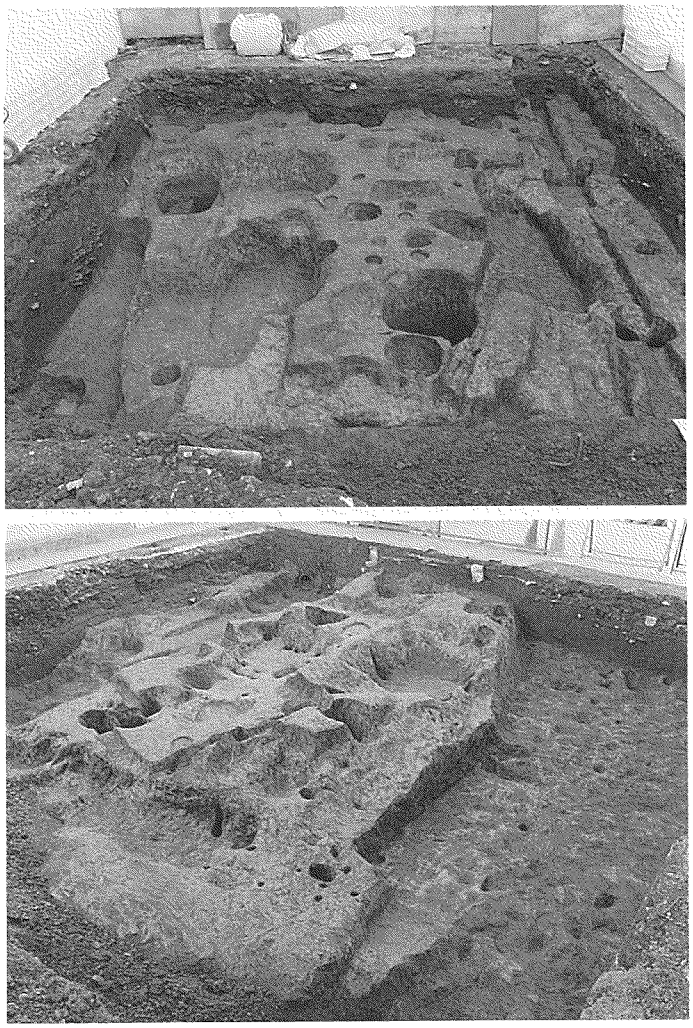
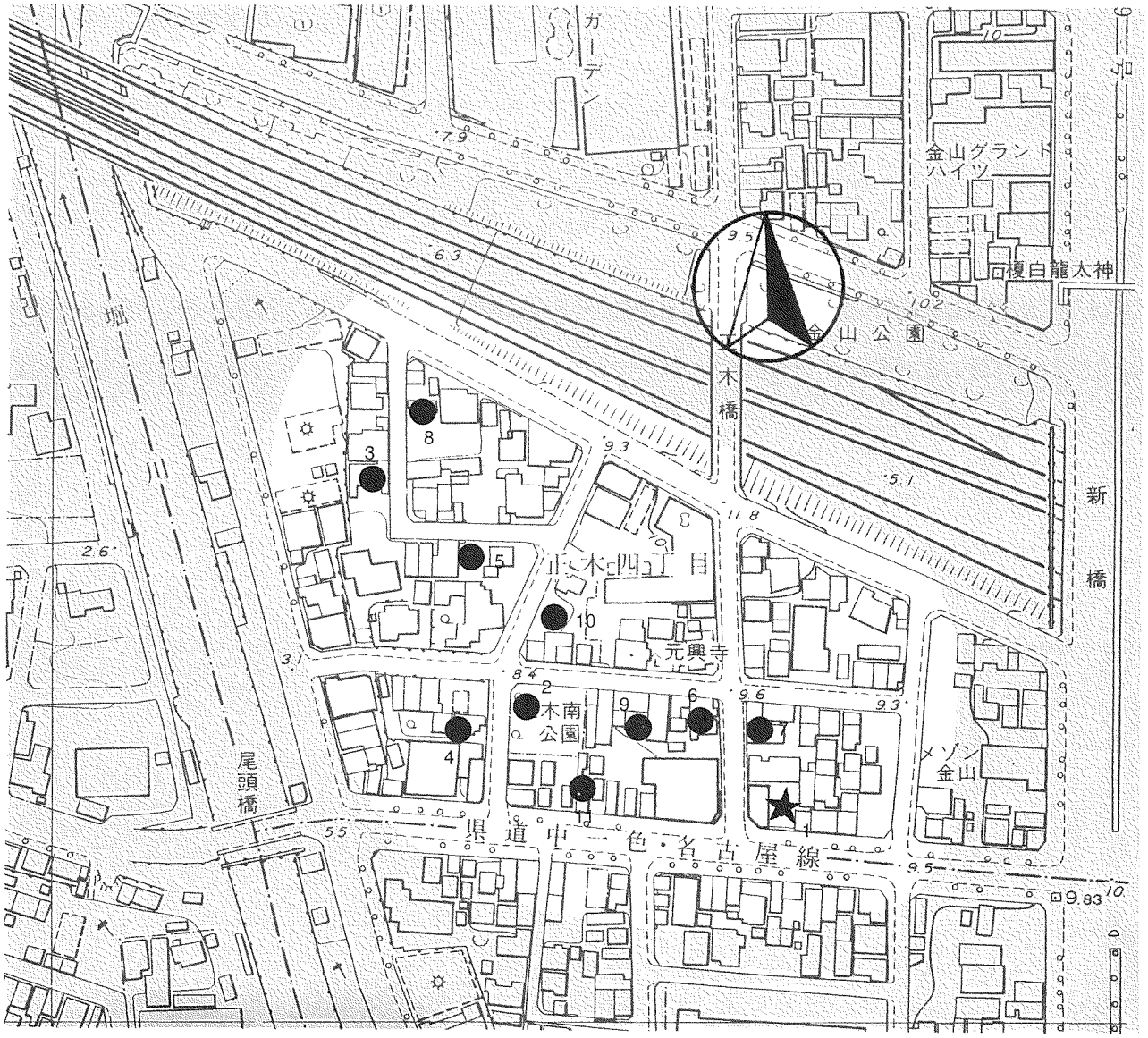


写真３　完掘状態の北（前）半区（写真上）と南（後）半区



第３図　発掘調査地点図（１/2,500）

1	10次	平成14年	約120m²	名古屋市教育委員会	古墳時代・古代住居跡
2	公園地点	昭和55年	約30m²	名古屋市教育委員会	
3	１次	昭和59年	約160m²	名古屋市教育委員会	
4	２次	昭和59年	約290m²	名古屋市教育委員会	瓦だまり・古墳時代住居跡
5	３次	昭和59年	約60m²	名古屋市教育委員会	
6	４次	昭和60年	約90m²	名古屋市教育委員会	瓦だまり
7	５次	平成３年	約130m²	名古屋市教育委員会	瓦だまり・古墳時代住居跡
8	６次	平成７年	約160m²	名古屋市教育委員会	
9	７次	平成11年	約420m²	名古屋市教育委員会	瓦だまり・塔「水煙」残欠
10	８次	平成11年	約240m²	名古屋市教育委員会	近世墓
11	９次	平成12年	約40m²	名古屋市教育委員会	瓦だまり・溝

3　日誌抄

1月10日(木)　着手。アスファルト切断除去。
1月15日(火)　前（北）半区の表土除去。東端付近、下水溝攪乱を除去。
1月16日(木)　西半は包含層うすい。近世土坑検出、陶磁器等多い。
1月22日(火)　東端付近、暗・黒褐色土の掘り下げすすむ。住居跡か。
この間、遺構掘削・遺構土層断面図作成・写真撮影。
1月29日(火)　清掃。北半区完掘写真撮影。周囲壁土層断面図作成。
1月30日(水)　遺構平面図作成。
2月1日(金)　遺構平面図完成。
2月4日(月)　SK15地下式坑の断割り調査。前半区完了。埋め戻しとともに、後（南）半区表土除去開始。
2月5日(火)　表土除去。東端付近、下水溝攪乱を除去。近世土坑検出。
2月6日(水)　近世土坑群掘り下げすすむ。西端付近、暗褐～黒褐色土検出。古代瓦片多い。
2月7日(木)　黒褐色埋土のSB5住居跡をはじめ、SB4・6住居跡など掘り下げ開始。
2月8日(金)　西端の暗褐色土遺構は、前半区のSK7とは別遺構（SK30）と判明。
この間、遺構掘削・遺構土層断面図作成・写真撮影。
2月14日(木)　SK30床面検出。ピット等検出・掘削。周囲壁土層断面図作成。
2月15日(金)　清掃。南半区完掘写真撮影。周囲壁土層断面図完成。
2月18日(月)　遺構平面図作成。
2月21日(木)　遺構平面図完成。周囲壁土層注記、遺物採集。
2月25日(月)　南半区埋戻工開始。
2月26日(火)　現地での調査完了。後片付工。

II　調査の内容

1　基本層序

調査区内の基本層序は表土・攪乱以下、灰褐色土（近現代）・茶灰褐色土（近世以降）・茶褐色土（中世）・暗褐色土（古代）・黒褐色土（古代・古墳時代以前）が堆積する。茶灰褐色土までは砂質が強く、しまりはあまり強くない。茶褐色土よりあとはシルト質が強く、硬くしまり乾燥するとブロック状に剥離する。ほとんどはそれぞれの時代の遺構埋土であり、包含層的な堆積は中世以降の茶褐色土と近世以降の茶灰褐色土が最大50cmほどの厚さで残っていた(第4図)。なお、調査区全域の表土には火災を受けた戦災ガラが多くみられ、一帯の戦禍が著しかったことを物語っている。

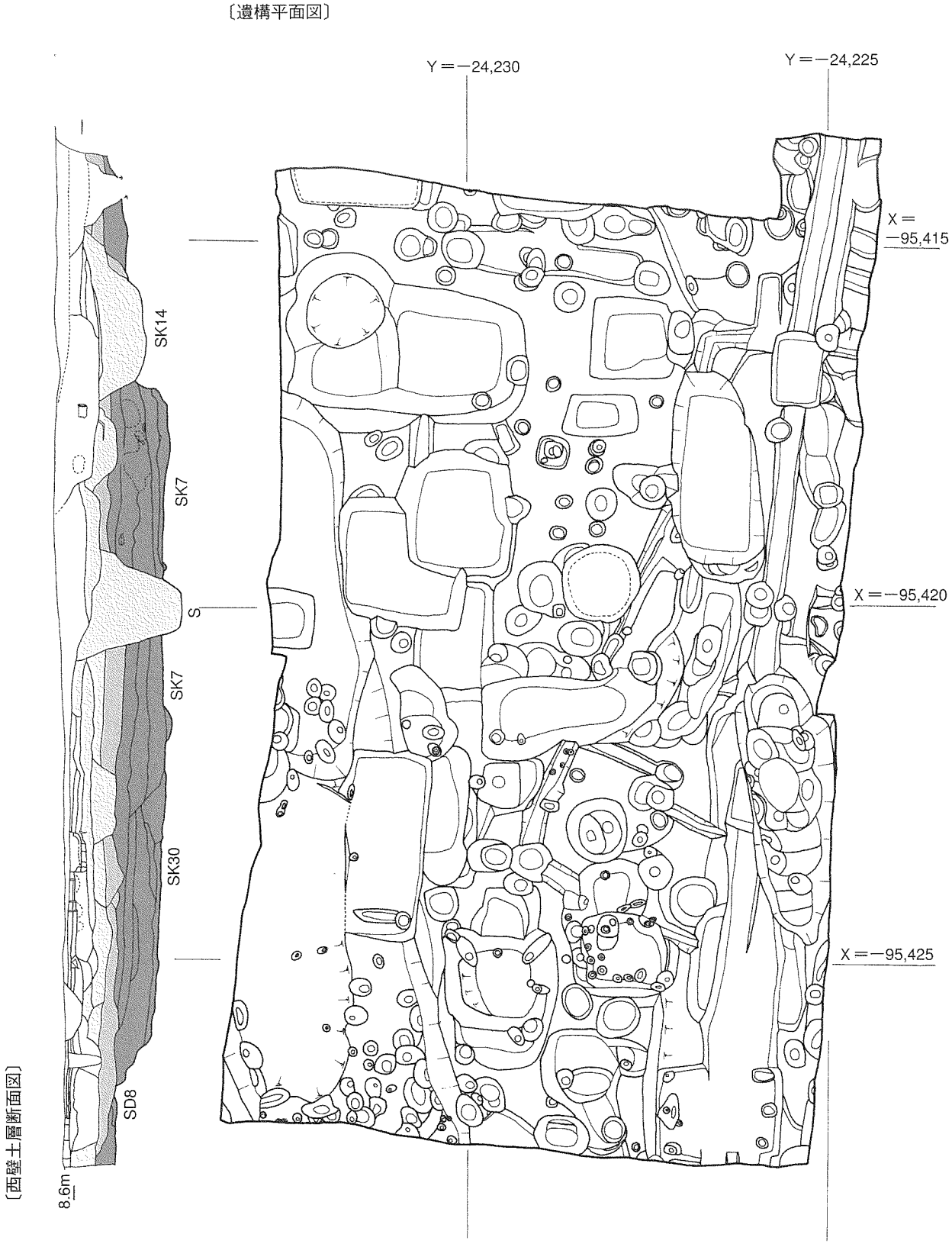
2　遺構

遺構内の埋土は、前述のように、灰色砂を含み軟質な茶灰褐色土系とシルト質が強く比較的硬くしまる茶褐色土系に大別できる。おおむね前者は近世以降、後者は中世以前の年代が推定できる。今回の10次調査地点では、ほとんどの遺構埋土に古代瓦片が含まれており、古代寺院が衰退後に大量の瓦片が散布していたことを物語っている。遺構により、古代瓦片は破片が大きく完存に近い状態のものや、逆に10～20cm大の小片がめだつものがあり、大まかな時期の新古を示すかもしれない。

寺院建立に直接かかわる遺構や寺院伽藍と思われる遺構は、残念ながら今回の調査においては発見されなかった。

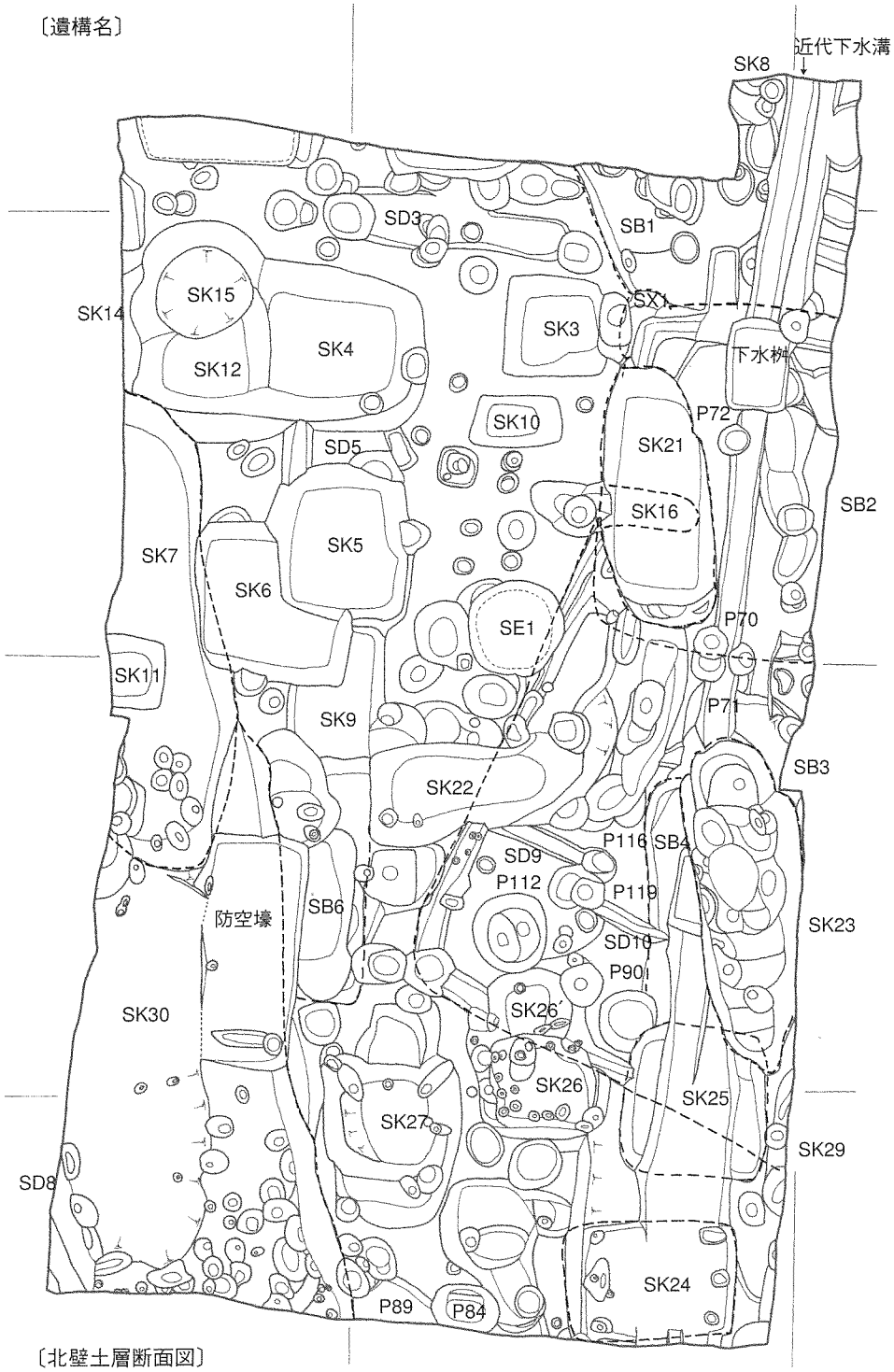
古墳時代

古代瓦片をまったく含まない黒褐色土を埋土とする遺構がわずかに残っており、古墳時代後期（5世紀後半）の竪穴住居跡1軒のほか、10数個のピットを検出した。

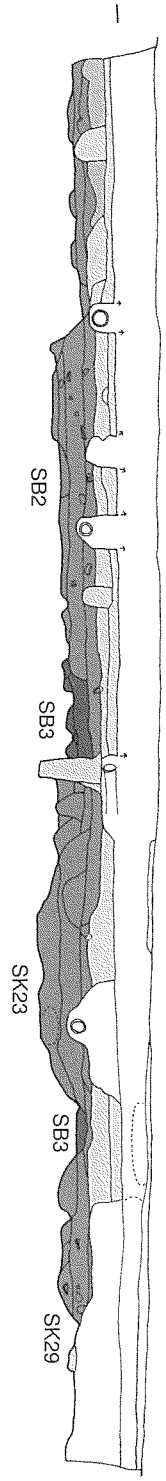


第４図　遺構平面図と土層断面図（１/80）

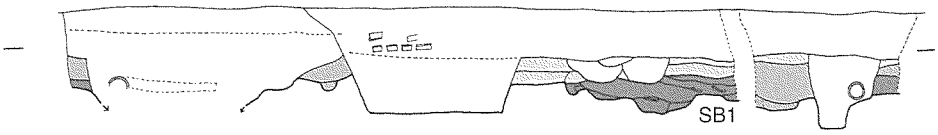
〔遺構名〕



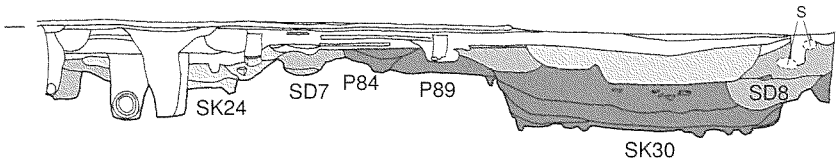
〔東壁土層断面図〕

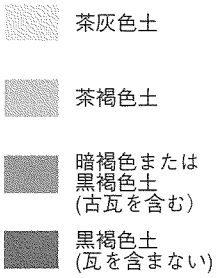


〔北壁土層断面図〕



〔南壁土層断面図〕





SB３（第５図、写真４・５・６）　調査区東壁にかかり、約１/３が検出された。SB２・４・６、SK21・23および近世・近代遺構など多くの後世の掘り込みに切られ、住居埋土は一部が残されていたのみである。

まず前半区南東隅付近で、西辺の壁溝が検出された。しかし、SB２などの後世の掘り込みにより、この住居の埋土として確認できたのは、東壁付近のみであった（第５図東壁）。黒褐色土層中から、須恵器・甕片（２）や土師器・台付甕片（３）が出土した（写真４）。須恵器・甕片は底部付近がよく残る一方、胴部付近が薄く剝片状にはがれていた。埋設に何か意図的なもの感じたものの、埋土中で火を受けた形跡はみられず、壁面での検出という限界もあり確認できなかった。

後半区では、南西のコーナー部が検出された。壁溝は西辺で、上辺幅が24cm、底面で約14cm測る。深さは肩から22cm、床面から10cm程度である。西辺から南辺にかけての壁溝は、外側の10cm幅分は黒褐色の強い土で埋まり、内側は地山ブロックが多く混じる二重構造を呈しており。一度掘り直された可能性が高い。西辺の座標北との傾きは、N45度Eである。

前半区のP70が北西、後半区のP116が南西の主柱穴と推定される。深さは床面から各64・54cmであり、埋土は黒褐色土と地山橙色シルトの細かいブロック混土で共通する。P116と南辺との距離約２ｍと主柱穴間の距離が約2.2ｍであることから、西辺の長さは6.2ｍ前後に復元できる。西辺壁溝からP116にむかって、上辺幅約30cm・床面からの深さ12cmの溝がのびており、間仕切りの溝と考えられた。なお、P70にはP71、P116にはP119が接するように掘られており、住居の建て直しの可能性も残る。

後半区出検出した部分については、当初 SB５と名づけて掘り下げた。埋土の厚さは平均で20cmほど残されており、床面の標高は8.20～8.24ｍである。埋土中からは、主に土師器の小・細片が出土し、ベルトとして残した部分から１点のみ須恵器・高杯片（１）が出土している。また、主柱穴と思われるP70からは、宇田型甕口縁部・高杯脚部に混じり鉄鎌（７）が出土する。土師器・須恵器の出土状況からみて、埋没時期は東山窯の須恵器生産開始期（H-111号窯期）頃と考えられる。

写真４　前半区南端・東壁出土の須恵器・甕(2)

写真５　後半区・南西隅部分（東から）

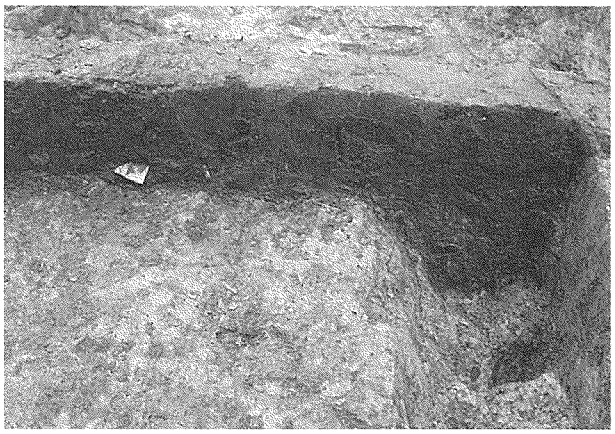
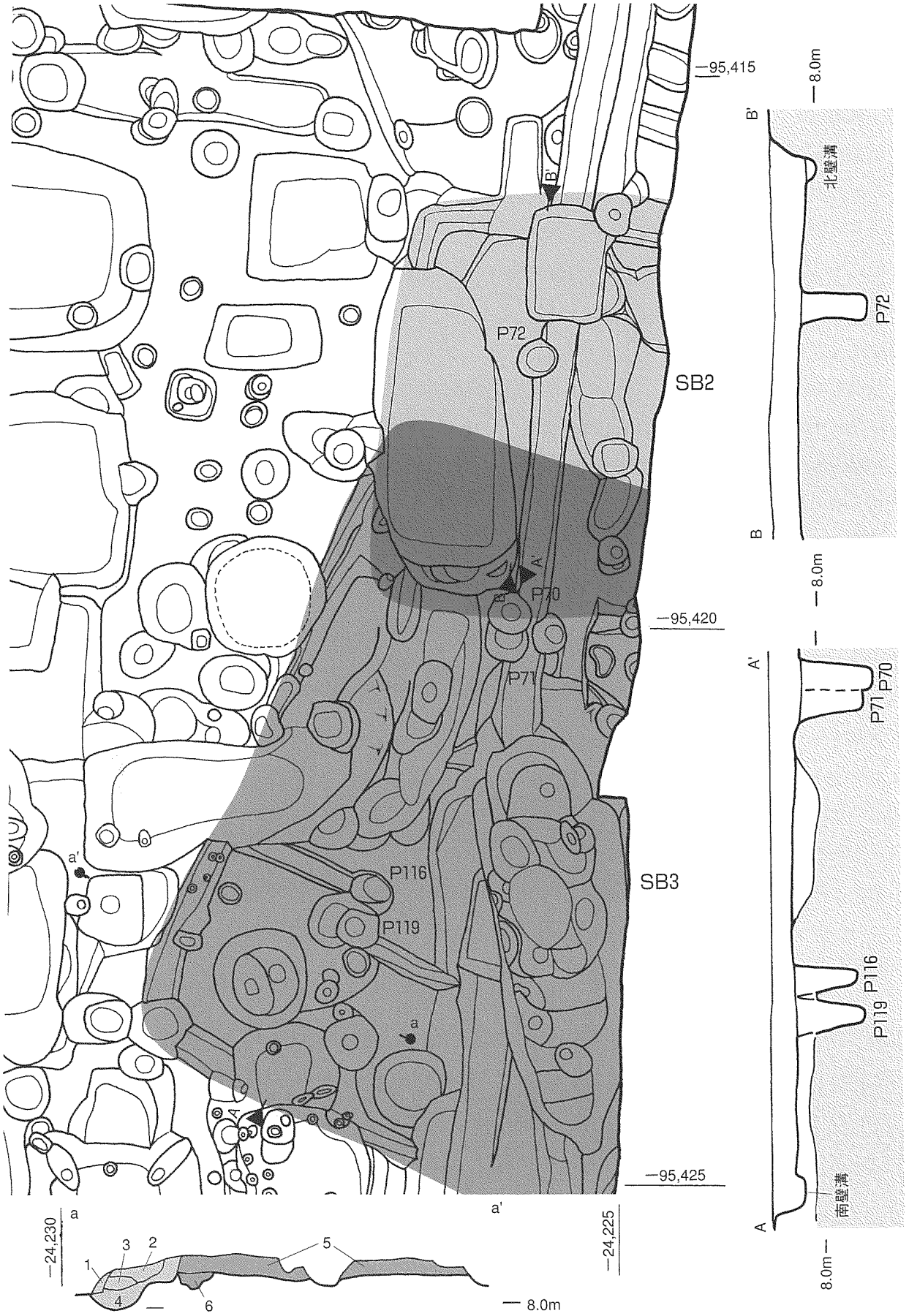


写真６　後半区西壁溝と須恵器片(1)（北から）



第５図　ＳＢ２とＳＢ３住居跡実測図（１/50）

古　代

暗褐色土・茶褐色土を基本埋土とし、古代瓦を含む遺構。調査区の西端と東端付近に集中する。竪穴住居跡が4軒検出されたほか、隅丸長方形ないしは楕円形の土坑状の遺構が大小4基みつかっている。

土坑群

暗褐色または黒褐色を埋土とする土坑が4基みつかっている。長楕円の平面形を呈し、南北方向に長くのびる傾向をもつ。調査区東端近くにはやや小さめのSK21とSK23が南北に連なる。約4ｍの空白区間をおいて、西壁にかかるSK7とSK30が南北に並ぶ。

土坑埋土には多量の古瓦片を含む。瓦片廃棄を目的に掘られたものではなく、埋没の過程で投棄されたかもしくは混入したものと考えられる。

SK21（前半区、第6図、写真7・8）

調査区東端寄りに位置する。中央付近を、近世遺物を含む長楕円形で深いSK16の掘り込みによって壊され、北・東縁は近代下水溝によって攪乱される。現状での規模は、南北2.9ｍ・東西1.3ｍ・地山検出面からの深さは約1ｍである。底面幅は約1ｍであり、断面形は箱型に近い。長軸方向は、N3度Eとわずかに東へ傾く。

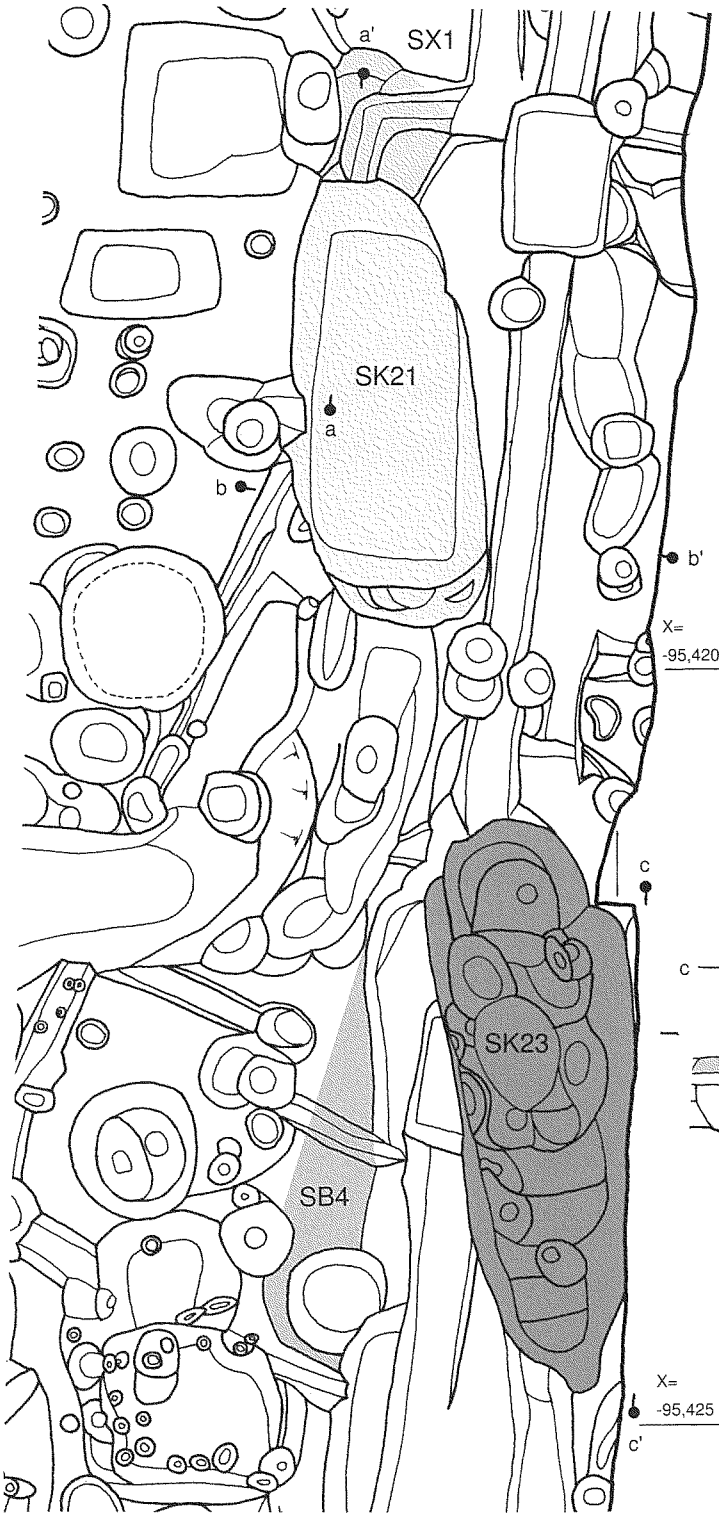
埋土は基本的に暗褐色土であり、地山・焼土ブロックの混ざり具合やしまりの強さなどから、4層に細分することができる。どの層からも古瓦片の出土がみられ、とくに上層からは丸・平瓦の完存品を含む大型の破片がめだった。古瓦片に混じり、古墳時代～古代の土師器・須恵器片が出土する。遺物は小片であり時期の決定は難しいが、最も新しい時期の破片には奈良～平安時代頃の杯身片がみられる。

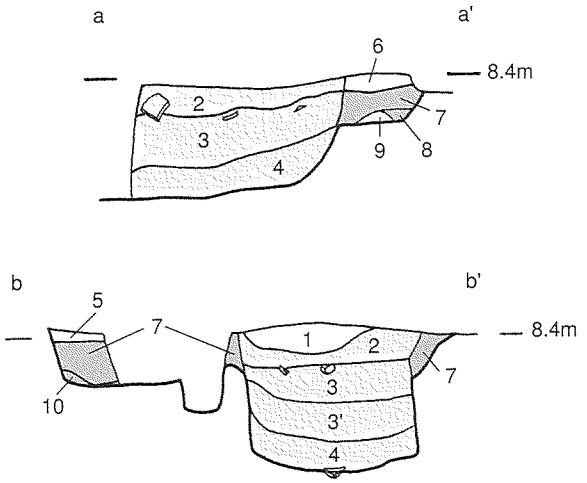
SK23（後半区、第6図、写真9）

調査区中央東端にて検出された長楕円形の土坑。東側は調査区外、西側大半の上部は、近代下水溝の攪乱を受ける。遺構上部はSB4によって削平される。長軸方向はN8度W、南北長3.5ｍ・東西長1.1ｍまで検出でき、最深部で深さは約50㎝を測る。断面形は半円形に近く、最も深い中央部で底面の標高は7.8ｍである。底面は平滑でなく大小の穴や段によって凹凸が激しい。また、底面付近には鉄分が沈降し、硬化していた。埋土は基本的に暗褐色土であり、古代瓦を良好に含む上層と、黒褐色土に近く瓦片をほとんど含まない下層に大別できる。出土遺物は、古瓦以外は小片の土器・須恵器片であり、古代（7世紀代）のものを含む。

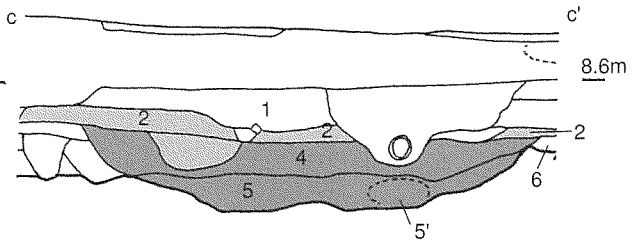
写真7　SK21（南から）

写真8　SK21東西セクション（北から）





1　灰茶褐色土　地山シルトブロック５cm大まばら。やや軟
2　灰褐色土　焼土0.5cm大まばら。均質で地山ブロック含まない。
3　暗褐色土　焼土0.5cm大めだつ。地山ブロックを部分的に含み、シルト強くしまる。
3'　暗褐色土　焼土0.5cm大めだつ。地山ブロックを部分的に含む。３層に比べやや軟質。
4　暗褐色土　焼土0.5cm大まばら。２～3'層に比べ、軟質。
［２～４層＝SK21埋土］
5　暗茶褐色土　茶褐色シルトめだつ。焼土0.5cm大まばら。ややしまる。
6　暗褐色土　２層より黒褐色シルトブロック多く、ややしまる。
［SX1埋土］
7　黒褐色土　地山シルトブロック１～２cm大めだつ。［SB2埋土］
8　黒褐色土　７層より黒褐色シルトブロック大粒。［SB2壁溝］
9　地山ブロック５～10cm大に黒褐色シルトブロック２～３cm大混。
［SB2埋土］
10　黒褐色土　地山シルトブロックややめだつ。シルト強くしまる。



1　灰褐色砂　［近世包含層］
2　暗褐色土　茶褐色強く、均質で混ざり物少ない。やや砂質強い。
［SB4埋土］
3　暗褐色土　灰砂めだち、砂質強い。
4　黒褐色土　黒み強くしまる。鉄分沈降めだつ。
5　黒褐色土　シルト強くしまる。地山シルトブロック0.5～2cm大めだつ。
5'　5層の土がグライ化して、暗灰緑色を呈す。
［4～5'層＝SK23埋土］
6　黒褐色土　均質でシルト強く締まる。［SB3埋土］

第６図　SK21とSK23土坑実測図（１/50）

写真９　SK23（北から）

SK７（前・後半区、第７図、写真10・12）

調査区中央西端で検出された。西側は調査区外にのび、ほぼ東半分にあたる南北5.6ｍ・東西１ｍ分が検出された。中央付近を近世土坑SK11に壊され、南端部ではSK30を重なるように切る。平面形は長楕円形または隅丸長方形であり、長軸方向はＮ５度Ｗとやや西へ傾く。深さは地山の検出面から60～70cm程であり、断面形は箱形に近い。埋土は黒褐色を呈し、おおむね４層に分層できる。中央付近では地山ブロックがめだつ層とあまり含まない層とがレンズ状に重なり合う断面が観察された。古瓦片は上部２層に特に多く含まれ、検出された北端近くでは密集する部分もみられた。南端付近では、底部から40～50cm上の付近の上層で古瓦片が集中する部分があり、良好な軒瓦片も含まれる（中表紙・写真２）。

出土遺物は古瓦片が最もめだち、５～７世紀代の土師器・須恵器の小片が混ざる。

SK30（後半区、第７図、写真11・13）

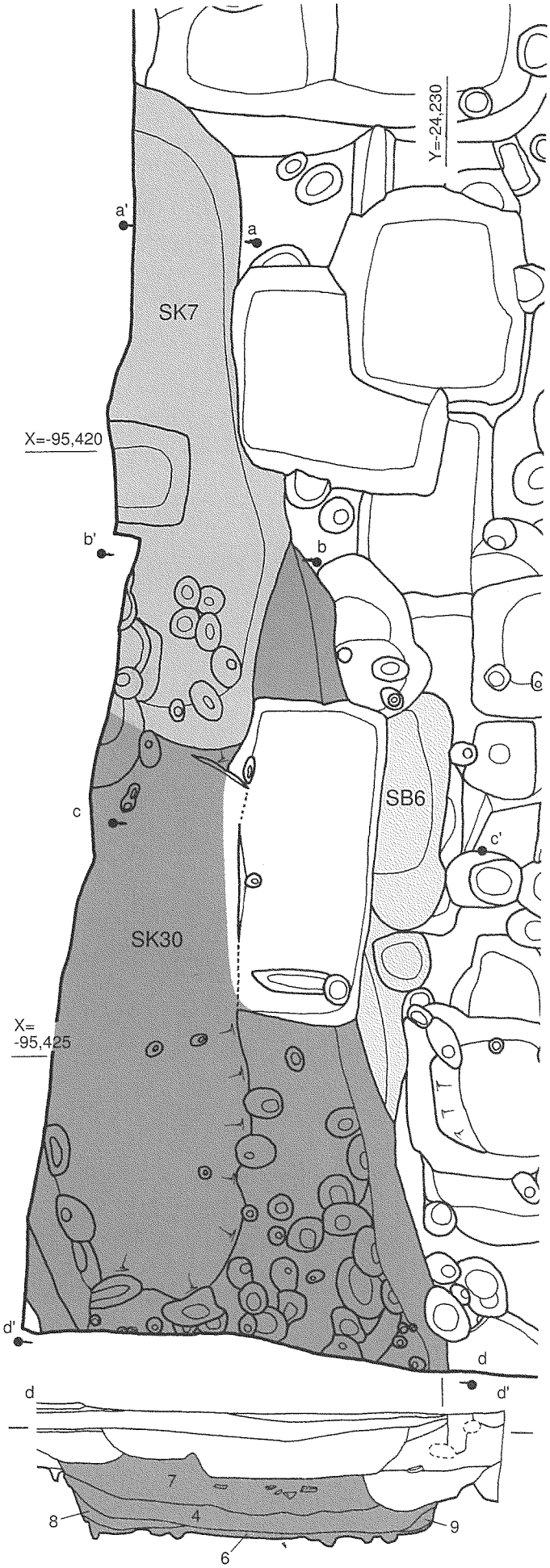
調査区南西端付近には広く黒褐色土が広がっており、SK７から続く土坑の一部として掘り下げはじめた。南壁からＮ12度Ｗの方向にのびる東肩が約７ｍ分検出され、北西部および南端は調査区外へと続く。東肩の一部を防空壕で壊され、調査区南西端では西肩付近を茶灰褐色砂の溝状の遺構に切られ、北端付近はSB６によって遺構上面が削平される。幅は地山の検出面で約３ｍ・底部で約2.3ｍ・深さ50cmを測り、断面形は浅い逆台形を呈する。

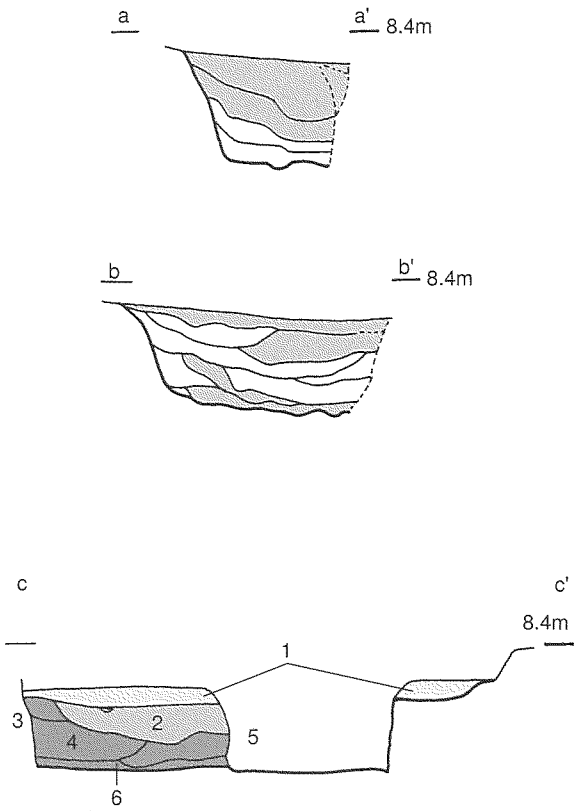
埋土は黒褐色土でシルト質強く硬くしまる。古瓦片を多く含み小土・炭化物の小粒がまばらにみられる上層と、黒色シルトがめだち古瓦片の少ない下層に大別できる。南東端の肩付近でパルメット紋の軒丸瓦瓦当片（43）が検出された。最下層の底面付近の６cm前後は、鉄分が沈降し硬化していた。底面は南壁で高さが7.70ｍ付近で北へ向かって低くなっていく。南端付近は直径20cm以下、深さ10cm程度の小さなピット状の掘り込みがめだつ。検出した北端部付近は標高7.50ｍほどで、埋土を掘り込んで壊すSK７の底面の高さとほぼ同じである。土坑として分類したが、掘られた目的・用途に関しては別の可能性も考えられ、類例の増加を待っての検討が必要であろう。

出土遺物は古瓦片が最もめだち、特に埋土上層に集中する。土器・須恵器片は５～７世紀代のものがみられるが、ほとんどが小片であり、埋没年代を決める手がかりにはできなかった。SK７やSK23とともに、伽藍の存続期に最も近い可能性のある遺構としておきたい。

写真10　SK７（左端はSK11）（東から）

写真11　SK30（南から）





1　暗灰褐色土　灰砂ややめだち、しまる。［SB6　埋土］
2　黒褐色土　1層に比べ黒い炉シルトめだつ。［SK7　埋土］
3　黒褐色土　地山シルト・砂ブロック0.5～3cm大めだつ。シルト強くしまる。
4　黒褐色土　黒色シルトブロック多い。地山シルトブロック2～3cm大ややめだつ。
5　黒褐色土　地山シルトブロック0.2～1cm大めだつ。
6　黒褐色土　鉄分沈降し、硬化。
7　黒褐色土　地山シルト・砂ブロック0.5～3cm大めだつ。シルト強くしまる。
8　黒褐色土　黒色シルトブロック多い。地山シルトブロック2～3cm大ややめだつ。
9　黒褐色土　地山シルトブロック0.2～1cm大めだつ。

写真12　SK7東西セクション（北から）

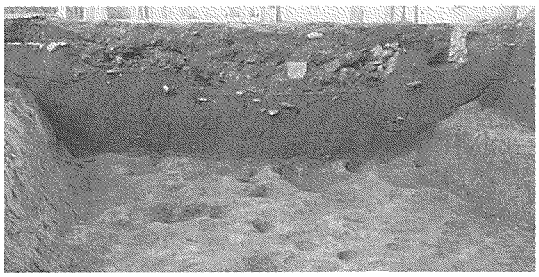


写真13　SK30調査区南壁セクション（北から）

第7図　SK7とSK30実測図（1/50）

竪穴住居跡など

SB１（前半区、写真14）

調査区の北西端に位置する。座標北に対しN26度Wの方向に、直線約２ｍ分の段差が検出され、南西コーナー付近の一画になるものと思われる。段差は約７cmを測り、竪穴住居跡の西辺となると思われた。壁溝・主柱穴・火所は確認できていない。埋土は暗褐色土で、古瓦片を多く含んでいる。

SB２（前半区、第５図、写真15・16）

調査区東壁にかかり、北西コーナー部を含む約１/２が検出された。埋土は暗褐色土であり、SK21および近世・近代の掘り込みに切られる。

東壁でみると、北肩は地山の橙褐色土であるが、南肩はSB３の埋土の黒褐色土となる。北肩から南肩まで約４ｍを測り、住居跡の規模を推定できる。埋土は肩の上面から床面まで20～24cmの厚みがあり、床面の8.08～8.16cm付近である。西・北辺の壁溝は、上辺幅24cm・底面幅10cm・床面からの深さ８cm程度を測る。西辺はほぼ南北方向にのび、Ｎ５度Ｅの傾きである。出土遺物は、土師器・須恵器の小・細片が主であり、埋没時期を決めるに至らなかった。

SX１（前半区、写真14）

SB１の南西およびSB２の北西部の埋土を覆うように堆積し、SK21に切られる暗褐色土（第６図・土層図上）。遺構の形や規模は明らかにできず、包含層の一部であるかもしれない。

写真14　SB１・SX１付近（北西から）

写真15　SB２（北西から）

写真16　SB２（SK21・SB３との切り合い）（東から）

SB 4（後半区、第６図、写真17）

調査区の東壁に2.2～3.6ｍにわたり埋土が残される。SB３のセクションベルトでは、黒褐色土を切る暗褐色土が観察され、わずかな段差がみられた。形状・規模ともに明らかでなく、埋土が水平に堆積する状況から、竪穴住居であったと考えた。

SB 6（後半区、第７図、写真18）

調査区の南西寄りに位置する。SK30の埋土を覆うように暗褐色土が、約20cm残存していた。SK30の北東部の肩は、大戦中の防空壕と思われる1.2×2.6ｍの長方形の掘り込みによって壊されている。SB６の埋土はこの防空壕の東肩よりもさらに50cmほど東へのびており、約３ｍ分が残されていた（第７図、土層図Ｃ－Ｃ′、写真18）。しかし、東肩は明瞭な形でのこっておらず、遺構の形状・規模を明らかにできなかった。SB４と同じく、埋土が水平に堆積する状態から竪穴住居として掘り上げた。

SK29（後半区、写真19）

調査区の南東隅付近の東壁にかかる遺構。やや灰色味のつよい暗褐色土を埋土とし、地山面への掘り込みはほとんどみられなかった。平瓦片が地山面上近くに折り重なるように南北方向に並んでおり、東壁内へと続いていた。古瓦片のほかは出土遺物が少なく、古代の土坑状遺構として分類したが、時期・性格ともに検討が必要と思われる。

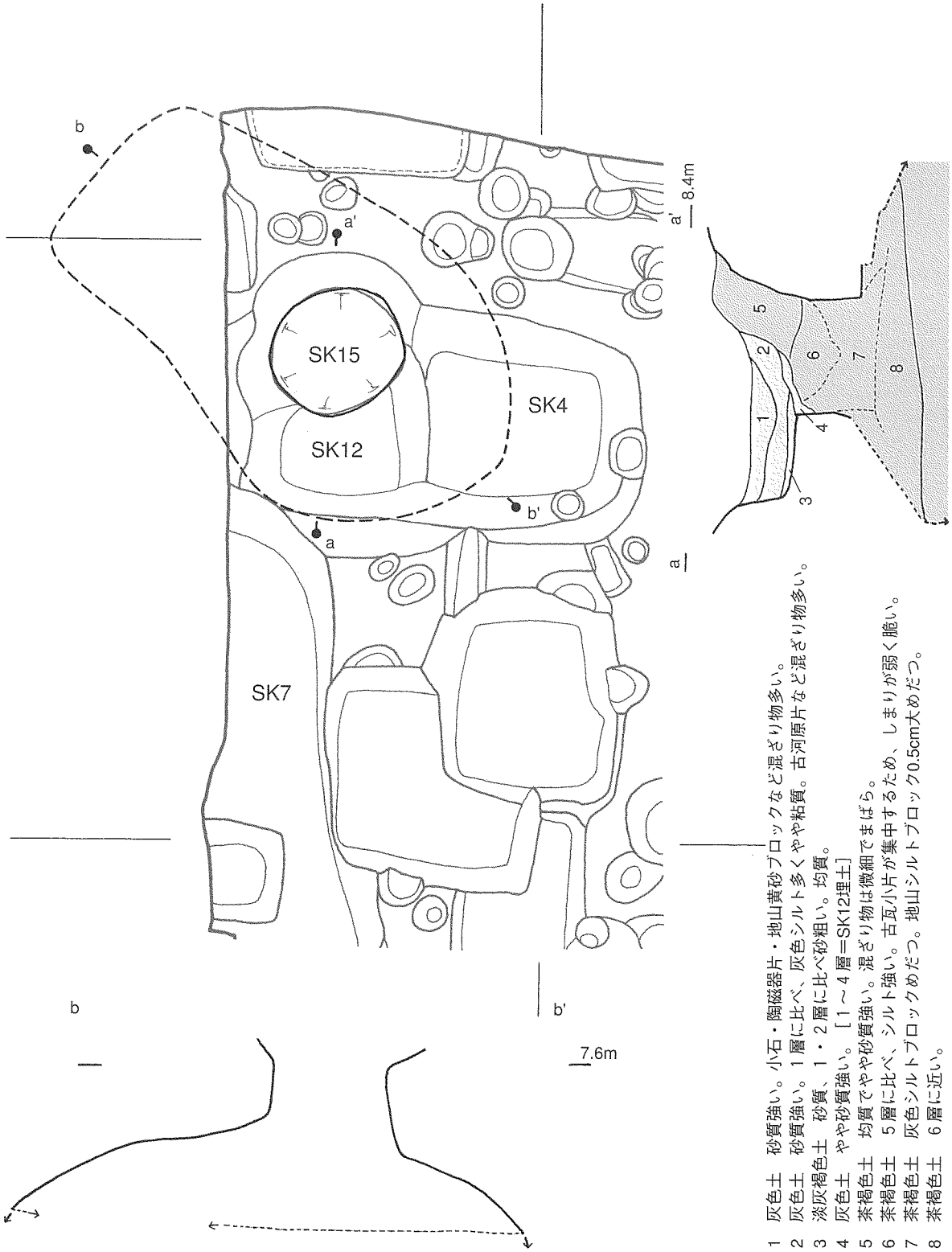
写真17　SB３を切るSB４の埋土（東から）

写真18　SB６東西セクション（南から）

写真19　SB29瓦集中状況（南西から）

中　　世

中世末から近世前半は、「願興寺」が移転し「国豊山元興寺」が建立されるまでの、最も付近が荒廃していた時期と考えられている。



第8図　SK15実測図（1/50）

SK15（前半区、第８図、写真20・21）

調査区北西隅で検出された。地山検出面では直径約1.6ｍの円形を呈し、南半はSK12、南西の一部をSK４に壊される。SK12の床面より10cmほど下で最も直径が小さくなり90cm程度となる。検出面から約1.2ｍ、標高で７ｍ付近のところから、四囲が急に広くなる。前半区の基本平面図作成後機械掘削を行ったところ、壁が四周にオーバーハングしており、北西から南東に向かってのびる空間がみつかった。空間の広さは、標高6.4～6.7ｍ付近で長軸４ｍ・短軸２ｍをこえる。地山で検出した円形の土坑は地下空間への出入口の竪坑となると思われる。なお、完掘はできなかった。

埋土は、やや砂質の強い茶褐色土であり、比較的小片の古瓦片で充満していた。大量の瓦片に混じって、古代～中世の須恵器円面硯・山茶碗・中国製青磁片などが出土する。最も新しい時期のものは、16世紀代の土鍋片がみられ、遺構の埋没時期の下限を示している。円形の出入口や地下空間の形成から、中世末の名古屋台地西縁部に点在する中世墓の一種とされる「地下式壙」と考えた。

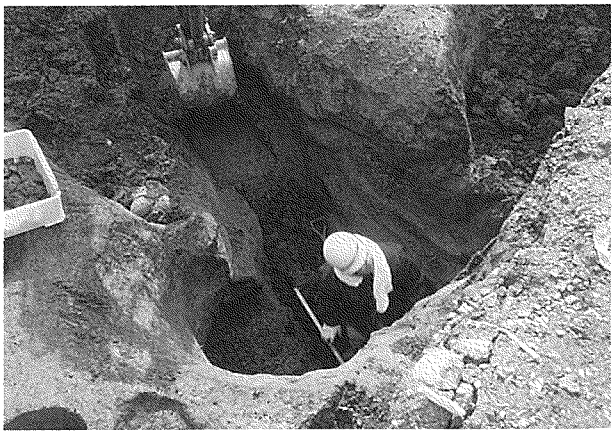


写真20　深掘りの状況（北西から）

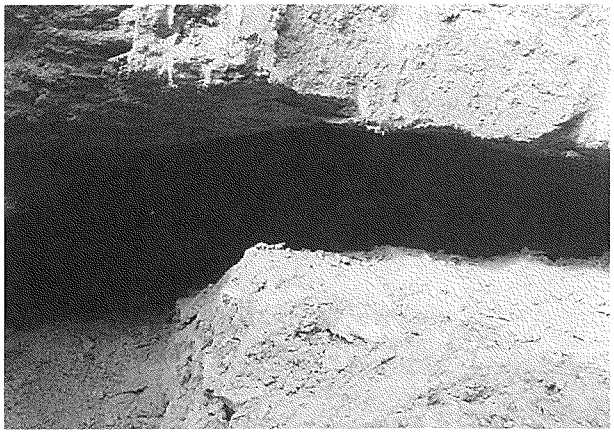
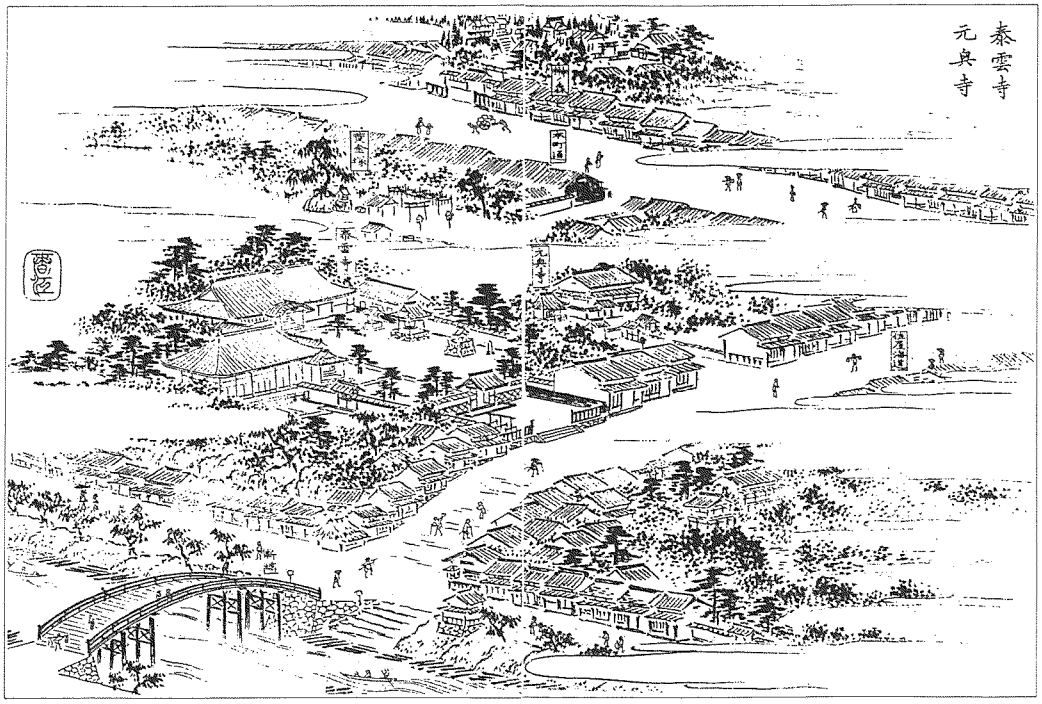


写真21　空間の広がり



第９図　江戸時代の周辺の様子（「尾張名所図会」より）

近世～近・現代

茶灰褐色の砂質の強い土が基本埋土。「国豊山元興寺」の建立（1718年）以後の遺構と思われる。調査区南側には、近世・東海道「七里の渡し」の迂回陸路であった佐屋街道がとおる。

土坑群

22基の方形あるいは隅丸方形を主とした土坑が検出された。調査・前半区の北西部と、後半区の南東部にとくに特徴的な土坑が集中する。前者には、SK４・５・６・11・12があげられ、やや大きめの隅丸方形あるいは長方形の平面形で検出され、断面形は逆台形に近い。後者には、SK24・25・26・27・28があり、方形に近い隅丸方形を呈し、断面は箱形に近い。SK24・26・27で顕著なように、坑の周壁の内側に杭痕をのこす特徴をもつ。こうした土坑内の杭痕は、木材による構造物が土坑内につくられていたことを示すものと思われる。また、前者はSK４→SK12、SK５→SK６のような切り合いがみられるのに対し、後者は切り合うことなく配置されているようにみえる。

遺物は、とくにSK４・５・11・12・26から多量の陶磁器などの日常品が出土している。遺物の時期については、おおむね18世紀後半から19世紀初頭が考えられる。SK４とSK12のように切り合う土坑だけでなく、SK11やSK26など離れた土坑間の遺物も接合することから、近い時期に多量の遺物が廃棄された可能性が高い。この場合北西部の土坑群は廃棄坑として掘られ、南東部の土坑群は「地下室」あるいは「穴蔵」とよばれた施設の廃絶後に多量の遺物が廃棄されたと考えることもできよう。

井戸　SE１（前半区）

調査区中央付近に位置する。当初は土坑（SK13）として検出した。直径１ｍ強の円形の平面形で、まっすぐ下方へ掘り込まれている。茶灰褐色の均質な砂質土が埋土であり、地山の検出面から約1.2ｍまでを掘り下げた。出土遺物は少なく、古瓦片のほかは近世陶磁器片が混ざる。埋土はさらに下方へ続くようであり、近世の素堀井戸の可能性が高い。

第10図　近世遺構の分布（１/100）

第１表　近世土坑一覧表

土坑名	形　状	検出面での規模	深　さ	底　高	主軸方位	備　　考
SK１	円形	直径70	7	8.33	—	
SK４	方形	(200)×180	62	7.70	Ｎ５度Ｅ	
SK５	方形	160×(80)	77	7.56	Ｎ５度Ｅ	
SK６	方形	185×170	52	7.73	Ｎ５度Ｅ	SK５を切る
SK８	不明	(60)×(50)	17	8.23	—	
SK９	長方形	110×(150)	25	8.12	Ｎ５度Ｗ	
SK10	長方形	100×60	16	8.25	N90度Ｅ	
SK11	方形	(90)×125	110	7.26	Ｎ６度Ｅ	
SK12	方形	(150)×(150)	61	7.53	Ｎ５度Ｅ	SK４を切る
SK13	円形	直径110	—	—	—	井戸、SE１に改称
SK16	長楕円形	(160)×(55)	25	8.12	N70度Ｗ	
SK17	不整形	100×(130)	17	8.24	—	
SK18	隅丸方形	60×70	18	8.24	—	
SK19	不明	(60)×(60)	26	8.14	—	
SK22	長楕円形	240×75～110	37	7.89	N90度Ｅ	
SK24	方形	(170)×(130)	(60)	7.91	Ｎ２度Ｅ	底面に径10～20cmの杭痕６か所
SK25	方形	(160)×(170)	(45)	8.06	Ｎ８度Ｅ	
SK26	方形	160×160	(41)	8.11	N12度Ｅ	東・北・南の３壁に約10個の径10cm杭痕
SK26	方形	120×(70)	(22)	8.15	Ｎ１度Ｅ	
SK27	方形	(150)×(130)	(57)	7.87	—	北西・北東隅に径15cmの斜め方向杭痕。
SK28	方形	(120)×(170)	(20)	8.01	N10度Ｗ	

・「検出面での規模」「深さ」の単位はcm。「底高」は底面の平均標高。単位はｍ。
・（　）は現況での測値を示す。

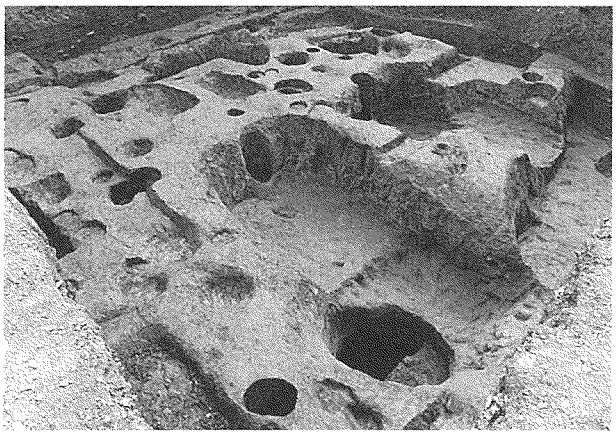


写真22　北(前)半区の近世遺構（北西から）

写真23　南(後)半区の近世遺構（南東から）

1　SK 4［手前］と SK12［左奥］（南東から）

2　SK 5［左］・SK 5［右手前］・SK 9［右奥］

3　SK11（東から）

4　SK26

5　SK24（南から）

6　SK24（北から）

7　SK28（南西から）

写真24　近世土坑

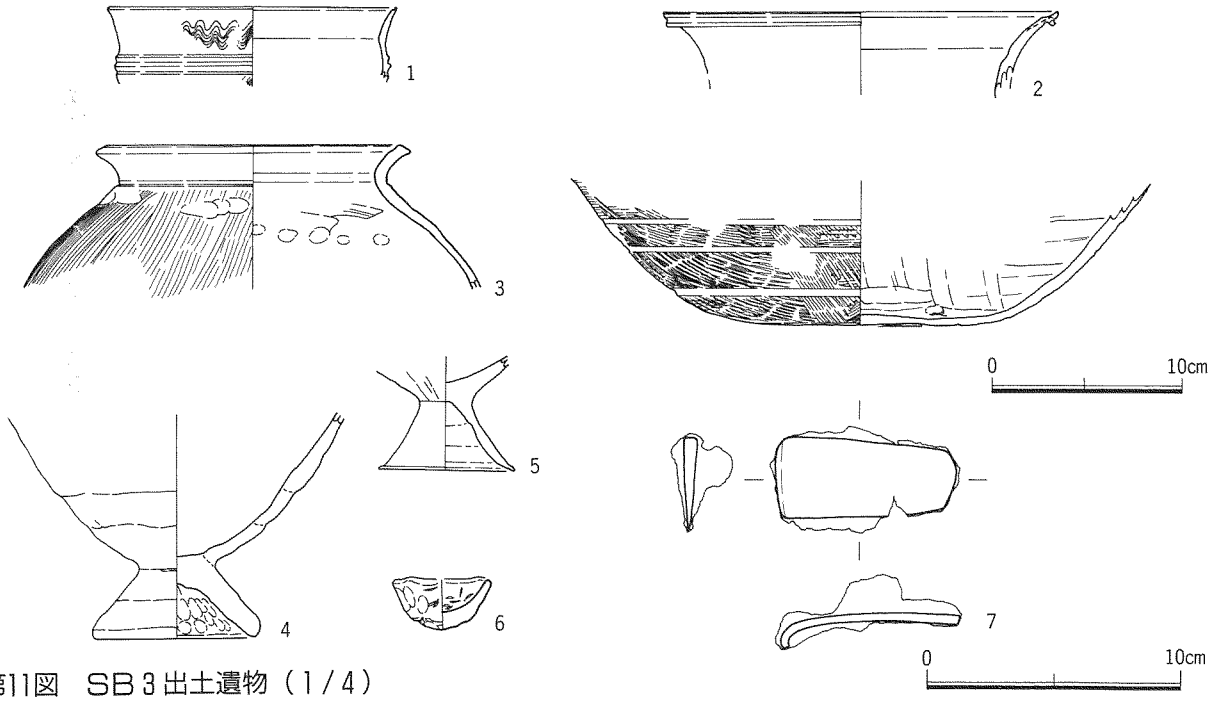
III　遺物

1　土器類

出土遺物の約80箱のうち、大半は古代寺院に由来する瓦片と近世～近現代の陶磁器類の破片であり、古代以前～中世の土器・陶器類の出土は僅かである。

弥生時代以前　チャートまたは頁岩製の剝片１点（８）が出土しており、縄文時代まで遡る可能性がある。また、古墳時代以後の遺構埋土中から、弥生時代後半～古墳時代初頭の赤彩土器の小片が出土する。

古墳時代　SB３とその主柱穴と思われるP70から、中期（５世紀中頃）の遺物が出土している。P70出土の土師器甕口縁部（３）は、「宇田型」の台付甕であり、名古屋台地部では古いタイプに属する[村木1995]。土師器片に比べ、須恵器は南西部の埋土中から唯１点のみ出土した無蓋高杯の口縁部片（１）や、東壁層中でみつかった甕の口縁部および底部（２）のみに限られる。須恵器の年代観は、東山窯開窯期の東山111号窯期の製品と考えられ、宇田型甕片などの時期と矛盾しない。また、P70からは、鉄鎌と思われる鉄製品片（７）が１点出土する。



第11図　SB３出土遺物（1/4）

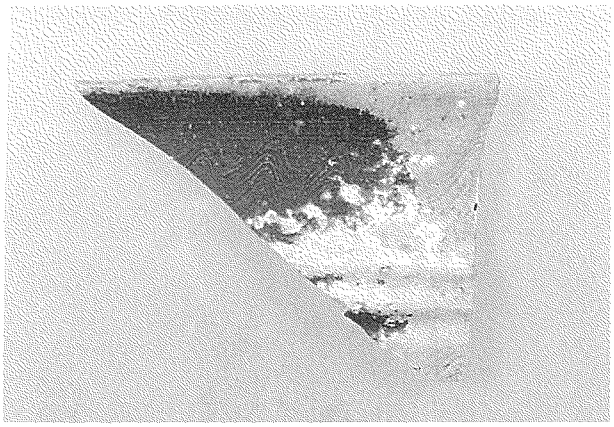


写真25　SB３出土、須恵器無蓋高杯片(1)

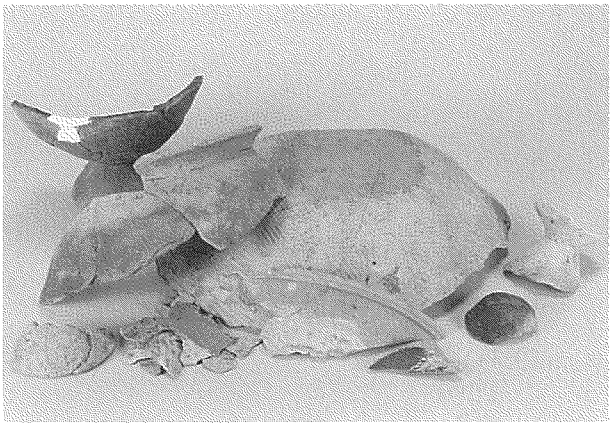
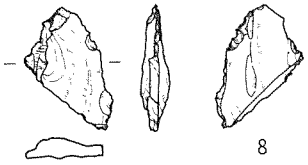


写真26　SB３出土遺物



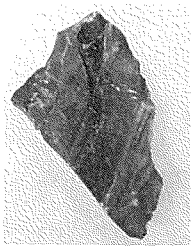
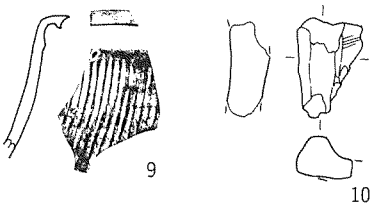
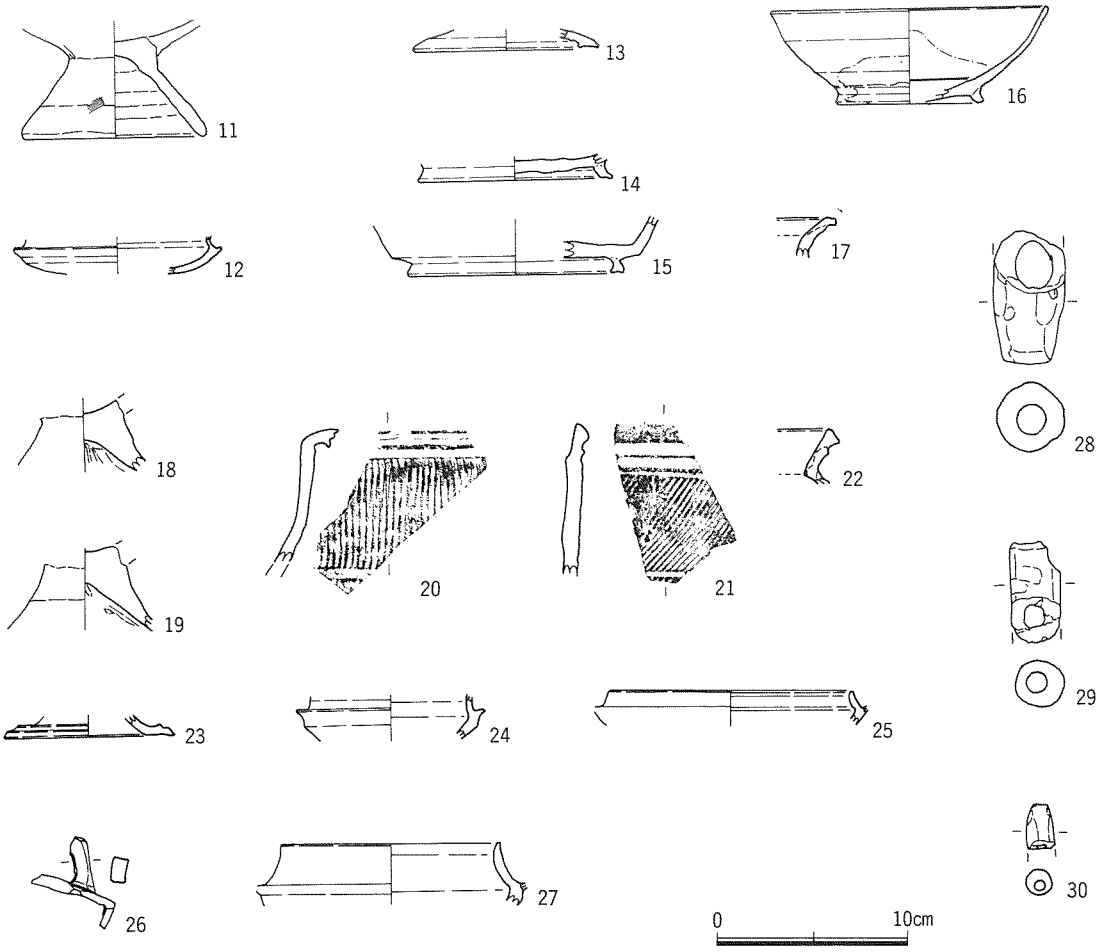


写真27　剝片(8)





第12図　住居跡・土坑出土の古代遺物

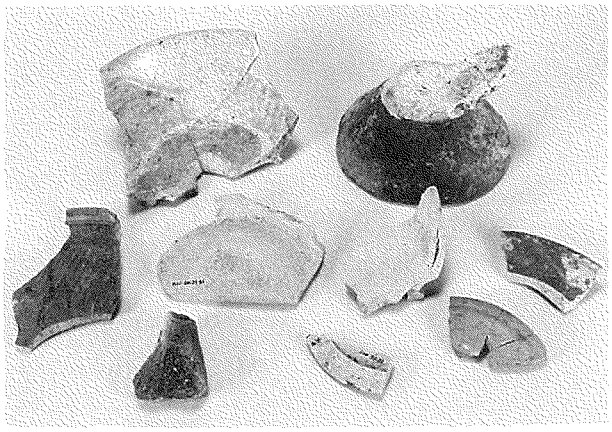


写真28　古代遺物（SK７・SK30以外）

写真29　古代遺物（SK７・SK30）

また、古代以後の住居跡や土坑埋土からも、土師器片（11・18・19）や須恵器片（9・12・13・17・20～25・27)、円筒埴輪の小片が出土する。

古代　須恵器は7世紀後半から8世紀後半のものがめだち、(26)は小型平瓶の把手付近の破片である。(10)は雲母を多く含む胎土で、古墳時代から古代にかけての移動式カマド片と推定できる。中世遺構のSK15からは、須恵器円面硯（31）1点が出土する。灰釉陶器片は（16）の椀1点がみつかった程度である。魚網のおもりと考えられる管状土錘が、3点出土している。(28・30）は紡錘状、(29）は筒形の外形を呈する。

中世　SK15地下式壙から瀬戸・常滑製の陶器・炻器類のほか、土製羽釜片（37～39）が出土しており、最も新しいものは16世紀に下がる。

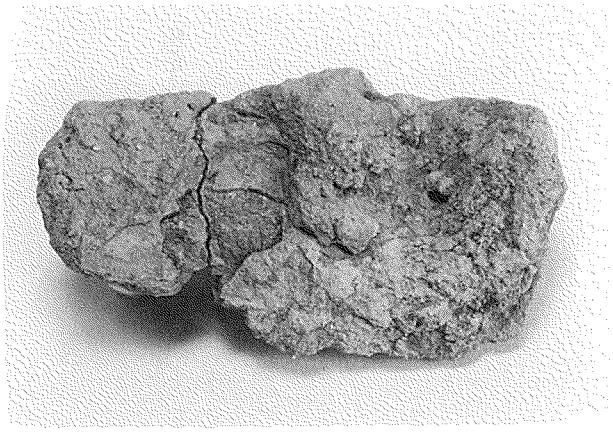


写真30　SB3（P70）出土の鉄鎌片

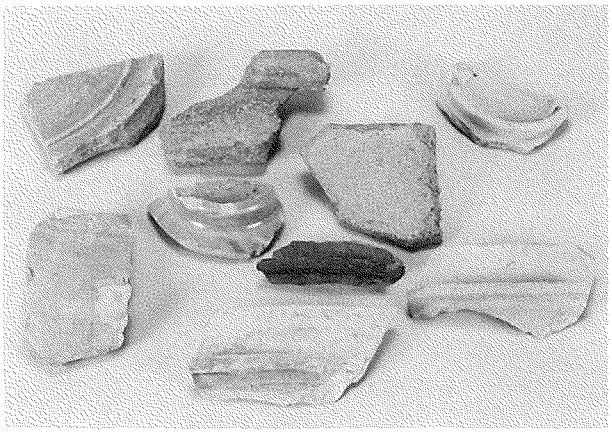
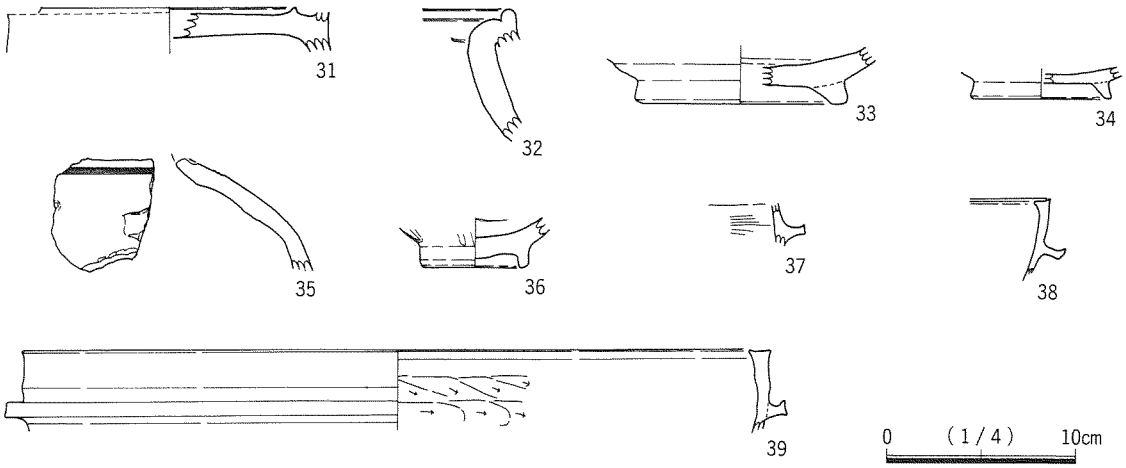


写真31　SK15出土遺物



第13図　SK15出土遺物（1/4）

第２表　土器類観察表

番号	遺　　構	材質	器　　種	口　径	底　径	器　高	時　期	備　　考
1	SB５（３）埋土中	須恵器	高坏				５ｃ	
2	SB３東壁	須恵器	甕	(20.8)		(4.5)	５ｃ	口縁部と底部を図示、胴部は薄く剥離
3	Ｐ70	土師器	甕	(15.4)		(7.6)	５ｃ	外面タテハケ
4	東壁セク23層(SB３埋土)	土師器	台付甕		8.9	(11.8)	５ｃ	
5	SB５　南半	土師器	台付甕		(7.3)	(6.0)	５ｃ	
6	SB３東壁	土師器	ミニチュア鉢形	5.0		2.5		
7	Ｐ70	鉄製品	鎌	長5.0	幅3.3	厚0.7	５ｃ	
8	後半区東壁	石器	剝片	長4.9	幅3.5	厚1.2	縄文？	チャートまたは珪質頁岩
9	SB４　(16)東壁際	須恵器	鉢			(5.7)	５ｃ	
10	SB４	土製品	かまど			(5.3)		
11	Ｐ72	土師器	台付甕		9.7	(6.3)	５ｃ	
12	SK21北	須恵器	坏身	(11.0)		(2.0)	７ｃ	
13	SK21	須恵器	坏蓋	(9.8)		(1.1)	７ｃ	
14	SK21北	須恵器	坏身		(10.2)	(1.4)	８－９ｃ	
15	SK21北	須恵器	坏身		(11.4)	(3.0)	８－９ｃ	
16	SK16	陶器	碗	(14.6)	(7.8)	5.0	10ｃ	灰釉陶器
17	SK23　中位	須恵器	甕			(2.2)		
18	SK７　北部上半	土師器	高坏			(3.8)	古墳	
19	SK７　アゼ間	土師器	高坏			(4.5)	古墳	
20	SK７　アゼ間	須恵器	鉢			(7.9)	５ｃ	外面タタキ
21	SK７　アゼ間	須恵器	鉢			(8.2)	５ｃ	外面タタキ
22	SK７　北部上半	須恵器	甕			(3.0)		
23	SK７　北部上半	須恵器	高坏		(9.0)	(1.2)	５ｃ	
24	SK30北ｃ層	須恵器	坏身	(10.0)		(2.4)	７ｃ	
25	SK30北ｃ層下	須恵器	坏身	(12.8)		(1.9)	７ｃ	
26	SK７　北部上半	須恵器	平瓶			(4.4)	８？９ｃ	
27	SK30	須恵器	坏身	(11.6)		(3.2)	７ｃ	
28	SK７　アゼ間	土製品	土錘	径3.6	孔径(1.4)	長(7.1)		重さ(69.5)ｇ
29	SK30セク北ｅ層	土製品	土錘	径2.7	孔径1.1	長		重さ26.8ｇ
30	SK30南　トレンチ最下層	土製品	土錘	径1.4	孔径0.4	長		重さ5.0ｇ
31	SK15	須恵器	円面硯	(17.0)		(2.3)	奈良	
32	SK15	炻器	甕			(6.4)	14ｃ	常滑
33	SK15	陶器	碗	(11.2)		(3.0)	12ｃ	
34	SK15南北セク西半	陶器	山茶碗		(7.5)	(1.7)	12ｃ	
35	SK15	陶器	壺			(6.0)		古瀬戸
36	SK15	磁器	碗		(5.8)	(2.7)		青磁　画花文　中国
37	SK15	土師質	羽釜			(2.3)	13？14ｃ	
38	SK15	土師質	羽付鍋			(4.3)	14ｃ	
39	SK15南北セク西半	土師質	羽付鍋	(39.2)		(4.5)	16ｃ初	

2　瓦類

出土遺物の70％を占める。瓦の分類および細かな観察については、これまでの報告書［名古屋市教委1994・2002］に詳しく述べられており、以下ここでの報告の基準としたい。

1　軒丸瓦（第14・16図、写真31・32）

軒丸瓦の瓦当範種については、現在13種を確認している［服部1994・2002］。10次調査では、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴａ・Ⅴｂ・Ⅵ・Ⅶａ・Ⅷ・Ⅸの９種が確認できた。

Ⅰ　素縁素弁８弁蓮華紋（40）

SK30から１点のみ出土。内区直径17cm、厚さ（中央部で中房の高さを除いたもの）は1.8cmと薄い。花弁は先端がとがり僅かに肥厚する。中房は半球状で、直径４cm・高さ４mm、蓮子は１＋８である。焼成は軟質で、淡黄色を呈する。

Ⅱａ・Ⅱｂ　素縁蓮華紋（10次での出土なし）

Ⅲ　重圏縁素弁８弁蓮華紋（41・42）

尾張願興寺跡で出土する軒丸瓦の中で最も多い。10次調査でも、内区のわかるものだけで８点、外縁の破片を含めると倍近くの出土となる。復元可能な（41）は、復元直径が21cm・外縁幅3.8cm・瓦当厚2.4cmを測る。中房は円筒状となり、直径3.4cm・高さ５mm、蓮子は１＋６である。（41）はやや軟質で灰白色、（42）は灰色を呈し、ともに燻し焼成である。

Ⅳ　重圏縁素弁９弁蓮華紋（43）

外縁と内区の一部のみの破片が出土。にぶい橙色を呈す。

Ⅴａ　重圏縁単弁８弁蓮華紋（44）

弁内に単子葉を配するいわゆる「山田寺式」の軒丸瓦。10次調査では、中房部を欠失する（44）のほか、単弁部の破片が出土した。（44）の外縁部は幅3.8cm、四重圏紋の外に幅1.6cmの無紋帯がめぐる。

外面が灰色を呈し燻し焼かれた瓦質の焼成である。

Ⅴｂ　重圏縁単弁８弁蓮華紋（45）

子葉が沈線のみで表現される。10次調査では最も良好な残存状態であり、SK７の南端、SK30を切る付近の瓦片集中部から出土している。直径18.8cm・外縁幅2.2cm・瓦当厚4.8cmを測る。橙褐色を呈す。

Ⅵ　重圏縁単弁６弁蓮華紋（46）

尾張元興寺跡では２番目に発見例が多く、弁内にパルメット紋を配する特徴的な瓦。10次調査では、内区面が剝がれた破片（46）や単弁破片（59）が確認された。中房は円筒状で、直径４cm・高さ８mm、周縁に歯車状の細かな刻み目が施される。黄灰色を呈し、燻し焼きの焼成である。

Ⅶ　鋸歯紋縁複弁蓮華紋（47）

いわゆる「川原寺式」の瓦であり、外縁近くの小片のみの出土である。須恵器に近い硬質の焼成である。範形の違いによる細分ではⅦａと思われ、今次ではｂ・ｃ類の出土はない。

Ⅷ　珠紋縁単弁12弁蓮華紋（48）

外区の一部を含む約１/４の破片が出土した。灰色で、燻し焼きの焼成である。外区内縁に珠紋帯をめぐらすこの型式の軒丸瓦は、今回はじめて発掘調査での出土が確認された。石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址

の研究』(1936年)に「尾張元興寺」出土して紹介され、同型式の瓦は昭和区若宮瓦窯で焼かれ尾張国分寺でも使用されたことがわかっている。

IX　宝相華紋(49)

約1/8の破片が出土。橙色の均質な焼成である。瓦当厚は1.5cmであり、瓦当裏面には布目痕が明瞭に残る。布目密度はやや粗めと思われる。

2　軒平瓦(第15・16図、写真32・33)

尾張元興寺跡出土の軒平瓦は、基本的に重弧紋と唐草紋の二種である。10次調査では唐草紋の出土はなく、すべて重弧紋であった。1994・2002年の報告書において、重弧紋は紋様構成や顎面調整からⅠ～Ⅳの型式に分けられ、さらに重弧の本数(三重・四重・五重等)によって細分されている。

重弧紋(50～54)

今次調査出土の重弧紋は、状態の良いものはほとんどが「Ⅰ簾状押し挽き重弧紋(顎部凸面ヨコナデ)五重弧紋」である。特に残存状態の良い(50)～(54)は、瓦当面の厚さが順に3.8・3.9・5cm、顎の長さ4・6.2・6cm、顎の高さ2・1.3・1.6cmを測る。色調と焼成は、(50)が灰または褐色で硬質、(51)・(52)は白色に近く軟質である。

3　丸瓦(第17・18図、写真33)

尾張元興寺跡出土の丸瓦は、いわゆる「行基葺」瓦が主体である。10次調査においても玉縁付丸瓦は僅か1点を確認したのみにとどまる。図示した3点については、いずれも凸面のタタキ目をていねいにナデ消している。ほぼ完存の(83)は、長さ43cm・広端幅18cm・狭端幅10cm・厚さ2cmを測る。

4　平瓦(第18・19図、写真34)

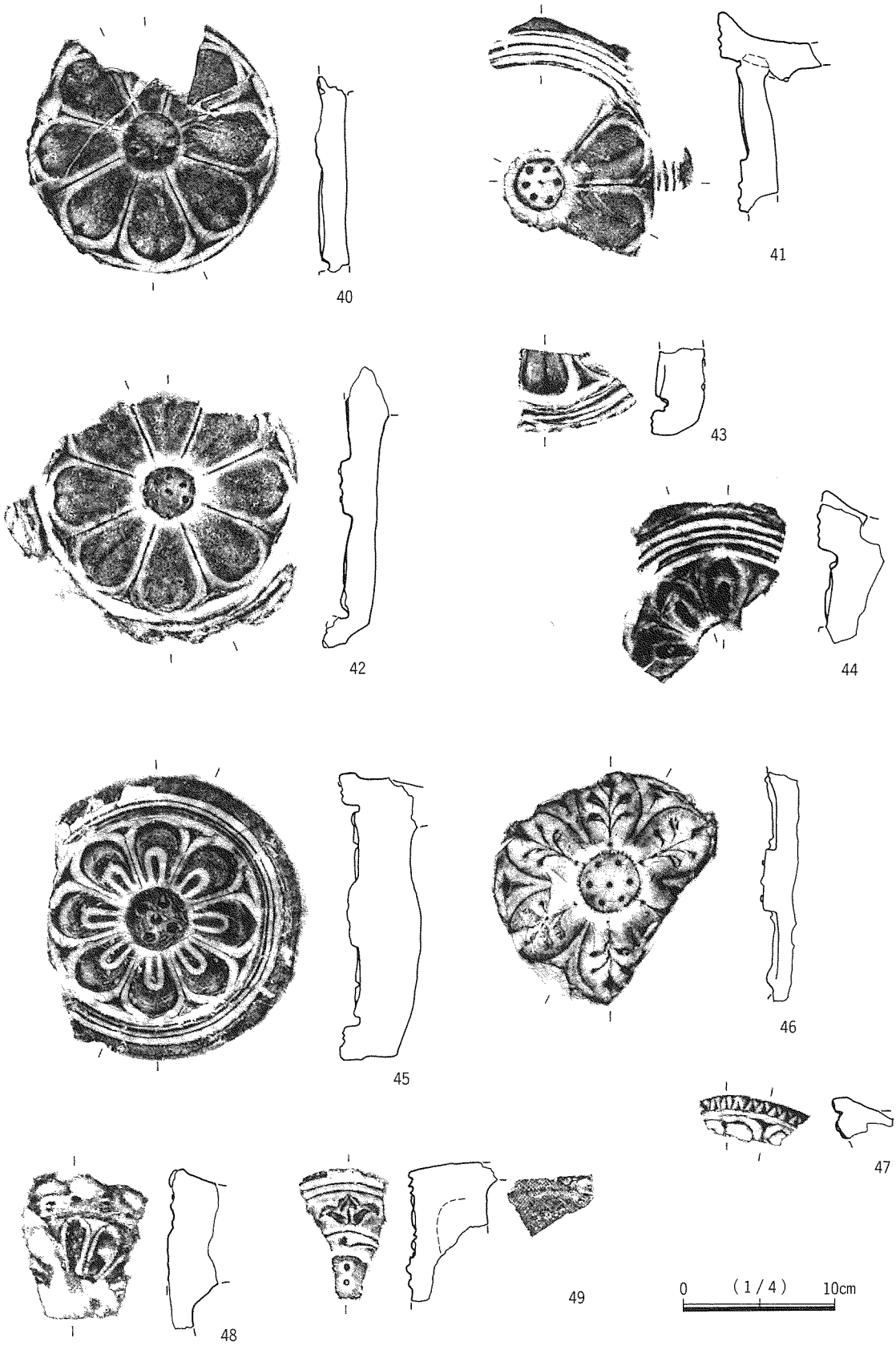
刻線タタキの凸面と、縄タタキの凸面がみられる。刻線タタキには平行と格子(正・斜格子)、縄タタキには側縁に平行なものと、弧状を描くものに分けられる。厚さは1.5cm前後のものから2cmを超える厚手のものがみられる。

5　道具瓦(第19図)

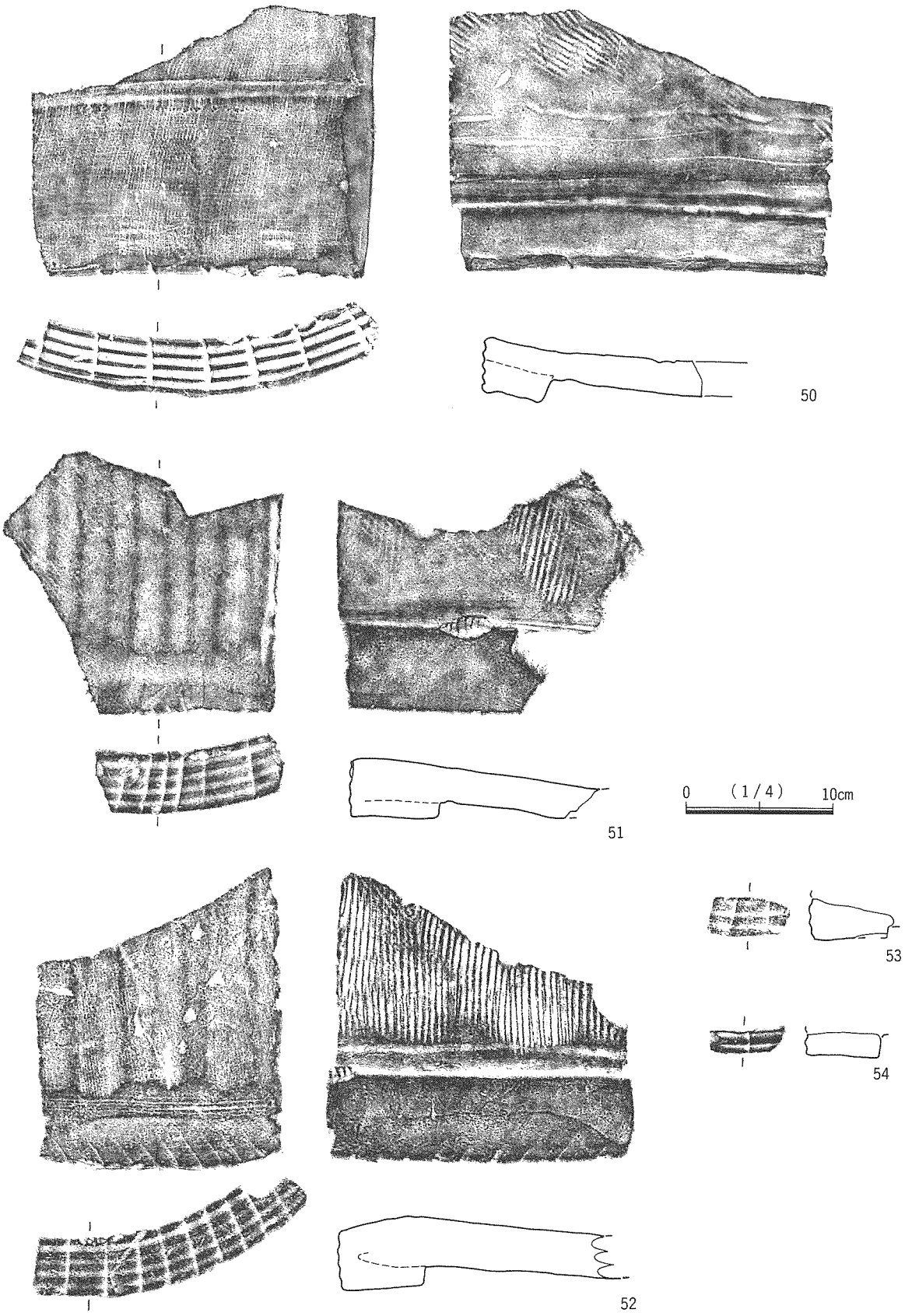
隅切瓦(93・94・95)　焼成前に隅を斜めにカットされた瓦。

6　棟飾瓦(第19図、写真35)

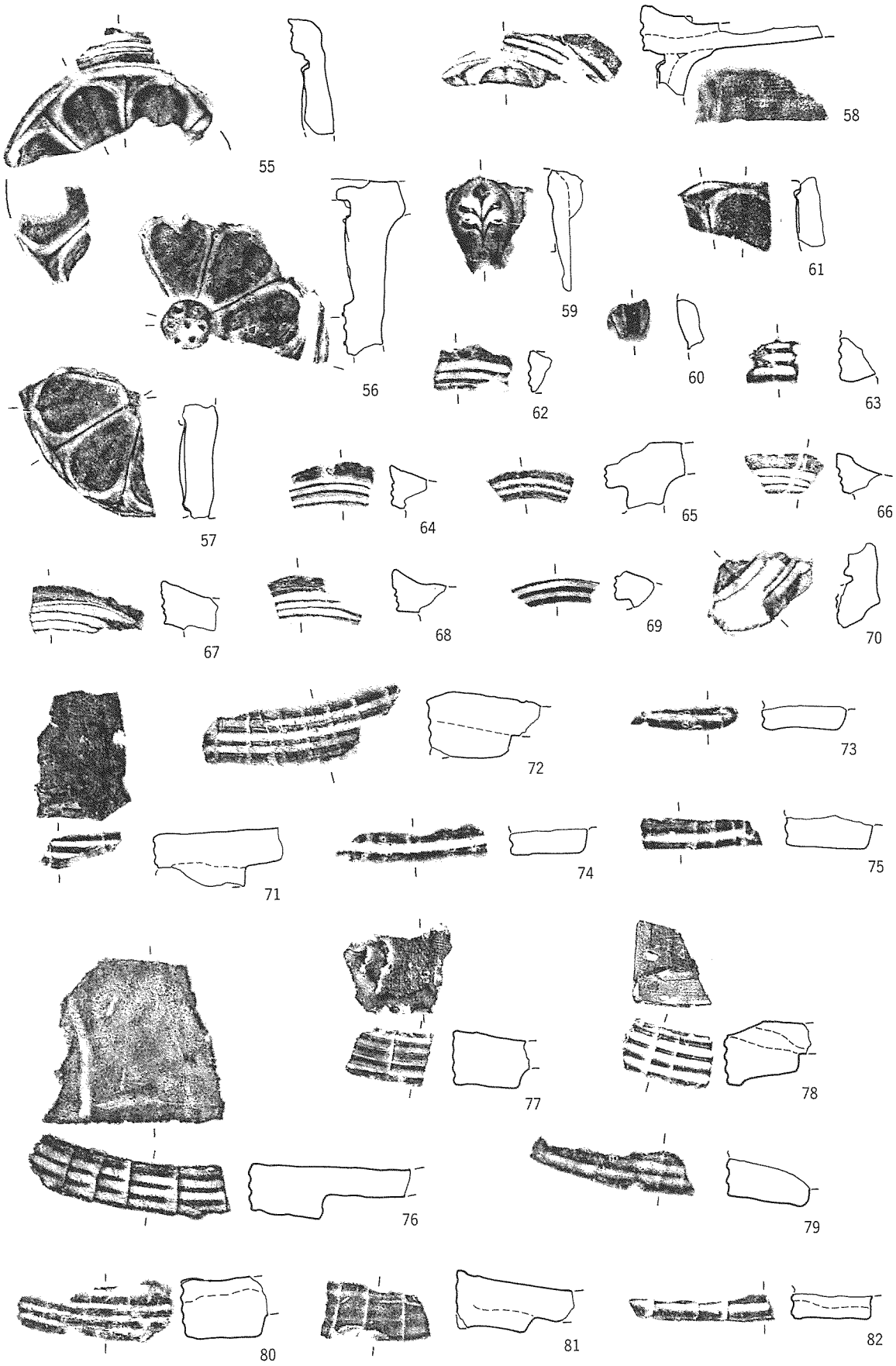
いわゆる「鬼瓦」であり、尾張元興寺跡での出土例は稀である。10次調査では、SK30の埋土中から突帯状の側縁と鬼面紋の一部が出土し、貴重な発見例となった。長さ・幅ともに30cmを超える大きさに復元できる。



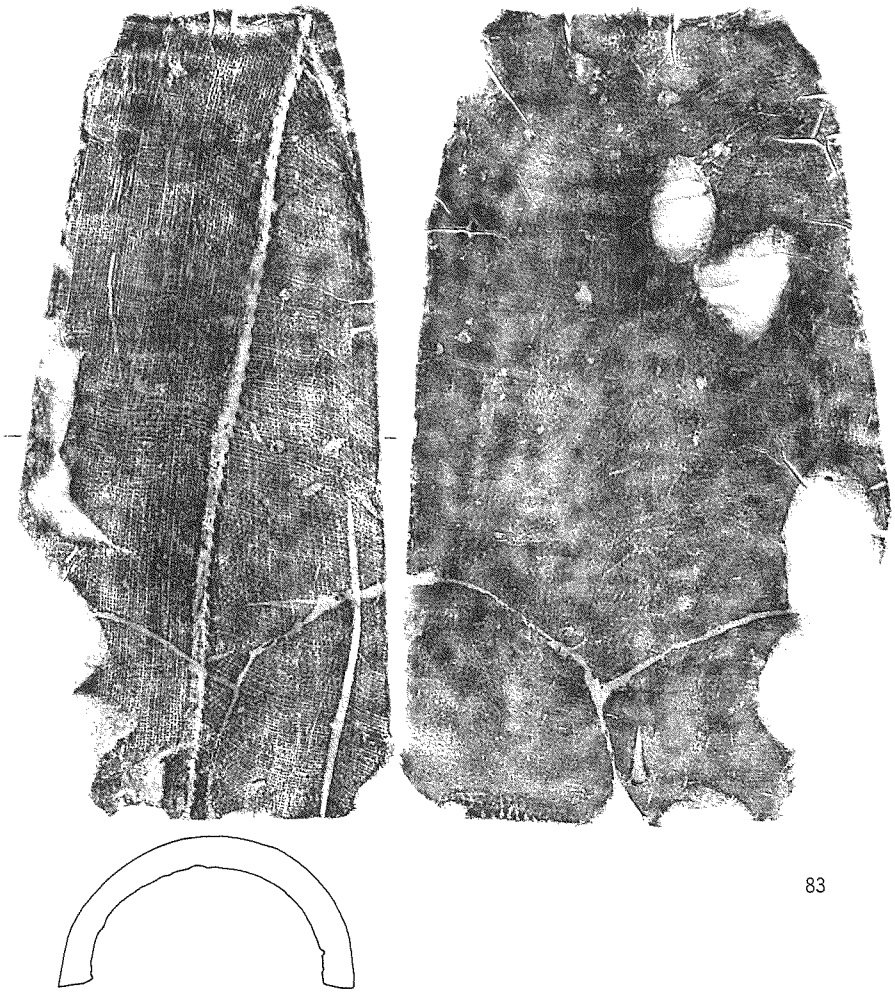
第14図　軒丸瓦（1/4）



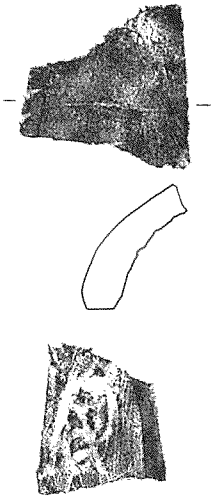
第15図　軒平瓦（1/4）



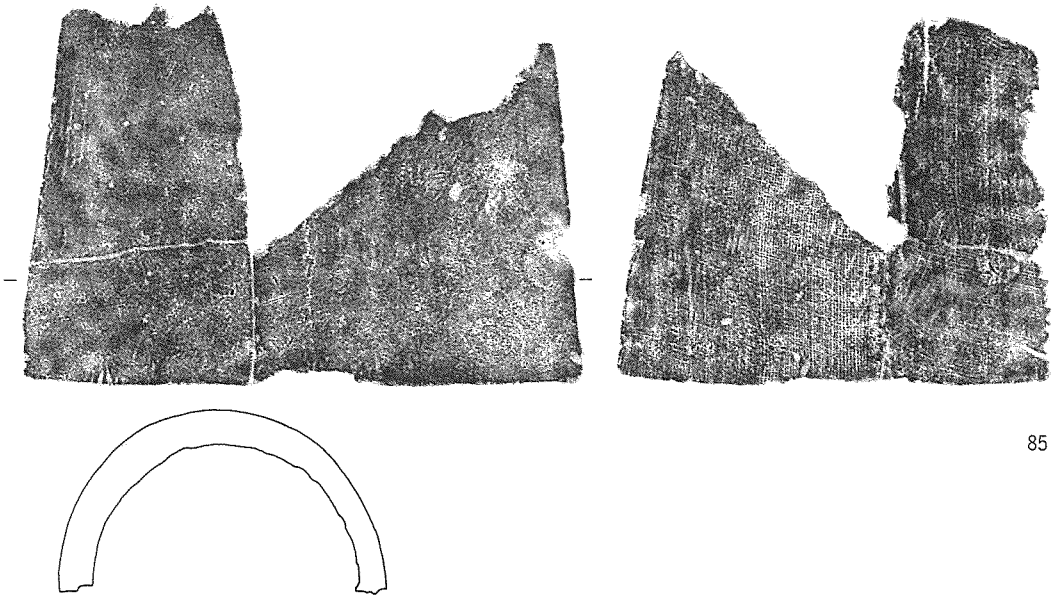
第16図　軒丸瓦・軒平瓦片（1/4）



83

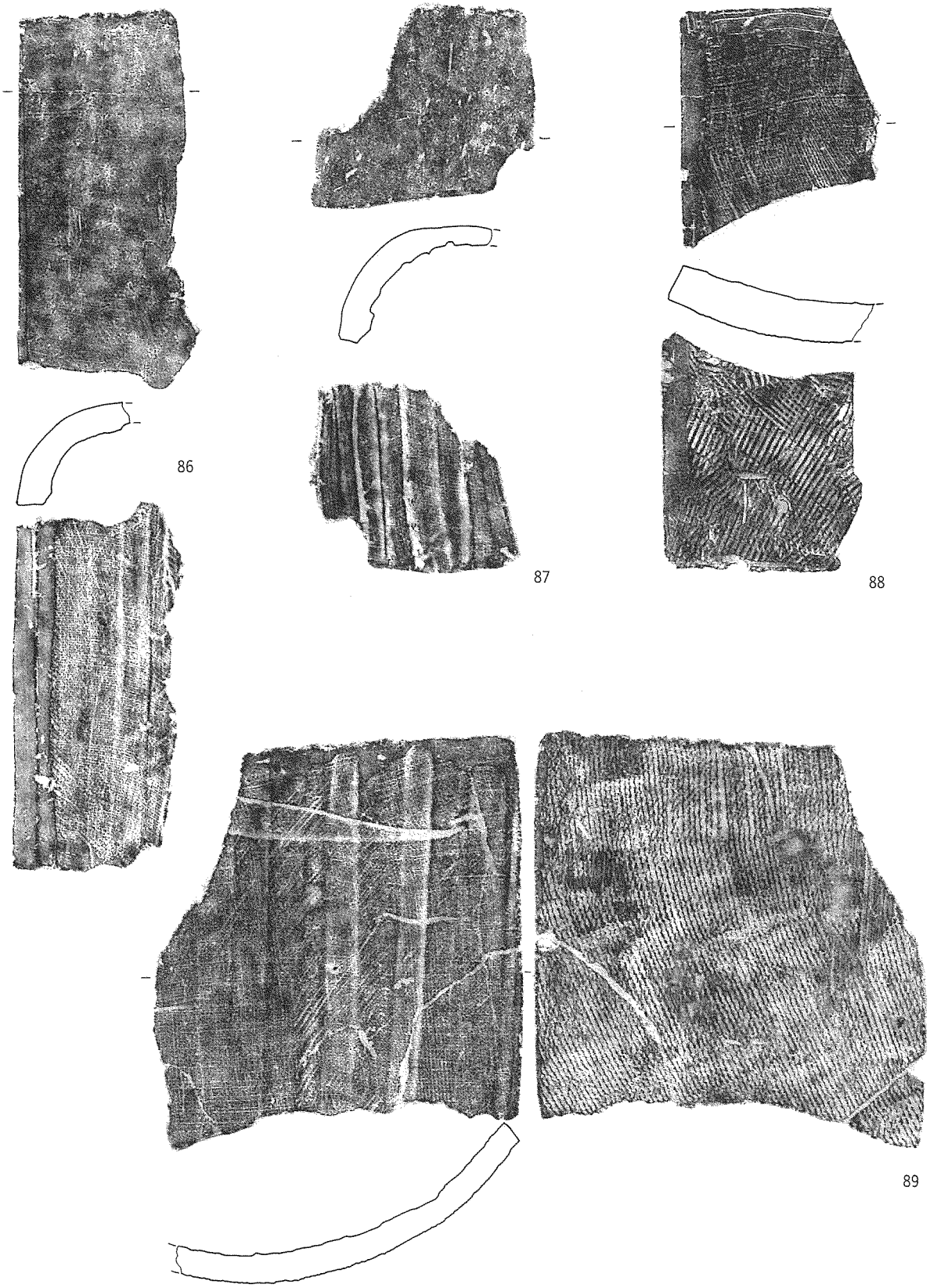


84

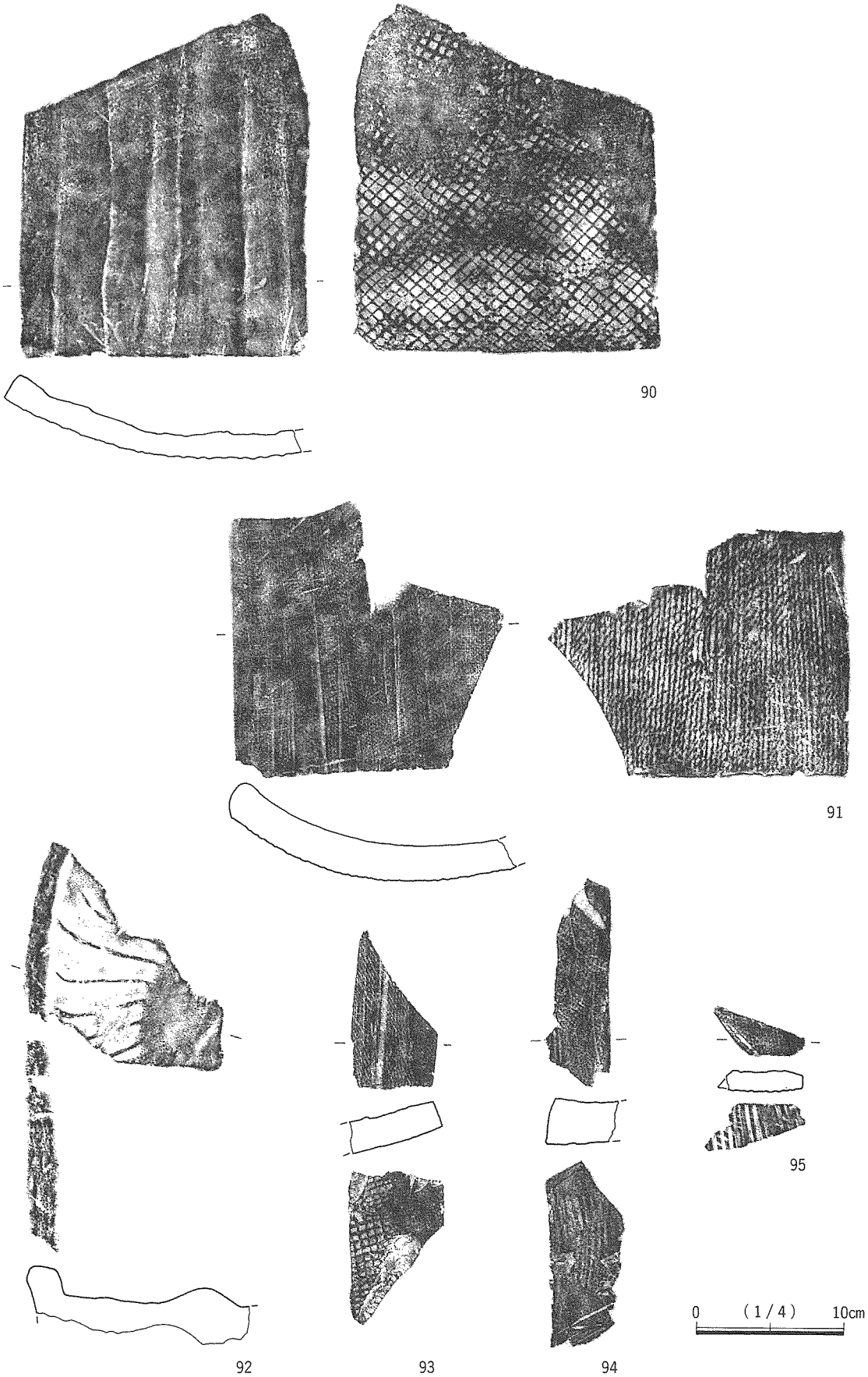


85

第17図　丸瓦（1/4）



第18図　丸瓦・平瓦（1/4）



第19図　平瓦・棟飾瓦・隅切瓦（1/4）

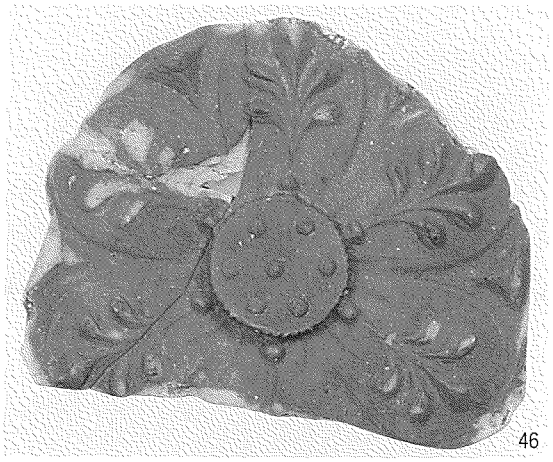


写真32　軒丸瓦（番号は図版と同じ）

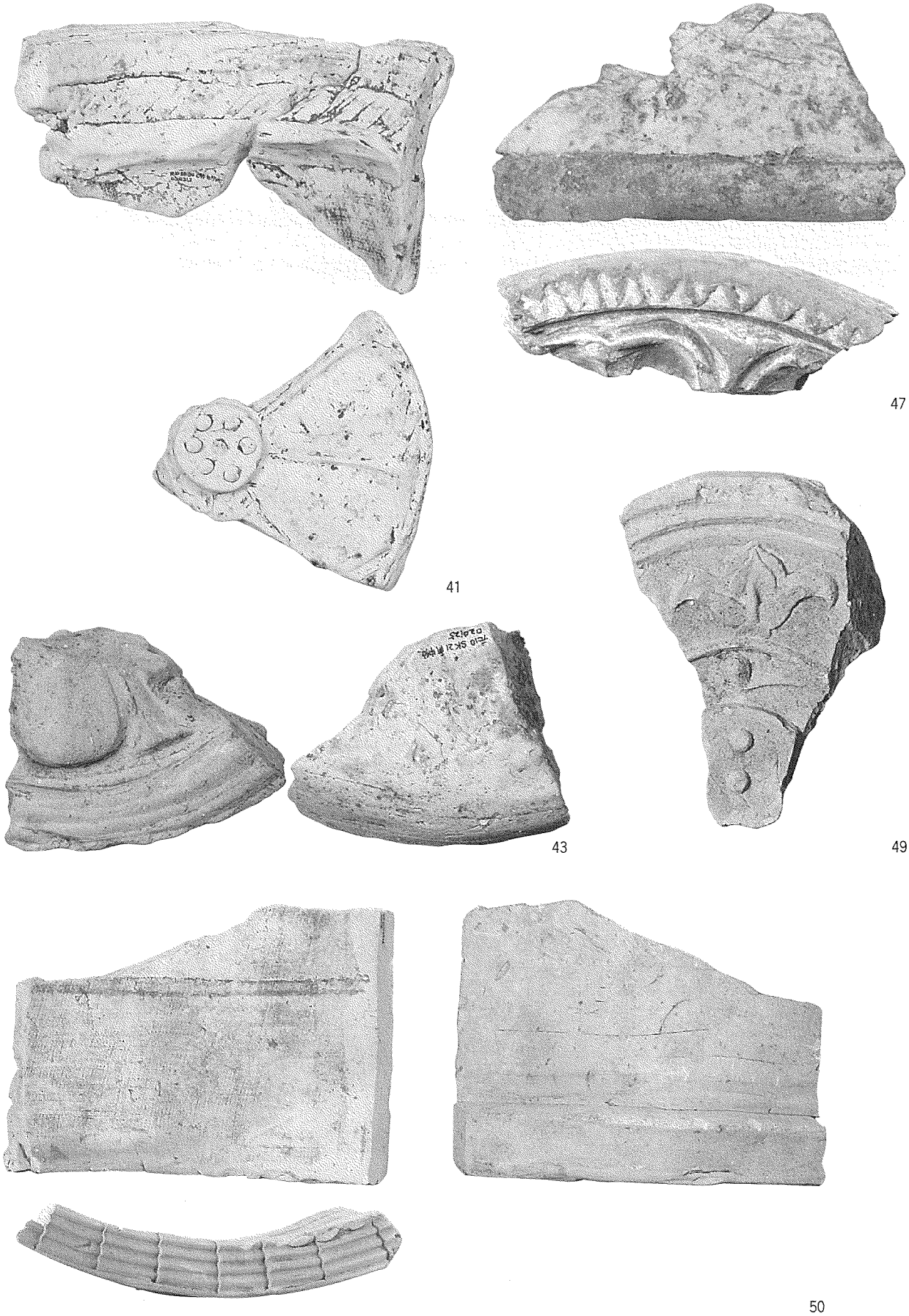


写真33　軒丸瓦・軒平瓦

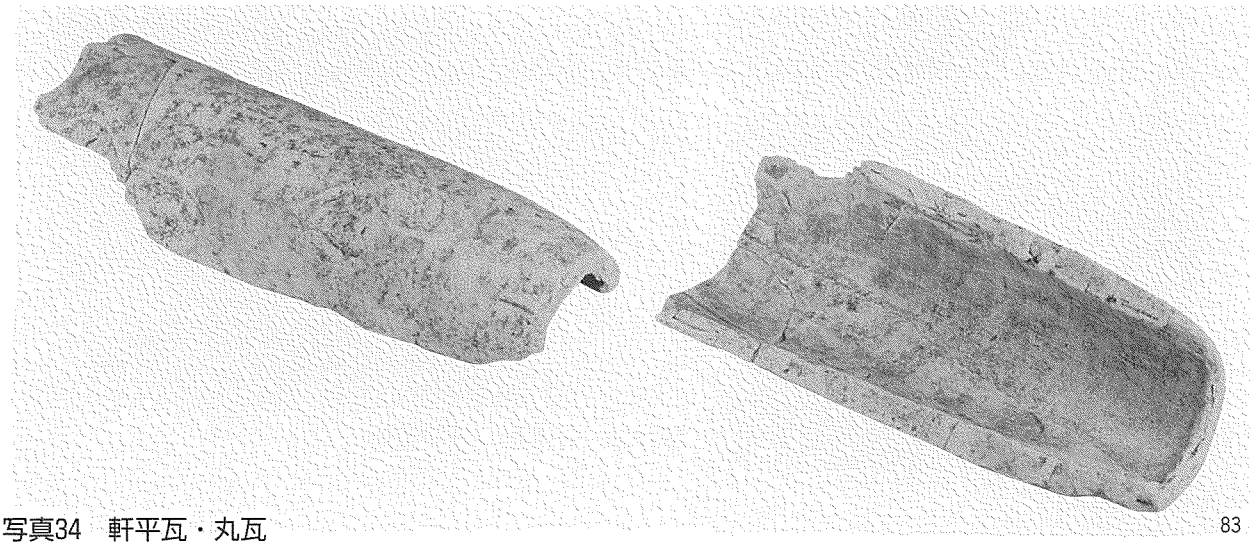


写真34　軒平瓦・丸瓦

89 写真35　平瓦（88～90）

90

88

92

写真36　棟飾瓦

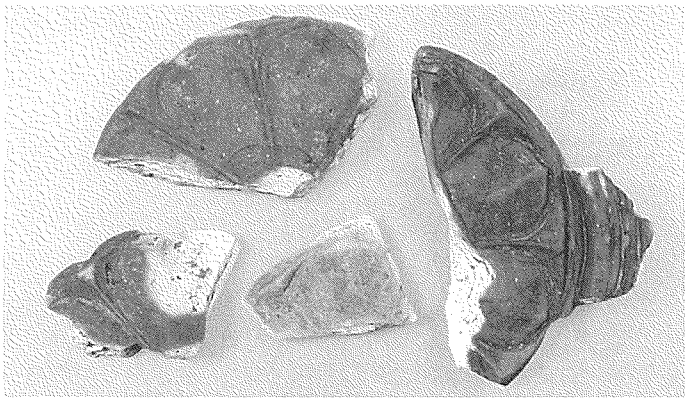


写真37　軒丸瓦

写真38　軒丸瓦・軒平瓦片

第３表　軒丸瓦観察表

	遺　　構	直　径	内　　区				外　区		長	焼　　成	色　　調		燻	胎土
			内区径	中房径	蓮子数	弁幅	外区広	外縁高			外　面	断　面		
40	SK30上層	(176)	170	40	1＋(8)	39			20	不良・軟	淡黄色	淡黄色	×	やや密
41	SK７　南半	324	160	34	1＋6	40	31	13	69	不良・軟	灰白色	灰白色	○	やや密
42	SK12南北ベルト北半区	210	172	38	1＋6	38	19	17	44	良好	灰色	灰白色	○	粗
43	SK21　南　中位					28	16	9	36	やや良	橙	橙	×	やや粗
44	SK７南半	(109)	(69)	42		32	38	14	45	良好	灰色	灰白色	○	やや密
45	SK30　北	188	144	44	1＋4	34	22	13	54	硬	橙	橙	×	やや密
46	SK30南東	(148)	145	40	1＋6	45			25	良好	黄灰色	明黄褐色	○	やや密
47	SK７南半	(212)	(190)				11	5	41	良好・硬	灰色	灰色	×	粗
48	SK15南北ベルト西半	(194)	(164)	48		20	17	3	33	良好・軟	青灰色	灰白色	○	やや密
49	SK15上位						17		59	やや良	橙	橙	×	やや密
55	SK７南半	(223)	(163)			40	30	16	36	良好	暗灰色	灰白色	○	やや密
56	SK７ベルト間		152	36	1＋6	38	15		50	やや不良・軟	灰色	灰白色	○	やや密
57	SK15					39			29	良好	灰色	灰白色	○	やや粗
58	SK30	(222)	(182)				28	15	125	不良	灰色	灰白色	○	やや密
59	SK７　北上半					42			—	やや不良	灰色	にぶい黄橙	○	やや密
60	SK７南半								18	やや良	灰色	灰白色	○	やや密
61	SK30　セク南　ｃ？ｄ層								23	不良	黄灰色	浅黄色	○	やや密
62	SK11						27		16	やや不良	青灰色	灰白色	○	やや密
63	SK21							8	25	やや不良	灰白色	灰白色	×	やや密
65	SK30　セク南　中？下位　ｃ？ｄ層	(188)	(125)				29	16	55	良好・軟	灰色	灰白色	○	やや密
66	SK７南半	(220)					28		38	不良	灰色	灰白色	○	やや粗
67	SK30北						30	14	45	良好・軟	暗灰色	灰白色	○	やや密
68	SK30北						29	18	37	良好・軟	暗灰色	灰白色	○	やや密
68	SK30　中位						38	9	25	良好	灰色	灰オリーブ	○	やや密
69	SK30						21	11	17	良好	暗灰色	灰色	○	やや密
70	SK30　上層						32	12	30	不良・軟	灰白色	灰白色	×	やや密

第4表　軒平瓦観察表

番	遺　　構	厚さ	顎長	高	焼　成	色　調		燻	胎土
						外面	断面		
50	SK23　中位中央	36	40	15	硬	灰色	灰白色	×	密
51	SK30　上層	39	62	13	軟	灰白色	灰白色	×	やや粗
52	SK30　南　中位	50	60	16	不良	灰白色	灰白色	○	やや密
53	SK 7　南	(28)	53	—	良好	灰色	灰色	×	粗
54	SK 7　南	(14)	49	13	軟	灰白色	灰白色	○	やや密
71	SK11	38	61	14	やや不良	灰色	黄灰	○	やや密
72	SB 4　東壁	48	55	15	やや不良	灰色	浅黄	○	やや密
73	SK21　上層	(16)	57	14	やや不良	灰色	浅黄	○	やや粗
74	SB 6　南	(17)	53	16	良好	灰色	黄灰	○	やや粗
75	SB 3　SK21　上層	(22)	55	17	やや良	灰色	浅黄	○	やや密
76	SK 7　南	33	52	15	不良・	灰白色	灰白色	×	やや密
77	SK 7　南	32	52	13	良好	灰色	灰色	×	粗
78	SK 7　西壁	39	59	13	良好	灰色	灰色	×	やや密
79	SK 7　南		56	14	良好	灰色	灰白色	○	やや密
80	SK30　上層	(40)	54	15	良好	灰色	灰黄	○	やや粗
81	SK 7　南	34	54	8	不良・	灰白色	灰白色	×	やや密
82	SK 7　西壁	(17)	55	17	不良	灰色	灰白色	○	やや粗

第5表　その他の瓦観察表

番	遺　　構	種類	凸面	凹面	厚	胎土	焼　成	色　調		燻
								外　面	断　面	
83	SK21　北　東半断割	丸瓦	桶	消し	17	やや密	やや不良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	×
84	SK21　北　東半断割	丸瓦	桶	消し	22	粗	良好	青灰色	青灰色	×
85	SK21　北　東半断割	丸瓦	桶	消し	19	やや密	やや不良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	×
86	SK 7	丸瓦	桶	布	20	やや粗	やや不良	灰黄色	にぶい橙	×
87	SK21　北　東半断割	丸瓦	桶	消し	21	やや密	やや不良	浅黄色	浅黄色	×
88	SK 7	平瓦	平行	桶	30	やや粗	良好	灰色	灰色	×
89	SK 7　南	平瓦	桶	縄	20	やや粗	やや不良	橙	橙	×
90	SK 7	平瓦	格子	桶	17	やや密	不良	灰白色	黄灰色	×
91	SK21　北　東半断割	平瓦	縄	桶	24	やや密	やや良	灰色	灰色	×
92	SK 7　南	鬼瓦	—	—	(30)	やや粗	やや不良・軟	灰色	灰白色	○
93	SK21　北　東半断割	隅切瓦	格子	布	21	やや粗	良好	黄灰色	灰白色	×
94	SK 7　南	隅切瓦	平行	布	26	やや密	良好	黄灰色	黄灰色	×
95	SK30　北C層　下位	隅切瓦	平行	布	14	やや粗	やや良	灰白色	灰白色	×

3　近世遺物

10次調査では、20基をこえる近世土坑から、18世紀後半から19世紀にかけての近世陶磁器類を主とした遺物がまとまって出土している。

磁器類には、肥前系のものと瀬戸・美濃系のものがあり、碗・皿・鉢・蓋の主要器類のほか、紅皿・小坏・瓶（神酒徳利）・水滴などがみられる。碗は、筒形碗・広東碗・端反碗・丸碗といった多種にわたる。

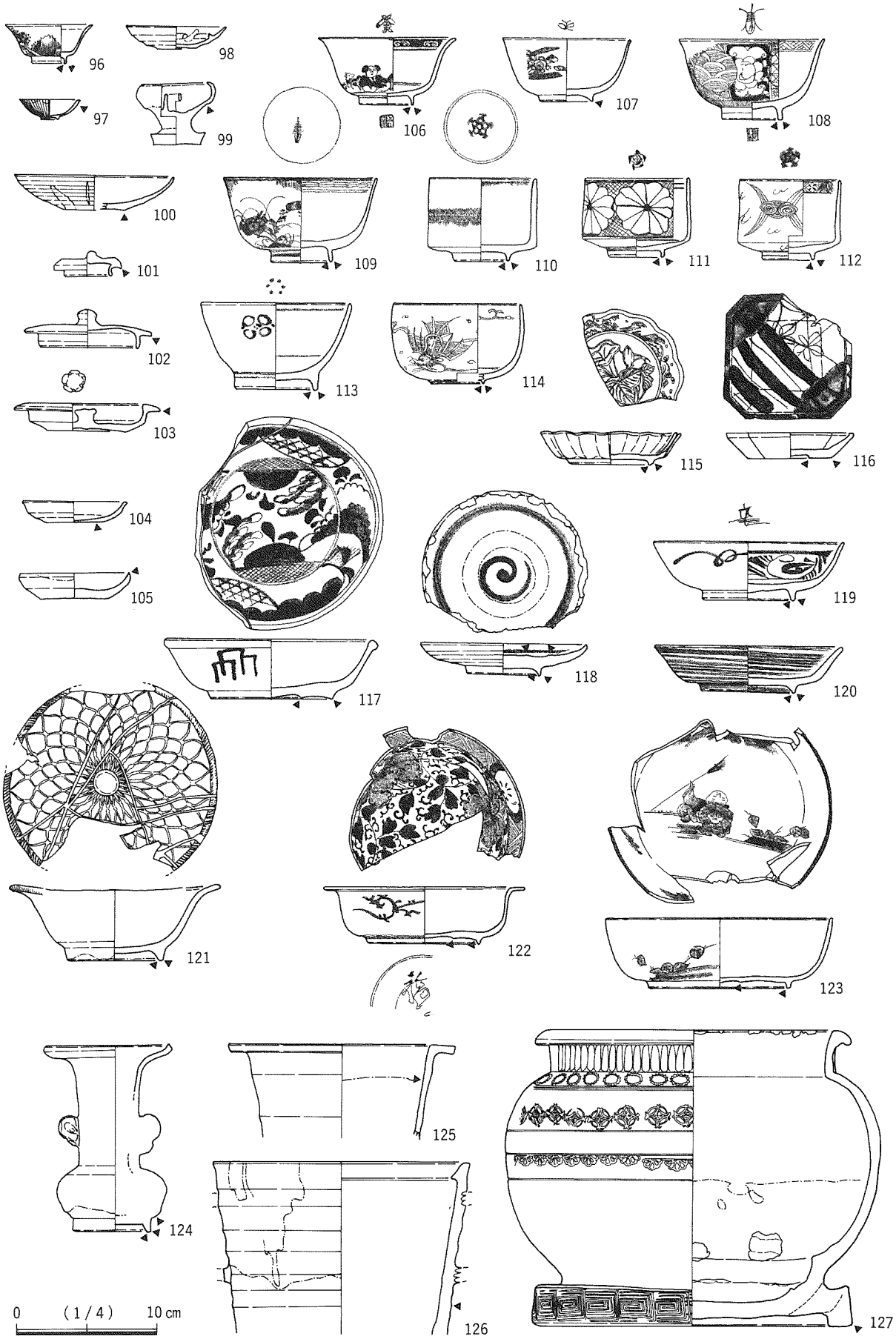
陶器類はほとんど瀬戸・美濃系の製品で占められる。碗・皿・小皿など食卓に不可欠なものをはじめ、・灯火具類・徳利・急須・水注・蓋物・壺・瓶・甕・擂鉢・花瓶・仏花器・仏口器・火鉢・香炉・瓶掛・行平鍋・十能・植木鉢などあらゆる日常生活用品におよんでいる。

炻器類は、主に常滑製であり、大甕・水甕のほか、炭櫃（185）・かまど（211）・蚊燻し（212）・火消し壺など中･大型品が多い。産地は特定できないものの、白色粘土等を使用して低火度焼成した製品に、皿･内耳鍋・五徳（213）・人形（239）・盆景の橋（240）・ミニチュアまたは玩具（134・201）がある。(174)は、近世貨幣である「一分銀」を模した型物で、裏面には「定　銀坐(座)常足」とある。

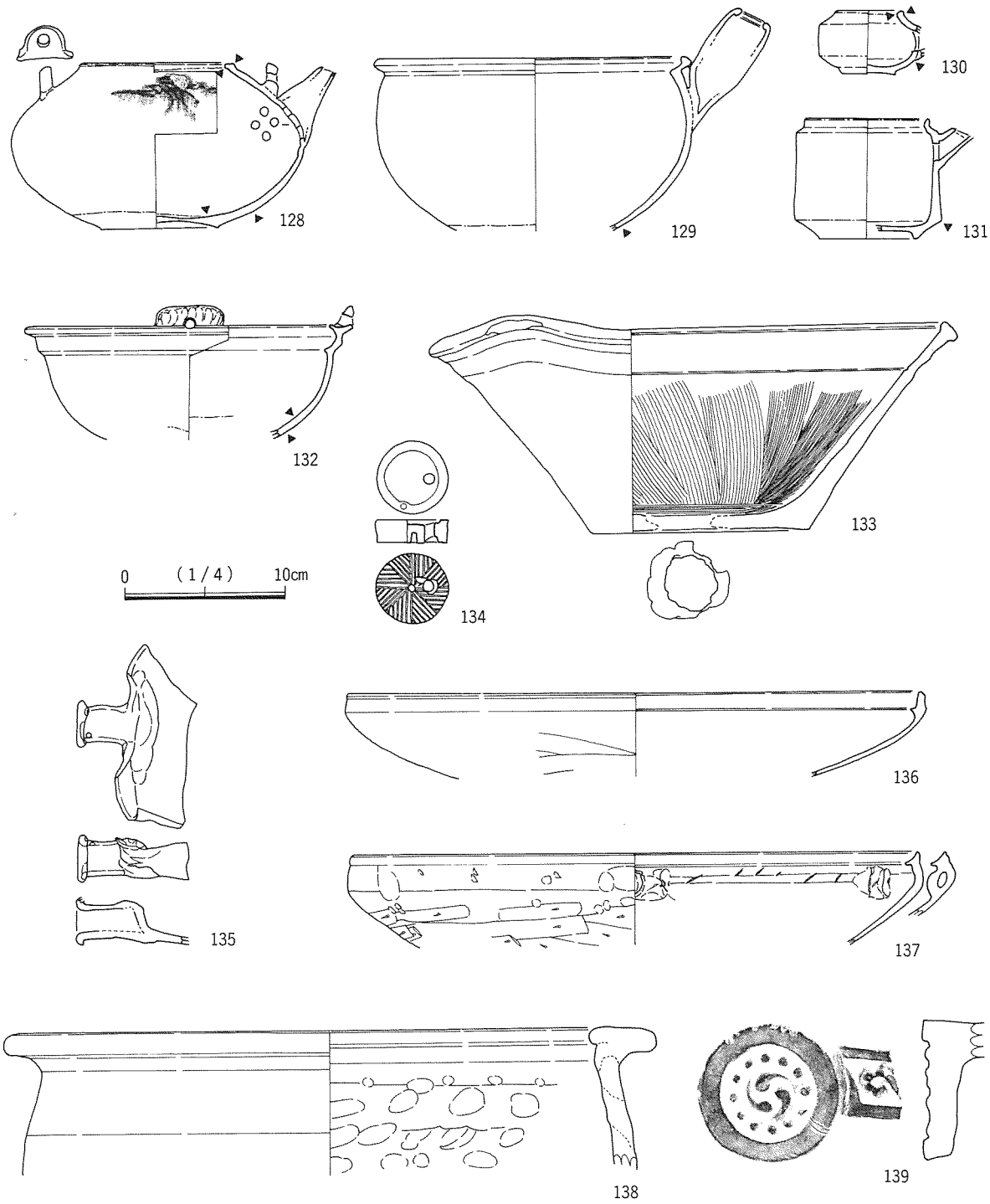
その他の遺物として、青銅製品は「寛永通寶」２点（175･176)、石製品は火打石（260～272）および砥石（273～274）が出土する。火打石は、図化しなかったものを含めて、20点を数え、いずれも養老瀧産の青みがかった地に白い縞が特徴的なチャートの一種と思われる石材を使用している［水野1998］。とくにSK26からは、比較的大粒のもの８点が出土しており、このように一ヵ所からまとまって出土する例は現在のところあまり類例を見ない。(280）は第２次大戦中に使われた陶製代用品の竿秤の錘である。表面に、「岐阜中定錘秤量拾五瓩」とあり、実際の重さは900ｇである。

近世遺物の年代観は、18世紀後半から19世紀にかけてのものが主であることがわかった。陶磁器類を中心に、さまざまな日常生活用品が揃っており、量的にもまとまった資料といえる。

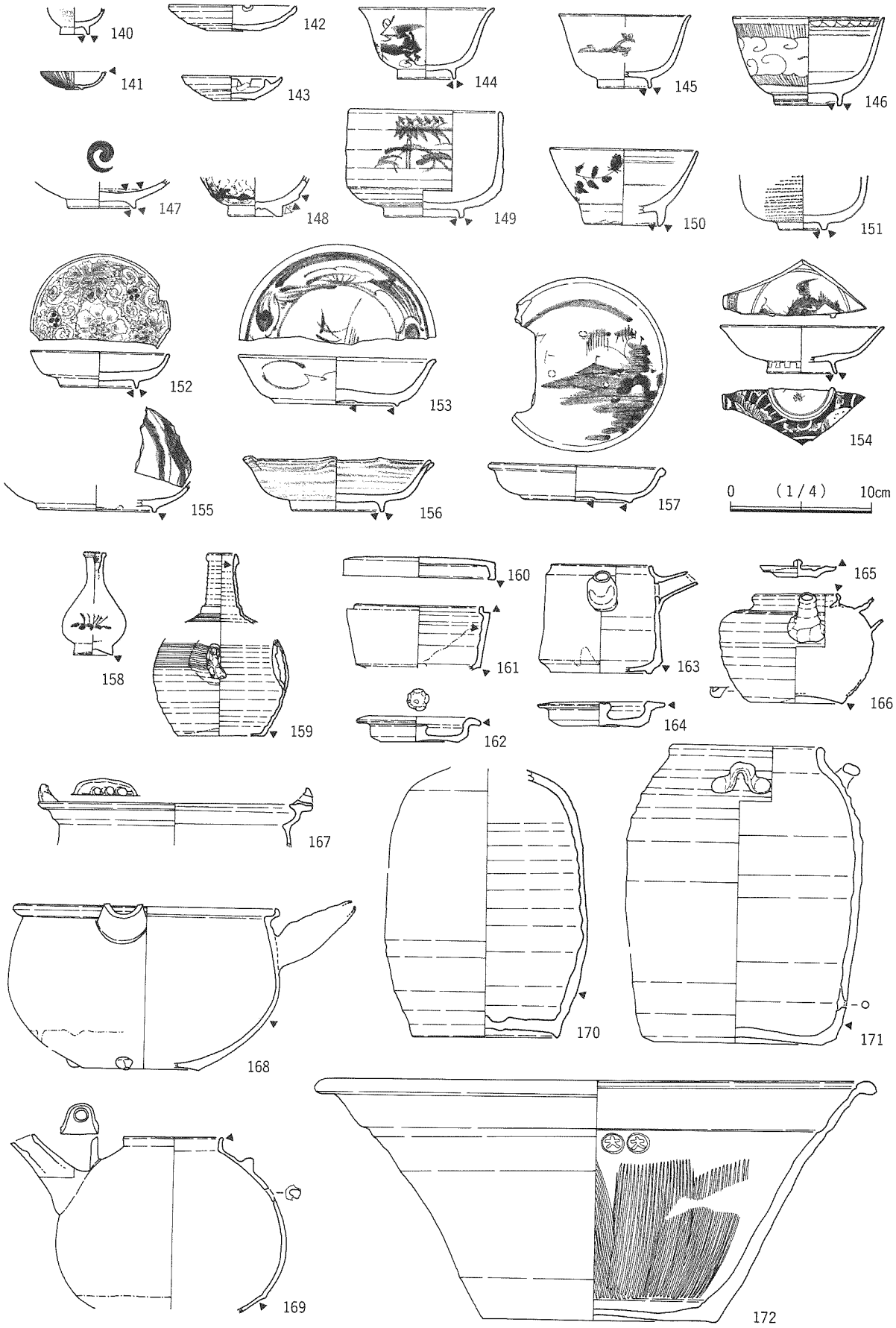
写真39　ＳＫ４出土遺物



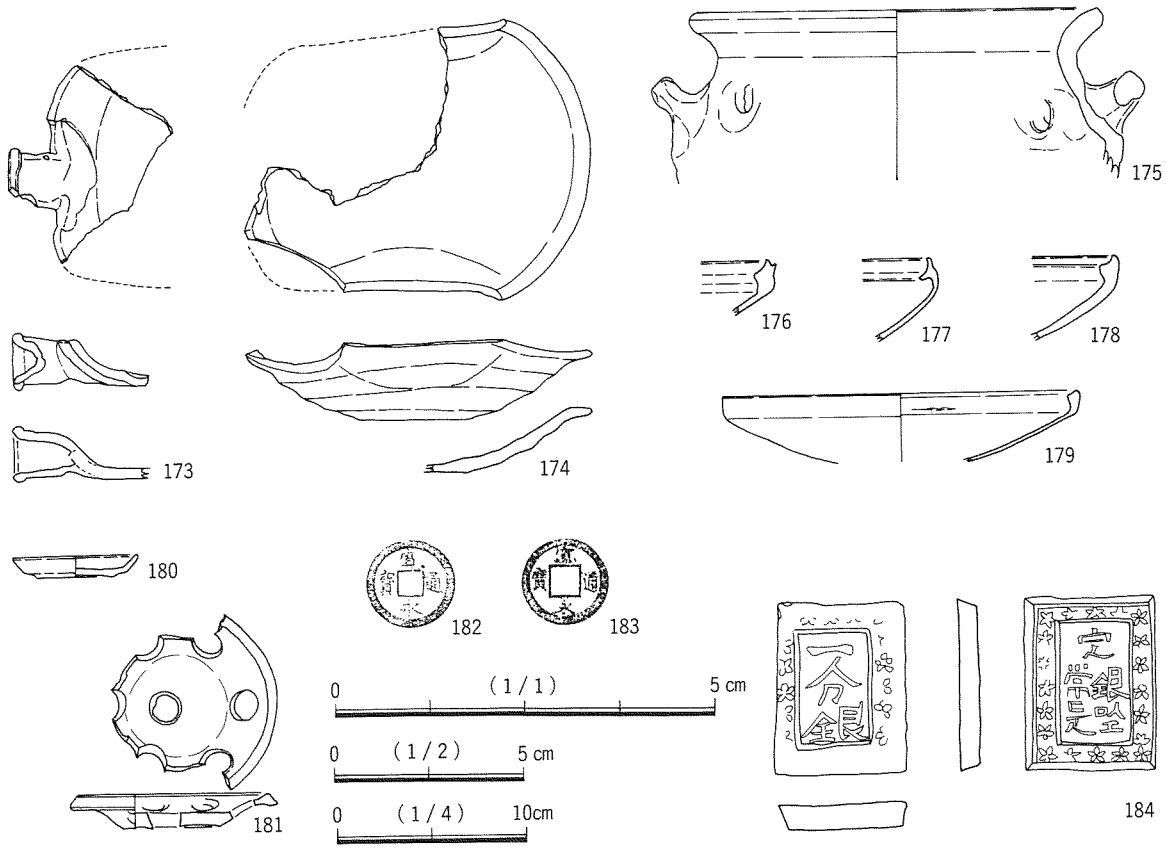
第20図　SK４出土遺物１（１/４）



第21図　SK４出土遺物２（1/4）



第22図　SK５出土遺物１（1/4）



第23図　SK５出土遺物２（１/４、184は１/１、182・183は１/２）

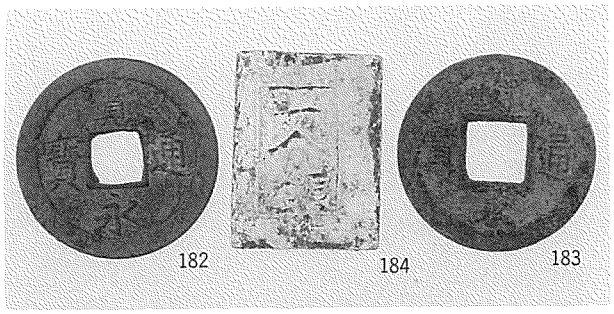
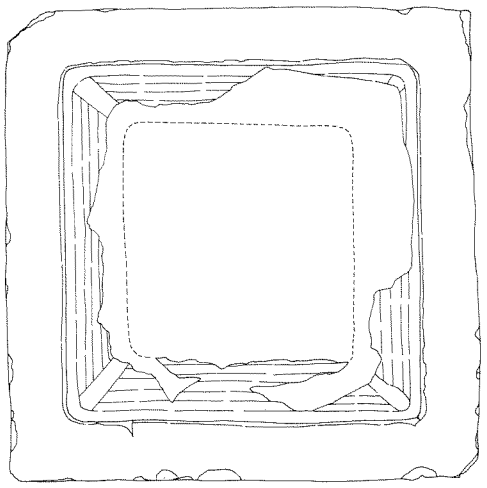
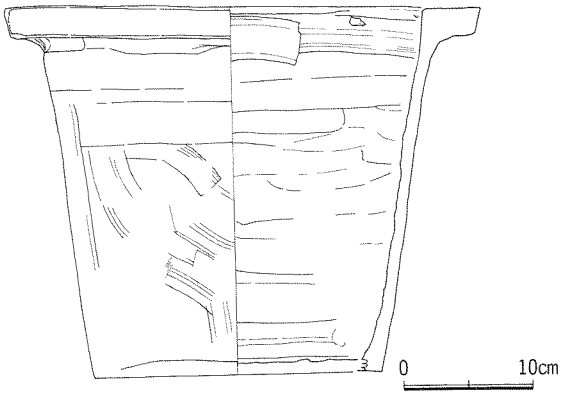


写真40　「寛永通寶」と模造銭

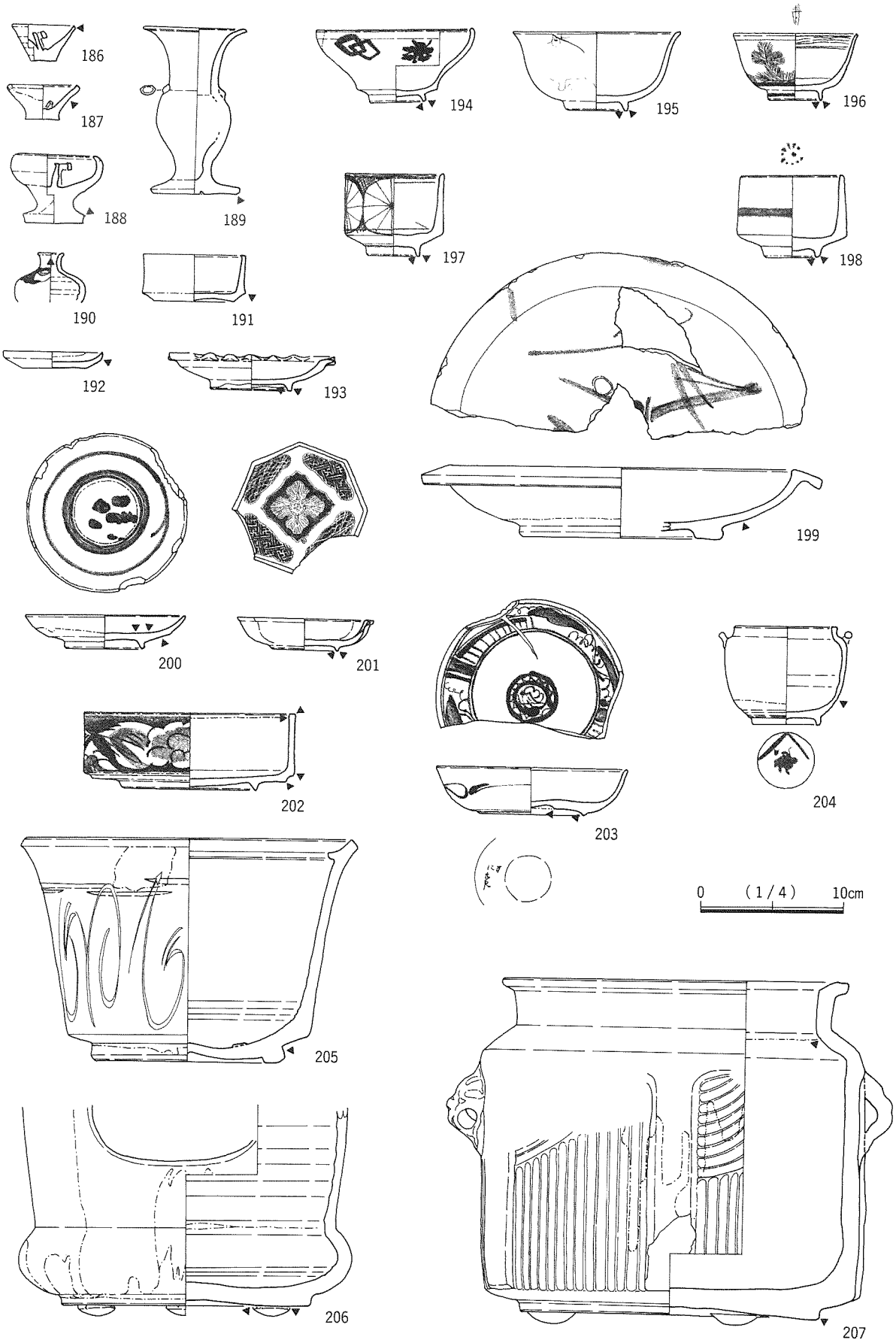
▲写真41　「蚊燻し」（SK11出土、212）



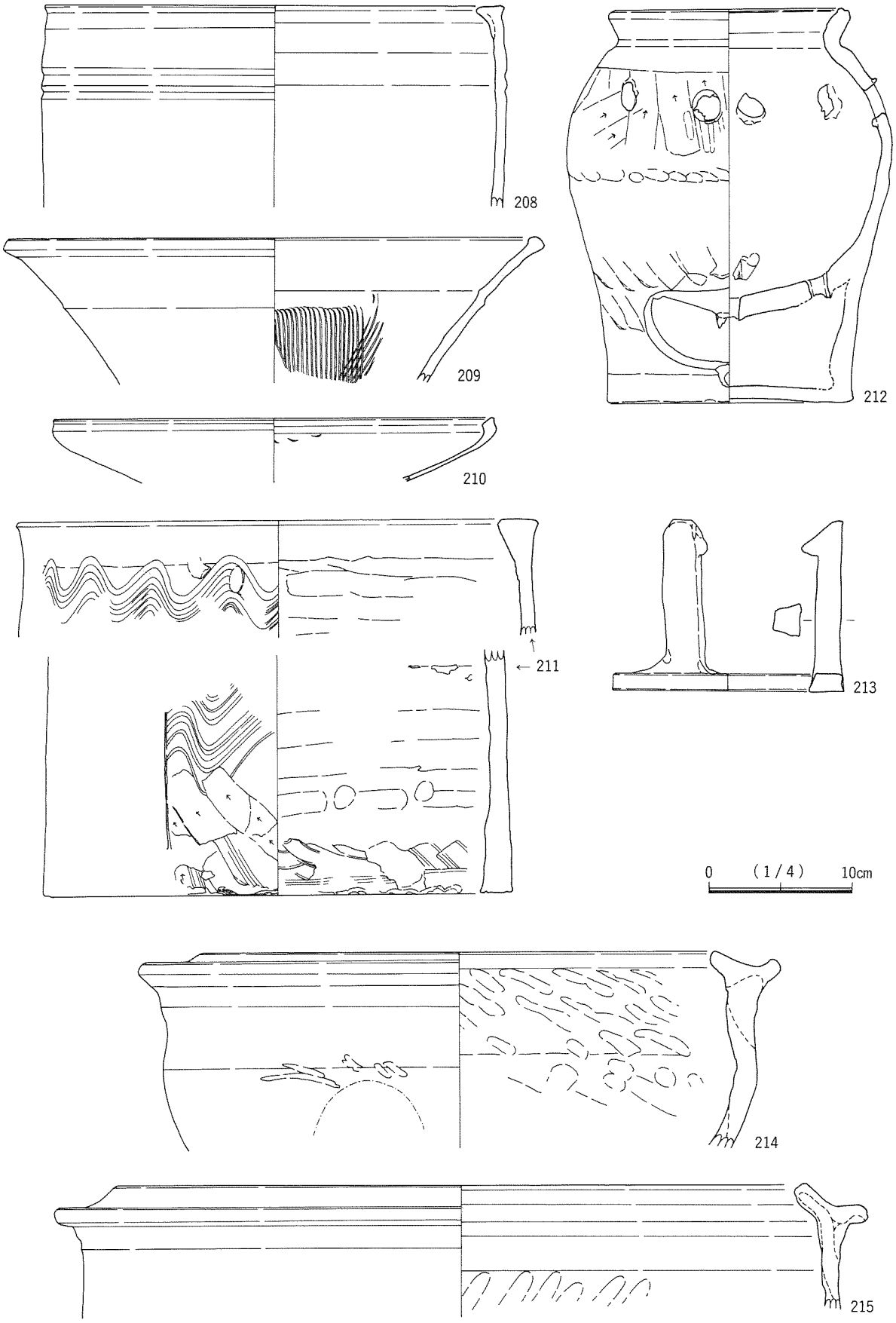
185



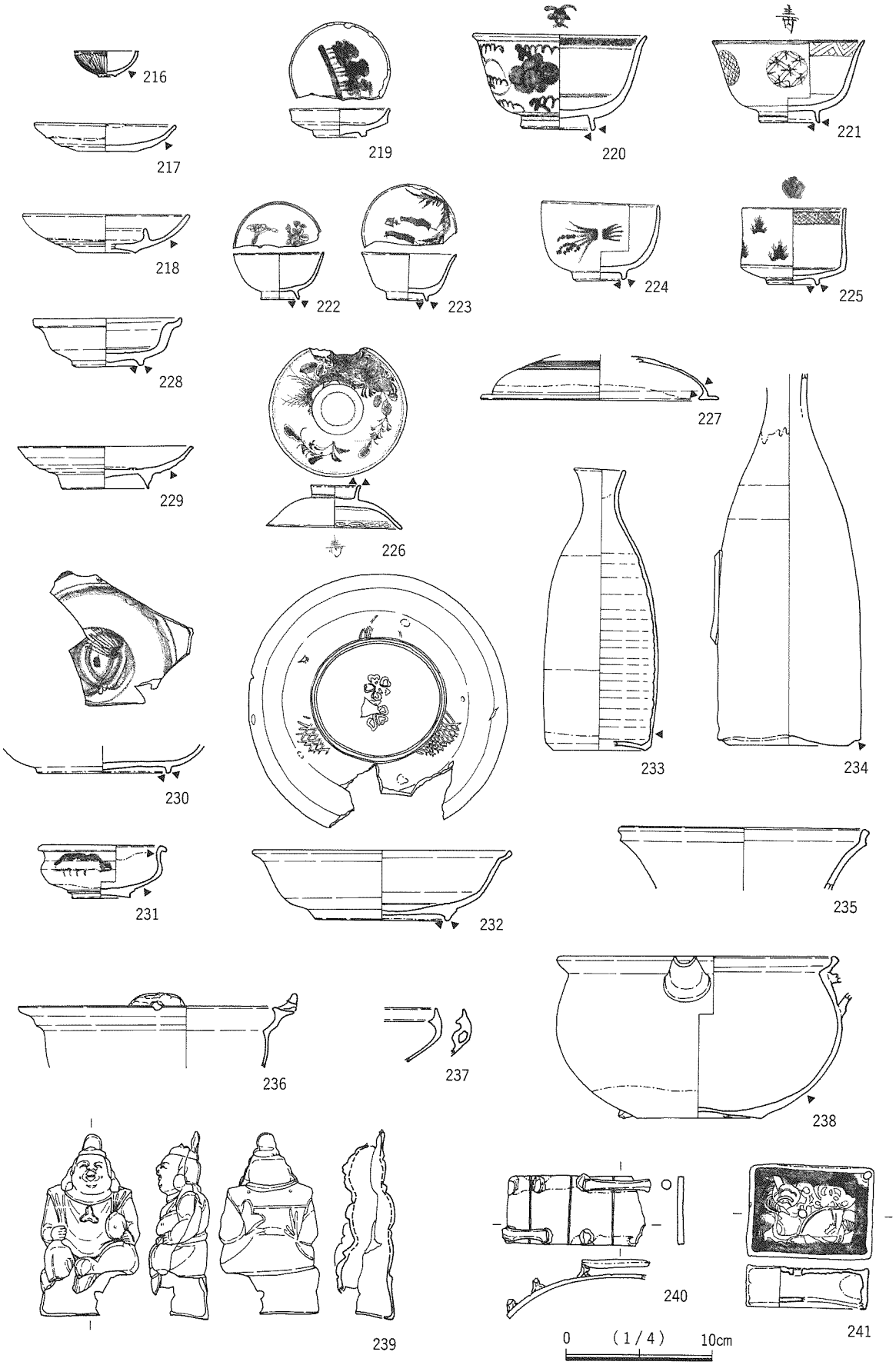
第24図　P90出土遺物（１/６）▶



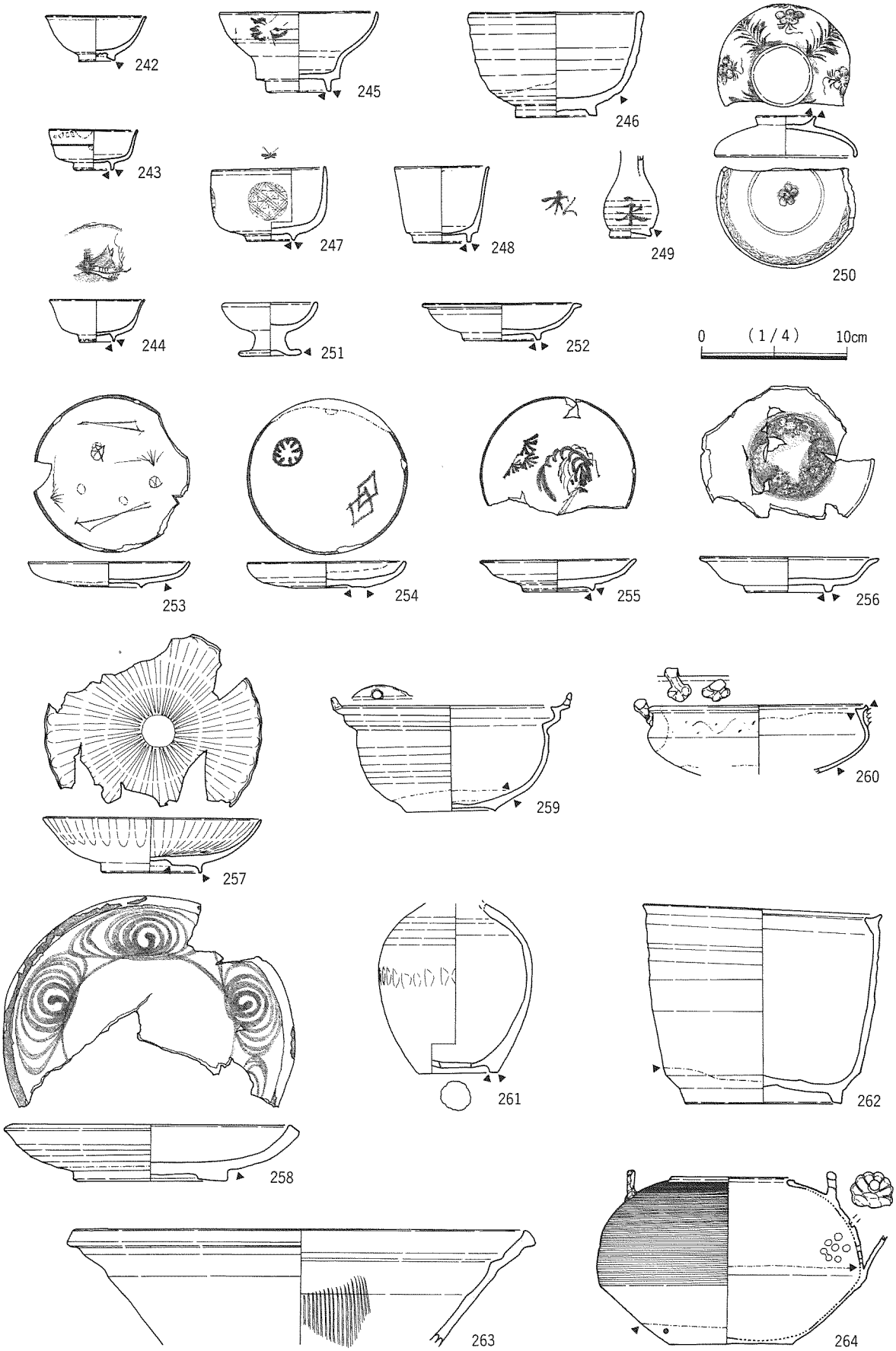
第25図　SK11出土遺物（1/4）



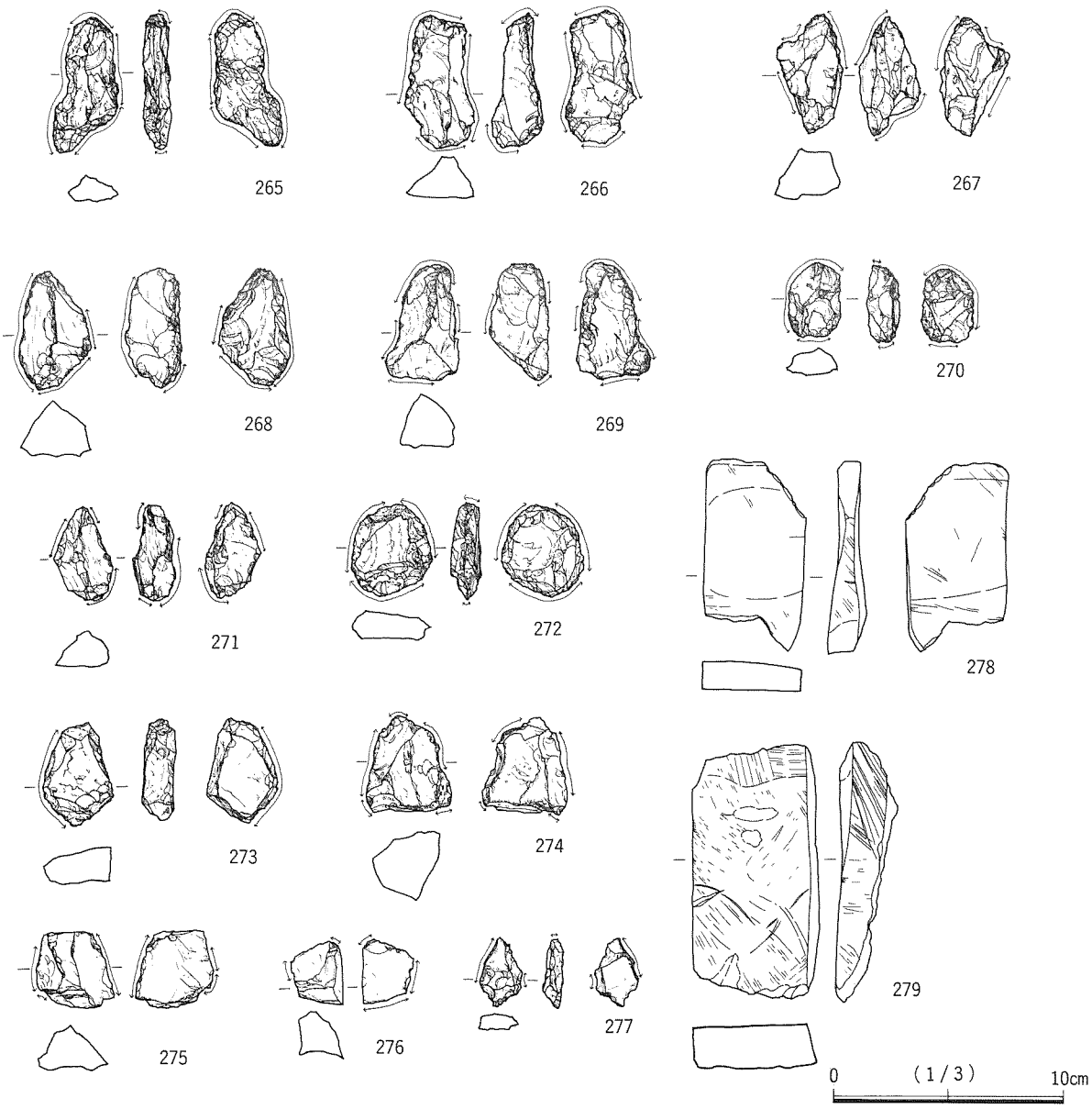
第26図　SK11（208～213）・SK12（214・215）出土遺物（1/4）



第27図　SK12出土遺物（1/4）



第28図　SK26出土遺物（1/4）



第29図　火打石と砥石（1/3）

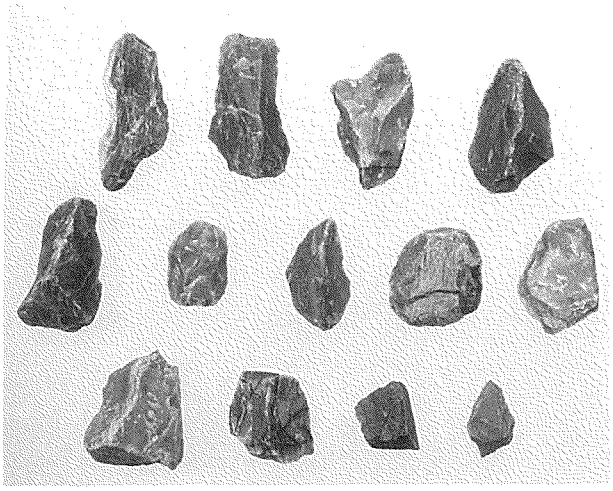


写真42　火打石

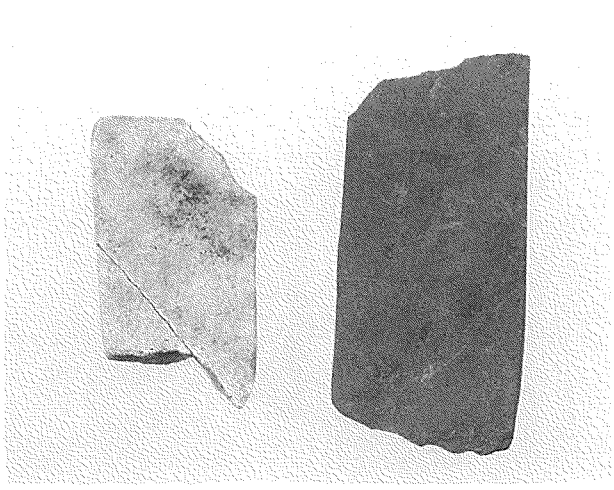


写真43　砥石

第6表　近世遺物観察表1

番号	遺　　構	材 質	器　種	口径	底径	器高	時期	備　　考
96	SK 4	磁器	小坏	(6.3)	2.4	2.8	19 c	染付　瀬戸美濃
97	SK 4	磁器	鉢	4.5	1.3	1.4	18？19 c	紅皿　型成形
98	SK 4	陶器	灯火具	(7.2)	2.8	1.6	18？19 c	灯明皿(受皿)　鉄釉　瀬戸美濃
99	SK 4	陶器	灯火具	4.5	3.4	4.6	18？19 c	鉄釉　瀬戸美濃
100	SK 4 表土	陶器	灯火具	11.4	4.1	2.5	18？19 c	灯明皿　鉄釉　瀬戸美濃
101	SK 4 表土	陶器	蓋	4.8		1.8	18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
102	SK 4	陶器	蓋	9.0	7.0	2.8	18？19 c	鉄釉＋うのふ釉　瀬戸美濃
103	SK 4 表土	陶器	蓋	12.4		2.0	18？19 c	鉄釉　瀬戸美濃
104	SK 4 表土	陶器	皿	9.4	4.0	1.5	18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
105	SK 4 表土	陶器	皿	7.8	4.6	1.9	18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
106	SK 4 表土	磁器	碗	9.2	3.8	4.5	19 c	上絵付(黒・白・黄・赤彩)
107	SK 4 南半＋表土	磁器	碗	9.9	4.0	4.8	19 c	染付　瀬戸美濃
108	SK 4	磁器	碗	(10.4)	4.4	5.8	19 c	染付＋上絵付(緑・赤彩)　瀬戸美濃？
109	SK 4 表土	磁器	碗	11.0	4.4	6.1	19 c	染付　瀬戸美濃
110	SK 4 南半	陶器	碗	7.7	3.9	6.0	18？19 c	呉須絵　陰刻　見込みコンニャク印判五弁花　瀬戸美濃
111	SK 4 表土	磁器	碗	7.6	4.0	5.7	18？19 c	染付　見込み手描き五弁花　肥前
112	SK 4 南半	磁器	碗	7.2	3.8	5.8	18？19 c	染付　コンニャク印判五弁花　肥前
113	SK 4 表土	陶器	碗	10.8	5.8	6.3	18？19 c	呉須絵　高台被熱　瀬戸美濃
114	SK 4 ＋SK12北東	磁器	碗	(9.2)	(3.8)	5.8	18？19 c	染付　肥前
115	SK 4 表土	磁器	皿	10.0	5.9	2.2	18？19 c	型成形
116	SK 4	陶器	皿	9.1	6.0	1.9	18？19 c	灰釉＋緑釉　鉄絵　型成形　瀬戸美濃
117	SK 4 表土	磁器	皿	15.2	8.6	4.3	18？19 c	染付　玉緑状口縁
118	SK 4 表土	陶器	皿	11.8	5.3	2.2	18？19 c	輪禿皿　灰釉　鉄絵　見込みに巴文　瀬戸美濃
119	SK 4 南半＋表土	陶器	皿	13.7	6.8	4.2	18？19 c	灰釉　呉須絵　瀬戸美濃
120	SK 4 表土	陶器	皿	13.4	6.8	3.4	18？19 c	灰釉　白化粧土回転刷毛目　瀬戸美濃
121	SK 4	磁器	鉢	(15.0)	(7.0)	5.4	19 c	青磁　型成形　高台内に赤彩　焼継あり　瀬戸美濃
122	SK 4	磁器	鉢	(14.4)	8.2	4.1	18？19 c	染付＋上絵付(金・赤彩)　焼継あり　肥前
123	SK 4	磁器	皿	16.2	10.2	5.1	18？19 c	染付　高台蛇の目釉剥ぎ　肥前
124	SK 4	陶器	瓶	9.1	5.5	13.4	18？19 c	仏花瓶　瀬戸美濃
125	SK 4	陶器	植木鉢				18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
126	SK 4 南半	陶器	甕	(16.4)		(12.3)	18？19 c	灰釉に呉須流し掛け　瀬戸美濃
127	SK 4	陶器	瓶掛	(22.6)	22.6	21.2	18？19 c	ルス釉　印花　瀬戸美濃
128	SK 4 南半	陶器	土瓶	9.6	7.5	10.5	18？19 c	灰釉　鉄絵
129	SK 4 表土	陶器	行平鍋	20.0		(17.1)	18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
130	SK 4 表土	陶器	水注	4.4	3.6	4.0	18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
131	SK 4 表土	陶器	水注	7.8	6.2	7.6	18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
132	SK 4 南半	陶器	鍋	20.8		(8.3)	18？19 c	錆釉　双耳　瀬戸美濃
133	SK 4 表土	陶器	擂鉢	33.1	13.7	14.0	19 c	鉄釉　底部焼成後穿孔　瀬戸美濃
134	SK 4 表土	土製品	土製ミニチュア	4.5		1.4		白形
135	SK 4	陶器	十能	縦11.6	横7.0	高3.0	19 c	灯明皿(受皿)　鉄釉　瀬戸美濃
136	SK 4	土師質	焙烙鍋	(36.4)		(5.3)	19 c	
137	SK 4	土師質	焙烙鍋	(35.8)		(5.8)	19 c	
138	SK 4 南半＋表土	炻器	甕	(41.0)		(9.0)	19 c	赤物　常滑
139	SK 4 南半＋表土	瓦	瓦	縦8.8	横13.0	長3.9		
140	SK 5	磁器	小坏		2.2	(1.8)	19 c	ピンク色の吹墨
141	SK 5	磁器	鉢				18？19 c	紅皿　肥前
142	SK 5	陶器	灯火具	9.0	3.9	1.9	18？19 c	灯明皿(油皿)　鉄釉　口縁の一部欠損・煤付着　瀬戸美濃
143	SK 5	陶器	灯火具	7.1	3.1	1.8	18？19 c	灯明皿(受皿)　鉄釉　瀬戸美濃
144	SK 5	磁器	碗	(9.6)	(4.2)	5.1	19 c	端反碗　染付　瀬戸美濃
145	SK 5	磁器	碗	(9.4)	(3.8)	(5.2)	19 c	端反碗　上絵付　瀬戸美濃
146	SK 5	磁器	碗	10.8	4.8	6.3	19 c	染付　焼成不良
147	SK 5	陶器	皿		4.9	(1.9)	18？19 c	瀬戸美濃　灰釉鉄絵　見込み蛇の目釉剥ぎ
148	SK 5	陶器	碗		3.9	(2.8)	18？19 c	ビラ掛け碗　萩
149	SK 5	陶器	碗	(11.2)	(5.6)	(7.7)	18？19 c	白化粧土　呉須絵　瀬戸美濃
150	SK 5	磁器	碗	(10.6)	(5.4)	5.4	18？19 c	染付　広東碗　肥前
151	SK 5	陶器	碗		3.4	(3.8)	18？19 c	鐙茶碗　緑釉・黄釉　瀬戸美濃
152	SK 5	磁器	皿	9.9	5.4	2.6	19 c	上絵付　瀬戸美濃
153	SK 5	磁器	皿	14.0	8.8	3.4	18？19 c	染付　肥前
154	SK 5	磁器	皿	(11.6)	(5.0)	3.4	18？19 c	染付　肥前
155	SK 5	磁器	皿		(8.5)	2.1	16 c	染付　高台内カンナ痕　高台畳付砂付着　釉に虫喰いあり　中国
156	SK 5 ＋SK11	陶器	皿	13.5	6.5	3.9	18？19 c	回転刷毛目　輪花　瀬戸美濃
157	SK 5	磁器	皿	12.5	7.7	2.6	18？19 c	染付　肥前
158	SK 5	磁器	瓶	1.7	2.8	7.4	18？19 c	御神酒徳利　染付　松・梅花文　肥前
159	SK 5	炻器	瓶	2.4	(6.4)	4.9	18？19 c	布袋徳利　焼締
160	SK 5	陶器	蓋	10.8		1.3	18？19 c	呉須絵　瀬戸美濃
161	SK 5	陶器	鉢	(8.6)		(4.5)	18？19 c	蓋物　灰釉　19とセットか？
162	SK 5	陶器	蓋	7.8		1.9	18？19 c	鉄釉　瀬戸美濃
163	SK 5	陶器	水注	(7.2)	(7.2)	7.7	18？19 c	灰釉
164	SK 5	陶器	蓋	7.0		2.0	18？19 c	灰釉　瀬戸美濃
165	SK 5	炻器	蓋	5.4		1.2	18？19 c	
166	SK 5	炻器	急須	6.3	6.5	7.8	18？19 c	体部に焼成後穿孔
167	SK 5	陶器	鍋	(19.4)		(4.3)	18？19 c	鉄釉　双耳
168	SK 5	陶器	行平鍋	18.9	8.4	12.2	18？19 c	灰釉　外面底部に煤付着
169	SK 5	陶器	土瓶	7.2		(12.2)	18？19 c	青土瓶　緑釉　体部に焼成後穿孔あり　信楽？
170	SK 5	陶器	瓶		10.5	(19.2)	18？19 c	徳利　黄釉　瀬戸美濃
171	SK 5	陶器	壺	(10.1)	13.5	21.2	18？19 c	鉄釉・灰釉　三耳　体部下半に焼成後穿孔あり
172	SK 5	陶器	擂鉢	39.5	16.9	17.3	19 c	鉄釉　瀬戸美濃
173	SK 5	陶器	十能	縦10.5	横8.6		18？19 c	鉄釉
174	SK 5	陶器	十能	15.0	18.1		18？19 c	鉄釉
175		炻器	蚊燻し	(21.8)		(9.0)	18？19 c	赤物　内面煤付着　常滑
176	SK 5	土師質	焙烙鍋			(2.9)	19 c	
177	SK 5	土師質	焙烙鍋			(4.3)	19 c	
178	SK 5	土師質	焙烙鍋			(4.3)	19 c	
179	SK 5	土師質	焙烙鍋	(20.8)		3.6	19 c	
180	SK 5	土師質	皿	6.6	4.0	1.2		口縁に煤付着
181	SK 5	瓦質	火具	11.0	5.0	1.8		目皿(焜炉の部品)
182	SK 5	金属	銭貨	2.3			18？19 c	寛永通宝
183	SK 5	金属	銭貨	2.3			18？19 c	寛永通宝
184	SK 5	土製品	一分銀型土製品	縦2.3	横1.7	厚0.3		表「一分銀」裏「定　銀座常足」
185	P 90	炻器	炭櫃	36.8	21.2	29.0	19 c	赤物　内面煤付着　常滑
186	SK11南半下位	陶器	灯火具	4.5	1.7	2.6	19 c	たんころ　灰釉　瀬戸美濃
187	SK11	陶器	灯火具	(5.2)	2.4	2.4	19 c	たんころ　灰釉　瀬戸美濃

第７表　近世遺物観察表２

番号	遺　構	材質	器　種	口径	底径	器高	時期	備　考
188	SK11南半下位	陶器	灯火具	5.5	4.0	4.9	19ｃ	ひょうそく　鉄釉　瀬戸美濃
189	SK11	陶器	瓶	7.3	6.4	6.8	19ｃ	仏花瓶　鉄釉＋長石釉　双耳　虫喰い多い　瀬戸美濃
190	SK11	磁器	壺	(1.8)		(3.5)	19ｃ	上絵付(金・赤彩)　肥前
191	SK11	陶器	鉢	(7.2)	5.7	6.3	19ｃ	蓋物　灰釉　口唇部釉剥ぎ墨付着　瀬戸美濃
192	SK11	陶器	皿	6.9	4.3	1.2	19ｃ	灰釉　瀬戸美濃
193	SK11	陶器	皿	11.6	5.8	2.5	19ｃ	ひだ皿　灰釉　瀬戸美濃
194	SK11	陶器	碗	11.2	4.0	5.2	19ｃ	奈良茶碗　灰釉＋緑釉　鉄絵　口錆　瀬戸美濃
195	SK11	陶器	碗	(11.8)	4.6	5.5	19ｃ	白化粧土＋鉄絵　瀬戸美濃
196	SK11	磁器	碗	(8.8)	4.0	4.7	19ｃ	染付　肥前
197	SK11	磁器	碗	7.0	3.8	5.9	19ｃ	染付(菊花文)見込み五弁花　瀬戸美濃
198	SK11	陶器	碗	(7.2)	4.2	5.8	19ｃ	灰釉　外面鉄絵　内面呉須絵　瀬戸美濃
199	SK11	陶器	皿	(28.0)	(14.2)	5.0	19ｃ	灰釉＋緑釉　鉄絵＋呉須絵　瀬戸美濃
200	SK11下位	陶器	皿	11.2	5.5	2.5	19ｃ	灰釉＋鉄釉　蛇の目釉剥ぎ　瀬戸美濃
201	SK11下位	磁器	皿	9.6	4.8	2.2	19ｃ	染付　形成形
202	SK11南半下位＋SK４	磁器	鉢	14.9	9.8	5.4	19ｃ	段重　染付
203	SK11下位	磁器	皿	13.4	7.4	3.3	19ｃ	染付　高台内蛇の目釉剥ぎ＋記号　焼継痕あり
204	SK11南半下位	陶器	壺	7.3	4.8	5.9	19ｃ	灰釉　双耳　高台内に墨書あり　瀬戸美濃
205	SK11	陶器	甕	(23.4)	13.5	5.8	19ｃ	灰釉＋辰砂　ヘラ描き文　瀬戸美濃
206	SK11	陶器	火鉢		17.4	(14.7)	19ｃ	外面緑・白・黄釉　内面灰釉＋錆釉　三足　窓あり　瀬戸美濃
207	SK11南半下位	陶器	水甕	(24.2)	21.0	24.2	19ｃ	
208	SK11	陶器	甕	(32.0)		(14.2)	19ｃ	鉄釉　瀬戸美濃
209	SK11	陶器	擂鉢	(37.6)		(10.2)	19ｃ	鉄釉　瀬戸美濃
210	SK11	土師質	焙烙鍋	(30.8)		(4.4)	19ｃ	
211	SK11	炻器	かまど	(36.4)	(32.6)		19ｃ	赤物　方形の窓が一ヶ所あり　常滑
212	SK11西壁	炻器	蚊燻し	(17.0)	17.2	27.5	18？19ｃ	赤物　内面煤付着　常滑
213	SK11	瓦質	五徳	(16.2)		12.0		
214	SK12南北ベルトａ？ｃ層	炻器	甕	(44.8)		(13.8)	18ｃ	真焼　常滑
215	SK12南北ベルトａ？ｃ層	炻器	甕	(48.2)		(8.8)	18ｃ	赤物　常滑
216	SK12南西	磁器	鉢	4.5	1.3	1.8	18？19ｃ	紅皿　形成形　肥前
217	SK12南西	陶器	灯火具	(9.8)	4.0	1.9	18？19ｃ	灯明皿　鉄釉　瀬戸美濃
218	SK12東西アゼ東半上層	陶器	灯火具	11.6	4.0	2.7	19ｃ	灯明皿　灰釉糸　瀬戸美濃
219	SK12北東	陶器	碗	7.0	3.7	2.0	19ｃ	灰釉　鉄絵　瀬戸美濃
220	SK12南東	磁器	碗	12.0	5.2	6.6	19ｃ	染付　瀬戸美濃
221	SK12南東	磁器	碗	15.5	4.3	5.7	19ｃ	染付
222	SK12北東	磁器	小坏	6.2	1.6	3.2	19ｃ	上絵付
223	SK12北東・東西アゼ東半上層	磁器	小坏	6.6	2.8	3.2	19ｃ	染付
224	SK12南西	磁器	皿	6.2	3.6	5.5	19ｃ	染付　貫入・虫喰い多い
225	SK12東西アゼ東半上層	磁器	碗	7.3	3.6	5.3	18？19ｃ	染付　外面若松　見込みコンニャク印判五弁花　内面七宝繋文　肥前
226	SK12南東	磁器	蓋	8.4	3.5	2.9	18？19ｃ	染付
227	SK12南東	陶器	蓋	(16.2)		3.1	19ｃ	灰釉　瀬戸美濃
228	SK12南東	陶器	皿	7.2	5.0	3.4	19ｃ	黄釉　内面煤付着　口唇部欠損多い　瀬戸美濃
229	SK12南北ベルトａ？ｃ層	陶器	皿	12.0	6.0	2.9	17ｃ	輪禿皿　灰釉　瀬戸美濃
230	SK26＋SK12南北ベルトａ？ｃ層	磁器	皿	(9.4)		(1.9)	16ｃ	染付　中国
231	SK12南東	陶器	香炉	8.9	4.1	3.7	18？19ｃ	御深井釉　呉須絵　瀬戸美濃
231	SK12北東＋南西	土師質	人形	縦12.5	横6.7	厚4.3		えびす
232	SK12東西アゼ東半下層＋SK４南半	陶器	皿	17.8	9.2	4.9	16ｃ	黄瀬戸　見込み印花文＋ヘラ描き文　瀬戸美濃
233	SK12東西アゼ東半上層＋SK４	陶器	瓶	3.6	6.4	24.4	19ｃ	徳利　鮫釉＋底部のみ錆釉
234	SK12南北ベルトａ？ｃ層	陶器	瓶		8.2	(25.6)	19ｃ	徳利　鉄釉にうのふ釉流し掛け
235	SK12南西	陶器	鉢	(27.2)		(3.3)	19ｃ	鉄釉　瀬戸美濃
236	SK12南東	陶器	鍋	(19.0)		(5.1)	19ｃ	鉄釉　瀬戸美濃
237	SK12南東	土師質	焙烙鍋			(3.7)	19ｃ	
238	SK12北東	陶器	行平鍋	19.3	8.7	11.2	19ｃ	灰釉　三足付　二次的被熱　瀬戸美濃
240	SK12東西アゼ東半下層	陶器	ミニチュア	縦4.8	横10.1	高4.2		箱庭の橋　低火度焼成　緑釉　両側に布目圧痕
241	SK12南西	磁器	水滴	縦6.3	横8.4	厚2.9	19ｃ	染付　上部形成形　瀬戸美濃
242	SK26	磁器	小坏	7.0	2.5	3.1	19ｃ	染付
243	SK26	磁器	小坏	(6.1)	(1.8)	2.8	19ｃ	白磁
244	SK26	磁器	小坏	6.6	2.6	2.9	19ｃ	染付　見込みに楼閣山水文
245	SK26	陶器	碗	11.0	4.4	5.0	19ｃ	奈良茶碗　灰釉＋緑釉　鉄絵　口錆　瀬戸美濃
246	SK26	陶器	碗	12.2	5.6	7.3	18ｃ	灰釉　瀬戸美濃
247	SK26	磁器	碗	8.0	3.4	5.1	18？19ｃ	染付
248	SK26	陶器	碗	(6.6)	4.0	5.2	19ｃ	低火度焼成　透明釉　鉄絵
249	SK26	磁器	瓶		2.9	6.1	18？19ｃ	御神酒徳利　染付「松」「永」　肥前
250	SK26	磁器	蓋	(9.9)	2.2	2.9	18？19ｃ	染付　肥前
251	SK26	陶器	瓶	(6.8)	4.4	3.7	18？19ｃ	仏花器　灰釉　瀬戸美濃
252	SK26	陶器	皿	(9.0)	5.4	2.5	18？19ｃ	灰釉　瀬戸美濃
253	SK26	陶器	皿	11.2	4.7	1.7	19ｃ	灰釉　口錆　鉄絵(松竹梅)　瀬戸美濃
254	SK26	陶器	皿	11.0	3.2	1.8	19ｃ	灰釉＋緑釉　鉄絵　口錆　瀬戸美濃
255	SK26	陶器	皿	10.8	5.1	2.2	19ｃ	灰釉　口錆　鉄絵(蝦)　瀬戸美濃
256	SK26	陶器	皿	(12.4)	16.2	2.4	18？19ｃ	御深井釉　呉須絵　木型打ち込みによる陰刻　瀬戸美濃
257	SK26	磁器	皿	15.0	6.9	3.8	18？19ｃ	菊花形皿　口錆　高台内蛇の目釉剥ぎ
258	SK26	陶器	皿	20.2	10.7	3.9	19ｃ	馬の目皿　灰釉　鉄絵　瀬戸美濃
259	SK26	陶器	鍋	16.5	6.2	8.0	19ｃ	鉄釉　双耳　内面蛇の目釉剥ぎ　瀬戸美濃
260	SK26	陶器	鍋	(15.2)		(5.4)	19ｃ	灰釉＋鉄釉＋鉄釉　双耳　二次的被熱　瀬戸美濃
261	SK26	磁器	瓶		5.5	(11.8)		体部カンナ削りによる施文　高台砂目　高台内焼成後穿孔
262	SK26	陶器	瓶	16.5	10.8	13.9	18？19ｃ	銭甕　鉄釉　瀬戸美濃
263	SK26	陶器	擂鉢	32.2		(8.0)	18ｃ	鉄釉　瀬戸美濃
264	SK26	陶器	土瓶	9.5	8.6	12.0	18？19ｃ	鉄釉　糸目　瀬戸美濃
265	SK26北側	石	火打石	5.9	3.0	1.2		
266	SK26北側	石	火打石	縦5.8	横3.0	厚2.3		チャート「養老瀧産」
267	SK26北側	石	火打石	5.2	2.9	2.8		〃
268	SK26南半	石	火打石	5.2	3.1	2.5		〃
269	SK26南半	石	火打石	5.1	3.3	2.5		〃
270	SK26北側	石	火打石	3.3	2.3	1.4		〃
271	SK26南半	石	火打石	4.2	2.5	2.1		〃
272	SK26北側	石	火打石	4.2	3.6	1.4		〃
273	SK26南半	石	火打石	4.5	3.1	1.5		〃
274	SK12南北ベルト	石	火打石	縦4.2	横3.7	厚3.0		〃
275	SK12南東	石	火打石	3.3	3.3	2.0		〃
276	SK12南東	石	火打石	2.7	2.2	2.0		〃
277	P101	石	火打石					〃
278	SK26	石	砥石	縦8.3	横4.0	厚1.7		堆積岩(砂岩)
279	SK12南北ベルト	石	砥石	11.1	5.4	1.9		堆積岩(頁岩)
280	前半区表土	陶器	代用定錘	縦5.4	横8.0	高11.4	大戦中	

写真44　SK５出土遺物

写真45　SK12出土遺物

写真46　SK11出土、火鉢（206）と水甕（207）

写真47　人形（恵比寿）

写真48　秤定錘（陶製代用品）

Ⅳ　結語

古代寺院について

尾張元興寺跡は東海地方最古の寺院跡であり、考古学から古代史を語る上でますます重要性を増しつつある。1999年の７次調査およびその報告書により、伽藍の中心ともいえる塔の姿がうかびあがってきたことは、大量の瓦片を出土しながら伽藍復元の手がかりがなく「まぼろしの寺」状態であった当寺院跡の研究に大きな活力を与えたといえる。

10次調査では、限られた面積にも関わらず、多量の古代寺院の瓦片が出土した。なかでも「珠紋縁」の軒丸瓦の出土をはじめて発掘調査で確認でき、希少例の「鬼瓦」を発見した意義は大きい。また、遺跡推定範囲の南東端近くにおいても多量の瓦片が包含されていることがわかり、伽藍および寺域の東側の状況を考える上での手がかりになると思われる。本報告では古瓦片に十分な検討や分析を加えないままの報告となり、まだその成果を十分に引き出しているとはいえないことを付しておく。

寺院建立その前後

すでにこれまでの調査で、台地西縁寄りの正木南公園地点１次・２次調査で、５～６世紀代の土師器・須恵器の出土が確認されていた。また２次調査では６世紀代と思われる竪穴住居跡が検出された。10次調査北方近くの５次調査では、住居跡状の遺構が発見されている。10次調査では寺院建立以前の遺構として、古墳時代（５世紀後半）の竪穴住居跡 SB３がみつかった。遺跡内で確認された住居跡としては最も古いものであり、北方の伊勢山中学校遺跡５次調査の鉄鋌が出土した SB16や同７次の SB14、同10次調査の竪穴

住居跡の時期に近い。さらに北の正木町遺跡を含めて、古墳時代住居の分布が南に広がり、さらに大規模な集落遺跡も想定される。また、２次・７次では南北方向、９次調査では東西方向の大溝が確認されており、寺院建立以前の大規模な居館の存在の可能性もある。

一方、10次調査でみつかったSB１・２・４・６など竪穴住居跡と思われる遺構群は、埋土中に多くの古瓦片を含み、寺院衰退後の調査区一帯が居住域であったことをうかがわせる。調査区東100ｍの東古渡町遺跡では古墳時代を通じて墓域として利用されており、「願興寺」建立以降は居住域化していくことと合わせ、寺院建立とからむ周辺の土地利用を考えるのに大きな手がかりになりうると考えられる。寺院建立前後の遺構の性格を明らかにしていくことは、伽藍遺構の明確でない尾張元興寺跡を考える上で重要性を増していくのではないかと思う。

近世「元興寺」と佐屋街道

近世末「国豊山元興寺」復興以後の10次調査区南側は、「佐屋街道」に面した町屋の一帯であったと思われる。佐屋街道は、近世の東西交通の基幹街道であった東海道の重要なバイパスのひとつであり、17世紀初頭には整備されていたといわれる[水野1983]。調査区付近は、佐屋街道の起点である熱田と名古屋城下を結ぶ本町筋との三叉路にもほど近く、一般的な住居というよりも旅館・飲食店・商店などが軒を並べていたことが想定される。土坑に大量に廃棄されたさまざまな陶磁器類をはじめとした近世遺物の背景には、こうした立地上の環境が考えられる。ちなみに大正年間には、調査区付近は小・中規模な宿泊・飲食関係・日常雑貨の店などが軒を連ねていた一画であったようである。

「元興寺」は「泰雲寺」と軒を並べ佐屋街道に面していたと思われる。名所図会などから当時の面影を伺い知ることのできる２か寺は、当時の町並み形成に重要な役割を果たしていたと思われる(第９図)。現在静かな住宅街にのみこまれた尾張元興寺一帯は、高層住宅など小規模開発が断続的に繰り返される中、また新たな町並みの風景に変わりつつある。

参考文献

名古屋市教育委員会 1985ａ『尾張元興寺跡第Ⅰ次発掘調査概要報告書』［１次］

名古屋市教育委員会 1985ｂ『尾張元興寺跡第Ⅱ次発掘調査概要報告書』［２次］

名古屋市教育委員会 1985ｃ『尾張元興寺遺跡掘調査報告書』［３次］

名古屋市教育委員会 1986『尾張元興寺跡第Ⅳ次発掘調査概要報告書』［４次］

名古屋市教育委員会 1992『尾張元興寺跡第５次調査の概要』［５次］

名古屋市教育委員会 1994『尾張元興寺跡発掘調査報告書』［１～５次］

名古屋市教育委員会 1997『尾張元興寺跡発掘調査報告書』［６次］

名古屋市教育委員会 2000『尾張元興寺跡第８次発掘調査報告書』［８次］

名古屋市教育委員会 2000「尾張元興寺跡第９次発掘調査報告書」『埋蔵文化財調査報告書38』［９次］

名古屋市教育委員会 2002『埋蔵文化財調査報告書40　尾張元興寺跡第７次発掘調査報告書』［７次］

名古屋市教育委員会 1992『東古渡町遺跡第３次発掘調査の概要』

水野時二 1989「城下町名古屋をめぐる街道の変遷」『企画展　旅と街道』名古屋市博物館

水野裕之 2001「名古屋の火打石随考」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要第３号』

村木誠 1996「土師器・須恵器―伊勢山中学校遺跡第５次調査出土土器の研究―」『埋蔵文化財調査報告書24　伊勢山中学校遺跡（第５次)』名古屋市教育委員会

伊勢山中学校遺跡第10次

Ⅰ　はじめに

1　位置と立地

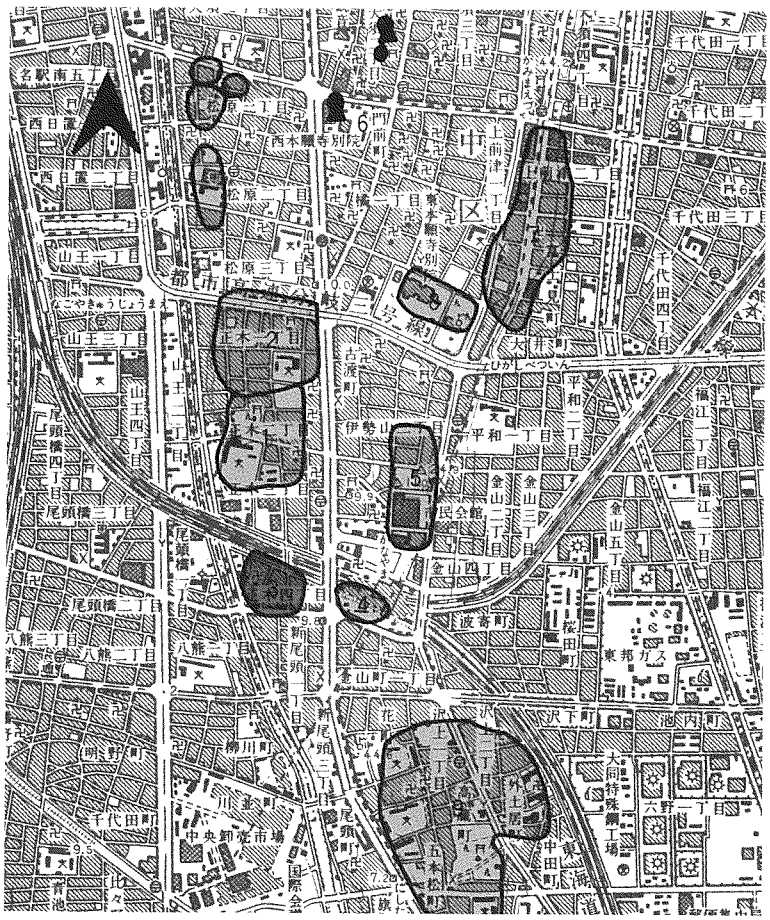
伊勢山中学校遺跡の所在する中区は名古屋市のほぼ中央に位置する。官庁街・オフィス街・商業地が集中し、昼間人口比率が500％を超えるまさに名古屋の「中心」区である。また、遺跡地の最寄駅（南東へ約500ｍ）金山総合駅は、広域交通の結節点であり、その周辺は名古屋の副次拠点域として開発整備が進められつつある。

地形的には名古屋台地が半島状に突出した通称熱田台地の西端に立地し、標高は７～10ｍである。古代においては、遺跡地西側は海であったと推定されるため、海上交通上の要所であったと考えられる。

2　周辺の遺跡

周辺には北に正木町遺跡、東に古沢町遺跡、南に尾張元興寺跡、東古渡町遺跡などの重要な遺跡が集中している（第１図）。これらの遺跡群は性格・時期ともに互いに重複するものであり、またおもに正木一丁目から四丁目にかけて展開しているため「正木遺跡群」と総称することもある。

うち、正木町遺跡は古墳時代住居跡のほか、律令祭祀の代表的遺物の陶馬、飛鳥石神遺跡と共通する文字資料、平城宮・三河国府・斎宮等のごく限られた遺跡からしか出土の無い羊形硯など古代の特殊遺物が多く出土していることと、古代の倉庫群と思われる総柱の掘立柱建物群が見つかっており、郡衙の可能性が高い。また尾張元興寺跡は、７世紀中葉の創建が推定できる東海地方でも最も古い建立の寺院跡であり、近畿地方と共通する文様・技法の瓦も多く出土している。そして東古渡町遺跡は、５・６世紀の低墳丘の方形墓が十数基見つかっており、正木町・伊勢山中学校・古沢町遺跡の集落域に対する墓域と推定されている。



1．伊勢山中学校遺跡
2．正木町遺跡
3．尾張元興寺跡
4．東古渡町遺跡
5．古沢町遺跡
6．大須二子山古墳
7．富士見町遺跡
8．古渡城跡
9．高蔵遺跡

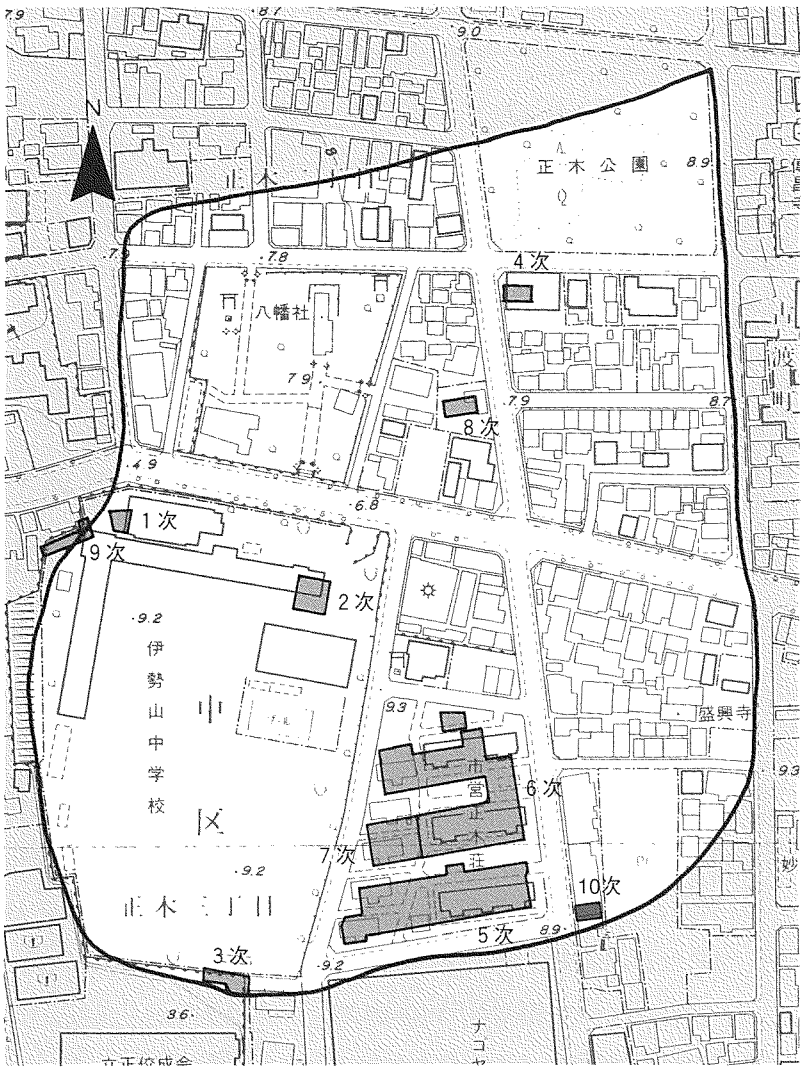
第１図　位置と周辺の遺跡

3　遺跡の概要

遺跡はほぼ300ｍ四方の範囲が推定されており、過去９回にわたり調査が行われている（第２図）。ただし、遺跡

地南の市営住宅正木荘の建設に伴う調査（5次～7次調査）ではまとまった調査が行えているが、あとは小規模でかつ散在的な調査であり、遺跡全体の様子を把握するには至っていない。現状では、弥生時代から近世まで続く複合遺跡で、特に古墳時代から古代の集落跡を中心とする遺跡といえよう。

また、これまでの調査で注目される遺物には、竪穴住居跡から見つかった鉄鋌や袋状鉄斧。初期須恵器・土師器・韓式系土器などの土器群。そして、目には見えないものの科学分析により明らかとなった、須恵器蓋杯内に入れられていた「塩」などがある。



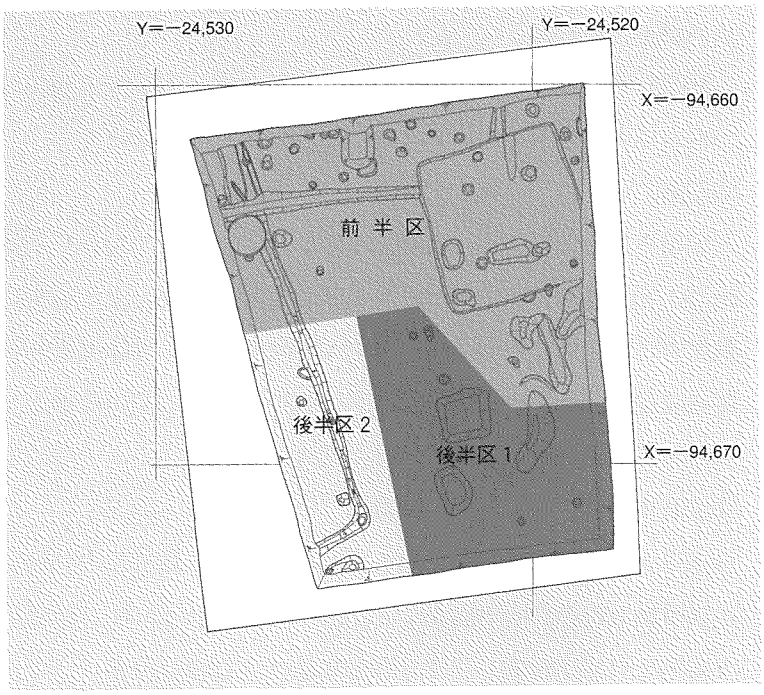
第2図　調査地点図

II　調査の経過

1　調査に至る経過

10次の調査地点は、鉄鋌が見つかった5次調査地点の東隣りであり、遺跡範囲のほぼ南東端に位置する。

平成12年4月、市教育委員会文化財保護室に当該地での個人住宅の建設工事予定と、その際の埋蔵文化財の取扱についての照会があった。文化財保護室では早急に試掘調査を実施し、埋蔵文化財が遺存することを確認したうえで発掘調査の必要を原因者に伝えた。その後、原因者との協議調整の結果、平成12年7月より約110m²を対象に発掘調査を実施することとなった。調査は排土置き場を確保する都合上、前半後半の折り返しとして開始したが、土量は予想以上で後半区はさらに2度に分けての調査となった。



第3図　調査区図（1：200）

2　日誌抄

7月17日　発掘準備および器材の搬入。

7月18日　前半区表土除去開始。

7月22日　包含層掘削。遺構検出開始。基準点・水準点測量。

7月23日　住居跡らしい遺構検出。

〜　この間、遺構検出、掘削。随時写真撮影、実測。

7月31日　清掃。写真撮影。基本平面図作成開始。

8月2日　前半区完掘。埋め戻し開始。

8月3日　住居跡内遺物取り上げ。完掘写真撮影。

8月5日　後半区表土除去開始。

8月6日　包含層掘削。以下の工程は土量が多いため2度に分けることとする。

〜　この間、遺構検出、掘削。随時写真撮影、実測。

8月12日　後半区完掘。写真撮影後基本平面図作成開始。

8月15日　埋め戻し完了。

8月16日　後片付け。現地での調査終了。

III　調査の内容

1　基本層序

調査区内の基本層序は、地表から約30cmが表土層で、以下20〜30cmに茶灰色土層、20〜40cmに茶褐色土層が堆積する。茶灰色土・茶褐色土はいわゆる包含層であるが、茶灰色土は近世陶磁器片までを含み、茶褐色土は古代までの遺物を含む。また、地山面は北から南に向かってなだらかに傾斜しており、北端と南端の比高差は約70cmにもなる。下位包含層の茶褐色土も南に向かって厚くなり、かつ沈鉄を多く含む層に変化している。調査地の南隣接地での試掘結果が「湿地上の地形であった」ことを考え合わせれば、調査地南側は小さな谷地形が入るものと推定できよう。

2　遺構と遺物

検出した遺構は住居跡・土坑・溝であるが、密集する様子はない。おそらく前述の、立地が谷地形の際であることが影響しているものと思われる（第4図）。

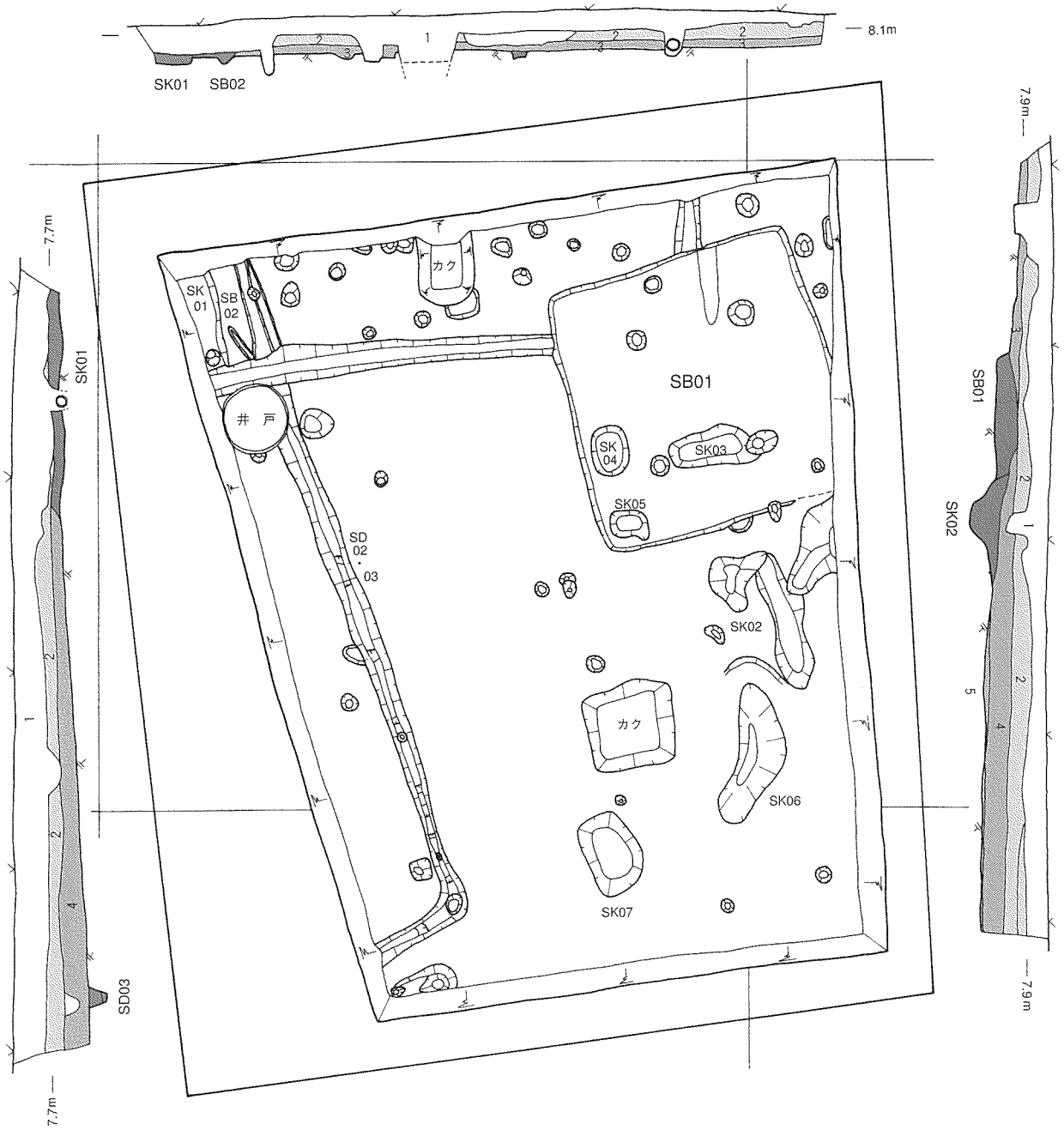
旧石器

注目される出土遺物に旧石器3点がある（第9図50・51・52）。50はSB01埋土、51と52は包含層からの出土。50は細石刃と思われ、豊田市梅坪遺跡からの出土資料に大きさ質ともに似る。51は石刃のチップか細石刃。50・51ともに非常に良質（緻密で均質）の赤茶褐色チャートで、同一石材の可能性もある。53は縦長の剝片で、石質は暗青灰色のチャート。細石刃の時期と思われるが、それより古いナイフ形石器の時期の縦長剝片（石刃）の可能性も残る。

弥生時代後期から古墳時代中期

SB02　調査区北西隅にて検出した竪穴状の落ち込み。住居跡番号を付したが、ほとんどが調査区外で、さらに検出した西半もSK01に切られるため詳細は不明。竪穴住居跡とすれば、壁際の周溝部分と思われる。茶褐色土一層が堆積し、ごく僅かに弥生土器か土師器の小片が出土した。

SK01　SB02を切る竪穴状の落ち込み。深さ15cmを測り、底面はフラットで水平。また調査区西壁面では長さ3.5mまで確認でき、その形状から竪穴住居跡の可能性がある。均質で黒味の強い暗褐色土一層が堆積



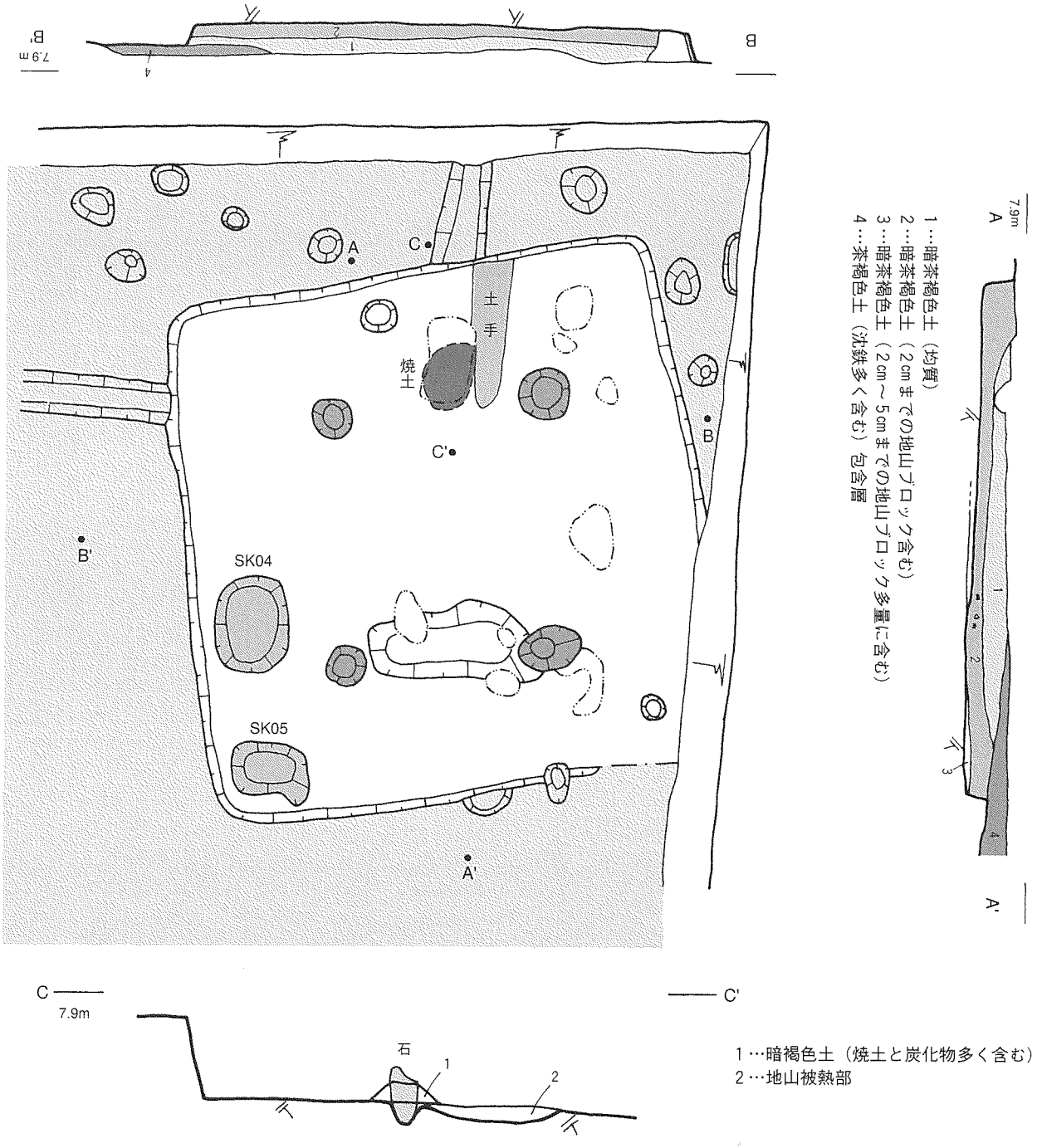
1 …… 表土およびカク乱
2 …… 茶灰色土（均質で締まりのある砂っぽい土）中・近世包含層
3 …… 茶褐色土（均質で硬く締まる）古墳・古代包含層
4 …… 茶褐色土（③層より黒味が強く、沈鉄多く含む）
5 …… ブロック土（茶褐色土と地山のブロック土）
SB01 …… 暗茶褐色土（第５図参照）
SB02 …… 茶褐色土（１cmまでの地山ブロック多く含む）
SK01 …… 暗茶褐色土（均質で黒味が強い）
SK02 …… 暗茶褐色土（均質で締まる。黒味が強く沈鉄多い）
SK03 …… 暗茶褐色土（均質）
SK04・05 … 暗茶褐色土（地山ブロック多く含む）
SK06 …… 暗茶褐色土（均質）
SK07 …… 茶褐色土（均質）
SD03上 …… 茶褐色土（均質で黒味が強い）
SD03下 …… 茶褐色土（２～３cmの地山ブロック多く含む）

第４図　平・断面図（１：100）

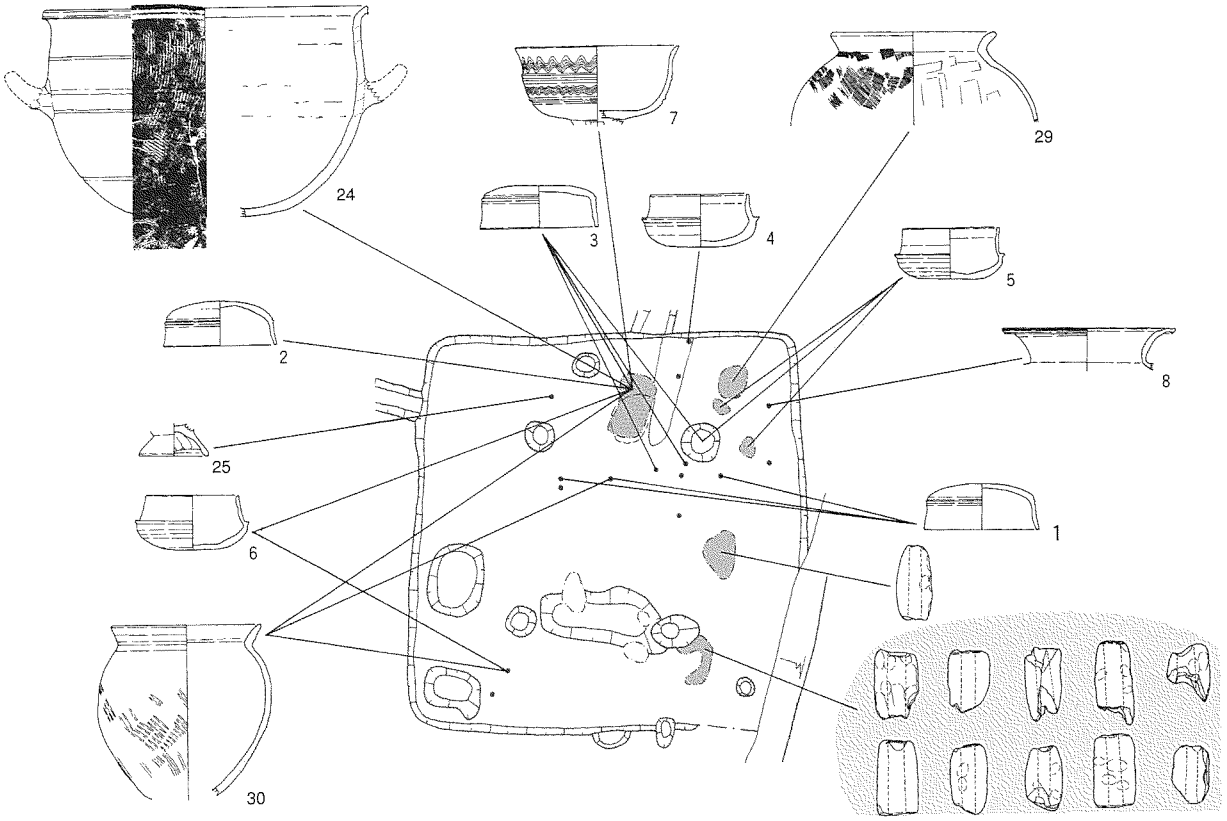
する。弥生土器もしくは土師器の小破片が少量出土している。

SD02・03　前半と後半にまたがったため、異なる番号を付したが同一の遺構。南北方向で、約8.5m分、西に屈曲してから約1.5m分を検出した。北は近現代の井戸・土管溝に切られるが、SB01の地点にまでは至っていない。幅30～40cm、深さ約30cmの規模で、茶褐色土が堆積するが下位は地山のブロックを多く含む。また、溝底は北端と南端とでは比高差約60cmを測り、地山の傾斜と同じように谷に向かって低くなる。性格は不明であるが排水溝とすれば北から南にスムーズに流れるものと思われた。パレス壺片（第8図47・48）S字甕片（44～46）が出土しており、弥生～古墳時代の移り変わりの頃の年代が推定できる。

SK02・03・06　平・断面ともに不定形な土坑。上部に土器片を含んだものもあったが、ほとんどが無遺物



第5図　SB01平・断面図（1：50）カマド断面図（1：20）



第6図　SB01遺物出土状況図

で人による掘削の可能性は薄いと判断した。

SK07　120cm×85cm、深さ約20cmを測る。茶褐色土一層を埋土とするが、出土遺物はない。

古墳時代中期から後期

SB01　調査区北東部にて検出した竪穴住居跡（第5図）。南東隅は僅かに調査区外となった。一辺約4mの方形プランで、最も残りの良いところでは、床までの深さが約30cmであった。壁際の溝は無い。床面は、東西は水平であるが、南北はやはり地形に影響されてか12cmほどの比高差がある。主柱穴は4本で柱間は1.7～2mを測る。柱穴の深さは床面から東北15cm、東南40cm、西南35cm、西北34cmと東北部のみやや浅い。中央北よりの柱穴間に、地山が被熱し焼土・炭化物が集中する地点があり、この場所にカマドがあったと推定できた。ただ残念なことに丁度そのカマド地点の上部が現代の土管溝のコーナーとなっており、長年にわたってしみ出した汚水が、周辺の土を変色させ分層等の検討をわかりづらいものとしていた。したがって、その土管コーナー部掘削中に出土した「火を受けた細長の石」は、カマドに据えられていた支脚であったとして、検出した北側寄りの小ピットに後で復元した（第5図）。また、焼土・炭化物の集中地点東側には、低いながら北壁から延びる土手状の高まり（幅約30cm）があり、カマドの痕跡の可能性を推定する。また、SK04・05は住居内の施設と思われるが遺物は無い。

埋土は基本的には暗褐色土の一層であるが、沈鉄が多い上層と地山ブロックが多い下層との二層に分けた。なお、床面はやや汚れたブロック土であったため、貼り床の可能性を考えて4分の1（南西部）についてはブロック土を除去した。結果、床面の汚れのみで明瞭な貼り床はないと判断した。

遺物の出土状況は、床面直上付近にて散在しており、やや北東部に集中した。離れた地点での接合もあ

り、不要品を廃絶住居内に破棄した様子といえよう(第6図)。また、南東柱穴付近には土錘が計15個体まとまって出土した（第6図)。長さ8cm重さ100gほどの大型品で引き網用と思われる。

須恵器には杯蓋身・高杯・甕・鉢がある。杯蓋（1・2・3）は天上部外面が丁寧な回転ヘラケズリで、口唇部断面は四角い。杯身（4・5・6）は垂直の高い立ち上がりで、底部外面は丁寧な回転ヘラケズリ。甕（8）はひじょうにシャープなつくり。無蓋高杯（7）は2段に波状紋が入り、脚部の透かしは4方向。把手付き鉢（24）は体部に4本の沈線が廻り、把手下には2個の竹管状工具による刺突がある。土師器は甕3点であるがすべて器形が違う。30は外面荒いハケメ。29は細かなハケメ。26は口縁端部内面を僅かにつまみ25の台がつく。

さて、以上の須恵器は猿投窯編年のH111号窯期に相当する。その年代観は5世紀中から後半頃であり、当住居跡の廃絶もこの頃と推定できる。

古代・中世

この時代の遺構は確認できなかったが、下位包含層の茶褐色土は古代の土器（須恵器・灰釉陶器）まで含む。なお、中世の遺物はきわめて少ない。

近世以降

上位包含層の茶灰色土は、中近世の遺物をごく僅かに含む層で、近世畑地の耕作土と思われる。また、調査区北東の井戸は太平洋戦争後の下水溝に切られており、明治頃から戦前までのものであろう。

包含層遺物

調査区南東部での下位包含層（茶褐色土）からは、須恵器・土師器等の遺物が多く出土した。遺構の可能性も考慮して、仮にSX01として遺物を取り上げたが、その後やはり、遺構の可能性は無いと判断した。SB01をパックしており、出土土器（第9図上段）もSB01より新しいものが多い。また、滑石製の剣形模造品（43）の出土があり注目される。

Ⅳ　おわりに

今回の調査は小規模な面積ではあったが、伊勢山中学校遺跡の重要性を再認識することができた。以下に列記してまとめにかえたい。

1．旧石器資料が出土したことで、当遺跡での人々の活動が旧石器時代にまで遡ることが明らかになった。

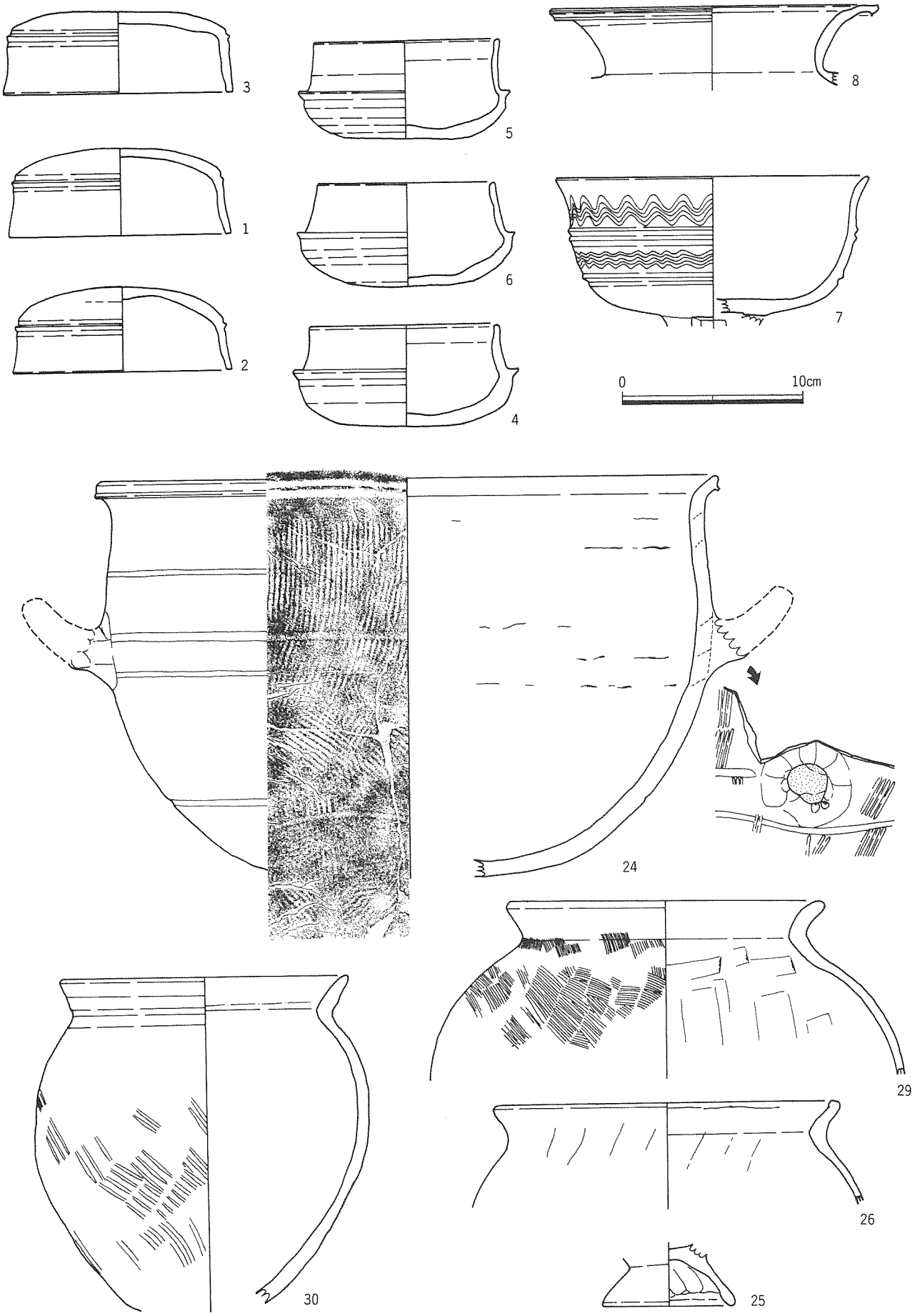
2．調査地での地山は全体に南へ傾斜しており、南側には谷地形が入るであろうことが確認できた。したがって、今回検出の住居跡は居住域の南端である可能性が高い。

3．その住居跡内の火処は、遺存は良くないが石の支脚を立てたカマドであったと推定できた。

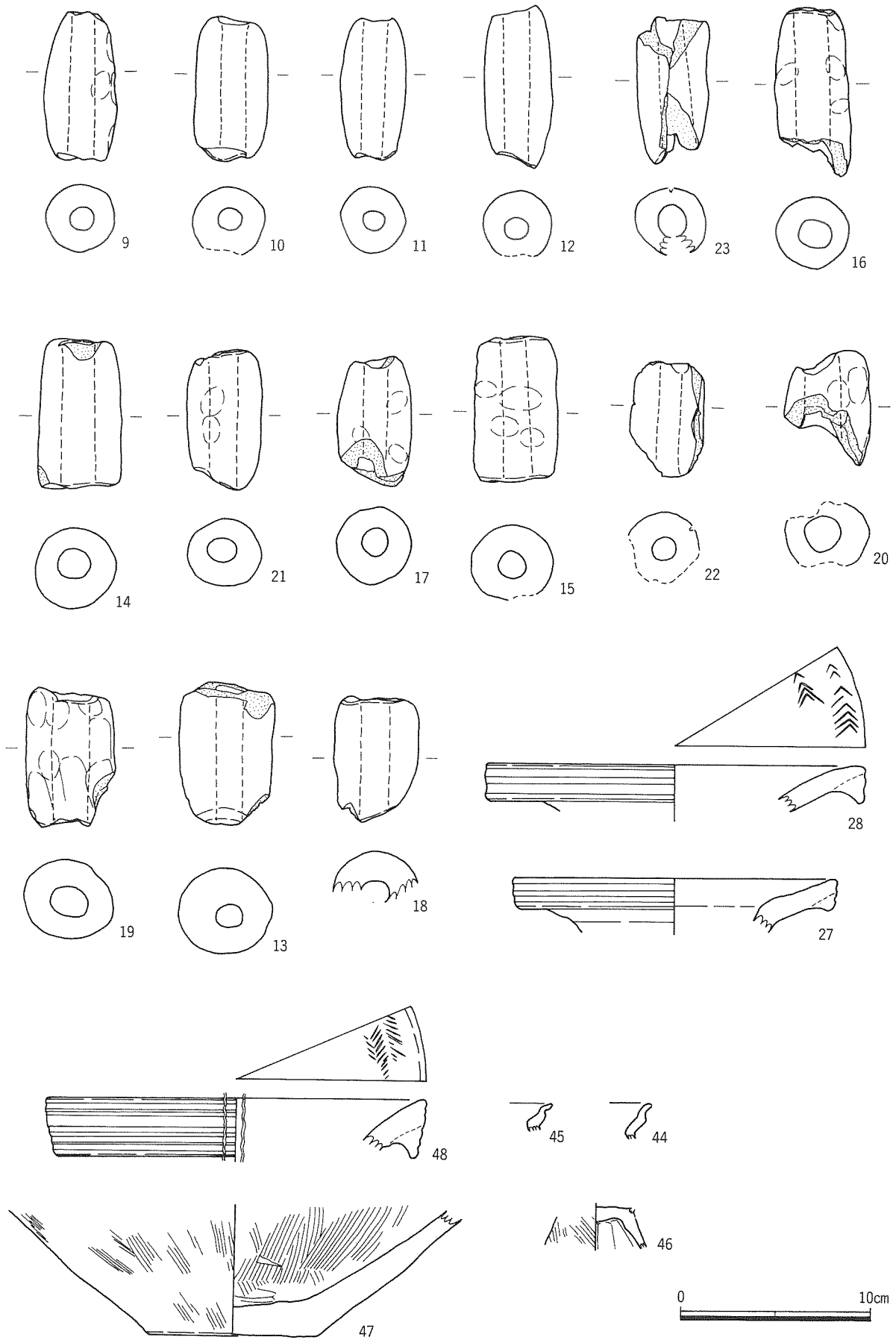
4．住居内からは、猿投窯編年のH111号窯期に相当する良好な初期須恵器の資料が出土した。類例の少ない時期の一括資料として重要である。

5．まとまって出土した引き網用土錘は、遺跡地東側の遠浅の海での漁を想定させる。

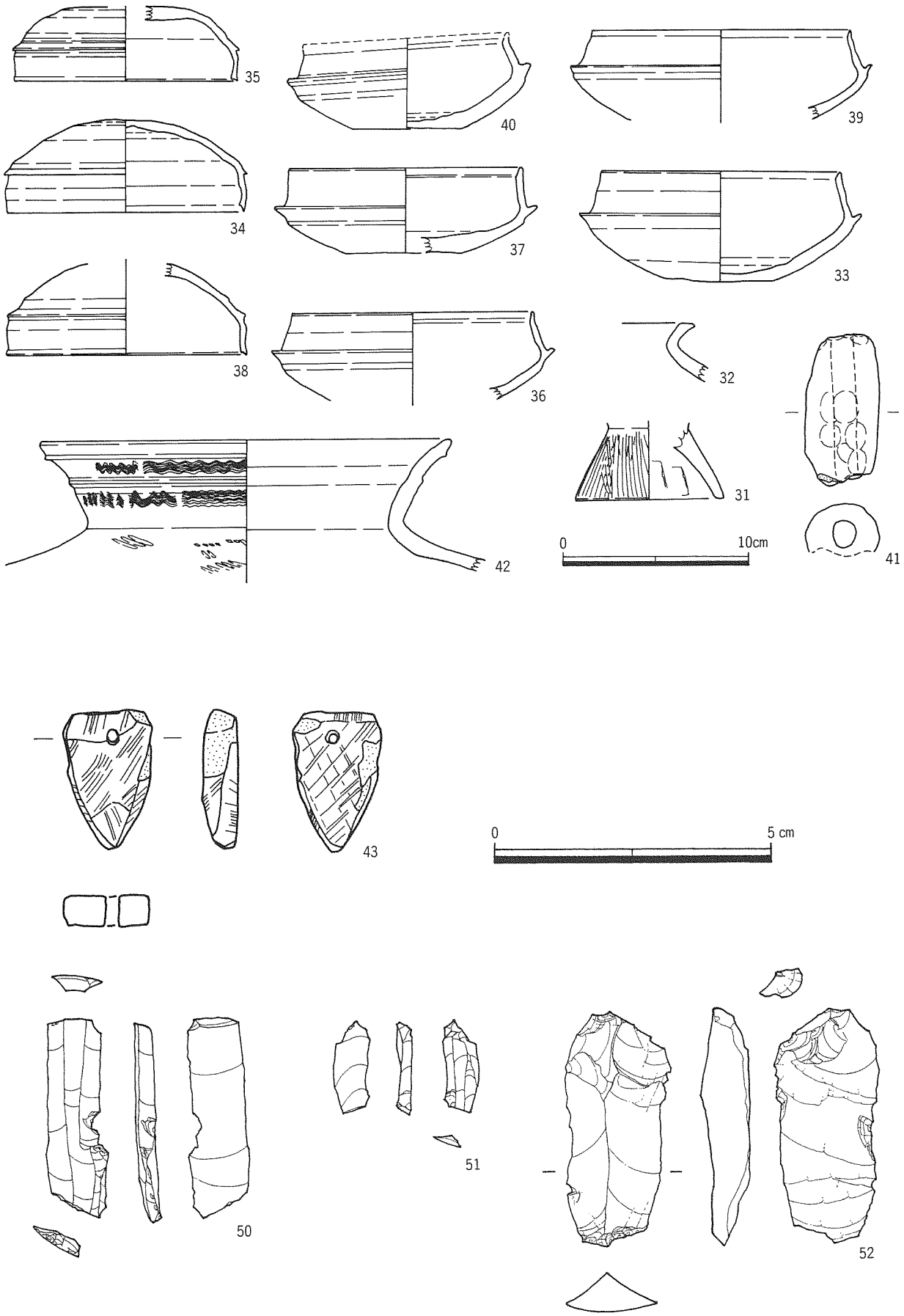
伊勢山中学校遺跡を含めた正木遺跡群は、名古屋台地上で最も重要な遺跡のひとつである。今後も小規模調査が多いであろうが、少しずつでも空白を埋めていく努力をつとめたい。



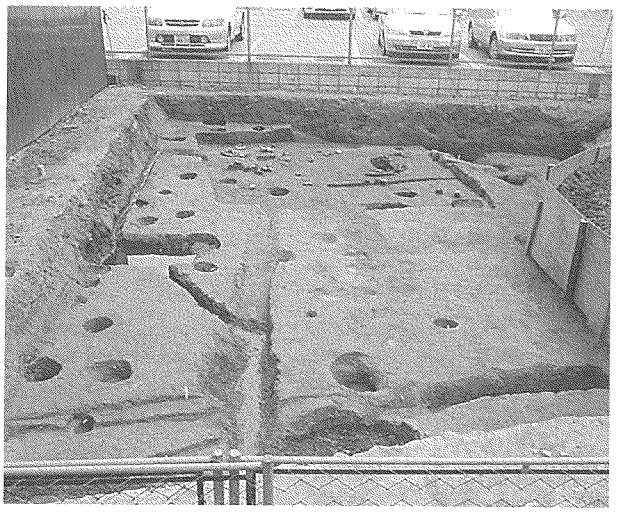
第７図　SB01出土遺物（１：３）

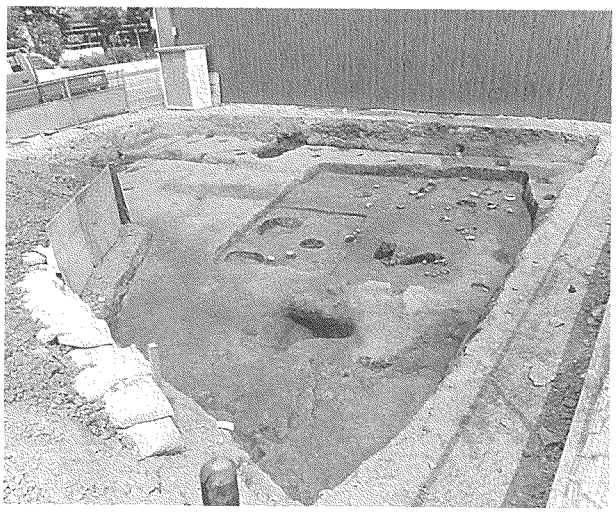


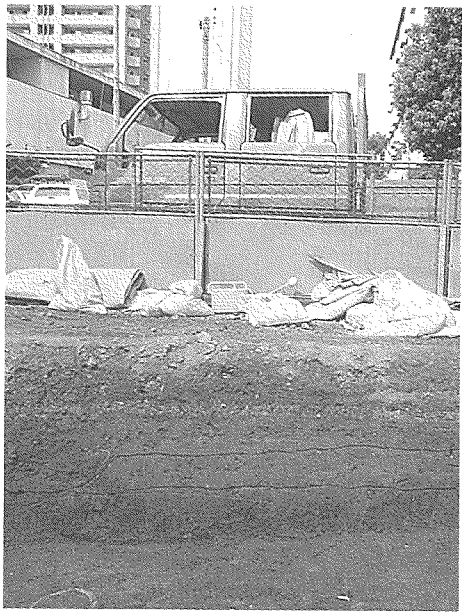
第8図　SB01（上段）SD02・03（下段）出土遺物（1：3）



第９図　包含層出土遺物（土器１：３、石製品原寸）





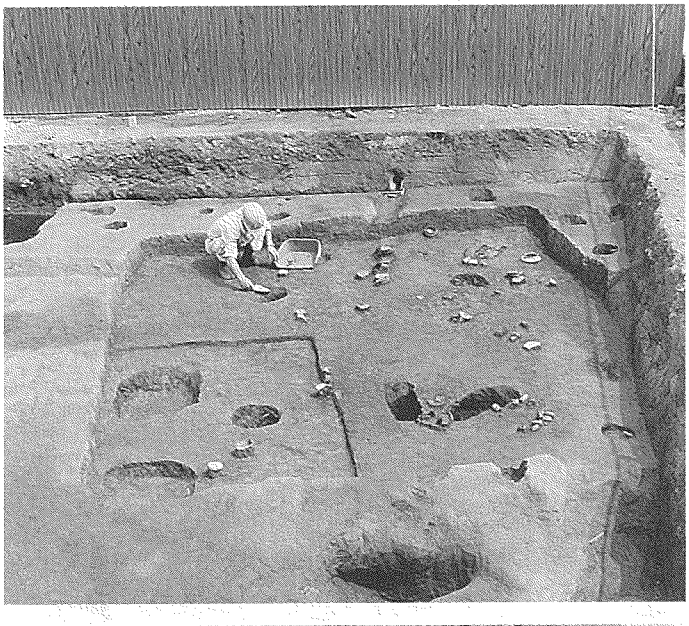


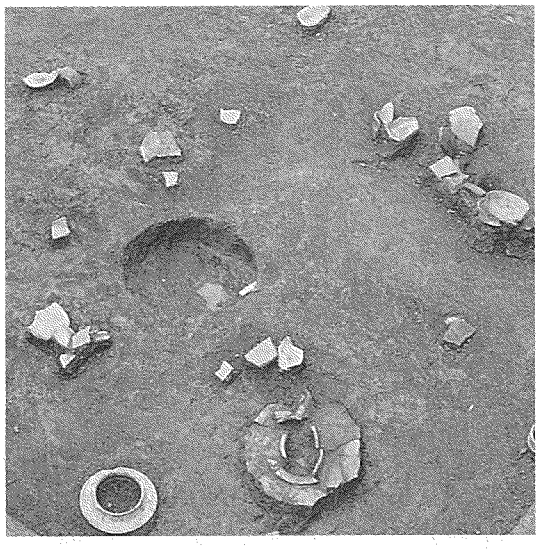
上段・中段左……前半区

中段右……後半区の２

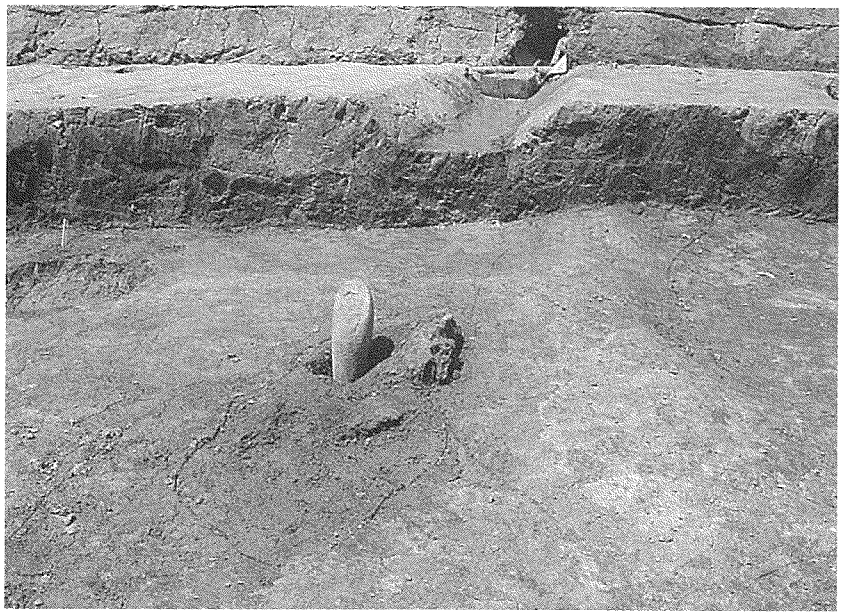
下段左……後半区の１

下段右……基本土層



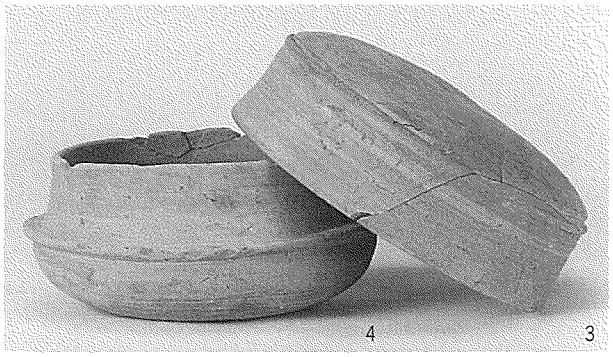


SB01　遺物出土状況

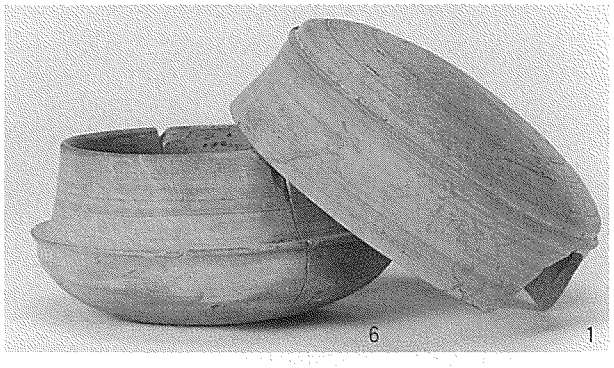


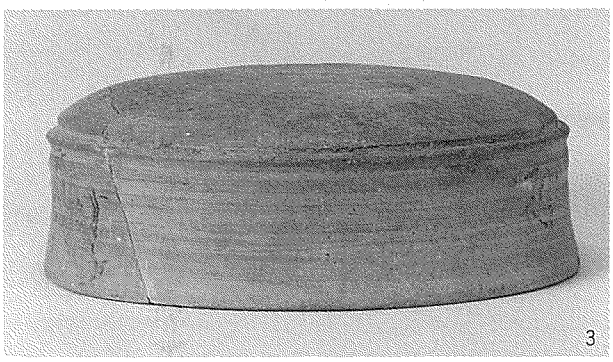
上・中段…SB01カマド

下段……SD03

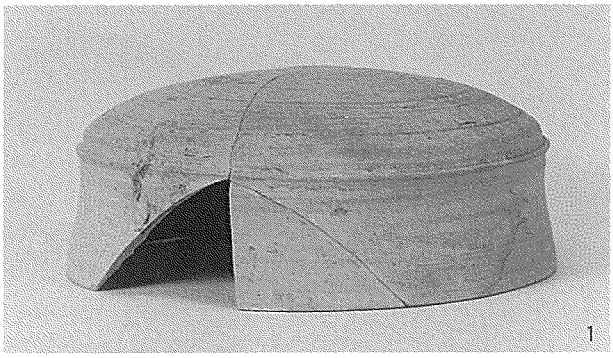

4
3

3
4


6
1


3

4


1

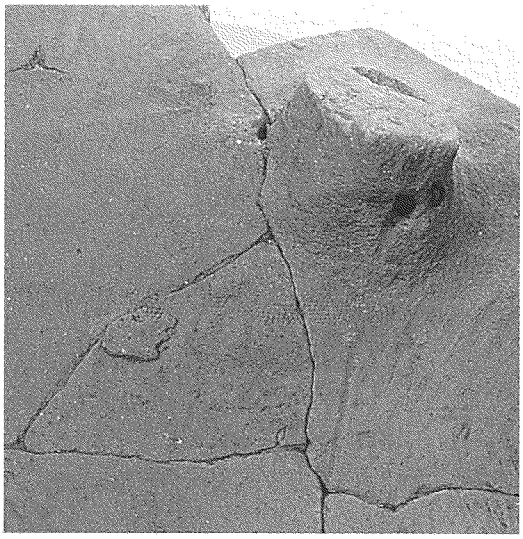
6

2

5

8

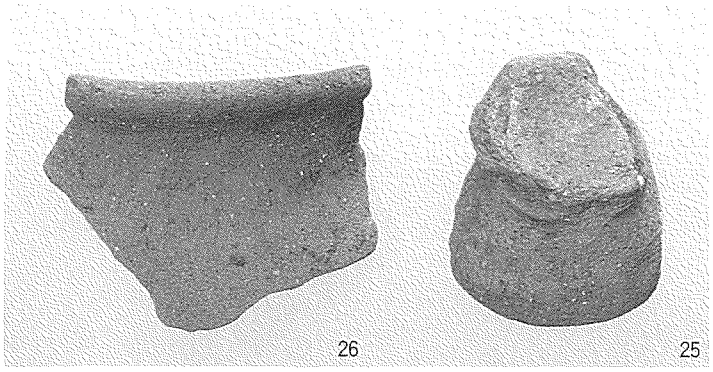
24



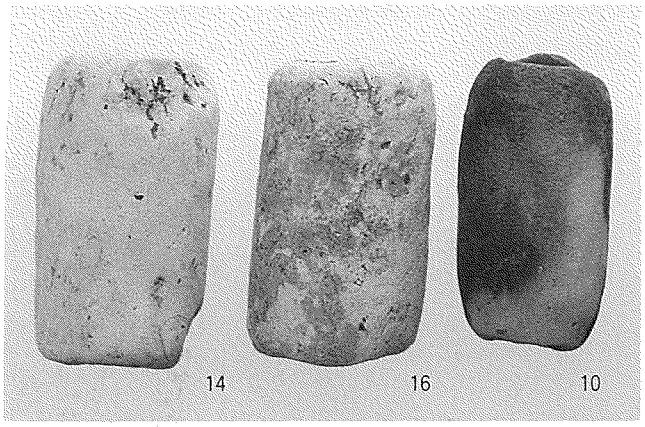
7

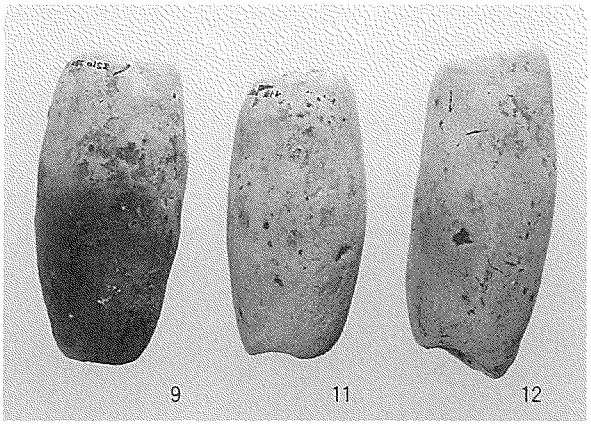
29

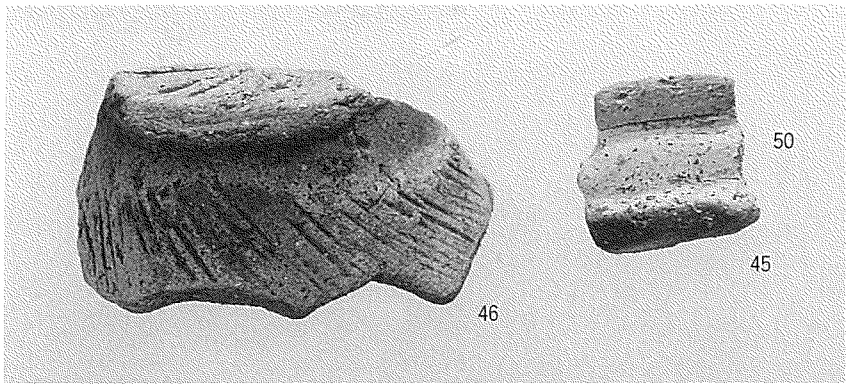
30

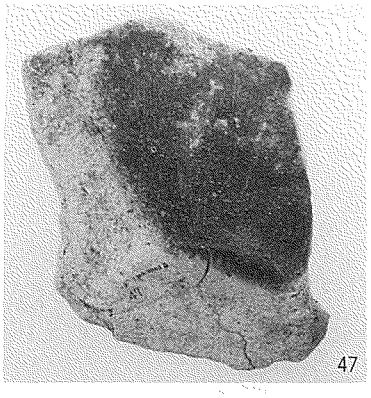

26
25

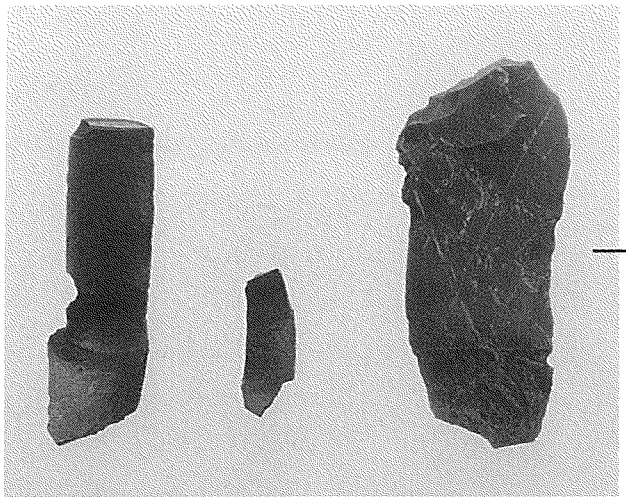
SB01出土土錘

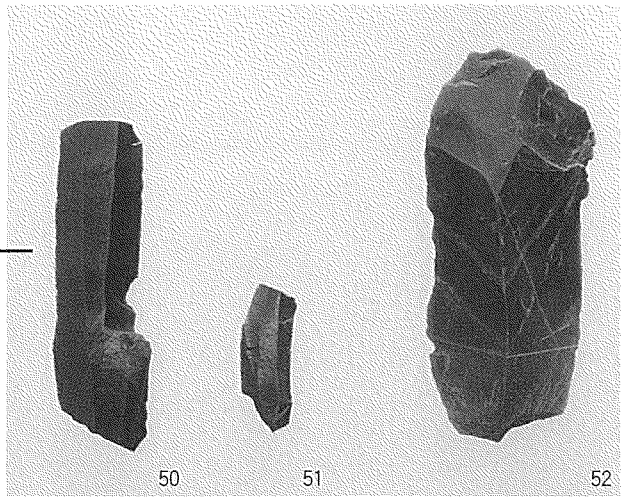


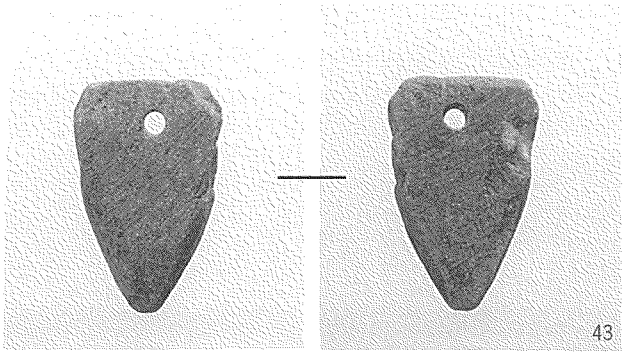


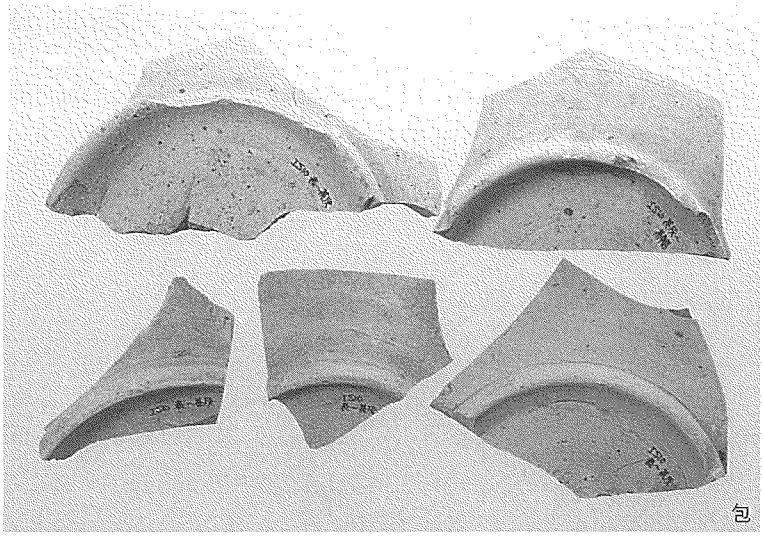


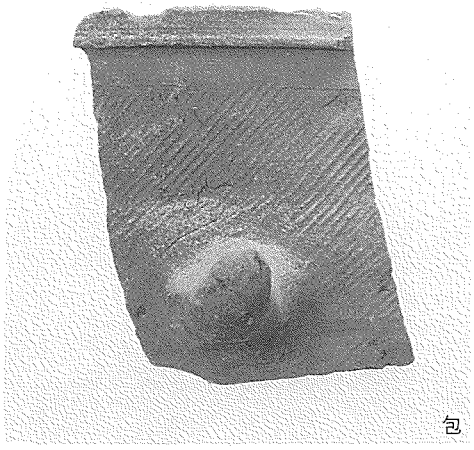


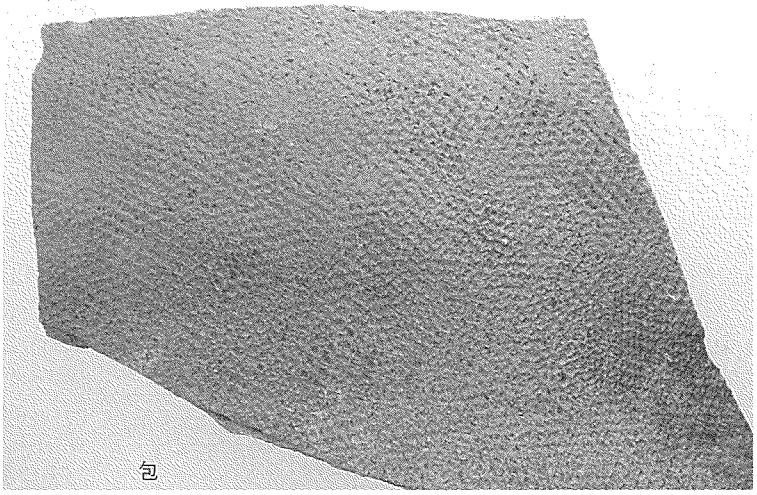




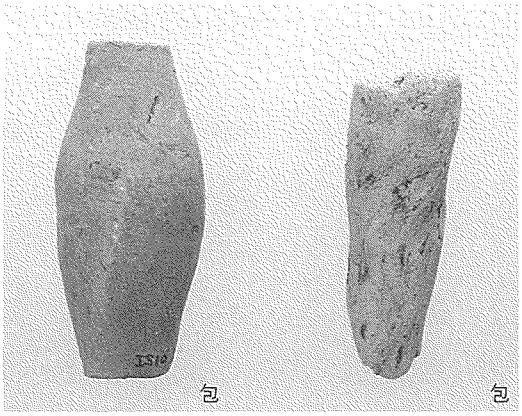

43


包

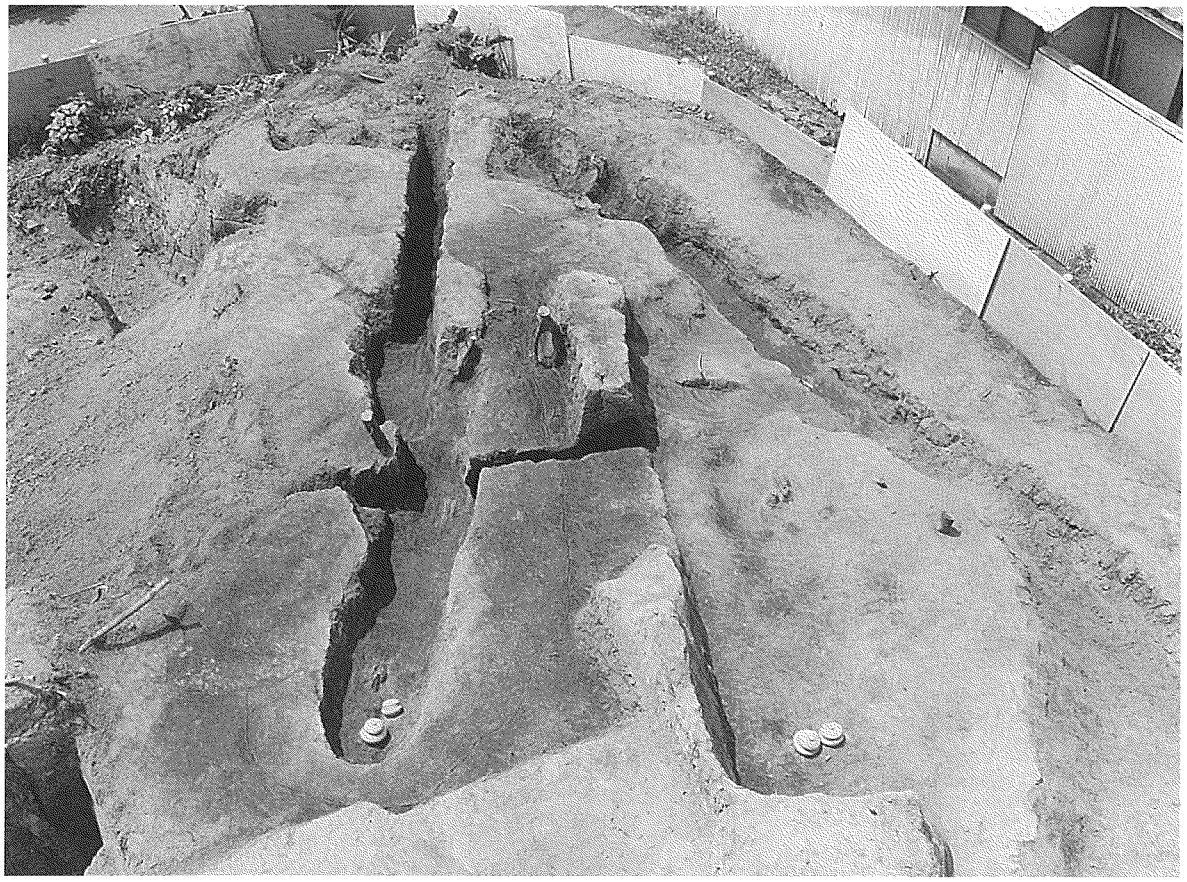

包


包

包


包
包

津賀田古墳発掘調査報告書



Ⅰ　位置と環境

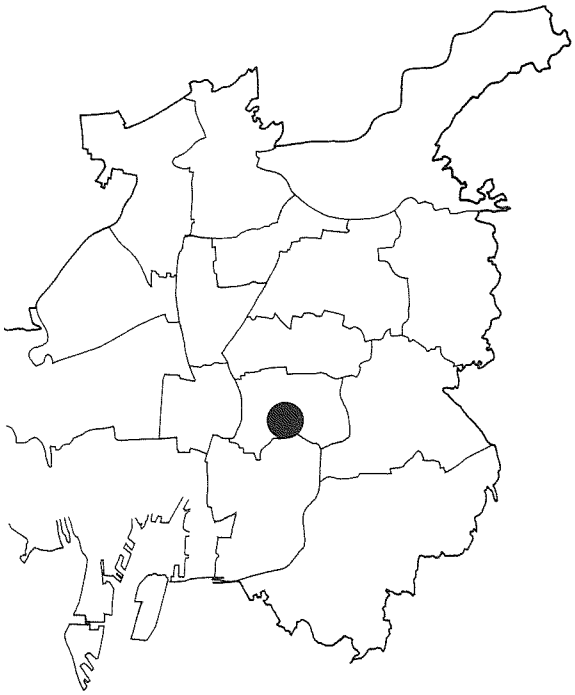
1　古墳の位置と立地

津賀田古墳は、名古屋市瑞穂区津賀田町に所在する直径約16ｍの円墳である。名古屋市の大部分をしめる名古屋台地は、南へ半島状にのびる熱田台地、瑞穂台地のふたつと、その根元にあたる那古野台地、そして瑞穂台地の南方にあり近世に松巨島とよばれて島状景観を呈した笠寺台地に区分することができる。このうち、津賀田古墳の所在地は、標高約14ｍを測る瑞穂台地上に立地している。低地面との比高差は約10ｍである。瑞穂台地の南半部にあたる瑞穂地区のなかでも、南端部にあたり、低地部にほどちかい場所である。台地は、本墳よりも北方へむかってひろがり、北方約300ｍの同じ台地面には、弥生時代の遺跡として知られる瑞穂遺跡がある。本墳の南方は、約700ｍで山崎川とその氾濫原へ下る崖となる。この山崎川氾濫原から瑞穂台地東崖下にかけて広がるいわゆる堀田潟は、生産の基盤として、あるいは交通・流通の拠点として、瑞穂台地上が比較的早くから集落や古墳が展開してきた背景となったと考えられる。

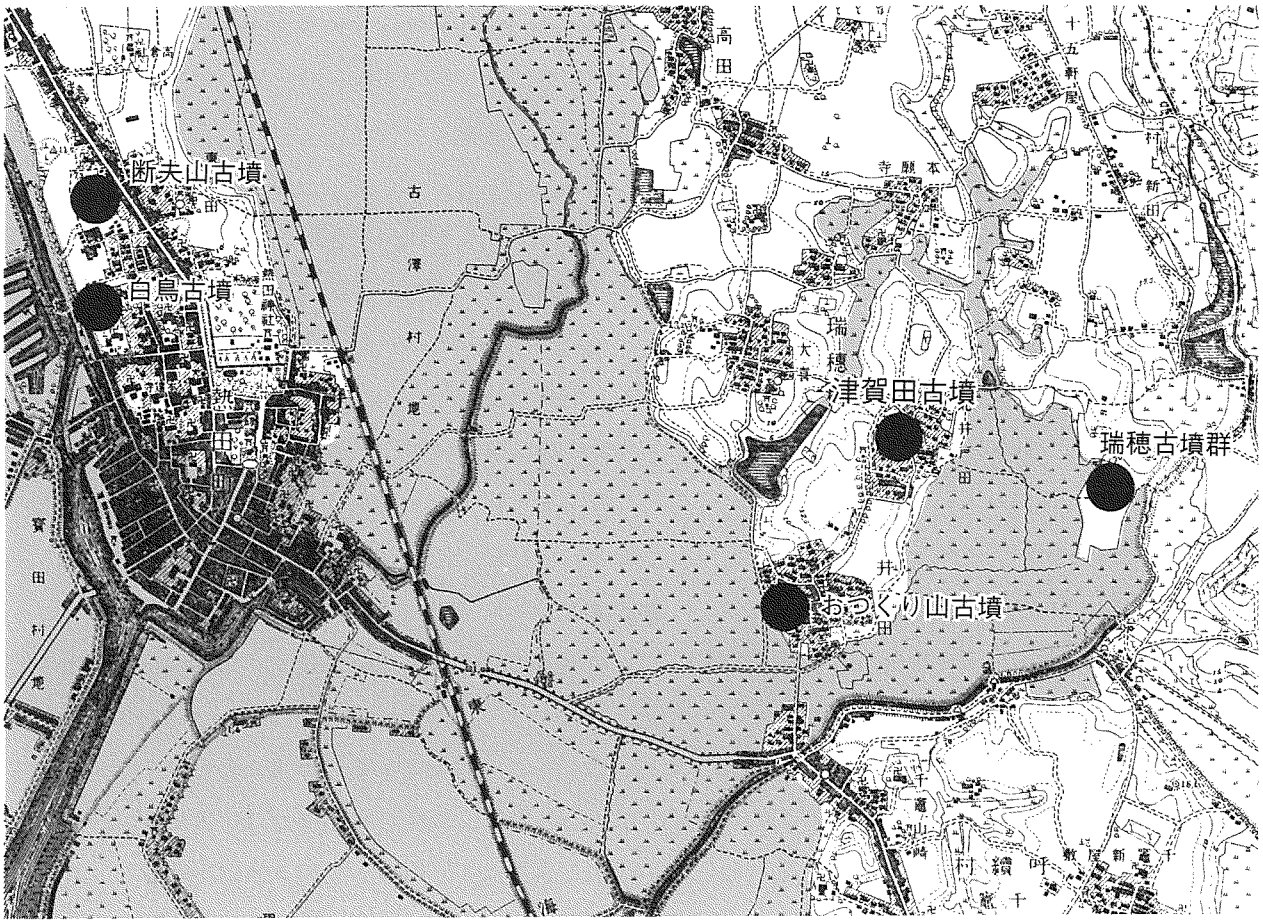
本墳の名称である津賀田の名は、町名から名づけられたものであるが、この町名は1945（昭和20）年に瑞穂町からわかれた際、字名からつけられたものである。古墳の所在地は、明治時代には瑞穂村字西屋敷20番（地目は「ヤブ」）が該当地である。「つかだ」の語源は、『張州府誌』に塚田祠としるされていることからとも、あるいは「津潟」の転訛からともいわれている。町内にある津賀田神社は、近世には「墓田」もしくは「塚田」と書かれることもあったらしく、塚田の根拠となっている。

津賀田町付近は、近世には北井戸田村に属し、北井戸田村の中心集落であった。集落は台地東縁部にあり、その東側低地部は地蔵池、川名川（山崎川）から用水を引いて水田耕作がおこなわれていた。台地上では麦作が盛んであった。『尾張国町村絵図』で北井戸田村を見ると、集落内の屋敷と共に塚が３基描かれている。集落内の道の多くは、現在踏襲されており、津賀田神社を表す若宮八幡宮と天聖寺との位置関係から、津賀田古墳は「鎧塚」に該当する。また、他の２基は「大塚」、「兜塚」である。大塚は頂上に碑のようなものが描かれているが、その後の変転は不明である。明治時代には、瑞穂村字東屋敷６番（地目は「畑」）が該当地である。兜塚は、同様に字東屋敷46番（地目は「ヤブ」）で、今の甲山町にあたり、戦後になって土取りで消滅したという。

このように、本墳の周囲には、なお数基の古墳の存在を想定することができよう。津賀田古墳は、単独立地しているのではなく、数基で構成される古墳群としてとらえられる。



第１図　津賀田古墳の位置



第２図　津賀田古墳の立地

第３図　津賀田古墳周辺の遺跡

2　周辺の遺跡

瑞穂区内では、現在55の遺跡が知られている。瑞穂区の地形は、北から南に流れる山崎川の東側は八事丘陵、その西側が広義の名古屋台地、さらにその西側の新堀川流域は沖積地となっている。遺跡の多くは名古屋台地に立地している。

瑞穂台地では比較的早い段階から人の居住があったらしく、縄文時代の遺跡は、山崎川左岸の大曲輪遺跡、下内田貝塚、瑞穂遺跡、欠上貝塚、田光遺跡、東屋敷遺跡が知られ、縄文時代早期からみとめることができる。欠上貝塚は、津賀田古墳の北西方600ｍに所在し、早期後葉の土器や石鏃を出土した。低地をわたった東方の丘陵裾には、縄文時代前期の貝塚である大曲輪遺跡がある。1939年に発見され1941年に国指定史跡となった。1980年の調査では、前期の貝塚、晩期の甕棺墓、住居など多数の遺物や遺構が良好な状態で出土した。出土した埋葬人骨には、イヌを抱いた姿で見つかったものがあり注目された。瑞穂遺跡では中期の竪穴住居が１棟検出されている。山崎川をはさむ南の対岸は笠寺台地となり、その崖上には早期末～前期初頭の新屋敷貝塚が存在している。

弥生時代の遺跡は、大喜遺跡、大喜梅林遺跡、欠上貝塚などがあり、瑞穂台地上の高台に位置する瑞穂遺跡は、中期、後期の拠点的な集落跡である。古墳時代前期初頭まで継続した。瑞穂小学校内の調査では、幅３～５ｍ、深さ3.5～４ｍの断面Ｖ字形の濠が確認された。このほか弥生時代中期から古墳時代にかけての竪穴住居50軒以上が検出されている。また、東方の丘陵の末端に接する台地南端に位置する旧中根村仁所では、1870年に銅鐸が発見された。高さ83.2cmをはかる三遠式銅鐸で、袈裟襷文区画内に渦巻文が配されている。

古墳時代の遺跡としては、古墳時代前期末以降、八高古墳、高田古墳と、中型の前方後円墳があいついで築造された。八高古墳は、瑞穂区の北端附近に位置する前方後円墳である。墳長約70ｍ(現存長約45ｍ)、高さ約4.5ｍをはかる。旧制第八高等学校が墳頂部を発掘したが何も出土しなかったという。1989(平成元)年に発掘調査がおこなわれ、畿内「大和北部様式」に忠実な埴輪を出土しており、その伝播経路から考えて、畿内との交流の拠点が、尾張南部でもいちはやく瑞穂台地に存在した可能性がある。高田古墳は、墳長約87ｍの前方後円墳であったが、1955（昭和30）年の調査後に滅失した。内部主体は粘土槨であった。この周辺には円墳４基が知られ、高田古墳群を形成していたが、１基を残して滅失した。瑞穂地区では、これらの前方後円墳以後は、北方では東北方の台地東縁に村上おどり山古墳、東方700ｍの瑞穂古墳群など、中小型の円墳が築造されている。村上おどり山古墳は、かつては幅２ｍの濠がめぐり直径約40ｍ、高さ約４ｍの規模であったという。瑞穂古墳群は、３基の円墳がしられていたが、道路造成により３号墳が消滅して、現在は２基となっている。いずれも直径約20ｍ程度の規模とおもわれる。１号墳と２号墳では、かつて円筒埴輪が採集された。いずれも焼質はあまいが窖窯による焼成で、外面調整はタテハケを主とする。古墳時代後期前葉の時期と考えられる。

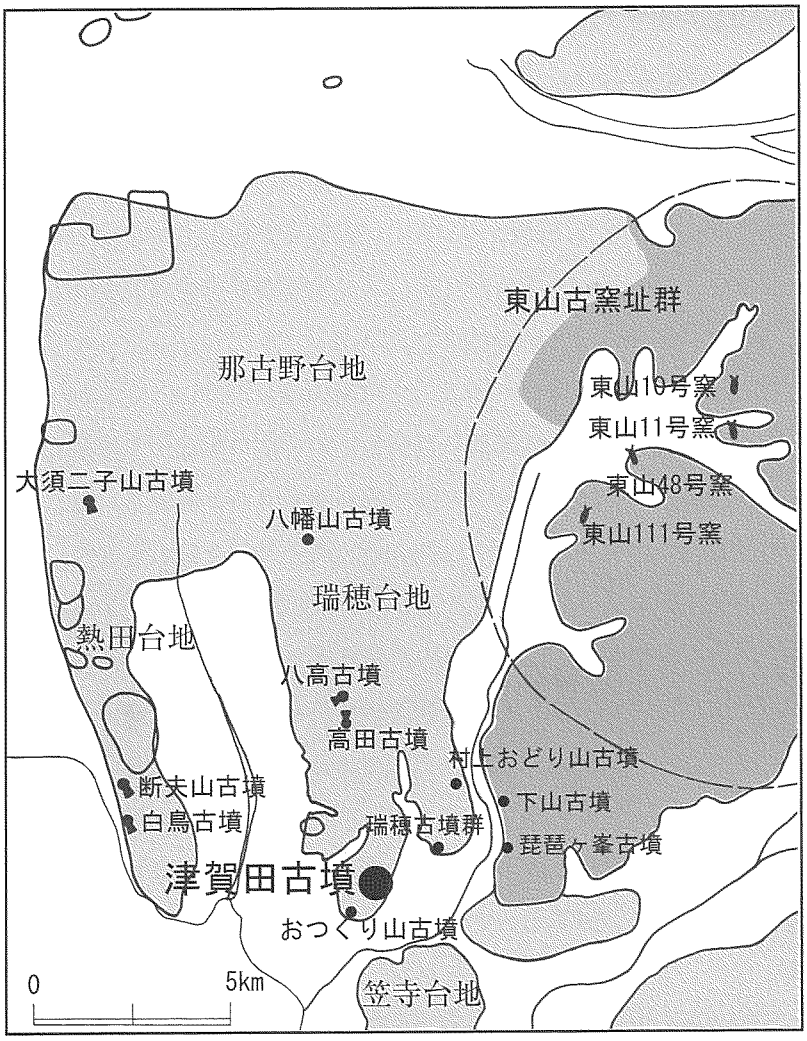
台地南縁にあたる井戸田町には、おつくり山古墳、ためまる古墳、姫塚古墳、剣塚古墳の４基が知られている。『賤小手巻』には井戸田の七塚として剣塚、稲荷塚、大黒塚、恵比寿塚、天神塚、荒神塚の名がみえ、なお数基の古墳（または塚）が存在したようである。

おつくり山古墳は、直径約16ｍ、高さ約６ｍの円墳であったという。復元直径は約30ｍであったと考えられる。1928（昭和３）年に土取り工事により破壊されたが、このとき小栗鐵次郎を中心として愛知県に

よる調査がおこなわれた。埋葬施設は粘土をもちいた木棺直葬で、直刀、甲、鏡２面、三環鈴、鈴釧、ガラス小玉などが出土したと報告されている(小栗1929)。報告中にはみえない遺物だが、金銅製胡籙が現在、東京国立博物館に保管されている。古墳時代後期前葉の古墳であろう。ほかに、東縁にはかつて井守塚古墳があった。主体部は横穴式石室で須恵器、武器などが出土した。古墳時代後期後半の古墳である。

このように、瑞穂台地の南端部には、規模はおおきくないが多数の古墳が展開している。しかしながら、集落遺跡の実態は、不明な部分がおおい。認識されている数すくない集落遺跡として、すでにのべた瑞穂遺跡のほか、本墳の北西600ｍ附近、台地西縁部に位置する、大喜町一帯の遺跡群をあげることができる。ここには、大喜遺跡、大喜梅林遺跡、大喜Ａ、Ｂ、Ｃ遺跡、田光遺跡、直来町遺跡（蛇塚遺跡）など、集落遺跡が密集している。大喜遺跡では、1988年の調査では、古墳時代中期の竪穴住居１軒を検出しており、城山２号窯式期～Ｈ11号窯式期の良好な須恵器をともなっている。直来町遺跡(蛇塚遺跡)は、明治末～昭和初期に多くの遺物が出土したことで早くから知られていた。そのなかには、弥生土器のほか、５世紀後半の須恵器がある。

古代～中世には、十六町Ｂ遺跡、瑞穂通４町目古墓、大喜Ａ遺跡、大喜Ｂ遺跡、大喜Ｃ遺跡、大喜梅林遺跡、仁所遺跡、片坂町遺跡などがある。城館としては、高田城跡、大喜東北城跡、大喜田光城跡、中根北城、中根中城、中根南城がある。



第４図　津賀田古墳の位置と名古屋台地

II　調査の経過

1998（平成10）年、津賀田古墳のある土地が宅地造成されることになり、発掘調査することになった。調査前の古墳は、墳丘部に根回り直径約１ｍの樹木が繁茂していた。土地所有者の話によれば、以前は竹林であって、やがて雑木が茂るようになったという。また、墳丘の南東部には民家が建ち一部は削平を受け、南から西側は小径で削られていた。かろうじて北側が墳裾らしいなだらかな傾斜面を保っていた。

５月６日、現地で、事業者と文化財保護室担当者ならびに見晴台考古資料館の担当者が打ち合わせをおこない、調査は解体予定の民家の撤去と樹木の伐採後に着手とした。ただし、南東部の民家１棟については、南側の道路が狭小で車輌の通行が不可能なため、古墳墳丘の東側を先行して調査し、通路を確保してから解体撤去することにした。また、墳丘測量については、費用の面から事業者が実施することになった。

５月中旬に測量を実施し、成果を受け取る。５月29日に発掘排土工事業者と現地で打ち合わせをおこなう。６月８日、墳丘東側から調査を開始した。表土の掘削は重機を用いておこなったが、伐採後に残された切り株の除去には難航した。墳丘の東裾部分は崩落土の再堆積土や土嚢で土留めがされたもので、あまり原形を保っていなかった。付近の住民の話では、戦時中に古墳の東側から防空壕が掘られていたとのことで、埋め戻し土と考えられる。墳丘上に十字にセクションベルトを設定し、裾部から墳頂部の表土除去へと移る。東側の墳頂部から裾部にかけてセクションベルトに沿って北側にトレンチを設け、土層を確認する。おおよその層序は、表土約20cm、暗褐色土約10cm、明るい茶色土約30cm、黄色ブロック土約50cm、黒色ブロック土の順に堆積していた。

６月12日に墳頂部トレンチ内をさらに掘削したところ、ふかふかの土の面とやや固い土の面があらわれた。先にやわらかい土のところを掘り下げたところ、須恵器有蓋短頸壺が出土した。蓋は鈕部分が欠損していた。壺の中は空で、外面に赤彩が施されていた。この須恵器は埋葬部にかかわるものと考えられ、横穴式石室墳ではなく木棺直葬墳であると予測された。

６月15日から先行して調査する東側を掘り始める。東側の墳丘下位は、断ち割った状態になったため、断面観察をおこなう。台地の地山である熱田層（橙黄色）の上位に黒色土が堆積し、その上位に墳丘が構築されていた。また、崩落土が３か所みられた。防空壕の出入り口と推定される。南東端は茶褐色土で、２次的な堆積土とおもわれた。また周溝を探すため、墳丘北側部分を掘削したが、戦前～戦後の攪乱土が厚く堆積しており、周溝を検出することはできなかった。この攪乱土を掘り下げていくと、戦前頃かと推定される陶磁器が多く出土し、墳丘をえぐるように土坑を掘っていることがあきらかとなった。地下室のようなものを掘っていたようである。墳丘上の切株周辺の黒色土にも近世頃の陶器がふくまれていた。

６月19日、21日、22日、23日と雨天日が続いたことと、23日から墳丘南東部の家屋の解体撤去と排土の搬出を事業者が実施するため、７月５日まで一時調査を中断した。７月６日から再開し、家屋の解体が済んだ南東部墳丘の調査を開始した。防空壕のうち東北側の穴はおもいのほか深く、また墳丘下に掘りすすんでいることが判明した。もう一つの壕とＵ字状に地下で繋がっている推定される。東側の掘削が終了しため、墳丘盛土を掘り下げ、主体部の検出につとめた。トレンチから出土した須恵器をふくむ土が軟質土であったことから、この土の範囲を検出することにした。この面は、黄色ブロック土の下位層である黒色土を掘り下げていったところで検出された。南東部では、この軟質土の範囲の外側に硬質土がみとめられ

た。セクションベルトをはさんで西側でも硬質面がみとめられた。７月８日、北側部分の遺構平面図の作成。南東部では、防空壕の埋め戻し土および崩落土を掘削するが、墳丘下にもぐり込んでいくため、遺存する墳丘土が崩落することが危惧されたため、途中で中止した。９日以降、範囲を広げ盛土上位層の黄色土を掘削する。14日以降は下位層の黒色土層を掘り下げ、主体部の検出につとめる。15日に東西セクションベルトにかかり、長さ約1.1m、幅約0.7mの広さで黒色土の範囲を検出する。埋土は空洞があるほどふかふかの土であった。

７月21日に東西セクションベルトのうち、南北セクションベルトの西側土層面を精査したところ、盛土層を切り込んで表土層から掘り込むラインを検出したが、盗掘坑と考えていた。この土坑の平面プランを検出したところ、土坑内より鉄刀１振が出土した。南北セクションベルトをはさんで同一レベルまで掘削していたが、これは墓坑を掘っていたらしく、主体部に到達したことで出土したようである。ついで近接した位置から鉄鏃が束になって出土した。これを第２主体部と名づけた。７月29日、第１主体部が検出された。須恵器有蓋短頸壺１点と刀子が出土し、その周辺には赤色顔料が散布された状況であった。しかし、北東側の須恵器には赤色顔料は付着していなかった。

８月８日には、現地説明会を開催し、約150人の参加を得た。８月14日にはセスナ機による航空写真を撮影した。８月17日には高所作業車から全景写真撮影をおこなった。８月13日から17日までに掘り残していた第１主体部棺埋土を掘削したが、南端部は、掘り方埋土と棺埋土の区別が困難であったため、棺埋土を掘削していたつもりが、あやまって掘り方まで掘削してしまった。８月18日、19日には主体部の平面図の作成をおこなった。その後盛土を掘削し、旧地表である黒色土の面を検出し、土層図を作成した。８月25日にすべての盛土を掘削し、現地調査を終了した。

写真１　津賀田古墳調査前の状況

写真２　津賀田古墳上空より南西をのぞむ

写真３　現地説明会の風景

写真４　現地説明会の風景

III　遺構と遺物

1　古墳の遺構

◆墳丘の調査

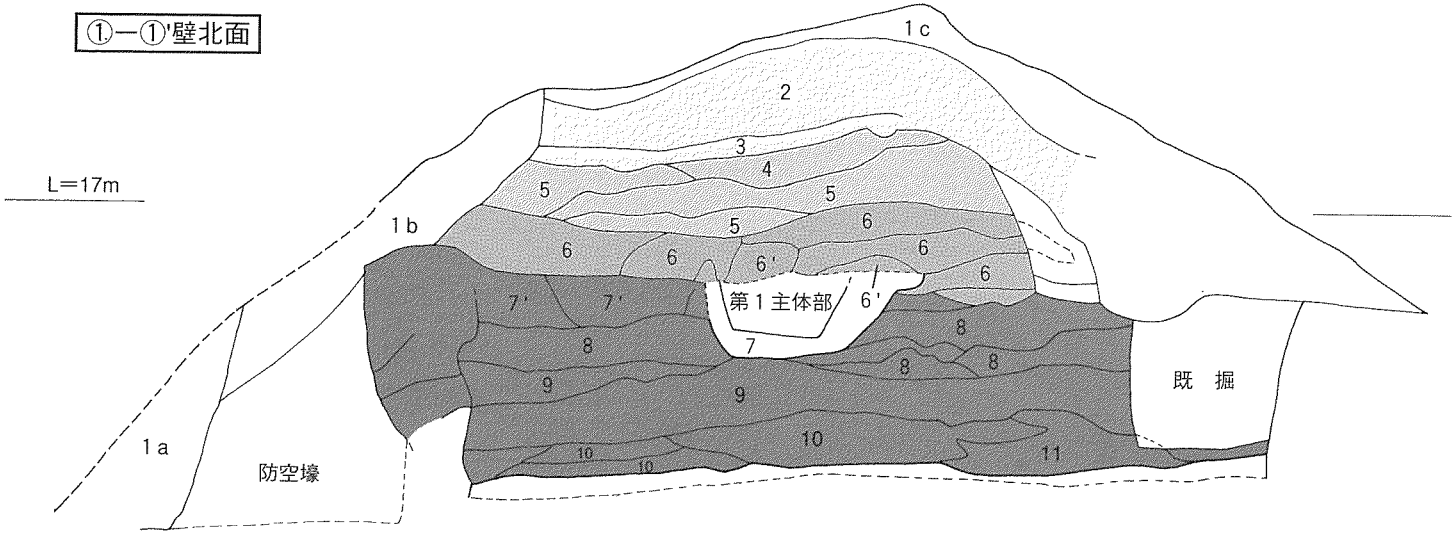
調査前の古墳の状況　古墳は、標高約14ｍの台地上に立地している。現況の墳丘規模は、東西約13.5ｍ、南北約16.5ｍ、道路面からの高さ約4.5ｍを測る。家屋の密集した集落の中にあるため、西側はすぐ脇を道路がとおり、盛土が削平を受けていることは現状からもうかがえた。とはいえ、東側から北側にかけては、測量図の等高線も比較的整った円弧を描いており、遺存状態は比較的良好かとおもわれた。さらに、東北部分にはわずかながら高まりが墳丘から北にのび、墳丘に関連するものかどうか注意された。しかし、このわずかな高まりは、掘削の結果、すべて表土層であった。また、周溝や墳丘裾端部の検出をこころみたが、墳丘周囲の攪乱や削平がいちじるしく、確認できる箇所はなかった。

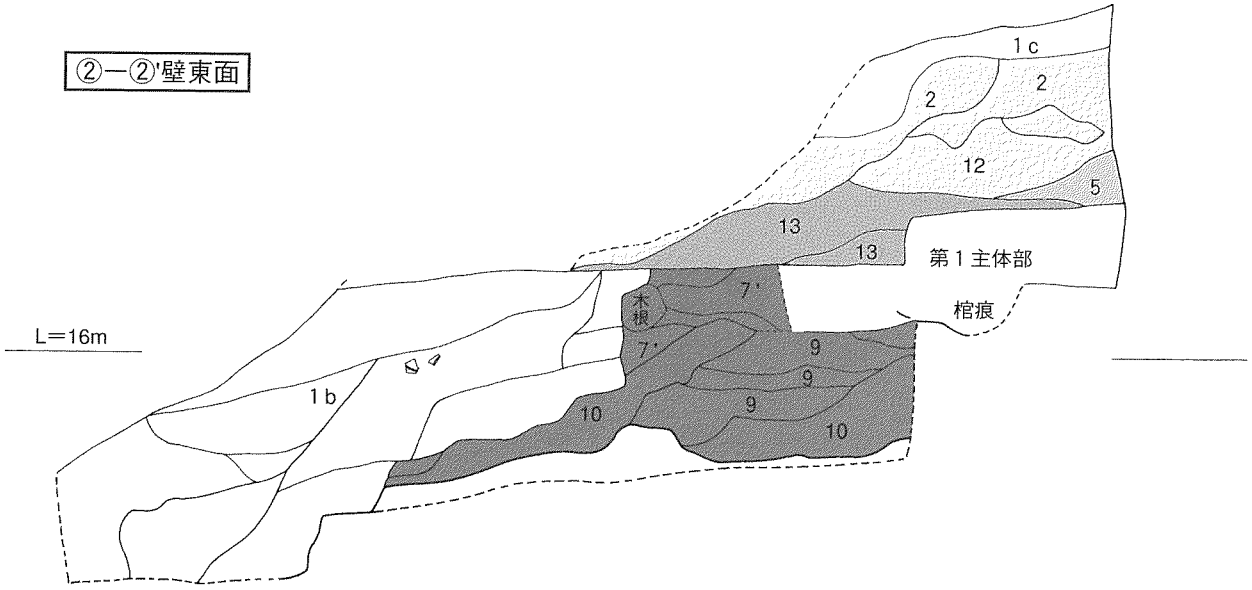
基本土層（第６図・第７図）　墳丘の断ち割り調査の結果、下位層に黒色土層を確認した。この黒色土は漸移的に橙黄色土に変化している。こうした色調変化は、名古屋城三の丸遺跡の調査でしばしば熱田層上位層でみられ、縄文時代頃の形成といわれていることから、この黒色土層は熱田層の最上位層と考えられる。したがって、古墳築造前の標高は、この黒色土上位面の約15.4ｍ前後であったと考えられる。したがって、墳丘の直径は約16.0ｍ、高さは約3.0ｍと推定される。

墳丘を形成する盛土層は、おおむね５層に区分される。第Ⅰ層（下位層/９～11層）は厚さ50～70cmで水平に堆積した黒色土からなるが、下位20～30cmは黒色土、上位40～50cmは褐色土や橙褐色土をふくむ黒褐色土である。黒色土層中に土器片が混じるため、地山ではないことはあきらかである。第Ⅱ層（８層）は、厚さ20～80cmを測り、灰褐色土を基調としたもので、橙色土ブロック土をふくむ層やふくまない層、黒色土ブロックをふくむ層などに分層できる。第Ⅲ層（７層）は、上面において第１主体部を検出した。しかし、この面の土質は一様でなく、主体部の南東部は黄色ブロック土や黒色ブロック土の混じった土であるが、西側や北側は黒色ブロック土であった。第Ⅳ層（６層）は、厚さ約20cmの黒色土である。地山由来の黄色土ブロックをわずかながらふくんでいる。第Ⅲ層上面で検出した主体部の棺部分の埋土は、黒色土でおおくの空隙があるふかふかの土であった。第Ⅳ層が木棺腐朽後、落ち込んだものである。第Ⅳ層は、第Ⅱ層や第Ⅲ層を覆うように円丘状に積まれている。第Ⅴ層（２～５層）は、厚さ0.8～1.3ｍを測り、灰黄色土、黄灰色土、灰黄色砂など黄色土ブロックをおおくふくむ土である。一見して、下位（第Ⅰ～Ⅳ層）に積まれた土層と区分できるものであった。第Ⅳ層を覆うように積まれ、墳丘を整えている。第２主体部は、この第Ⅴ層下位層（４・５層）を掘り込んで構築され、その埋土は下位に黄褐色砂質ブロック土、上位は黒色ブロック土であった。第Ⅴ層上位層（２・３層）で覆われている。表土層（腐植土）は、墳頂部ではわずかに10cm程度覆っているにすぎなかった。

このように、墳丘本来の盛土は、おおまかに灰黄色土、黄灰色土、黒色土の３種を基本とし、ほかに各々が土の混ざりぐあいによって若干の色調差や土質差を生じた土層が存在している。灰黄色土は第１主体部上面より上位の盛土にもちいられ、灰褐色土や黒色土は、埋葬施設以下の盛土にもちいられていた。とくに、第１主体部下面より下位の盛土は黒みがつよく、上位へむかうにつれ、褐色土、黒色土ブロックが混じる黄灰色土、灰黄色土と、漸次土層が変化している。熱田層の堆積層序を上位から順にたどるのとほぼ

第５図　津賀田古墳墳丘測量図

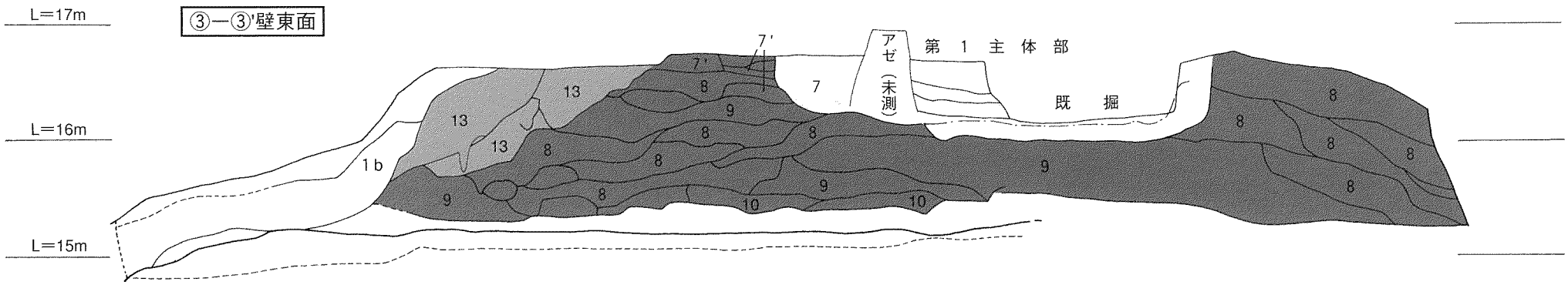


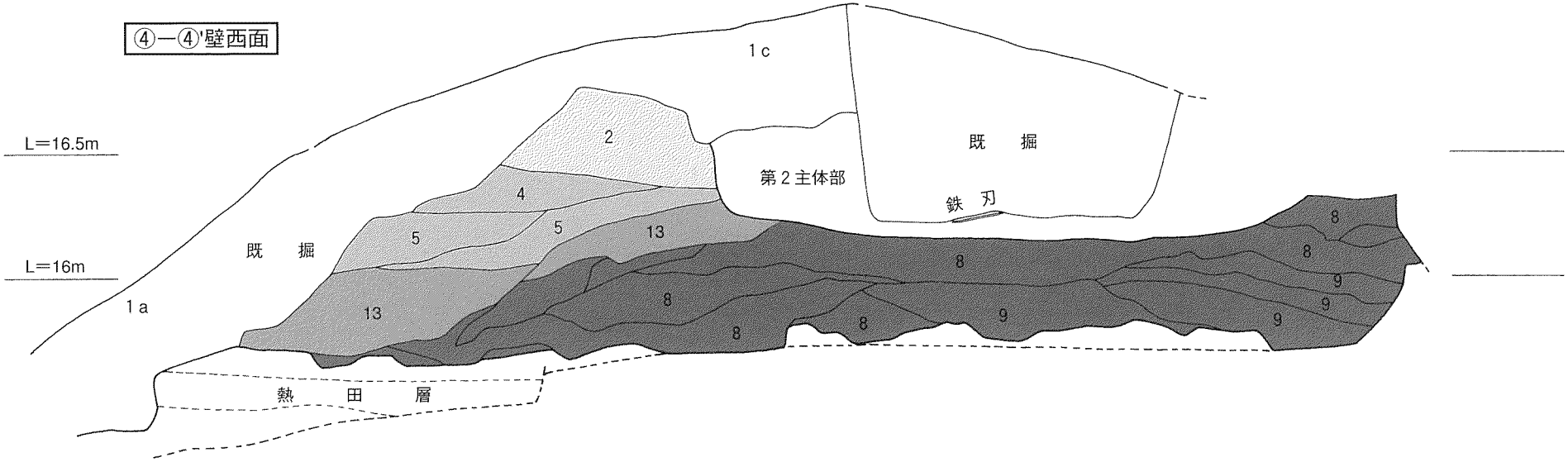


土層注記（全壁共通）

1a　表土（既掘）
1b　表土（攪乱）
1c　表土（腐植土）
2　灰黄色砂質土
3　暗灰色土
4　灰黄色土…黒色土ブロック多混
5　黄灰色土…黄色土ブロック多混
6　黒色土……黄色土ブロック混
6'　黒色土……ぼそぼそでしまりなく空隙目立つ
7　橙色シルトブロック、黒色土ブロック、褐色土ブロック混
7'　7に似るが砂質土　しまりなくふかふか
8　灰褐色土
9　黒褐色土
10　黒色土
11　灰褐色土
12　橙黄色シルト質土
13　黄灰色土

第6図　墳丘土層断面図(1)（S＝1/50）





第７図　墳丘土層断面図⑵（S＝１/50）

おなじ土層変化であることから、古墳築造場所周辺の熱田層を掘削して墳丘盛土としたと考えられる。

第１主体部の棺床下面レベルと、棺床肩口レベルには、盛土が平坦にそろう面がある。この面よりも上位の盛土は、土層はおなじだが第１主体部を被覆する盛土となっている。さらに、この第１主体部被覆の盛土の上面でも、平坦面をもうけている。このことから、この平坦面でいったん墳丘盛土を中止し、棺床部分を掘りくぼめたと考えられる。

墳丘築造過程の復元　このような土層堆積状況をもとに、墳丘の築造過程を、つぎのように推定した。

工程①　植生をとりはらって表土面を整地し、盛土をはじめる。まず、墳丘築造箇所の周囲の地山を掘削し、この土を盛土として積み上げ、上面が平坦面をなす直径10ｍ程度の第１次墳丘を築成する。盛土は、熱田層（地山）上位層の黒色土が主体である。平坦面では、第１主体部の棺床基底となる部分を設定しておく。

工程②　ひきつづき第１次墳丘周囲の地面を掘削して盛土とする。この盛土は、熱田層（地山）の橙色土がブロック状におおく混じる土である。工程①でもうけた平坦面に木棺を据え、これを固定するように盛土を積み上げていく。

工程③　第１主体部の被葬者葬送にかかる諸儀礼をおえたのち、棺蓋をかぶせ、その上は厚さ約20cmの黒色土で被覆される。この被覆土は、第１主体部だけでなく、すでに積み上げた第１次墳丘全体を覆うように積み、上部は平坦面をなさず丸い半円丘としている。

工程④　さらに地山を掘削してえた盛土を1.0～1.2ｍの厚さで全体を覆うように積んで、墳丘を完成する。この工程の盛土は、熱田層（地山）下層をなす灰黄色ないし黄灰色の砂質土である。

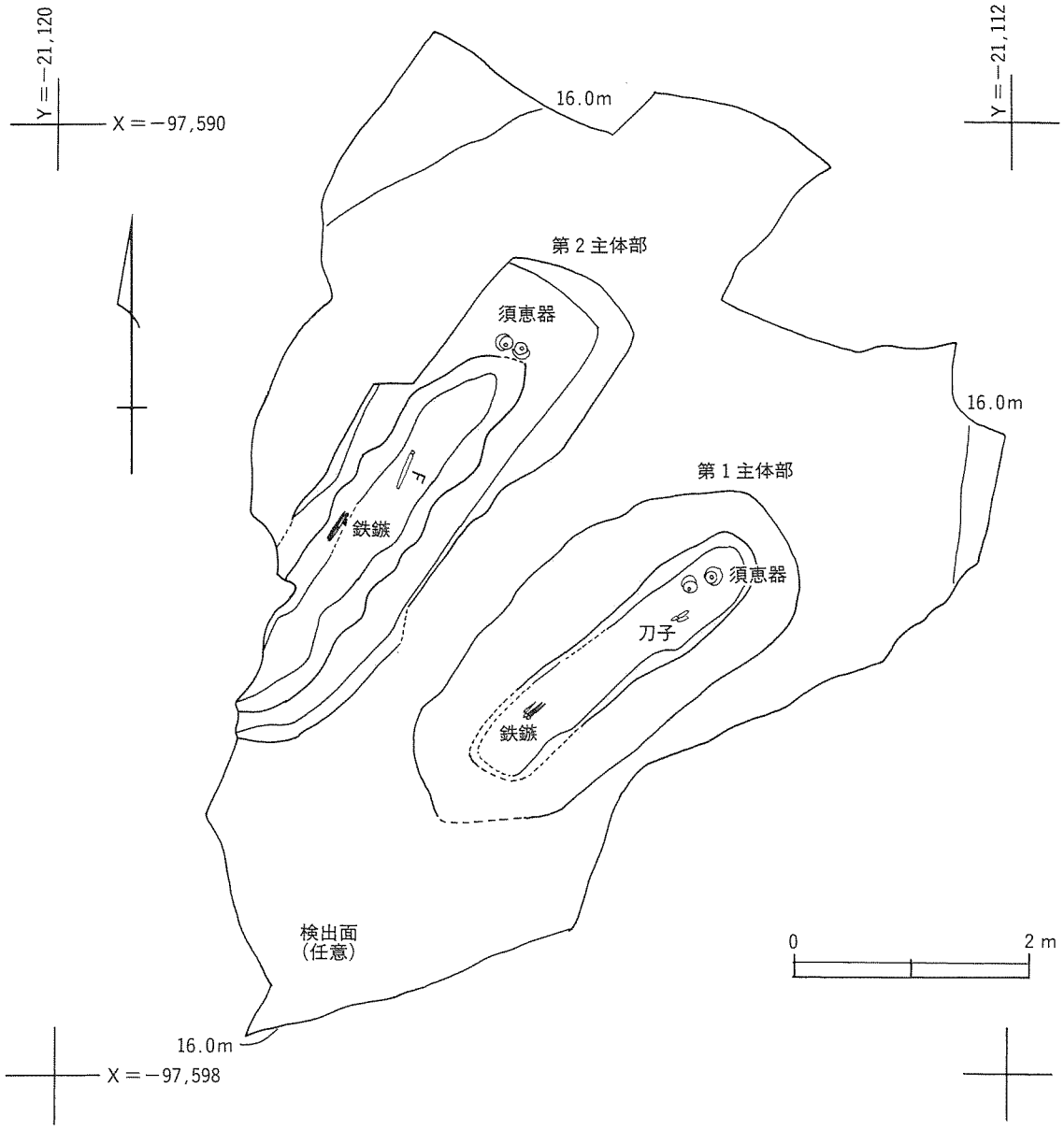
工程⑤　しばらく後に、第２主体部の構築のため、墳頂部から墓坑を掘り込む。棺をおさめ諸儀礼をすませると、再び盛土がほどこされた。

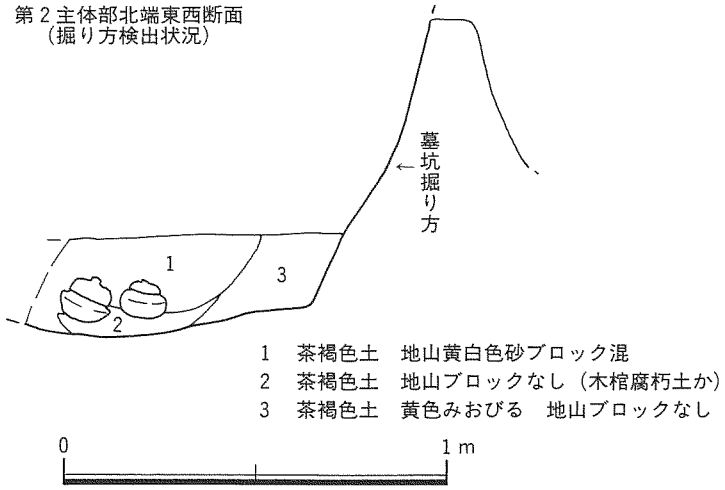
◆埋葬施設の調査

第１主体部　古墳構築の契機となった被葬者を埋葬する主体部である。掘り方のプランは明瞭でなく、とくに南端ははっきりとしなかった。埋葬施設の規模は、東西約1.7ｍ、南北約3.6ｍ、深さ約0.5ｍであった。埋土は、橙色シルトブロック、黒色土ブロック、褐色土ブロックが混じる。棺の規模は東西約0.6ｍ、南北約3.0ｍ。主軸をＮ50°Ｅに向ける。棺内埋土は、北寄りはふかふかの黒色土で、掘削していくと、空洞がみえる土である。南寄りは地山ブロックが少し混じるややぼそぼそとした感じの土であったが、北寄りのような空洞ができるほどではなかった。南西隅は、盛土が赤い地山土がおおく堅くしまり、プランを検出することができなかった。

遺物出土状況　棺内遺物として、北端から30～60cmの所に須恵器有蓋短頸壺２個が出土した。須恵器壺は完形で蓋をしたままの状態であった。また10cm離れて棺内東壁に沿って刀子１点が出土した。刃先は北を向けていた。北端から約2.1ｍはなれて鉄鏃が７本まとまって出土した。先端部を南に向けている。また、検出面から約30cm下、須恵器および刀子周辺の床および壁面には、南北約70cmほどの範囲に赤色顔料が付着していた。ただし、北東側の須恵器には全く付着していなかった。

第２主体部　墳丘完成後、葬られた被葬者の主体部である。掘り方は、墳丘頂部から盛土第Ⅴ層を壊して掘り込まれ、納棺後、再び黄灰色土で覆われる。埋土は、大半を掘削してしまったために、詳細は不


Y＝−21,120
X＝−97,590
Y＝−21,112
16.0m
第２主体部
須恵器
16.0m
第１主体部
鉄鏃
須恵器
刀子
鉄鏃
検出面
（任意）
0
2 m
16.0m
X＝−97,598


第２主体部北端東西断面
（掘り方検出状況）
墓坑掘り方
1
2
3
1　茶褐色土　地山黄白色砂ブロック混
2　茶褐色土　地山ブロックなし（木棺腐朽土か）
3　茶褐色土　黄色みおびる　地山ブロックなし
0
1 m

第８図　埋葬施設平面図

明であるが、刀の出土したレベル以下は、褐色砂で最下層にはわずかながら黄白色砂がみとめられた。刀の出土レベル以上には、黄褐色砂、灰白色砂質土で埋まっていたようである。墳丘上位層第Ⅴ層とほぼ同じ土であり、第１主体部のように異なる土で覆っていない。規模は、東西現存長約1.5ｍ、南北現存長約4.8ｍ、深さ約0.8ｍである。西側の墳丘は、盛土の流出がいちじるしく、主体部掘り方の埋土も大半が失われていた。そのため、幅はもうすこし広かったとおもわれる。棺埋設のプランは確認できなかった。ただ主体部内中央部が一段下がっており、これが棺の痕跡の一部とも考えられる。第１主体部と掘り方で約0.6ｍ、棺で推定約1.6ｍ離れている。主軸はＮ36°Ｅを向き、第１主体部とほぼ平行して構築されている。

遺物出土状況　棺内か棺外かはっきりしなかったが、須恵器有蓋短頸壺２個、刀１振、鉄鏃が18本出土した。須恵器壺は、主体部北寄りに２個が東西に並んで出土し、蓋をしたままの状態であった。東側の壺は、砂質土が充塡されていたが、ハマグリ右殻１片が入っていた。西側の壺内からは充塡した砂質土の上位に針状の鉄製品がのっていた。壺は、蓋をしたままであったことや、木棺直葬墳の副葬品であることから、埋葬時も空隙率の高い状態であったようである。科学分析の結果では、砂以外の構成物の組成は不明であったが、当時かなり粘性のある有機系の物質（例えば澱粉質や寒天質の練り物）が充塡されていたと推定されている（本報告附篇参照）。鉄鏃は束になって出土した。その多くは南に先端を向けている。

２　埋葬施設出土遺物

◆第１主体部

須恵器（第10図１・２）

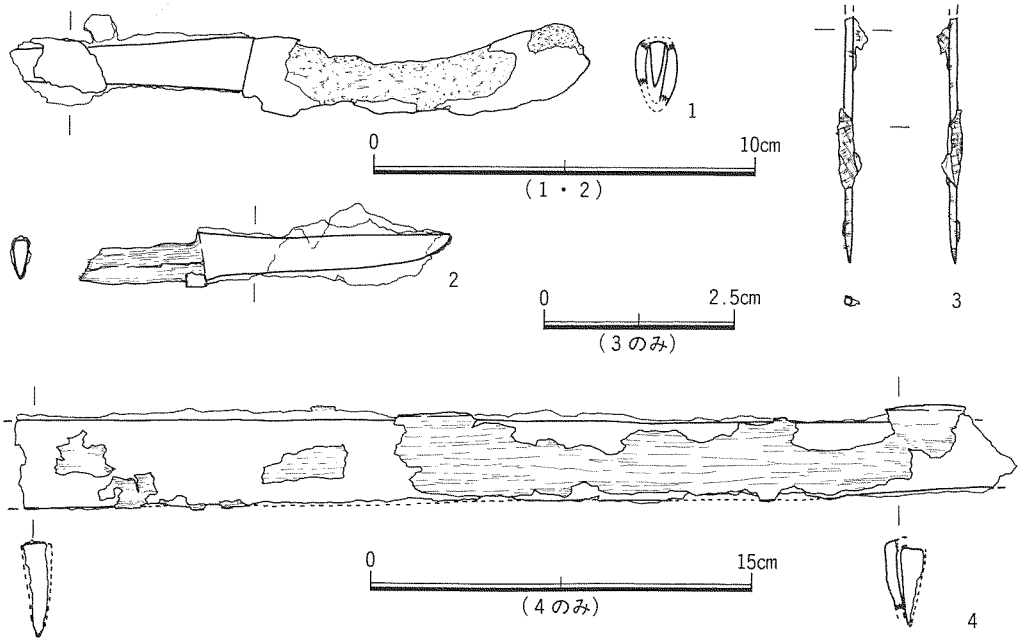
有蓋短頸壺が２組出土した。（１）は、蓋は口径10.4cm、器高5.9cmで、短頸壺は口径7.8cm、胴部最大径15.5cm、器高12.3cmである。蓋は、鈕の頸部がやや直立ぎみにたち、頸部と上部の縁とが明瞭に区別できる。天井部は比較的高く張り、その上半部には回転ケズリをほどこす。下半部は突線状の段をなし、口縁部と天井部の境はほかよりもひときわ高く明瞭にたつ突線がつく。この突線上には斜め上方からの刺突状の楕円形痕跡列が一周していた。ごく部分的に、上段の突線上にもかかったところがある。口縁部はやや内弯ぎみに直立し、端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされている。このために端部外面もやや外反している。短頸壺は、最大径がほぼ中央にありやや扁球形の胴部で、丸底である。口縁部はやや内弯ぎみに直立する。端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされ、そのため外面もわずかに外反する。胴部最大径にある一条の沈線から、上方へむかって羽状文・沈線・羽状文・沈線の順でそれぞれ一周している。２列の羽状文は、中間の沈線をはさんで対向するようにほどこされ、綾杉文状を呈する。その施文はハケ目状工具の端部をもちいた刺突による。下段羽状文と最大径部沈線との間隙に、布目状の痕跡が一周している。内外面は回転ナデ調整で、底部周辺にのみ手持ちケズリをほどこす。蓋と短頸壺は焼成時にもセットとして焼かれたものらしく、短頸壺の肩部にみられるわずかな溶着痕は、蓋の口縁端部と接合する。

（２）は、蓋は口径9.7cm、残存高4.1cmで、短頸壺が口径7.4cm、胴部最大径12.1cm、器高8.0cmである。蓋は鈕を欠損する。天井部は比較的高く張り、その上半部には回転ケズリをほどこす。下半部は回転ナデ調整で、口縁部と天井部の境は高く明瞭にたつ突線がつく。この突線の直上にも段がある。口縁部は直立し、端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされている。このために端部外面もやや外反してい

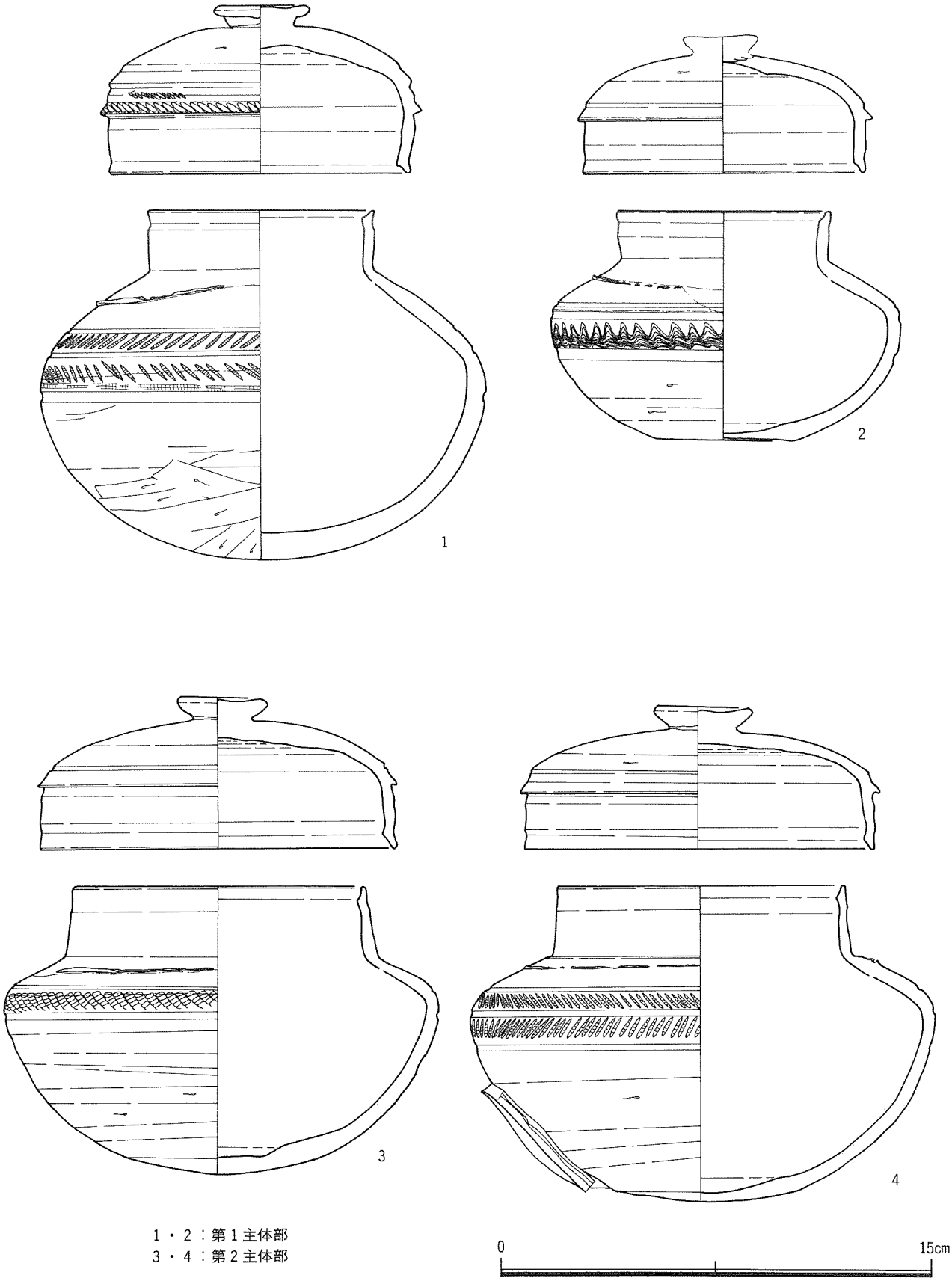
る。短頸壺は、最大径が中央よりもやや上方にあってやや扁球形の胴部で、平底である。口縁部はやや外反ぎみに直立する。端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされ、そのため外面もわずかに外反する。最大径部分に二条の沈線があり、下方へむかって複波状文・沈線の順でそれぞれ一周している。複波状文は、轆轤回転をもちいた施文で、やや乱れがあるが比較的丁寧なものである。内外面は回転ナデ調整で、底部周辺にのみ回転ケズリをほどこす。蓋と短頸壺は焼成時にもセットとして焼かれたものらしく、短頸壺の肩部にみられるわずかな溶着痕は、蓋の口縁端部と接合する。

鉄鏃（第11図１～７）

短頸鏃（１～４）が４点、長頸鏃（５～７）３点が出土した。（１）は腸抉柳葉系で、鏃身部は平造である。切先ふくらからややくびれながら腸抉へつづく。頸部は断面形が隅丸長方形で、関部はゆるくふくらむ台形関である。鏃身部片方の側縁に、有機質が付着している。茎は矢柄の木質がよく残存しており、口巻きには幅細扁平な紐状の有機物（樹皮か）を巻きつけている。残存長14.4cm、鏃身部の厚さ0.2cm、重量12.0ｇである。（２）は腸抉柳葉系で、鏃身部は片丸造である。横断面形で片側がゆるくレンズ状にふくらむ。ふくらから微妙なくびれをもって腸抉へつづく。頸部は断面形が隅丸長方形で、関部はゆるくふくらむ台形関である。鏃身部から頸部にかけて、木質様の有機物が付着している。茎は矢柄の木質がよく残存しており、口巻きは糸状の有機物で整然と糸巻きしている。残存長11.7cm、鏃身部の厚さ0.3cm、重量12.6ｇである。（３）は腸抉柳葉系で、鏃身部は片丸造である。横断面形で片側がレンズ状にふくらむ。頸部は断面形が隅丸長方形で、関部はゆるくふくらむ台形関である。茎は矢柄の木質がよく残存しており、口巻きには幅細扁平な紐状の有機物（樹皮か）を巻きつけている。残存長12.7cm、鏃身部の厚さ0.35cm、重量14.2ｇである。（４）は、鏃身部は平造である。ふくら最大が鏃身部中ほどにあり、そこからナデ関の鏃身関部にむかってすぼまる。頸部は断面形が隅丸長方形で、関部はゆるくふくらむ台形関である。鏃身か

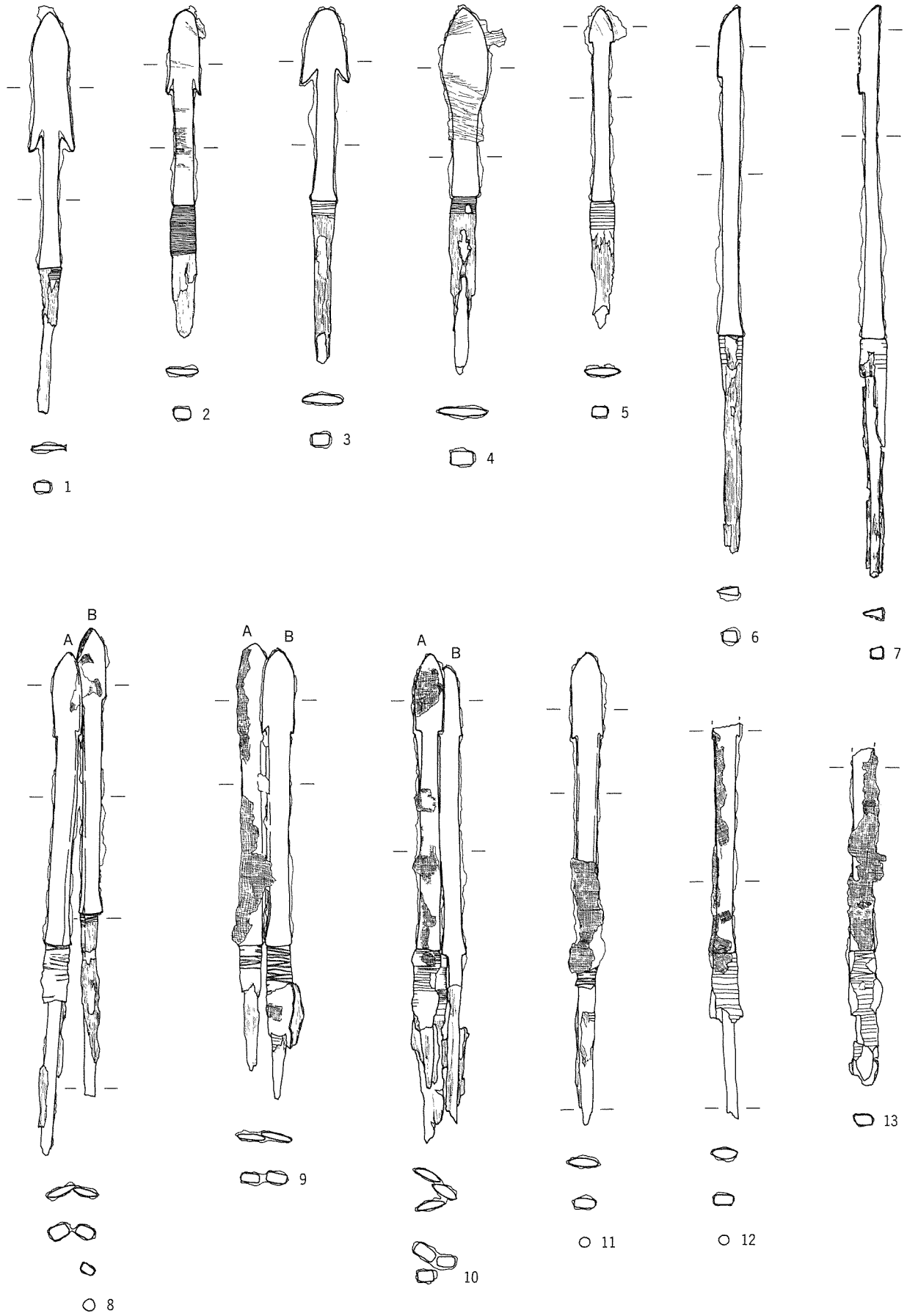


第９図　埋葬施設出土遺物(1)



1・2：第1主体部
3・4：第2主体部

第10図　埋葬施設出土遺物(2)



第11図　埋葬施設出土遺物(3)

ら鏃身関部にかけて、木質様の有機物が付着している。茎は矢柄の木質がよく残存しており、口巻きは糸状の有機物で糸巻きしている。残存長13.2cm、鏃身部の厚さ0.3cm、重量15.6ｇである。（５）は、鏃身部は平造である。鏃身関部は直角関である。頸部は断面形が隅丸長方形で、関部はゆるくふくらむ台形関である。鏃身部に、有機質が付着している。頸部は矢柄の木質が残存しており、口巻きには幅細扁平な紐状の有機物（樹皮か）を巻きつけている。残存長11.5cm、鏃身部の厚さ0.25cm、重量10.4ｇである。（６）・（７）は長頸の片刃箭式鏃である。（６）が残存長19.6cm、鏃身部の厚さ0.3cm、重量20.4ｇ、（７）が残存長20.6cm、鏃身部の厚さ0.4cm、重量21.0ｇをはかる。全長はほぼ同規格の鏃である。鏃身部の長さが異なり、また（６）の頸部は鏃身関部からほぼおなじ幅でゆるやかな台形関へ移行するが、（７）では鏃身関部では細く、しだいに太くしながらゆるやかな台形関へつづく。いずれも矢柄木質の遺存は比較的良好で、口巻きには幅細扁平な紐状の有機物（樹皮か）を巻きつけている。

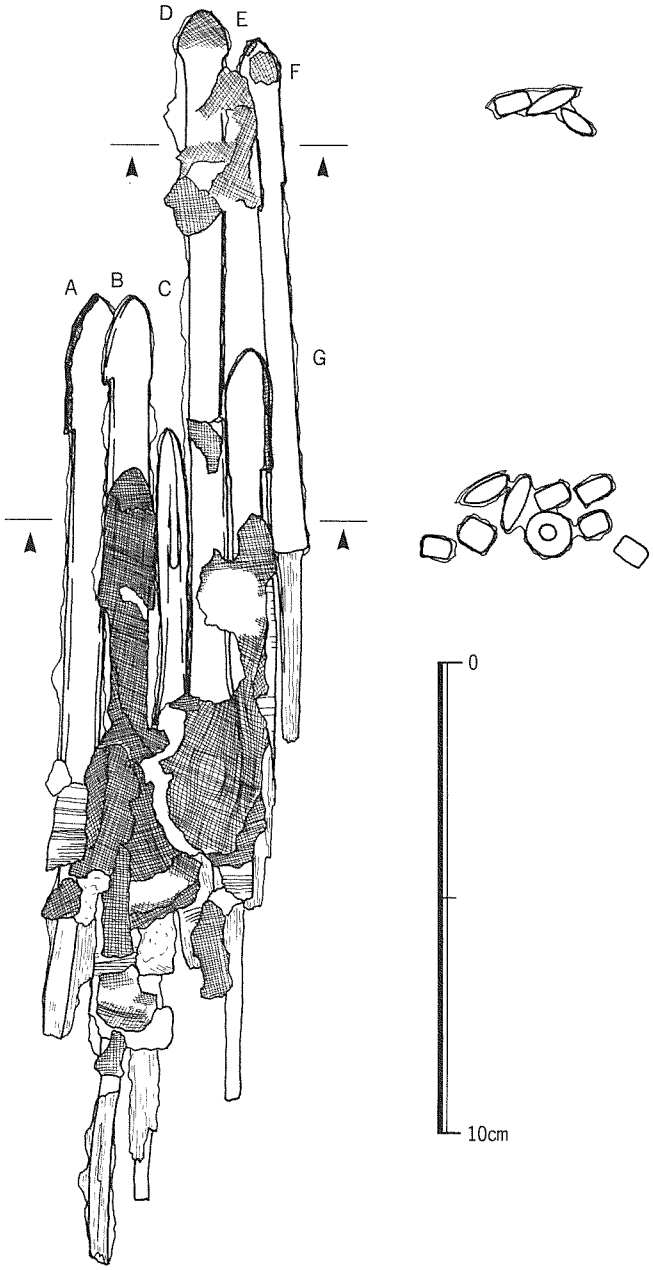
鹿角装刀子（第９図１）

残存総長15.3cm、刃部残存長6.1cm、柄部長8.9cmである。棟は直線的、刃部断面は三角形である。つよく反る鹿角製の柄を装着する。刃部には部分的に有機物製の鞘が残存しているが、肉眼では素材は不明である。

◆第２主体部

須恵器（第10図３・４）

第２主体部でも、やはり有蓋短頸壺が２組出土した。（３）は、蓋が口径12.3cm、器高5.3cmで、短頸壺は口径10.1cm、胴部最大径15.1cm、器高10.1cmである。蓋は、鈕が頸部からおおきく外反してたち、そのまま上部の縁へと移行していく。天井部は丸みが弱くなり、比較的扁平である。天井部の上半には回転ケズリをほどこすが、ほかの部分は内外面とも回転ナデ調整である。下半部は一条の沈線状の段をへて、口縁部と天井部



第12図　埋葬施設出土遺物(4)

の境にいたる。突線は明瞭であるが外方へたちあがらず、天井部の傾斜のまま移行してきたものである。口縁部はやや内弯ぎみに直立し、端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされているために外面もわずかに外反する。短頸壺は、最大径が胴部最上位にあって肩がつよく張っており、肩部上面は平坦にちかい。底は、平底風の丸底である。あきらかな扁球形で、平底風の丸底である。口縁部はやや内傾ぎみに直立し、端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされている。最大径部分にある一条の沈線から、下方へむかって羽状文・沈線の順でそれぞれ一周している。羽状文は、間隔が密で、刺突によるものではない。痕跡としては、複波状文起源で、轆轤回転をもちいるがほとんど上下動のないものと考えられる。内外面は回転ナデ調整で、胴部下半にのみ回転ケズリをほどこす。短頸壺の肩部にわずかな溶着痕がみられるが、蓋とは接合しない。この蓋と短頸壺のセット関係は焼成時からのものではなく、たがいに別個体由来のもののようである。

（4）は、蓋は口径12.1cm、器高5.0cmである。短頸壺が口径9.9cm、胴部最大径16.2cm、器高11.1cmである。蓋は、鈕が頸部からおおきく外反してたち、そのまま上部の縁へと移行する。天井部は丸みが弱くなり、比較的扁平である。天井部には突線部以外は回転ケズリをほどこし、ほかの部分は内外面回転ナデ調整である。下半部は一段下がって、口縁部と天井部の境にいたる。突線は明瞭であるが外方へたちあがらず、天井部の傾斜のまま移行してきたものである。口縁部は直立し、端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされている。内面は、この沈線状部分の直上が肥厚している。短頸壺は、最大径が胴部最上位にあって肩がつよく張り、肩部上面は平坦にちかい。底は、平底風の丸底である。口縁部はやや内傾ぎみに直立し、端部内面に沈線状をなすつよい回転ナデがほどこされている。内面は、この沈線状部分の直上が肥厚している。胴部最大径部分にある一条の沈線をはさんで、上方と下方へ、順に羽状文帯・沈線がほどこされている。羽状文は、ハケ目状工具の端部をもちいた刺突による。内外面は回転ナデ調整で、胴部下半にのみ回転ケズリをほどこす。胴部下半の一部に、別個体の須恵器片が溶着している。短頸壺の肩部にわずかな溶着痕がみられるが、蓋とは接合しない。短頸壺の肩部にみられるわずかな溶着痕は、蓋の口縁端部と接合し、蓋と短頸壺は焼成時からセット関係をみとめることができる。

鉄鏃（第11図８～13、第12図）

すべて長頸鏃である。（８）～(11) はいずれも長三角形式鏃身で、鏃身関部が直角関ないし腸抉状に短く斜めに切れ込む関で、頸部は断面形隅丸長方形で台形関とする。(12)・(13)は欠損しているが、長さや幅、断面形がほかと類似することなどから、同様の鏃とおもわれる。（８）はA・Bともに鏃身部片丸造で、鏃身関部が直角関、茎に矢柄木質が残存している。Aは口巻きに糸状の有機物で雑然と糸巻きしている。Bは鏃身部に布の痕跡がみとめられる。矢柄の残存状況は悪いが、残る痕跡からは口巻きを幅狭に糸巻きしていたとおもわれる。残存長18.0cm（A）・16.8cm（B）、鏃身部の厚さ約0.3cmである。（９）はA・Bともに鏃身部平造、鏃身関部が短小な腸抉で、茎に矢柄木質が残存している。ともに口巻きに糸状の有機物で雑然と糸巻きしている。Aは鏃身部に布の痕跡が広範囲にみとめられる。(10) はA・Bのほか裏側にCが銹着している。Bのみ鏃身部両丸造で、A・Cは片丸造、鏃身関部が直角関、茎に矢柄木質が残存している。Aは口巻きを糸状の有機物で整然と糸巻きし、以下は幅狭扁平な有機物（樹皮か）で整然と巻いている。Cも口巻きに糸状の有機物で雑然と糸巻きしている。Bは遺存が悪く、矢柄の様子はうかがえな

い。Aは鏃身部や頸部に布の痕跡がみとめられる。残存長15.6cm、鏃身部の厚さ約0.3cmである。(11) は鏃身部片丸造で、鏃身関部が短小な腸抉状である。口巻きに糸状の有機物で雑然と糸巻きしている。頸部から関部にかけて布の痕跡がみとめられる。矢柄の残存状況は悪いが、口巻きを雑然と糸巻きしていたとおもわれる。残存長17.0cm、鏃身部の厚さ0.35cm、重量18.6gである。(12)は鏃身関部よりも上方を欠損する。鏃身関部は短小な腸抉状で、鏃身部両丸造とおもわれる。茎に矢柄木質が残存しており、口巻き以下、幅狭扁平な有機物（樹皮か）で整然と巻いている。鏃身関部から口巻きにかけて布の痕跡がみとめられる。残存長14.2cm、鏃身部の厚さ0.3cm、重量13.4gである。(13) は上部と茎下位を欠損している。口巻きを糸状の有機物で雑然と糸巻きし、以下は幅狭扁平な有機物（樹皮か）で整然と巻いている。頸部から関部にかけて布の痕跡がみとめられる。残存長12.2cm、重量13.8gである。(第12図)は9本の鉄鏃が銹着し、全面に布が付着している。いずれの鏃も上述の鏃と同様のものであるが、この鏃塊の裏側に銹着する鏃に、頸部関を棘状関とするものが1本みとめられる。出土時にはこの鏃塊は上述の鏃とかたまっており、これらの鉄鏃が、本来はすべて鏃を布巻きして副葬したものであったことがわかる。

鉄刀（第9図4）

残存長39.5cm、幅3.6cm、棟の厚さ1cmの直刀である。刀身部の断面形は三角形である。表面に木質が付着しており、木鞘におさめられていたと考えられる。欠損がいちじるしく、上下すら不明となっているが、若干幅が狭まることから、図の右側が切先方向の可能性がある。

刀子（第9図2）

残存長9.7cm、刃部長6.5cmである。棟は直線的、刃部断面は三角形で深さ約3mmの直角関をもつ。茎は後方を欠損している。茎には木質が残存しており、木目の方向から、直線的な柄が装着されていただろう。関部には鎹状の柄残欠がわずかにみとめられる。

鉄針（第9図3）

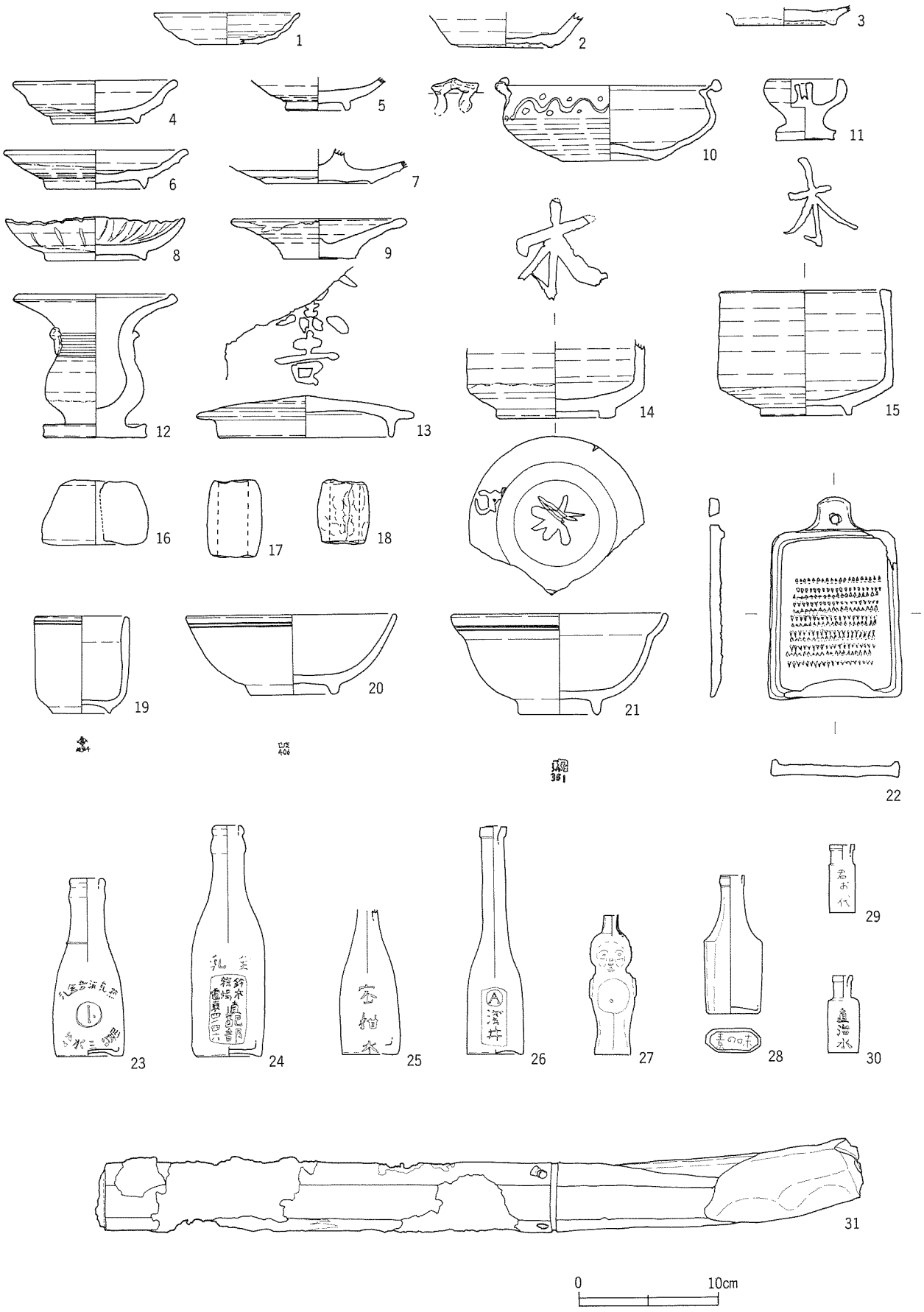
有蓋短頸壺（第10図3）内から出土した。上部を欠損しているが、残存長3.2cm、太さ0.1cmである。断面形は円形である。全面的に布目状の有機物がみとめられる。

3　古代～中世の遺構と遺物

墳丘盛土下には熱田層上位面の黒色土が良好に残っていたが、遺構は検出できなかった。

古墳以外の遺構はなく、いずれも表土層や古墳築造以前の遺物包含層、墳丘盛土層から遺物がわずかに出土したのみである。須恵器蓋の小片は、鈕部および口縁端を欠損するものである。土師器（弥生土器）は、第1主体部北東部地山直上、第1主体部南方盛土中、第2主体部須恵器壺直上から出土している。いずれも小片のため時期は不明である。

中世以降の遺物には、山茶碗、大窯期の陶器などがある。第2主体部南方表土層より、大窯期の擂鉢小片が出土している。北東部防空壕天井部が崩落した熱田層黒色土上位面からは、陶器瓶類体部片、山茶碗・碗、甕片、土師器皿が出土した（図版9-1）。本来は標高約15.4m附近にあったものが、落盤により標高



第13図　中世以降の遺物

約13.9mで検出されたものである。山茶碗（1－1）は淡褐色を呈する。復元口径約14.4cm、器高約4.9cmをはかる。瓶類は体部下半部の一部分で、口縁部、底部を欠損する。白灰色を呈する（1－2）。土師器皿は底部に回転糸切り痕が残る(1－3)。1－4は、陶器の破片で茶灰色を呈する。このほか表土層出土品として山茶碗・碗がある（図版9－2、第13図1～3）。2－1は美濃系山茶碗で、内面に轆轤挽きの痕跡が明瞭につく。復元口径10.4cm、器高2.3cmを測る。生田2号窯式のものである。2－2は底部片で底径5.6cm、残存高2.6cmをはかる。2－3は底部片で底径7.2cmをはかる。

4　近世～近代の遺構と遺物

墳丘北端部の表土層から数点の陶器、瓦がまとまって出土した(図版9－3～4、第13図4～9)。3－1は菊皿で口縁部を工具で切り込みを入れている。3－4は、端反皿で内外面に灰釉がかかる。無文である。底部に煤の付着がみられる。4－1は、受け皿と芯立てとが接合される形式の灯明具である。鉄釉がほどこされる。輪禿皿（3－3）、志野丸皿（3－2）は、瀬戸本業焼（以下略）第3～4小期、菊皿は第5小期、片口鉢の体部片（4－2）は第5～6小期、擂鉢口縁部片（4－3）は第6～7小期である。実年代は、17世紀末～18世紀中葉頃のものとおもわれる。

表土層から出土した陶磁器には、碗、皿、焼成前に外面に「(窯）吉」と書かれた蓋（第13図13)、香炉、仏花瓶などがある。落とし蓋には、内面に「大吉」と墨書されているものがある。これら表土層出土の陶磁器は、近世以降集落地内にあり、藪地（空き地）に廃棄されたもののほか、近世絵図に塚として記載されていることからも、村人によって祭祀された時に使用された陶磁器がそのまま放置されたものもふくまれているとおもわれる。事実、土地所有者は、調査開始時まで毎月お神酒をあげていたそうである。

墳丘北裾には、複数の土坑が掘られていた(SK2、SK3)。SK2の埋土のうち、中層は地山が落盤して再堆積した土であり、墳丘北側裾部の地山を大きく掘り込んで地下室状に掘削したものの、崩落したものである。墳丘側では表土下からでも最大深約2.5mを測る。これらの穴は、埋没後、灰褐色砂や黄灰色砂質土で覆われ、さらに表土（腐食土）や燃やしてできた灰（黒色土）が堆積していた。表土層や黄灰色砂質土からは、瓦、陶磁器、ガラス瓶などがおおく出土した。SK3からも陶磁器が出土している。

土坑出土遺物は、下位層として、皿、蓋、鍋（図版9－5、第13図10)、仏花瓶、秉燭、灯明皿（受皿)、灯明皿（油皿）(図版9－6)、碗、ひだ皿、皿（図版9－7）がある。鍋は幕末～明治頃のものである（5－1)。皿は飴釉がかかり、第5小期のものである（5－2)。仏花瓶は、頸部に5条の沈線がめぐり2個の耳が貼りつけられている。全高10.3cmである。下位は鉄釉、上位は緑釉をかけ分けしている(6－1、第13図12)。6－2は秉燭（第13図11)、6－3は灯明皿（受皿)、6－4は灯明皿（油皿）である。ひだ皿は磁器で内面に海老が描かれる。釘書きで「三十」とある（7－3)。最下位層のものには、広東碗、筒型碗、把手付碗がある（図版9－8)。このほかに墨書のある香炉が出土している（図版10－1)。いずれも器形は同じもので、外面に灰釉系の釉薬がほどこされる。1は見込みに「木」とある。土坑3層出土（第13図15)。2は見込みに「木」、高台内に「木」、外面腰部に「□」とある。茶褐色土出土（第13図14)。3は見込みに「(木)」、高台内に「木」、外面腰部に「□□」とある（表土層出土)。

このほかに陶製円盤、土錘（2点)、紡錘車がある（図版10－2、第13図16～18)。陶製円盤は、天目碗の高台部を残し、体部を打ち欠いている(2－1)。土錘は、2－4は長さ5.5cm、孔径1.9cm、重さ77.5gであ

る。2－3は、長さ4.4cm、孔径1.6cm、重さ52.5gである。紡錘車は、土製で器高4.7cm、孔径0.8cmを測る。少し欠損している。現重量は266gである（2－2）。土錘、紡錘車は近世以前の可能性もある。

昭和戦前期の統制品も表土層から出土している。陶磁器工業整備要綱により1942年から企業整備がおこなわれ、企業に番号が付与され、製品には生産者別標示記号の記載が義務化された。図版10－4は、水鉢で底部にスタンプで「瀬233」とある。図版10－6・7は国民食器とよばれ、コバルトで口縁部に2本ラインが入れられている。6－1（第13図21）は、陽刻で「瀬351」、6－2（第13図20）は「岐406」とある。「岐406」の製造者は、岐阜県土岐市土岐口の高橋利一である。7－1は高台内に「明治陶器」、7－2は「日の出　□」、7－3は「岐464」、製造者は土岐市土岐口の林徹三である。7－4（第13図19）は「泉　岐364」で製造者は土岐市泉町定林寺の澤田周一である。7－5は貝印、7－6は「倉陶」（大倉陶園　1919年～現在）とある。6は外面に朱で「瑞積□」と書かれている。また、おろし金（図版10－3－1、第13図22）は、金属製品の磁器製代用品である。歯ブラシ（3－2）は「㊋　14號」の記号が陰刻される（公は、「公定価格」の略号。1940年以降につけられる）。このほかにコンセントの代用品がある。

ガラス瓶は、飲料水、調理用品、化粧品、医薬品、文房具など57点ある。飲料用は、「Fresh Drinks」のエンボス文字のあるジュース瓶（5点）、同じく「National Drinks」（1点）などがあるが、戦後のものであろう。こうしたジュースが普及するまでの飲み物には、みかん水があった。瓶口が長くなっているのは、中身が出にくいようにした工夫である。口もとが欠損するもので「密柑水」とあるものが1点ある（第13図25）。図版10－5－2のひょうたん形の瓶は、ニッキ水の瓶であろう。キューピー人形形（図版10－5－1、第13図27）のものもこの種であろうか。全高9.7cmをはかる。

調理用品では、底面に「味の素」とあるバチ形の瓶（第13図28）、瓶底に「AICHI TOMATO CO. 会社印（星印）」があるもの、「星印」のみのものがある。トマト加工品のものとおもわれる。文房具はインク瓶（3点）、糊（1点）がある。殺虫剤の瓶は、エンボス文字で「専賣特許　インピレス　人畜無害　蠅必立死」瓶底に「NKK ㋭　12」とある。

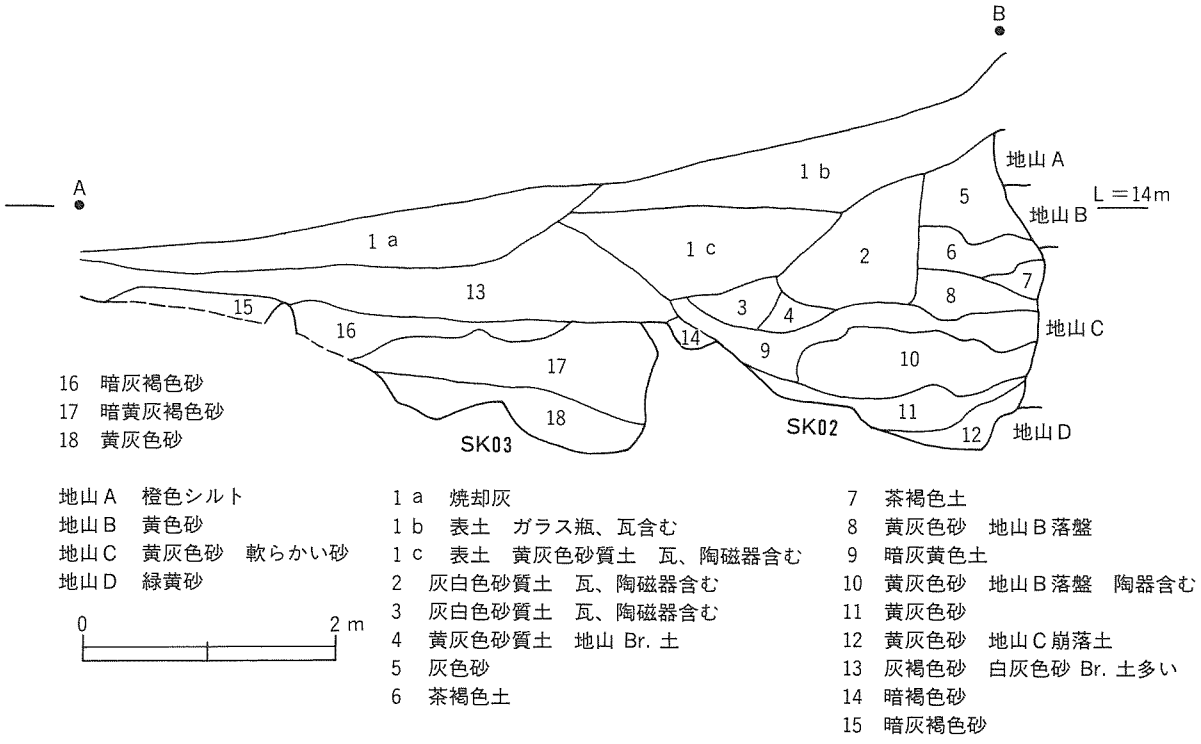
図版10－8－1～4は、牛乳瓶である。1は、口縁部を欠損する。エンボス文字で「全乳　梅林　眞乳社電南五三八」「高温殺菌　○・九竕入」とある。無色透明で気泡わずかにふくむ。2（第13図24）は、全高16.4cmである。エンボス文字で「全乳　鈴木牧場　直配部　電東四一四六」「非賣壜　一、八竕入」とある。瓶内底に黒色に変色した有機物が付着する。無色透明で気泡わずかにふくむ。3（第13図23）は全高12.6cmで、「蒸気消毒全乳　㋕　堀部三□□」「電話南三貳四九番」とある。無色透明で気泡わずかにふくむ。4は、全体に淡緑色、透明で、「全乳」「180cc」底部に「Ⓐ」とある。戦後のものであろう。全高14.2cmである。

5～10は、みかん水の瓶である。5は全高17.1cmをはかる。口もと近くに歪がある。「登録商標　㋡　塚本」「非賣壜」とある。気泡がおおくふくまれる。6は「器非賣品」、全高16.1cm。7（第13図26）は「Ⓐ淺井」「容器非賣品」とある。全高16.2cm。8は「同業組合」とある。全高15.6cmである。9、10は文字がない。5～10は、いずれも淡い青緑色を呈し、気泡をふくむ。昭和戦前期～昭和20年代とおもわれる。

図版10－9は、医薬品の瓶である。1は全高11.1cmを測る。瓶肩に「OXYFULL オキシフル」とある。2は「伊藤醫院」とある。全高13.6cmである。3（第13図30）は「直治水　大阪　丹平商會」、4（第13図29）は「君が代」とある。5～9は昭和6年に開発された両口式点眼瓶である。5は「EYE　LOTION

ROHTO」「S17」、6は「EYE WATER ROHTO」、全長8.4cmである。7は「点眼グリル FUKUI」、8は「SANTENDO DAIGAKU EYE LOTION」、9は「KBK TOKYO」とある。全長10.5cm。小型の瓶は7点ある（図版10-9）。

墳丘に焼夷弾が突き刺さった状態で出土した。上端は重機の掘削の際、潰れてしまったがほぼ完形品である（図版4）。種類はテルミット・マグネシウム焼夷弾である（第13図31）。全長54.3cm、断面形は六角形で一辺2.5cm、直径4.2cmである。弾頭部は錘で長さ4.8cm、本体部は27.1cmをはかる。尾部は軽金属で中空となり、安定装置の役目をもつ。長さ22.4cmをはかる。現存重量約1.64kgである。AN-M50四ポンドI.B.（焼夷爆弾）とおもわれる。この焼夷弾が落とされた空襲の時期は、あきらかでないが、瑞穂区で最も被害の大きかったのは、1945（昭和20）年5月17日のもので、付近の津賀田神社が被災している。



第14図　墳丘北側土坑断面図

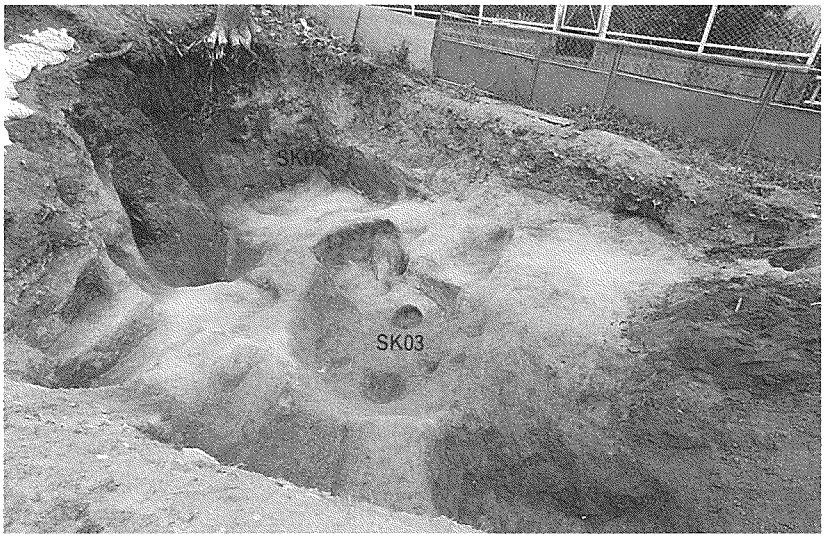


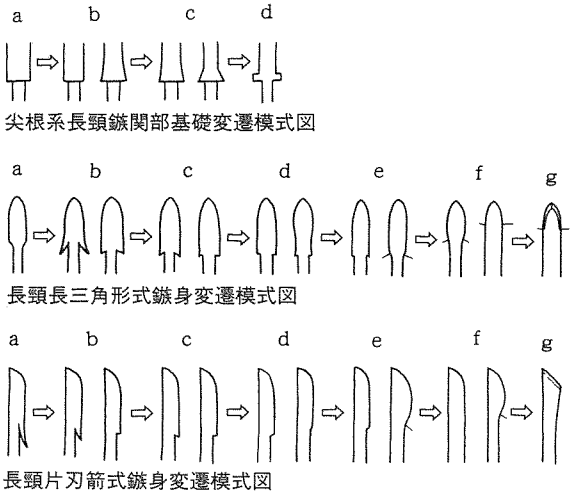
写真5　墳丘北側土坑

Ⅳ　後論

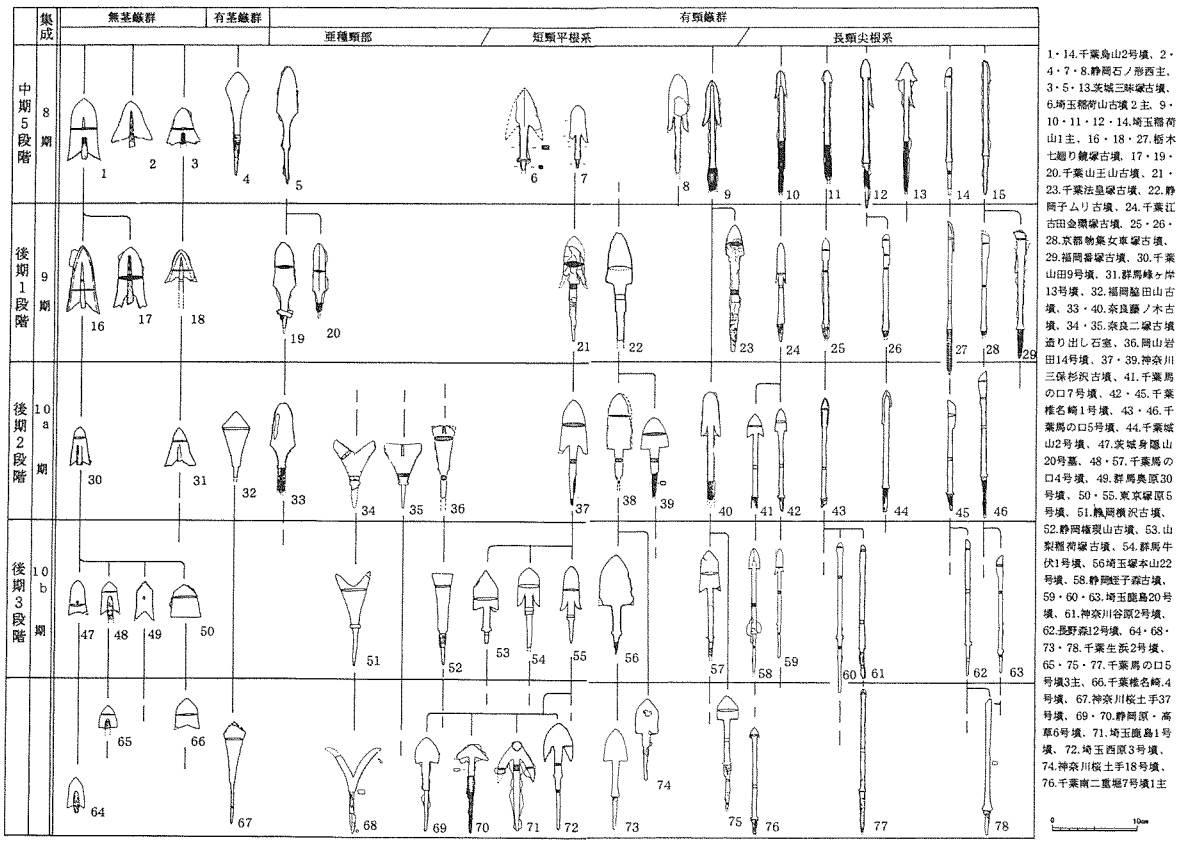
ここまでの内容と重複する点も多少あるが、以上の調査成果をふまえて、まとめとして若干の考察をしておきたい。なお、鉄鏃については、水野敏典の古墳時代後期鉄鏃編年（水野2003）が、東北・関東を中心としつつ中部・東海にも配慮したものとなっており、変遷過程の説明も簡明であるため、これをもちいることとする（第15・16図）。

副葬品の編年観　本墳では、第１主体部、第２主体部で、それぞれ２組の有蓋短頸壺が出土している。それらの特徴はすでにのべたとおりだが、観察所見にもとづけば、いずれの須恵器も東山（猿投）窯産である。第１主体部の須恵器はH10号窯式期、第２主体部の須恵器はH61号窯式期と考えられよう。

鉄鏃は、第１主体部では２本の片刃鏃が規格的な様相をしめすが、それ以外の５本は短頸鏃で、それぞれ形態が異なり、セットとしてはバラエティがある。これにたいし、第２主体部では鏃身関部の形態に若干の差異があるものの、ほとんどすべてがほぼ同じ長さ、同じ形態の鉄鏃であり、規格性のつよい一群であるといえる。第１主体部とくらべて、片刃鏃を１本もふくまず、また１本だけではあるが棘状関をもつものがあ



第15図　鉄鏃の形態的変遷模式図（水野2003より）



第16図　古墳時代後期東日本における古墳出土鉄鏃編年（水野2003より）

るという鉄鏃の組成差をみとめることができる。棘状関は、型式的には長頸鏃としてもっとも後出的な要素と考えられており、本墳第２主体部の構築時期を示唆する。(第14図)は、鉄鏃の関部および鏃身部の変遷を模式的にしめしたもの（水野2003）である。これによれば、第１主体部の鉄鏃は、鏃身部の形態は片刃鏃がｃ段階、そのほかはｂ～ｃ段階にあり、関部形態ではｃ段階と考えるのが妥当とおもわれる。第２主体部の鉄鏃は、鏃身部がｃ～ｄ段階、関部形態は１本のみがｄ段階で、それ以外すべてがｃ段階とおもわれる。したがって、鉄鏃については、第１主体部が水野編年（第15図）の後期１段階、なかでも古相の側にややちかく、第２主体部は同編年後期１段階でもより２段階にちかい新相の側に位置づけることができよう。水野編年の後期１段階は、須恵器との編年的関係ではおおよそ陶邑 MT15号窯式期～同 TK10号窯式期の時期幅と併行関係をもつものとされる。陶邑のこの型式と併行とされているのが猿投東山古窯址群のＨ10号窯式～Ｈ61号窯式期であるから、本墳で出土した鉄鏃と須恵器、および層位的にみた主体部の構築順序とは、編年的に矛盾しない。安易に暦年代に比定するのは適切ではないが、津賀田古墳は、第１主体部をともなって６世紀前葉に築造され、同じ前葉のなかでも中葉にちかい時期になって、第２主体部が構築されたと考えて大過あるまい。

墳丘について　墳丘の築成は、すでにのべたように、中央に第１次墳丘を築成して上面を平坦に整え、第１主体部を構築したのちに、その上方および周囲に盛土をおこなって第２次墳丘を築くという手法をもちいている。大阪府岡古墳（藤井寺市教委1989)、長野県新井原12号墳（長野県史1983）など中央に第１次墳丘を築きその上に盛土をほどこしていく例があり、本墳の築成工法もこれにちかいものとおもわれる。しかしながら、墳裾附近はどこも攪乱などによっていちじるしく破壊されていたため、墳丘中央とその周囲以外の築成工法をうかがうことはできない。豊田市三味線塚古墳（豊田市教委2001）や千葉県石神２号墳（千葉県文セ1977）などのように、中央の第１次墳丘だけでなく墳丘周縁に土堤状盛土をめぐらせる例が存在するため、本墳についても、本来の墳丘周縁の状況によってはこうした工法であった可能性を排除できない。

名古屋台地における津賀田古墳　名古屋台地では、各時期、ある一地域にのみ首長墳が築造されて中小墳もその周囲に分布する傾向がつよく、そのほかの地域では少数をのぞき古墳の築造があまりみとめられない。しかしながら断夫山古墳の築造以後、急速に古墳築造が活発化し、名古屋台地上各地域ではおもに中小墳がおおくみとめられるようになる。尾張大首長が出現し地域政権が形成されるなかで、名古屋台地上の各地域集団との統合・統制がはかられたのであろう。なかでも、瑞穂台地を核とする集団は活動が盛んであったようである。瑞穂台地は、弥生時代には瑞穂遺跡という拠点的な環濠集落をいとなみ、古墳時代前期末～中期初頭にかけては、八高古墳や高田古墳などが築造されて名古屋台地上で各期に一基という首長墳を擁したことのある地域である。古墳時代後期になると、津賀田古墳だけでなく、おつくり山古墳はじめ「井戸田の七塚」、瑞穂古墳群などが台地南端部に築造される。おつくり山古墳の副葬品の組合せ（本報告Ｉ－２を参照)は、大須二子山古墳の副葬品の様相と通ずるところがあって時期的にもちかいとおもわれ、両者は階層的な関係でむすばれる可能性がある。これらの古墳を築造した集団がかつての瑞穂遺跡あるいは八高古墳などをいとなんだ集団と同じであるかどうかは措くべきところだが、ともあれ瑞穂台地の特性にかかわる集団であることは容易に想像される。

瑞穂台地の古墳がその台地南端部に集中するのは、おそらくその地理的特徴におおきな一要因があろう。

本報告Ⅰ-1でものべたように、瑞穂台地の南端部は、山崎川の氾濫原とあゆち潟とによって形成される比較的広い低地と干潟にのぞむ。しかも、あゆち潟をはさんで対岸である熱田台地南半部は目の前である。可耕地としても、交通・交易の拠点としても重要視されたであろう。さらに、瑞穂台地の古墳時代中期後半以降の古墳分布は、山崎川に面した両岸に点々とみとめられる。東山古窯址群が山崎川上流の谷に展開してきたことを考えれば、山崎川河口に面した瑞穂台地南端部は、そこで焼かれた須恵器の運搬においてきわめて重要な地点であったと考えられよう。

このような背景を一因として、瑞穂台地南端部の古墳群にかかわる集団は、熱田台地から那古野台地に展開する尾張大首長の核集団とむすびつき、階層的な古墳群を形成した可能性がある。津賀田古墳は、すでに尾張ないし名古屋台地でも横穴式石室が導入されている時期にあって、木棺直葬という埋葬施設を採用する。その埋葬施設に須恵器をもちこむ現象は、横穴式石室導入と連動した、あらたな葬送観念を認識している。同一墳丘に第2主体部をもうけて追葬していることを考えれば、この時期としては横穴式石室を導入できる位置づけではなかったということであろうか。あるいは、おつくり山古墳が粘土槨であったということから、竪穴系の埋葬施設をもちいる伝統的な色彩であろうか。

いずれにせよ、津賀田古墳には、上述のような性格をうかがえる瑞穂台地南端部の古墳群中にあって、尾張の首長権を末端でになった被葬者像を推測できそうである。本墳のみであきらかにしうる問題ではないが、今後中小古墳から地域首長権を考えるための好資料といえよう。

引用・参考文献

犬塚康博 1998「第四章　古墳時代」『新修　名古屋市史』1、新修名古屋市史編集委員会編

奥住喜住 1988『中小都市空襲』三省堂

小栗鐵次郎 1929「井戸田おつくり山古墳」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第七、愛知県

岸山弘 1994「瑞穂の古墳」『瑞穂区誌』瑞穂区制施行50周年記念事業実行委員会編

木村有作編 1998『特別展図録　発掘された名古屋の五世紀』名古屋市見晴台考古資料館

小島一夫 1991「八高古墳」『愛知県埋蔵文化財情報6　平成元年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター・愛知県教育委員会編

庄司太一 1997『びんだま飛ばそ』1997年、パルコ出版

瀬戸市埋蔵文化財センター編 2002『江戸時代の瀬戸窯』

田口昭二 1983『美濃焼』ニュー・サイエンス社

千葉県文化財センター 1977『東寺山石神遺跡』

土岐津町誌編纂委員会編 1998『土岐津町誌　史料編』

豊田市教育委員会 2001『三味線塚古墳』

長野県史刊行会 1983「新井原12号墳」『長野県史』考古資料編

樋口吉文 1997「古墳築造考」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会

藤井康隆 2001「名古屋台地古墳時代の基礎資料(1)―八高古墳の埴輪―」『名古屋市見晴台考古資料館　研究紀要』第3号、名古屋市見晴台考古資料館

藤井寺市教委 1989『岡古墳』

水野敏典 2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』《第8回東北・関東前方後円墳研究会大会発表　要旨資料》東北・関東前方後円墳研究会

瑞穂区制施行50周年記念事業実行委員会編 1994『瑞穂区誌』名古屋市瑞穂区役所

三渡俊一郎 1981『熱田・瑞穂区の考古遺跡』《文化財叢書81》名古屋市教育委員会

『空襲の記録』1975年、中日新聞本社

V　津賀田古墳出土須恵器内残留物の検討

藤根　久・古橋美智子（パレオ・ラボ）

1　はじめに

津賀田古墳は、瑞穂区津賀田町二丁目地内に所在する6世紀前半頃の古墳である。調査では、第1主体部および第2主体部から須恵器や刀子あるいは鉄鏃などが出土した。このうち須恵器（蓋付短頸壺）は、第1主体部と第2主体部からそれぞれ2個づつ隣接して、蓋が被さった状態で出土した。さらに、これら須恵器の蓋付短頸壺内には、砂質土のような内容物が入っていた。

ここでは、この内容物について、顕微鏡観察や蛍光X線分析などの検討を行なった。なお、第1主体部からは、赤色顔料塊が出土したため、蛍光X線分析計による定性分析を行なった。

2　試料と方法

検討した試料は、第1主体部と第2主体部から出土した須恵器の蓋付短頸壺各2個体内から採取した砂質土である（第1表）。検討方法は、a）薄片あるいは水溶きプレパラートによる顕微鏡観察、b）蛍光X線分析、c）X線回折分析である。

試料	出土位置	遺　物	内容物	その他の特徴	分　析　内　容
1	第1主体部	蓋付短頸壺 No.1	砂質土	内容物少量	水溶き観察・蛍光X線・X線回折
2	第1主体部	蓋付短頸壺 No.2	砂質土	内容物少量	水溶き観察・蛍光X線・X線回折
3	第2主体部	蓋付短頸壺　西	砂質土	内部充塡	薄片観察・蛍光X線・X線回折
4	第2主体部	蓋付短頸壺　東	砂質土	内部充塡	薄片観察・蛍光X線・X線回折
5	第1主体部		赤色顔料		蛍光X線分析

附表1　検討を行なった試料

a）薄片あるいは水溶きプレパラートによる顕微鏡観察

第1主体部の蓋付短頸壺内容物2試料は、試料の一部を水に溶いて水浸プレパラートを作成し、偏光顕微鏡で観察した。また、第2主体部の蓋付短頸壺内容物2試料は、ブロックで取り出した後、粘性の低いエポキシ系接着剤を含浸し、土器薄片と同様の方法で薄片を作成し、偏光顕微鏡観察を行なった。なお、この薄片は、画像処理装置（住友金属工業㈱製 Personal Imageviser）を用いて2値化し、出土状態における内容物の粒子密度を調べた。

b）蛍光X線分析

壺内容物は、セラミック乳鉢で粉末化し、マイラー容器に入れて測定用試料とした。また、赤色顔料は、一部を指圧でつぶしセロハンテープを押し付けて測定用試料とした。

測定は、セイコー電子工業㈱製卓上型蛍光X線分析計 SEA-2001Lで行なった。X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器は Si（Li）半導体検出器である。測定条件

は、測定時間500秒、照射径10㎜、電流6μA、電圧50kV、試料室内は真空である。

c）X線回折分析

蛍光X線分析に用いた同様の粉末試料を底付形試料板に移し、ガラス板で軽く押しつけ平坦面を作り、測定用試料とした。測定は、㈱リガク製デスクトップ型X線回折装置 Mini Flex で行なった。測定条件は、電圧30kV、電流15mA、Cu-X線管、走査範囲5°～100°について計数時間1.0sec・ステップ幅0.02°の FT 測定を行なった。

3　結果

a）薄片あるいは水溶きプレパラートによる顕微鏡観察

［第1主体部蓋付短頸壺 No.1内容物］

7.5YR4/2　灰褐色の土塊を含む土。細粒部の顕微鏡観察では細粒石英あるいは長石が多く、ガラスも見られた。植物珪酸体化石が見られるが、水成を示す珪藻化石や花粉化石などは含まれていない。

［第1主体部蓋付短頸壺 No.2内容物］

7.5YR5/3　にぶい褐色の団粒状土。最大粒径φ3㎜。細粒部の顕微鏡観察では細粒石英あるいは長石が多く、ガラスも見られた。植物珪酸体化石も見られるが、水成を示す珪藻化石や花粉化石などは含まれていない。

［第2主体部蓋付短頸壺　西内容物］

7.5YR4/2　灰褐色の集塊土。白色および赤色粒子を含む。構成物の最大粒径φ2㎜。薄片観察では、鉱物類は、粒度φ120～400ミクロン、最大粒径φ1.0㎜の鉱物・岩石類からなる。石英や長石類が多く、火山岩類、堆積岩類の岩石片のほか、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、雲母類などの鉱物類、植物珪酸体化石が見られた。これら鉱物類や岩石片の周囲には黄褐色～淡黄色の粘土質物が付着し、空隙率の高い状態で接している。画像処理による粒子密度は、約44.95％を示す。

［第2主体部蓋付短頸壺　東内容物］

7.5YR4/2　灰褐色の集塊土。白色および赤色粒子を含む。構成物の最大粒径φ1㎜。薄片観察では、鉱物類は粒度φ80～600ミクロン、最大粒径φ1.0㎜の鉱物・岩石類からなる。石英や長石類が多く、火山岩類、堆積岩類の岩石片のほか、斜方輝石、雲母類などの鉱物類、植物珪酸体化石が見られた。第2主体部蓋付短頸壺・西内容物と同様、これら鉱物類や岩石片の周囲には黄褐色～淡黄色の粘土質物が付着し、空隙率の高い状態で接している。画像処理による粒子密度は、約48.08％を示す。

b）蛍光X線分析

いずれの試料も、主成分元素として、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) の各ピークが検出された。また、微量元素として、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) が検出された。

なお、1主体部から出土した赤色顔料は、蛍光X線分析計による定性分析から、高いピークの鉄が検出

されることからベンガラである（附図１）。

C）X線回折分析

いずれの試料も、石英（Quartz）の複数ピークが認められた。その他同定されない複数のピークが見られるものの、化合物の同定はできない。

4　考察

［壺内容物］

ここで検出された蓋付短頸壺は、いずれも蓋により閉じた状態で検出され、内容物は埋積後に混入した可能性は低いものと推定される。第１主体部と第２主体部では各２個体の壺は、内容物という点において対照的な出土状況を示している。第１主体部から出土した壺内容物は少ないものの、第２主体部から出土した壺内容物は、砂質土が壺一杯に充塡された状態であることから、埋納時の状態を示唆している可能性が高い。

これら内容物について、偏光顕微鏡による観察や機器による元素分析あるいは化合物の検討を行なったが、一般的な泥質堆積物と類似した特徴以外、これら内容物についての特徴を示す証拠は得られなかった。しかし、第２主体部から出土した壺内容物２試料は、空隙率の高い状態であることが分かった。これは砂粒自体は最大粒径１㎜程度の細粒物ではあるものの、沈降することなく圧密を受けない状態であることを意味する。すなわち、埋納時においてすでにこの状態であったことを示す可能性が高いことである。ただし、現時点では、砂粒以外の構成物の組成については不明であるが、この空隙には当時、かなり粘性のある有機系の物質が充塡されていたことが予想される。例えば、澱粉質や寒天質の練り物などが考えられる。

［赤色顔料］

第１主体部の赤色顔料は、蛍光X線分析によりベンガラである。従来、赤色顔料の種類として、水銀朱（HgS）、ベンガラ（Fe203など）、鉛丹（Pb304）などが知られている（たとえば、市毛1984）。

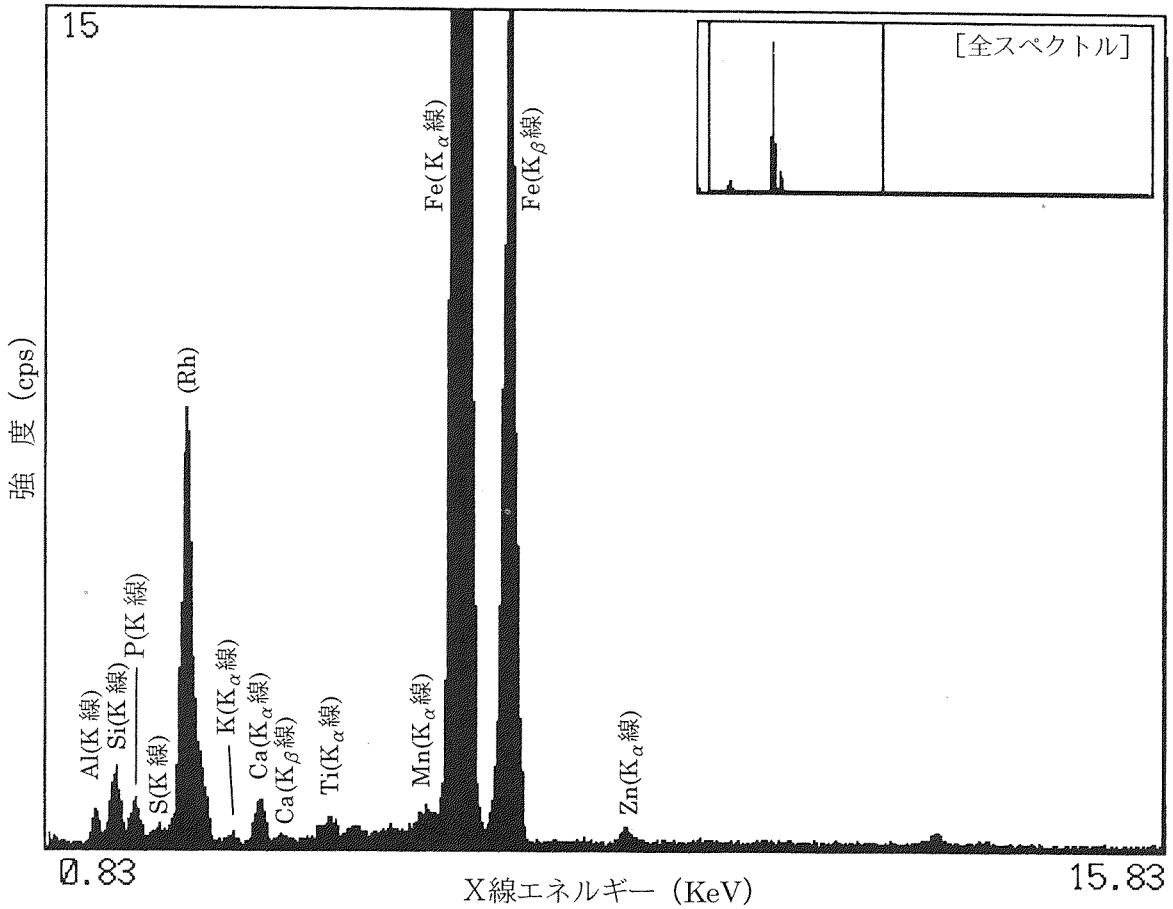
水銀朱は、主成分が硫化第二水銀（HgS）からなる辰砂（Cinnabar）から磨り潰して作られる。ベンガラは、赤色の由来となる主成分元素が鉄（Fe）であるものを総称していう。天然には、赤鉄鉱などの鉄鉱石やいわゆる赤土などを原料とする。あるいは、鉄分が多い土壌や褐鉄鉱、硫化鉄(磁硫鉄鉱：FeS、黄鉄鉱：FeS２）などを焼いたりするなど、種々の製法が考えられる（本田1995、北野1994など）。なお、イオウ（S）が若干検出されていることから、この赤色顔料は硫化鉄起源のベンガラである可能性が高い。

引用文献

市毛　勲 1984『増補　朱の考古学』第２版　考古学選書12、雄山閣出版　324p

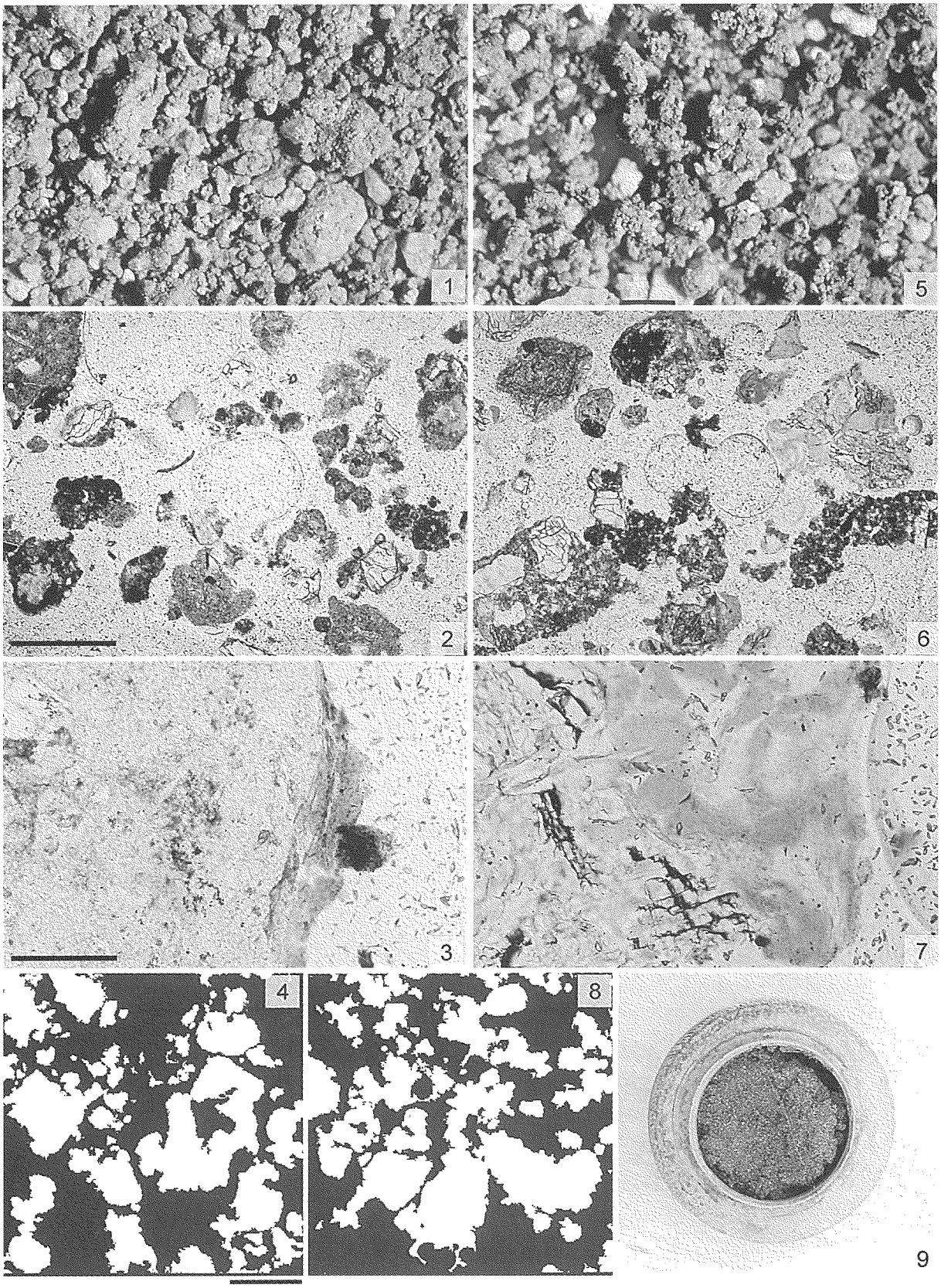
本田光子 1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』31・32、63-79p

北野信彦 1994「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点Ⅱ―文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について―」『古文化財の科学』39、93-102



附図１　第１主体部赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図

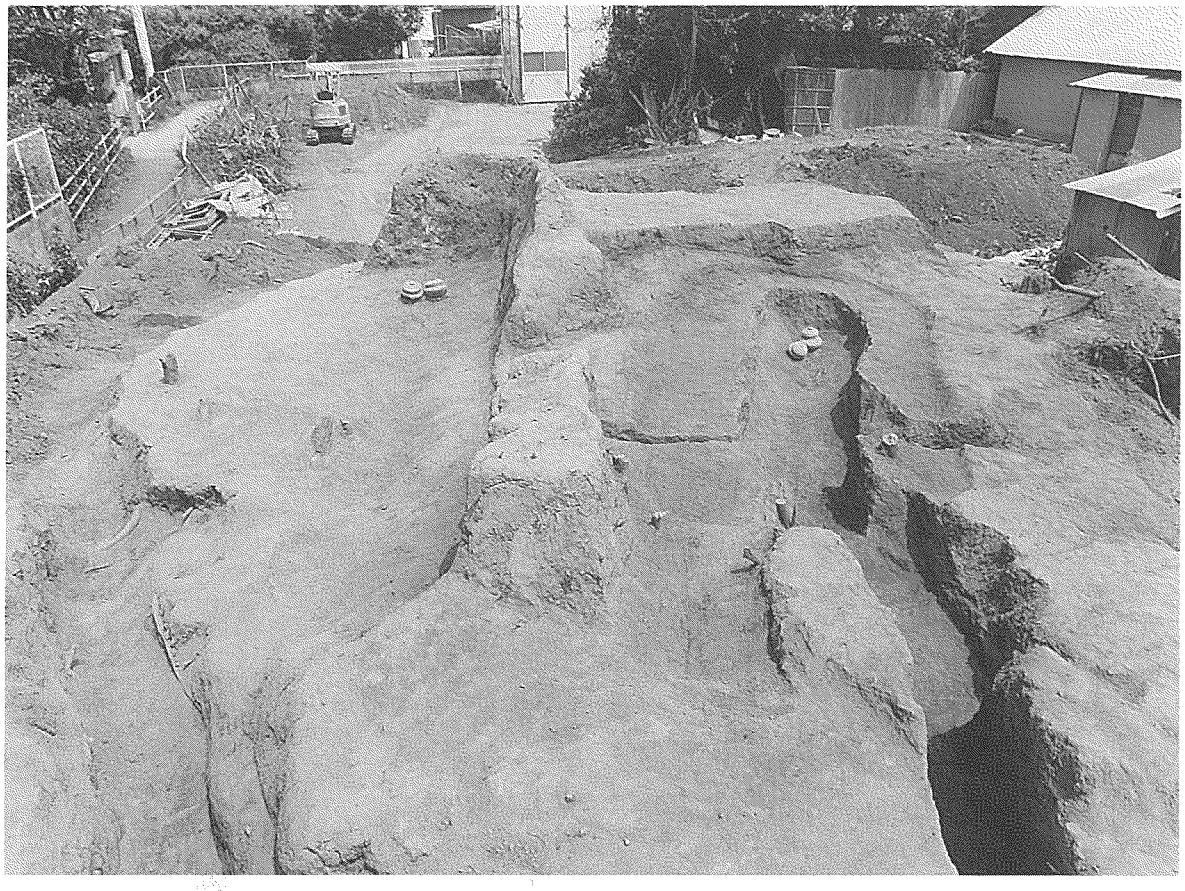
［元素記号］Al：アルミニウム、Si：ケイ素、P：リン、S：硫黄、K：カリウム、Ca：カルシウム、Ti：チタン、Mn：マンガン、Fe：鉄、Zn：亜鉛、(Rh)：ロジウム（Ｘ線管球ターゲットから）



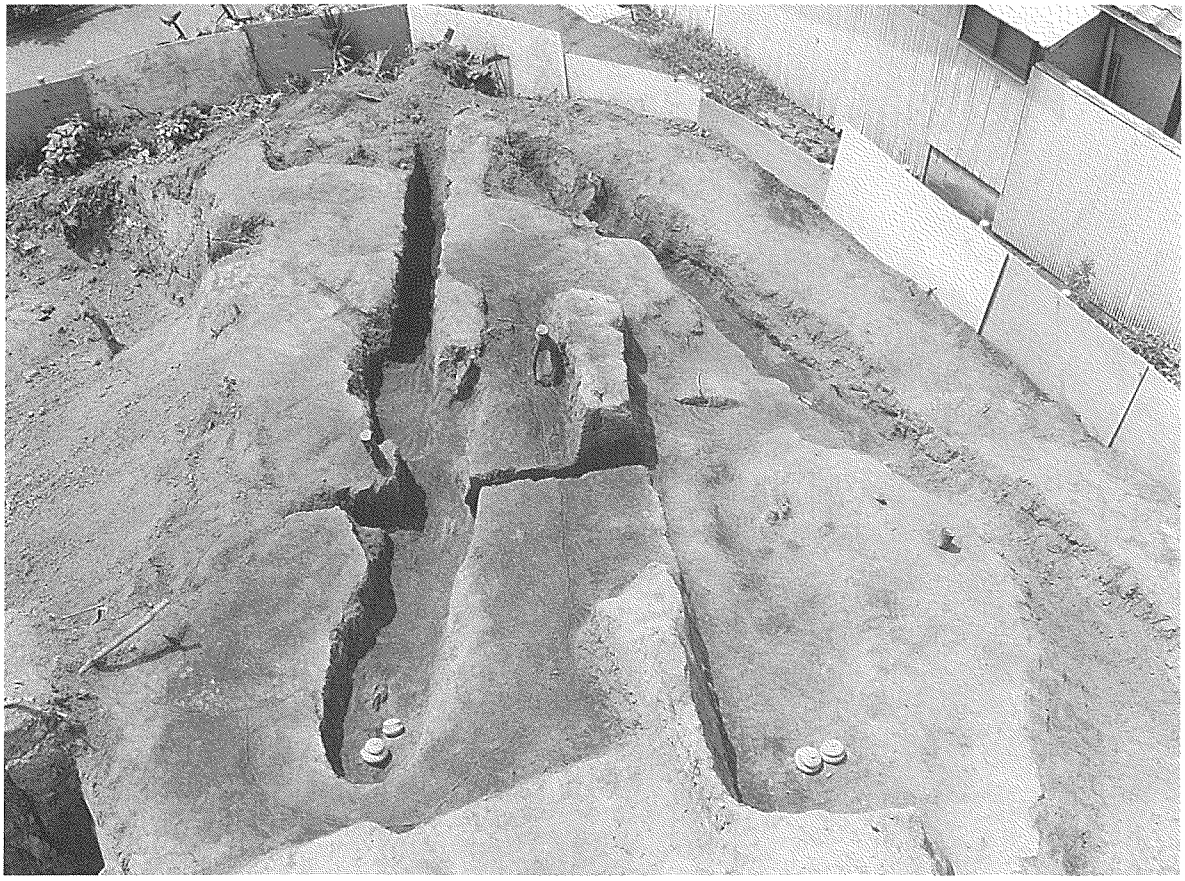
附図２　壺内容物の顕微鏡写真および二値化像

（スケール；No.1-5；1㎜、No.2-6；0.5㎜、No.3-7；0.1㎜、No.4-6；0.5㎜各共通）

１．第２主体部、西、内容物（実体顕微鏡）　２．第２主体部、西、内容物薄片（偏光顕微鏡）　３．第２主体部、西、内容物薄片（偏光顕微鏡）　４．第２主体部、西、内容物薄片（二値化像）　５．第２主体部、東、内容物（実体顕微鏡）　６．第２主体部、東、内容物薄片（偏光顕微鏡）　７．第２主体部、東、内容物薄片（偏光顕微鏡）　８．第２主体部、東、内容物薄片（二値化像）　９．第２主体部、東、内容物出土状況

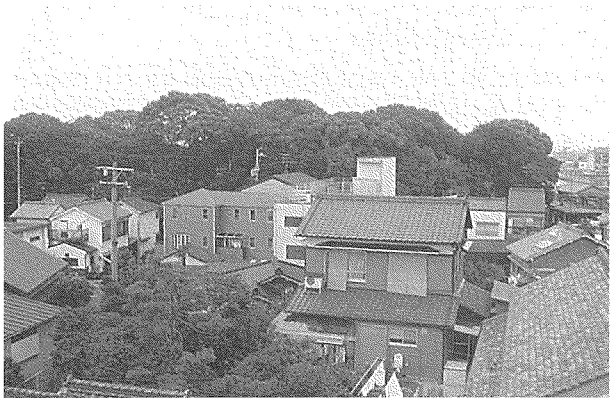


津賀田古葬埋蔵施設全景（南より）



津賀田古墳埋葬施設全景（北より）

図版2

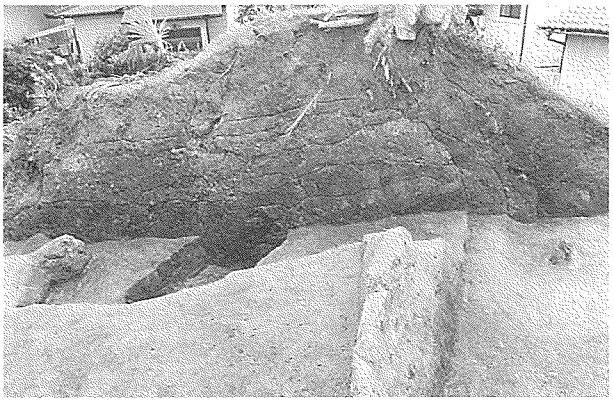


津賀田古墳上空より西方津賀田神社をのぞむ

津賀田古墳上空より南をのぞむ

調査直前の津賀田古墳（南西より）

調査直前の津賀田古墳（北より）



墳丘土層断面（①壁北面上半）

墳丘土層断面（①壁北面下半）

墳丘土層断面（③壁東面南半）

墳丘土層断面（③壁東面北半）

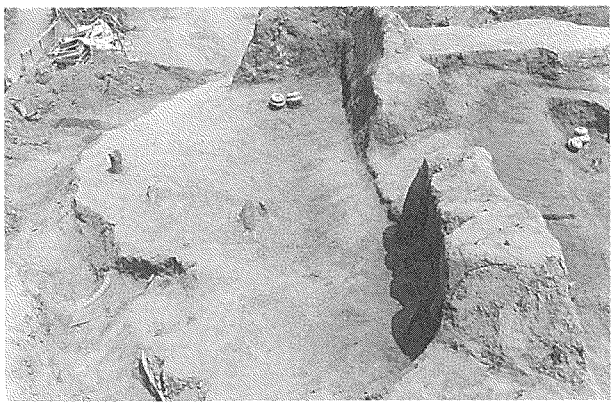
④壁西面北部の土層堆積状況

第２主体部の掘り方と須恵器

第２主体部須恵器出土状況

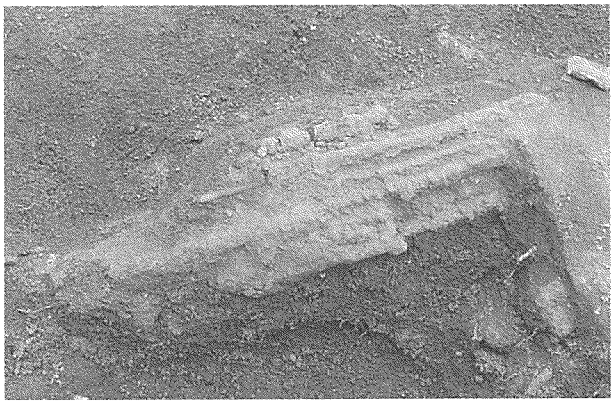
第１主体部須恵器出土状況

第１主体部



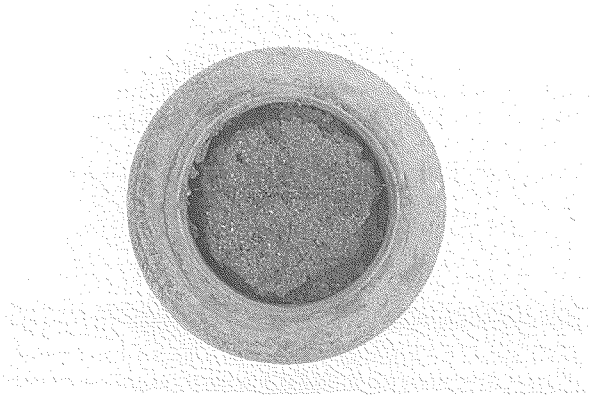
第２主体部

第１主体部鉄鏃出土状況

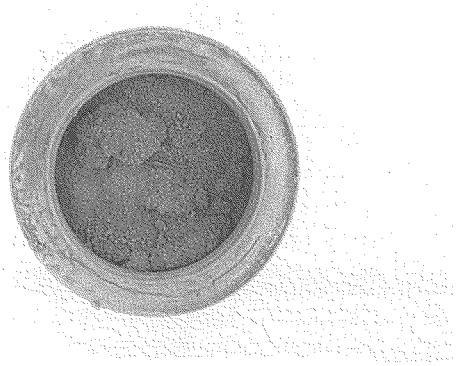


第２主体部鉄鏃出土状況

図版4



須恵器短頸壺（第10図１）の内容物



須恵器短頸壺（第10図３）の内容物

調査終了時の墳丘（北より）

調査終了時の墳丘（北西より）

焼夷弾出土状況

焼夷弾

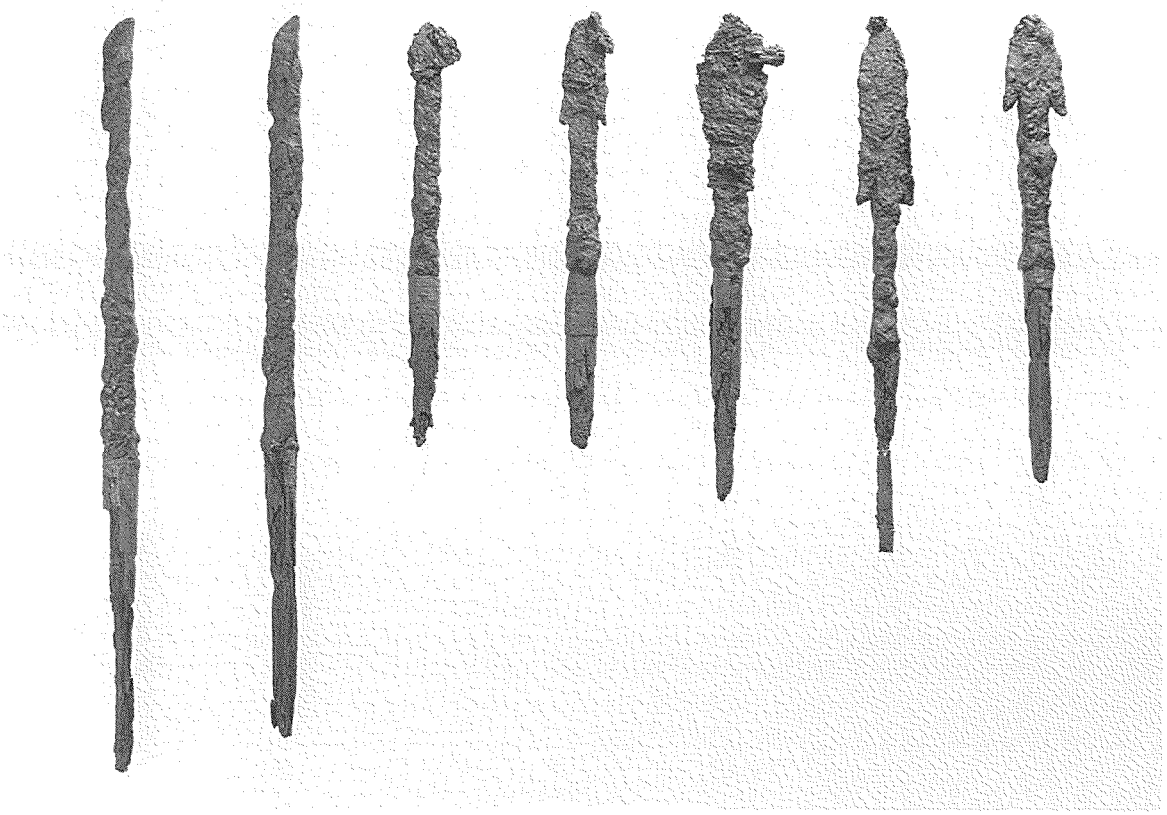
墳丘削平後の状況（北より）

墳丘削平後の状況（南東より）

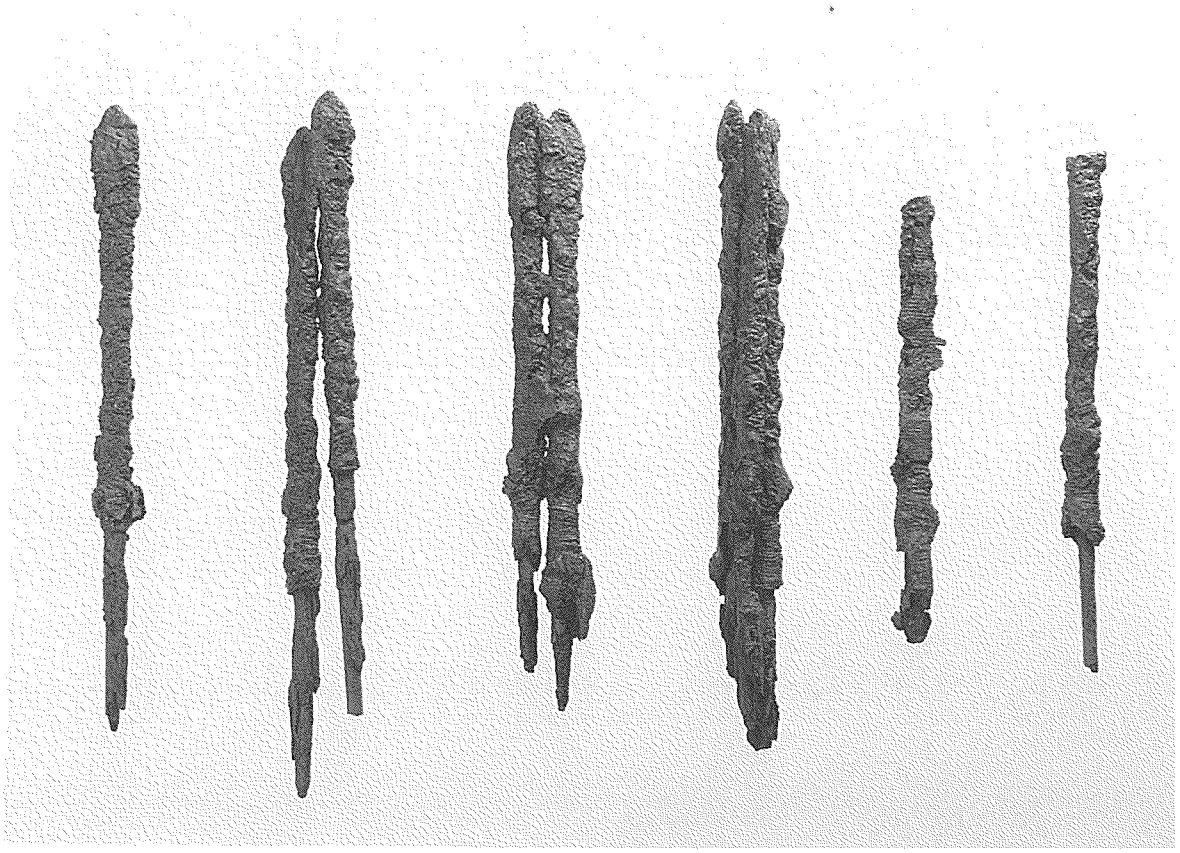
第1主体部出土須恵器

第2主体部出土須恵器

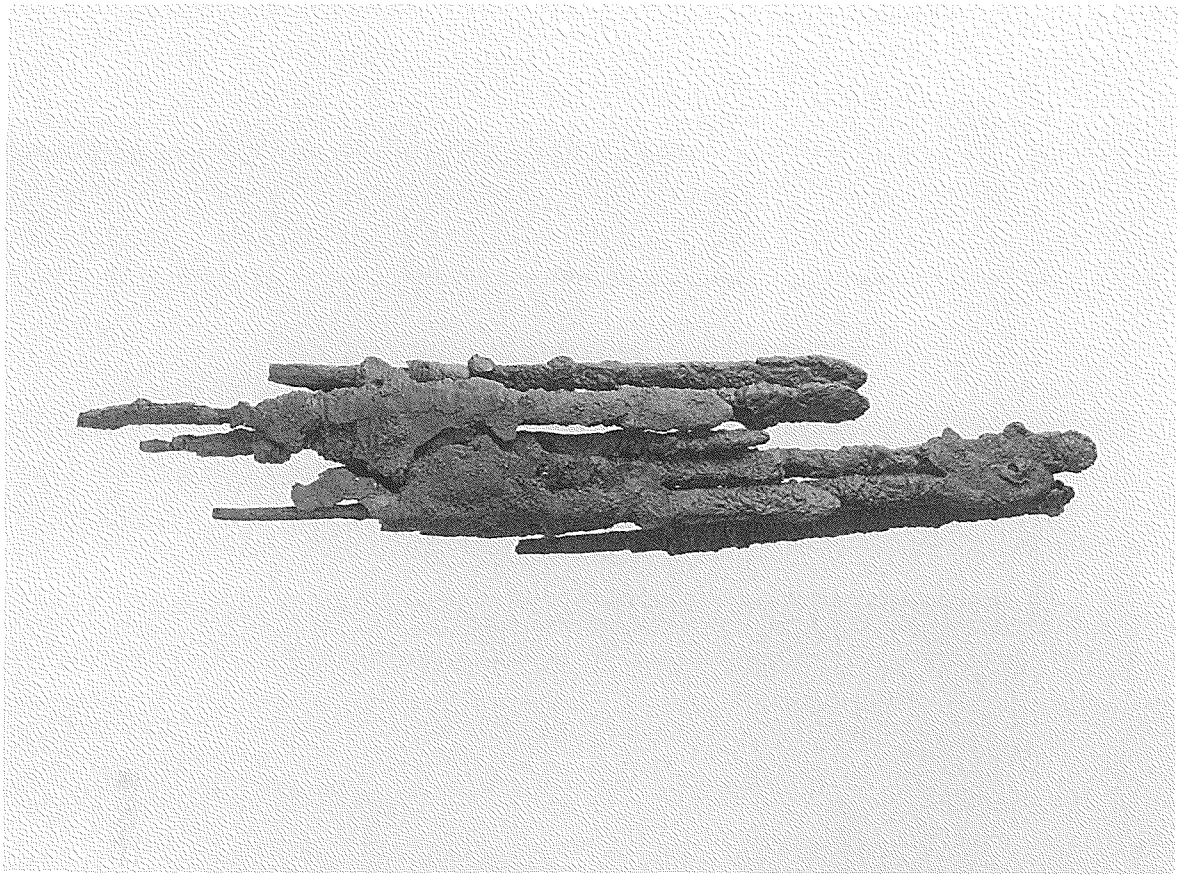
図版6



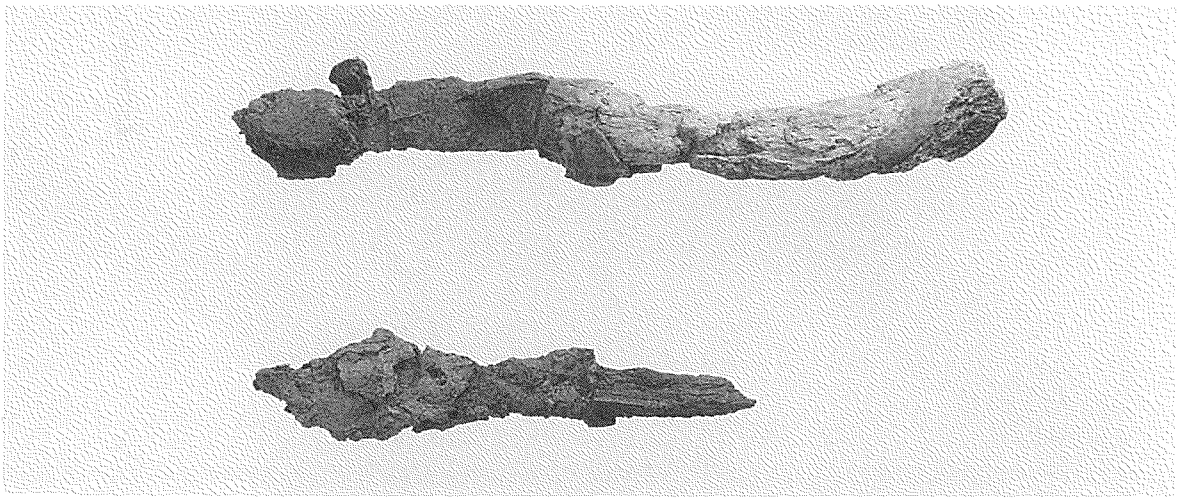
第1主体部出土鉄鏃



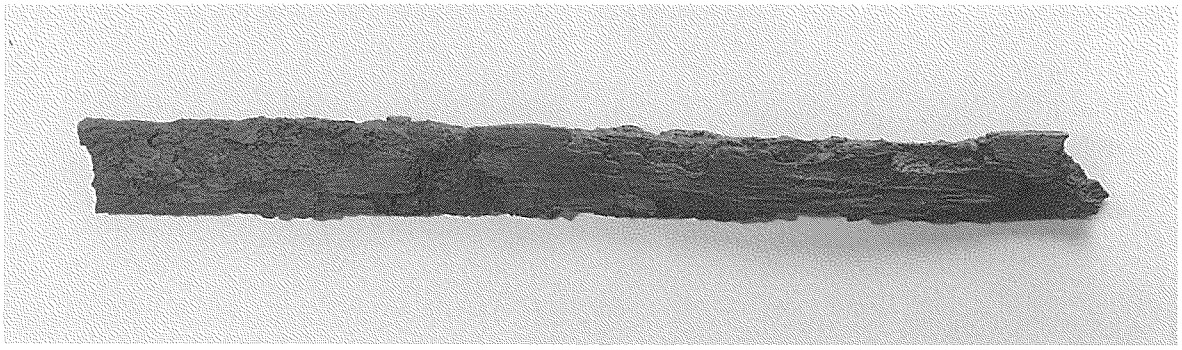
第2主体部出土鉄鏃（1）



第2主体部出土鉄鏃（2）

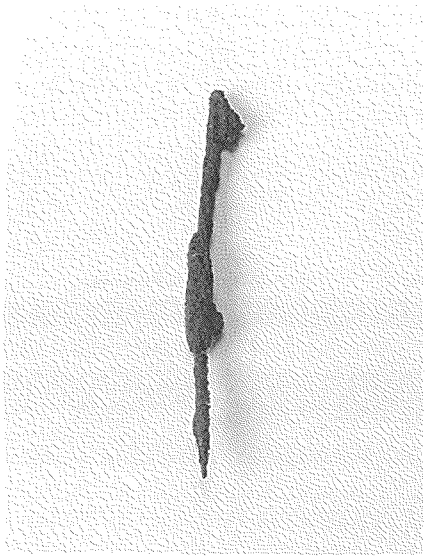


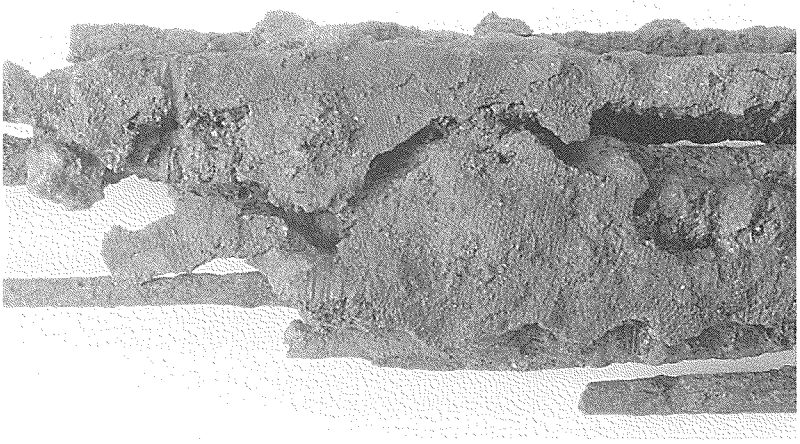
鉄刀子

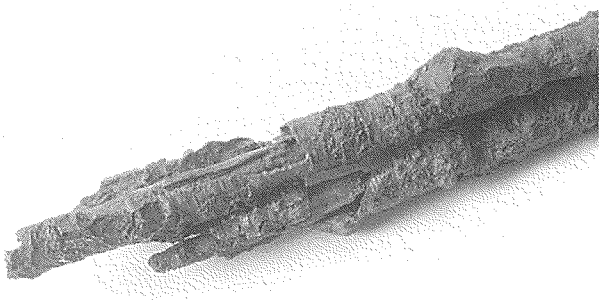


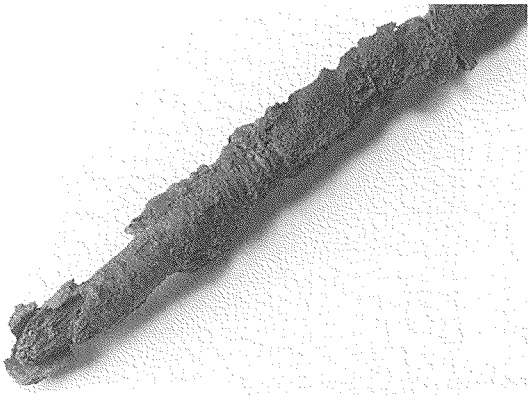
鉄　刀

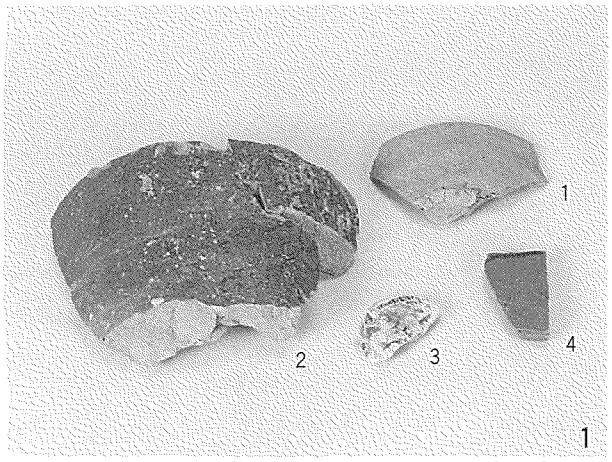
図版8

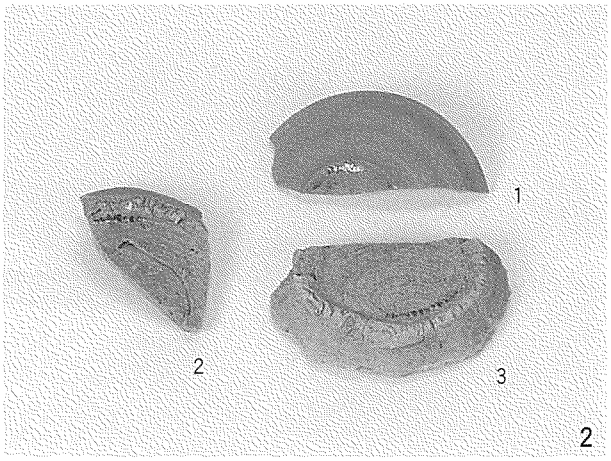


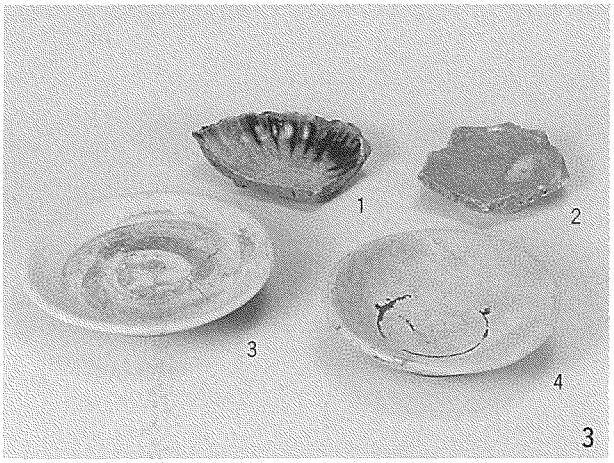


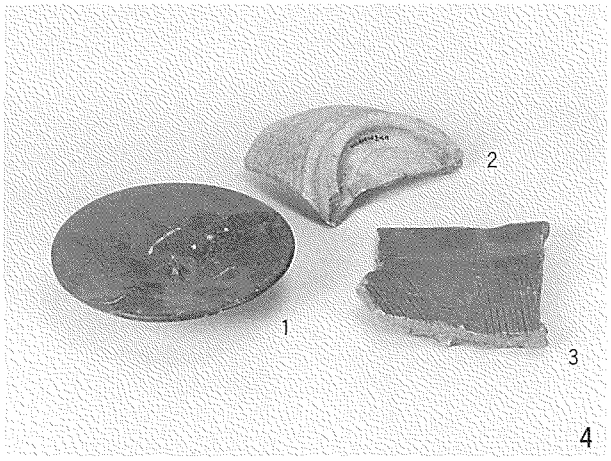


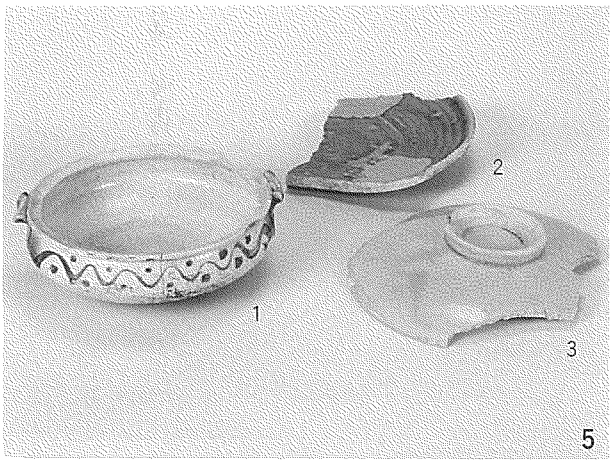


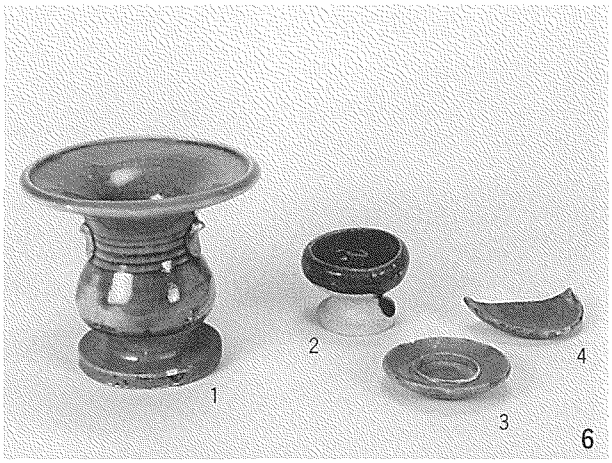

1
2
3
4
1

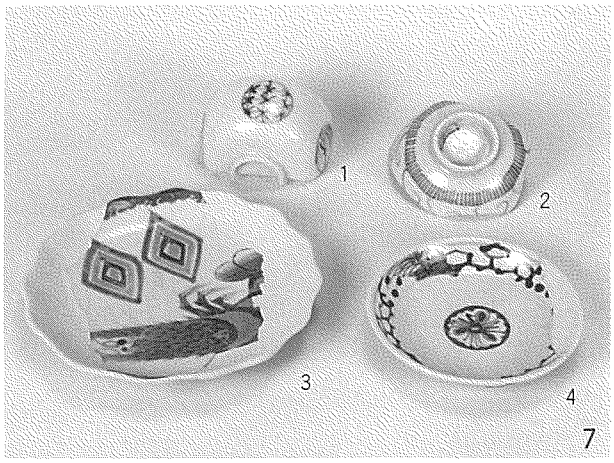

1
2
3
2

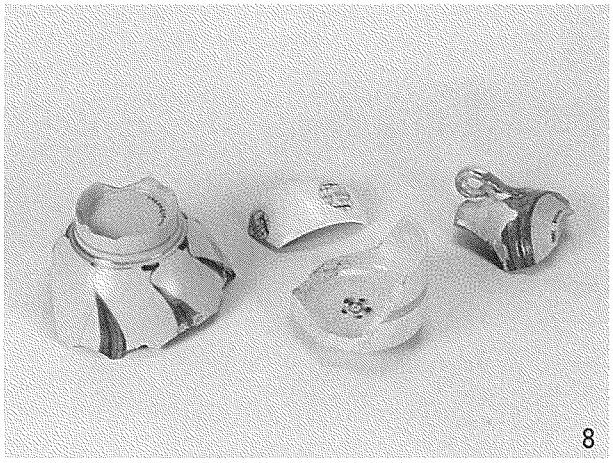

1
2
3
4
3


2
1
3
4

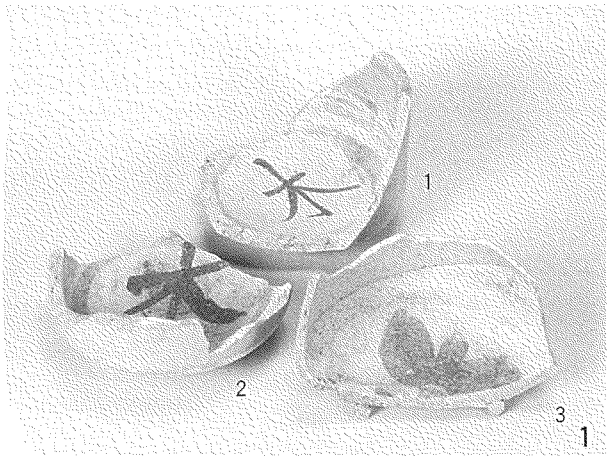

2
1
3
5

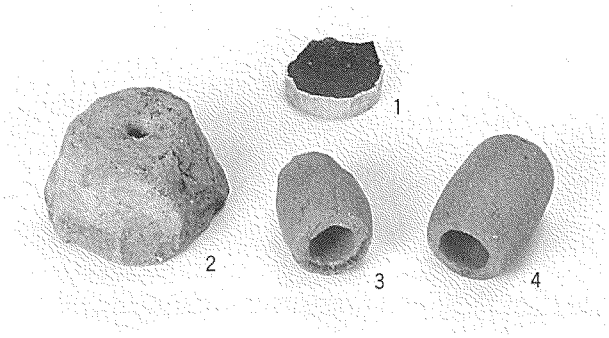

1
2
3
4
6

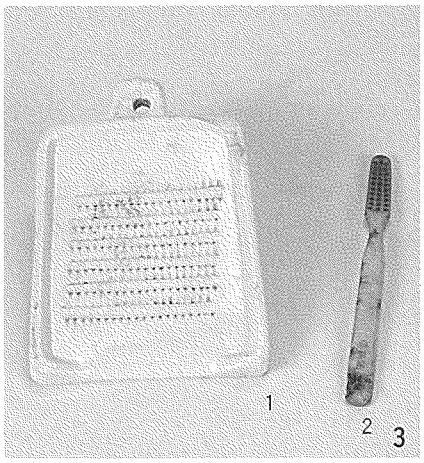

1
2
3
4
7

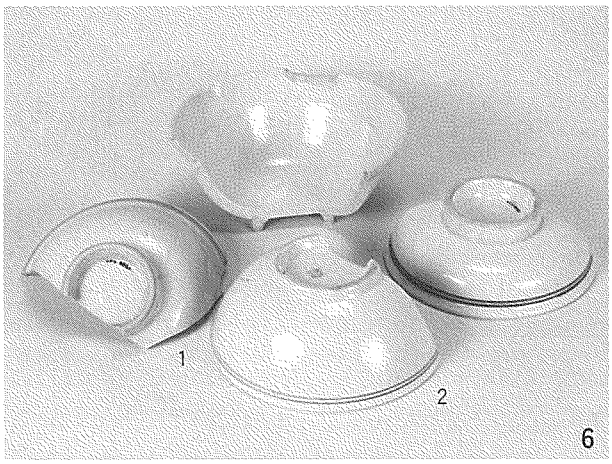

8

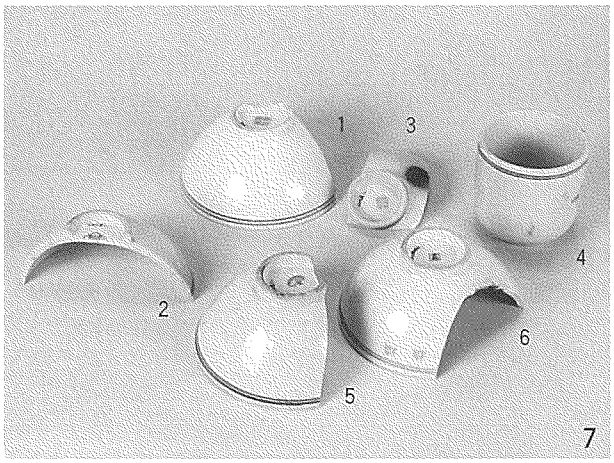
図版10

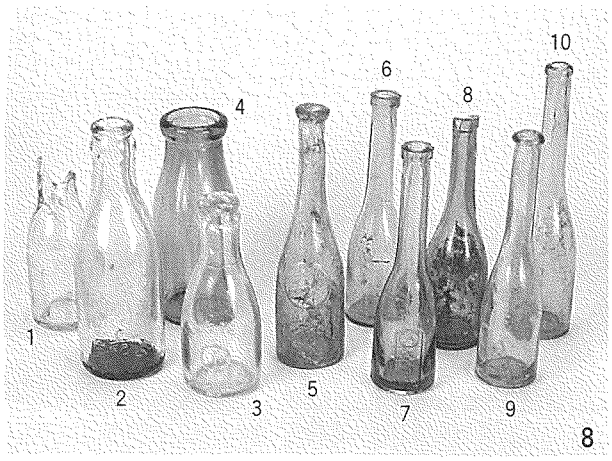












戸田遺跡発掘調査報告

調査地点周辺風景（戸田小学校屋上から北東を見る）

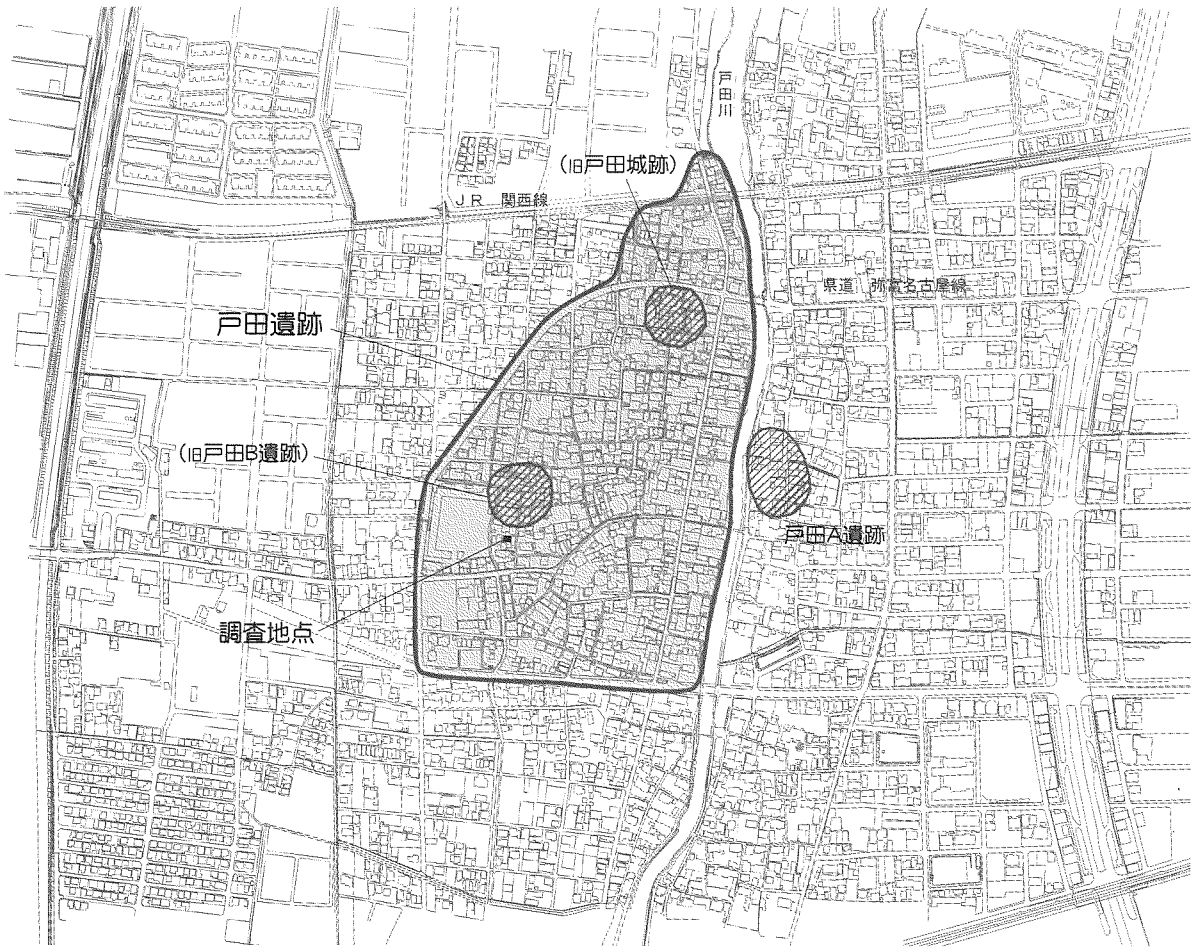
1　戸田遺跡について

戸田遺跡は、名古屋市中川区戸田一～三丁目に所在する中世の集落遺跡である。遺跡は、濃尾平野南部の沖積微高地を中心に立地している。中川区の旧富田町および周辺は、鎌倉市円覚寺所蔵の重要文化財『尾張国富田荘絵図』に描かれた荘園の跡として良く知られている。戸田遺跡の位置は、この富田荘の中心部近く、「横江里」の中に含まれると考えられている。絵図の表現からは、広い範囲に当時の遺跡の存在が予測されるものの、過去の調査・確認例は少なかった。名古屋市教育委員会が平成２年（1990）に改訂した『名古屋市遺跡分布図（中川区）』でも、その時点の遺物出土情報にもとづき、富田荘範囲内およびその周辺には千音寺遺跡を除いては小規模な遺跡が点在するのみであった。

名古屋市教育委員会では、平成12年度以降戸田二丁目付近での下水道整備事業に伴って、同事業および先行工事での掘削の状況や地中レーダー探査などにより、遺跡範囲の把握につとめた。この事業によって、戸田二丁目付近の広い範囲で遺構・遺物が出土し、あるいは広がりが推定された。

今回の調査は、従来「戸田Ｂ遺跡」と呼んでいた地区でおこなったものであり、調査着手時点の事業名としては「戸田Ｂ」を用いていた。しかし上記の成果と、今回の調査地点での面的な調査によって、安定した良好な遺跡状況が把握されたことから、遺跡範囲および名称の見直しが必要となった。

こうした経過から、現時点で地形および遺物出土状況によって、中世遺跡の残存が確実視される範囲を第１図のように定め、「戸田遺跡（遺跡番号13-23）」とした。従来の「戸田城跡（同13-16）」と「戸田Ｂ遺



第１図　調査地点と戸田遺跡範囲（１：10,000）

跡（同13-18）」は、この範囲に含まれることとなり、遺跡番号も欠番となった。

今回の調査は、「戸田Ｂ遺跡発掘調査」として実施されたものであるが、調査期間中の遺跡名称・範囲改訂と、今後期待される周辺での遺跡調査との整合性を考え、この調査を名古屋市教育委員会による戸田遺跡の最初（第１次）の調査として報告するものである。

なお、冨田荘については、中世史学や歴史地理学研究の立場から、絵図や円覚寺文書の分析を中心とした研究が積み重ねられている。これらの成果は、『新修名古屋市史第二巻』（1998）にまとめられており、参考文献についても同書を参照されたい。同書刊行以降の関連文献を下に掲げておく。

冨田荘絵図の中に今回の調査地点を示す作業は(注1)、大変興味深いものであるが、作業時間の制約もあって、拙速な結論を避けるべきと考えた。位置比定を含め、今後報告内容に関して多くの検討を期待するものである。

注１　千音寺遺跡１・２次調査報告では、冨田荘絵図の地割りと現在の市街を重ねた図を示している。いくつかの根拠に基づいており、千音寺遺跡周辺の対比については問題ないものと思われるが、戸田遺跡付近については、十分な検証を経ないまま図化している。戸田遺跡を考えるにあたっては、同書の図については一旦破棄したうえで、戸田遺跡周辺あるいは冨田荘全体の位置比定をおこなうべきと考える。

参考文献

伊藤雅乃 2002『第２次中川区戸田二丁目付近水道工事に伴う戸田Ｂ遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局下水道本部
山田鉱一・野口泰子 2000『埋蔵文化財調査報告書35　千音寺遺跡（第１・２次）』名古屋市教育委員会
蔭山誠一 2001「発掘！尾張国冨田荘」『まいぶん愛知69』愛知県埋蔵文化財センター

2　調査の経過

発掘調査は、個人住宅の建設に先だっておこなった。調査地点の地番は、名古屋市中川区戸田二丁目2016番１である。調査期間は、2002（平成14）年11月５日～12月６日、調査面積は80㎡であった。調査地点は更地の状態だったため、敷地内に安全用フェンスを設置して掘削にあたった。敷地内の余地は狭かったが、排土の仮置きが可能となったため、予定面積全体で一度に作業を進めることができた。

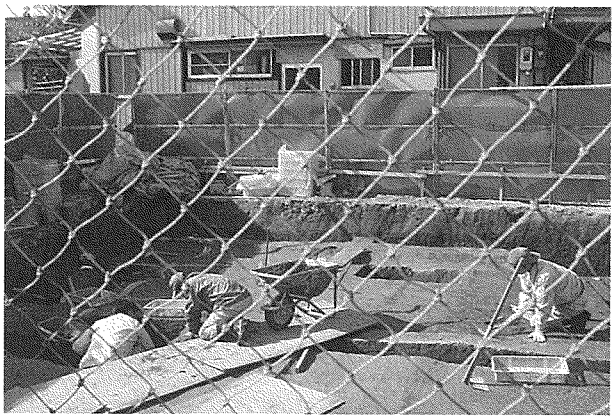
今までの周辺の調査成果から、遺構面が複数あること、地山の認定が難しいこと、貝層を検出する可能性が強いことなどが予測されていた。実際これらは、今回の調査地点でも遺跡の様相として確認された。なお、工事掘削の折りには、周辺の地下水位は地表から２ｍ付近あるいは以下と把握されていたが、この地点では地表下約１ｍを地下水位の上限として大きな変動はなかった。このため、底面が地下水位以下にある中世遺構の一部は、完掘できなかった。

作業は、小型重機による表土掘削の後、包含層・遺構検出・遺構仕上を状況に応じて各所で繰り返した。遺構面は、近世に２面以上を認めた他、中世にも最低３期（面）を認めた。ただし、単純に遺構面が重複する訳ではないことと、狭い調査区で各種作業を平行したため、各面を明確に弁別・記録することはできなかった。遺構の情報内容が豊富で複雑であったため掘削や作業に時間がかかり、一部の掘削を断念して調査期間を終えた。作業経過は、下記のとおりである。

なお、12月16日～20日に、発掘調査で軟弱化した住宅地盤の改良工事を実施した。

調査日誌（抄）

11月５日㈫　調査用資材搬入・準備工事。北西部よりバックホウによる表土掘削を開始。
11月６日㈬　表土の機械掘削継続。１Gr. で深掘り試掘。包含層・混貝土層・基盤砂層・地下水位を確認。
11月７日㈭　表土掘削終了。包含層掘削を進め、遺構検出に着手。委託業者が基準点測量を実施。
11月８日㈮　包含層掘削・遺構検出を進める。SK１・２・４～７など遺構掘削にも着手。遺構内の土層記録作成、遺物出土状況平面図作成に着手。平面図は、単点をトータルステーションで座標測量し、手作業で図化する。
11月11日㈪　包含層掘削・遺構検出・遺構仕上掘削をおこなう。地山・遺構埋土の確認のため各所にトレンチを設定。貝を含まない土については、遺構の切合い認定が難しい。
11月12日㈫　SD１を完掘。上層遺構（基本的に近世を想定）の完掘写真撮影。
11月13日㈬　おもに遺構掘削を進める。下層掘削のためのトレンチも設定。
11月14日㈭　おもに遺構掘削を進める。SK６・７の下部など遺構形状が地下水位以下にあたる部分は、埋土・形状把握が困難。上層に含めるべきであったピットもいくつか確認。上層平面図ほぼ完成。
11月15日㈮　１Gr. 西壁のトレンチで、貝層を含む落ち込み断面を確認、SX１と命名。
11月18日㈪　SX１貝層の検出、SK６・７などの遺構掘削を進める。
11月19日㈫　SX１貝層検出写真撮影。遺構検出・仕上掘削継続。
11月20日㈬　遺構検出・仕上掘削を進める。SX１・SK３・８などを掘削。
11月27日㈬　遺構掘削。SX１・SD６～９など掘削。SX１貝層を掘削、混貝土層は溝状の遺構埋土と確認しSD１とする。
11月22日㈮　SD１掘削。２～４Gr. でピットなど掘削。３・４Gr. を再検出。
11月25日㈪　雨天休止。
11月26日㈫　遺構掘削を継続。２Gr. の混貝土埋土の溝状遺構群（SX２をSD６～９と細分）など、切合いは複雑。
11月27日㈬　遺構掘削。SX１・SD６～９など掘削。
11月28日㈭　遺構掘削。土層図はじめ記録作業を急ぐ。
11月29日㈮　遺構の完掘を目指すが、SX１の肩部や土層観察用アゼの一部などは掘り残し、清掃をおこなう。全景写真を撮影。
12月１日㈰　平面図および土層断面図を作成。
12月２日㈪　遺構基盤面以下の確認掘削をおこなう。追加確認した遺構を略測し、平面図に追加。
12月３日㈫　確認のための深掘りを継続。SK３の下部で木組みの井戸枠・井戸桶を確認。
12月４日㈬　埋め戻しをおこなう。
12月５日㈭　埋め戻しを継続、終了。
12月６日㈮　後片づけ、撤去。現場作業完了。


作業風景（東から）

3　土層

対象範囲（調査区）は、南北約８ｍ、東西約10ｍの東西に長い長方形であった。全体を４グリッド（Gr.）に区分し、第２図のように１～４Gr. と呼んだ。Gr. 原点は、北西隅の任意点であり、南西隅の任意点方向を基準線とした。原点から東へ５ｍに基準線と平行する南北線、南へ４ｍに直交する東西線を仮定してGr. 区分線とした。グリッドの南北軸は、座標北から約５度東へ振っている。

第５図は、今回記録した土層断面図のすべてである。現場での記録を、ほぼそのまま掲載したため、かなり繁雑なものとなっている。これらの層位を大別すると、次のようになる。

Ⅰ　基盤層　中世の遺構面をなす自然堆積層（p.135を参照）

Ⅱ　中世層　中世の形成土・堆積土（中世の包含層・遺構埋土）

Ⅲ　近世層　近世あるいは戦国期以降の形成土・堆積土（主に盛土・整地土などの客土と考えられる）

Ⅳ　表土層（攪乱土）　近代以降の形成土・堆積土

第５図では、Ⅰ～Ⅳ層を網掛けで大別した。Ⅱ・Ⅳ層には網をかけず、Ⅲ層に薄い網、Ⅰ層にやや濃い網を掛けている。これとは別に、貝を含む層位には濃い網を掛けた。貝層の大半はⅡ層にあたるが、ごく小規模ながら近世の貝層も存在する。また近世に中世の貝層が攪乱されて再堆積（埋没）した層も含んでいる。

調査地点には、しばらく前まで少なくとも築70年以上の草葺き家屋が建っていたという。この家屋の礎石上面は、ほぼ現地表面にあった(西壁断面１層の凹みが礎石の痕跡)。Ⅳ層からの掘り込みは少なく、また深さも浅いものであった。１ｍ以上の深さがあったのは、１Gr.の試掘坑に利用した攪乱のみであった。

Ⅰ層は、基本的に無遺物の砂シルト層または砂層である。ただし、Ⅱ層下部との明確な区別をつけにくい部分も多く、Ⅰ層上面とした面で検出困難な遺構も多数あった。本来は、微高地の陸化あるいは遺跡形成開始以前の自然堆積層を指すべきものである。

Ⅱ層は、Ⅰ層より上位でⅢ層以下の層序を一括したもので、Ⅰ層との変化は漸移的な部分が多い。黒褐色・茶褐色・暗灰色・明灰色など種々の色調を呈し、砂質土～粘性土まで多様な細分が可能である。貝を含む土が多いが、ほとんどは廃棄された貝（貝塚・純貝層）が破砕・混入した混貝土層である。

Ⅲ層は、やや黄色みをおびた淡灰褐色土を主とし、Ⅱ層上面を不整合に覆っていた。全体的に均質な印象を受ける土であったが、観察すると顕著に細分が可能であった。今回の調査では、大半を機械掘削したが、わずかに含まれていた遺物は、層序に対応した新旧を示した。Ⅲ層上面とⅡ層上面において、近世の遺構が検出できるはずであり、Ⅲ層中においても２面以上検出できる可能性がある。

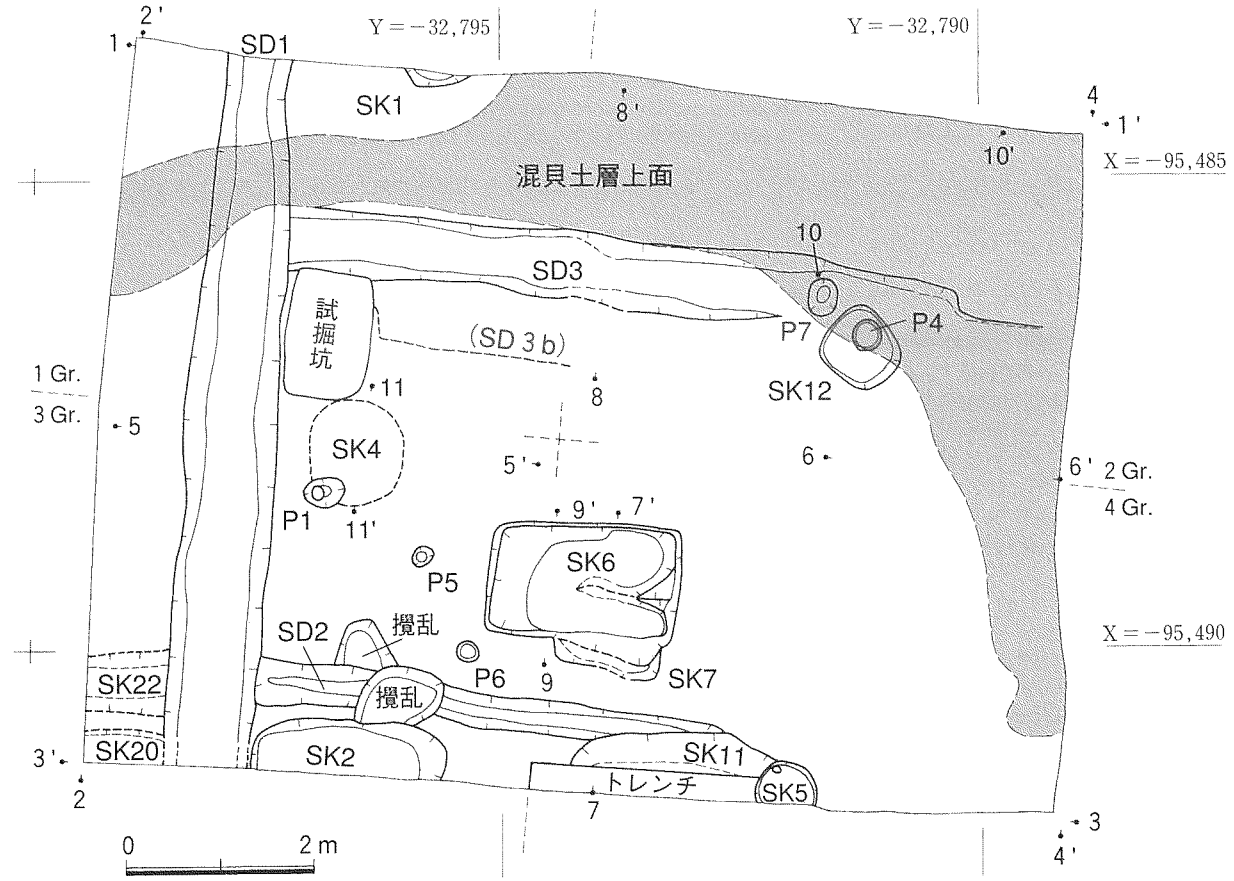
４　遺構

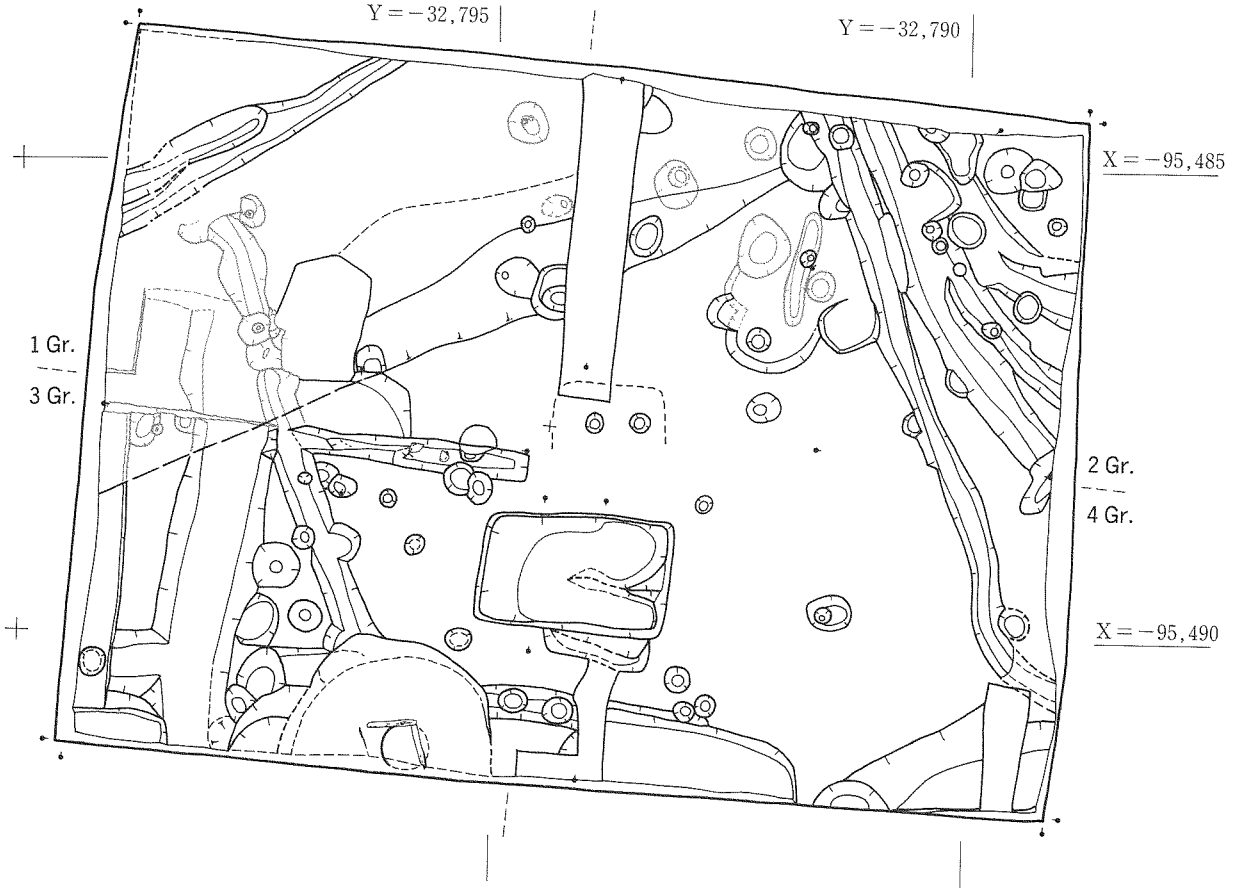
調査地点の地表面は、標高－１ｍ前後であった。これは東京湾の平均海面を基準とした数値であるが、名古屋港の平均海面に対する高度は約0.4ｍである。中世の遺構面は－1.7ｍ付近にあり、おおむね海面下となる(注2)。中世～近世の遺構面が多数存在するのは前述の通りだが、実際の調査では土層断面に認めた検出可能面が十分に把握できた訳ではない。

Ⅲ層直下の面で検出した遺構を上層遺構とし、第２図（上）に平面図を示した。上層遺構と同時に検出した中にも下層に含めるものを含み、下層で検出した中にも上層とすべき遺構があった。第２図は、これらを調整して上下に区分したが、判別不能なものもあった。個々の遺構の概略は第１表にまとめたので、ここでは上層・下層のおおまかな様相を述べることにする。

上層遺構は、柱穴様のピットは少なく、溝および土坑を主とする。いずれも埋土中の遺物は少量で、磨滅したものも多く、遺構の時期を示すには不十分である。ただし、出土した遺物は、土層断面に見る遺構の切り合いと良く整合している。Ⅲ層上面から掘り込まれたSK１は19世紀前半の遺物を含み、Ⅲ層中位で確認できるSD１は18世紀初頭以前の遺物を含む。断面には、両者の中間となる時期の遺構、SD１に先行する遺構などが多数認められた。

上層遺構は、主軸方向をほぼ東西・南北に持つ点で共通している。切り合いが不明確ではあったが、その中でも東西に軸を持つSD２は、南北方向のSD１に先行する。SK６は掘り込み面を確認していないが、上面の埋土はⅢ層と一体で埋め立てられた可能性があり、その場合SD１に先行する。SD２・３は、微妙ながら西の方が底面が低く、西へ下る溝だったと思われる。SD３は、SD１に流入していた可能性も残る。SD１の底面はほぼ平坦で、数値的には南北どちらへ流れるか確定できない。





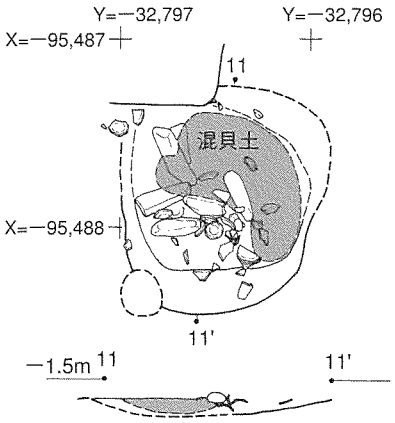
第２図　上層遺構（上）と下層遺構（下）平面図

下層遺構は、12世紀～15または16世紀に形成されたものと考えられる。この地点の遺跡形成の上限を示す遺物は、SX１の下層に含まれている12世紀後半の遺物である。SX１は、北から約60度東へ振った方向性を持つ大規模な落ち込みである。埋土は、上からＡ層＝SD11より北側の中～上位の暗灰色砂シルト、Ｂ層＝繰り返し掘削した人為的な溝（SD11）埋土、Ｃ層＝SD11下の暗灰～黒色シルト、Ｄ層＝Ｃ層の南側下層にあたる灰色砂シルトに分けて遺物を取り上げた。Ｂ層は、西壁付近に想定した貝塚１に由来する混貝土が主体、Ｄ層はＩ層との区分が不明瞭であった。印象でしかないが、自然流路（河道）を整備・利用した水路の成立から廃絶までを示すものと考える。上面には15世紀の古瀬戸片も含まれていた。ただし、各層位間での遺物の移動（特に沈降）はあり得るため、厳密な層位の時期比定は困難である。

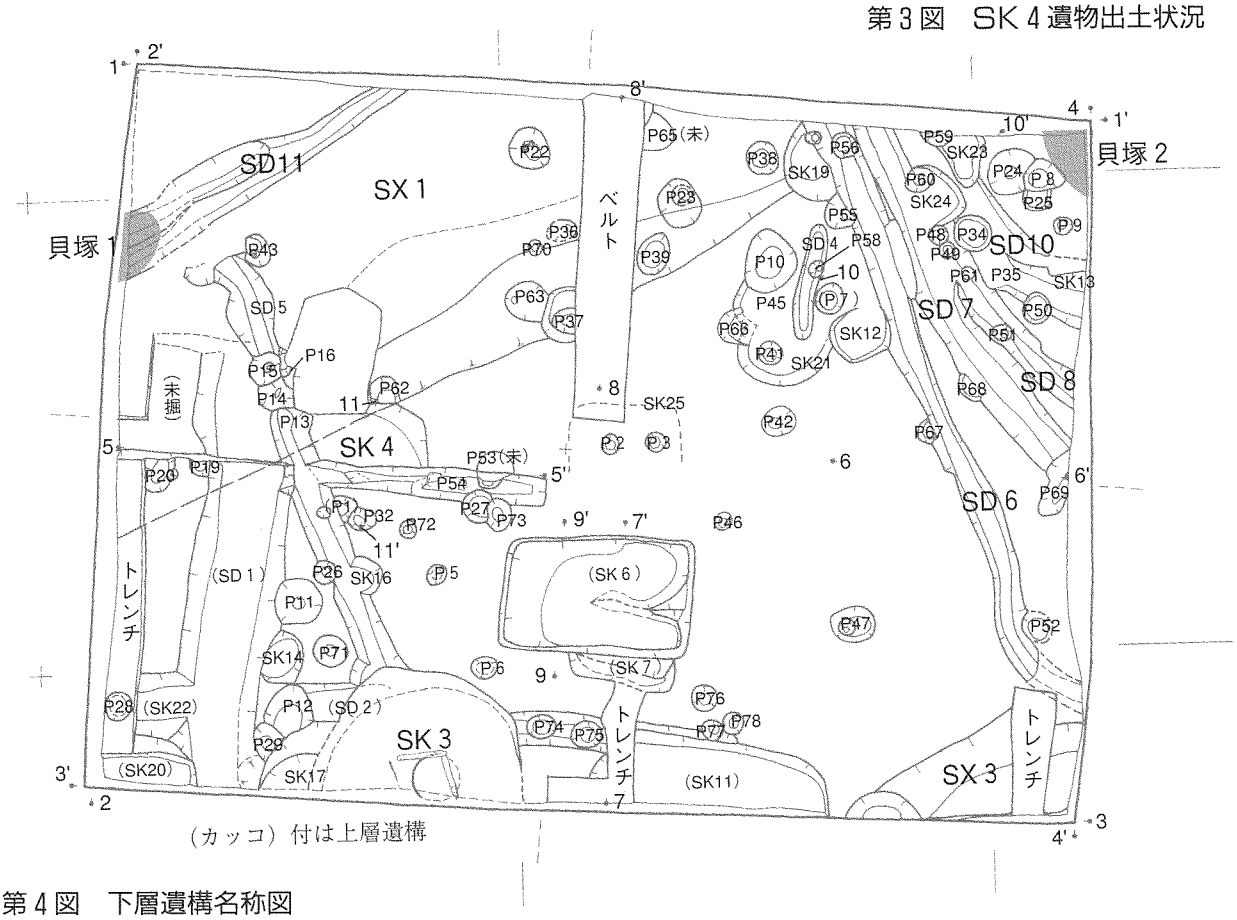
最も良好な貝層は、２Gr. 北東隅に見られた（貝塚２）。これに由来する混貝土で埋まる遺構をまとめてSX２と呼んだ。SX２は、SX１に略直交方向から東へ曲がる溝が複数重複しており、貝塚２に近い北東から南西へと変遷した可能性を考えている。SX１の各層位に対する直接的な関係は不明であり、北壁の土層区分も不詳であった。

４Gr. 南東のSX３は、方向性や埋土がＩ層と見分けにくい点が、SX１に似る。薄い混貝土を含むが遺物は少なく、規模・性格とも不明である。

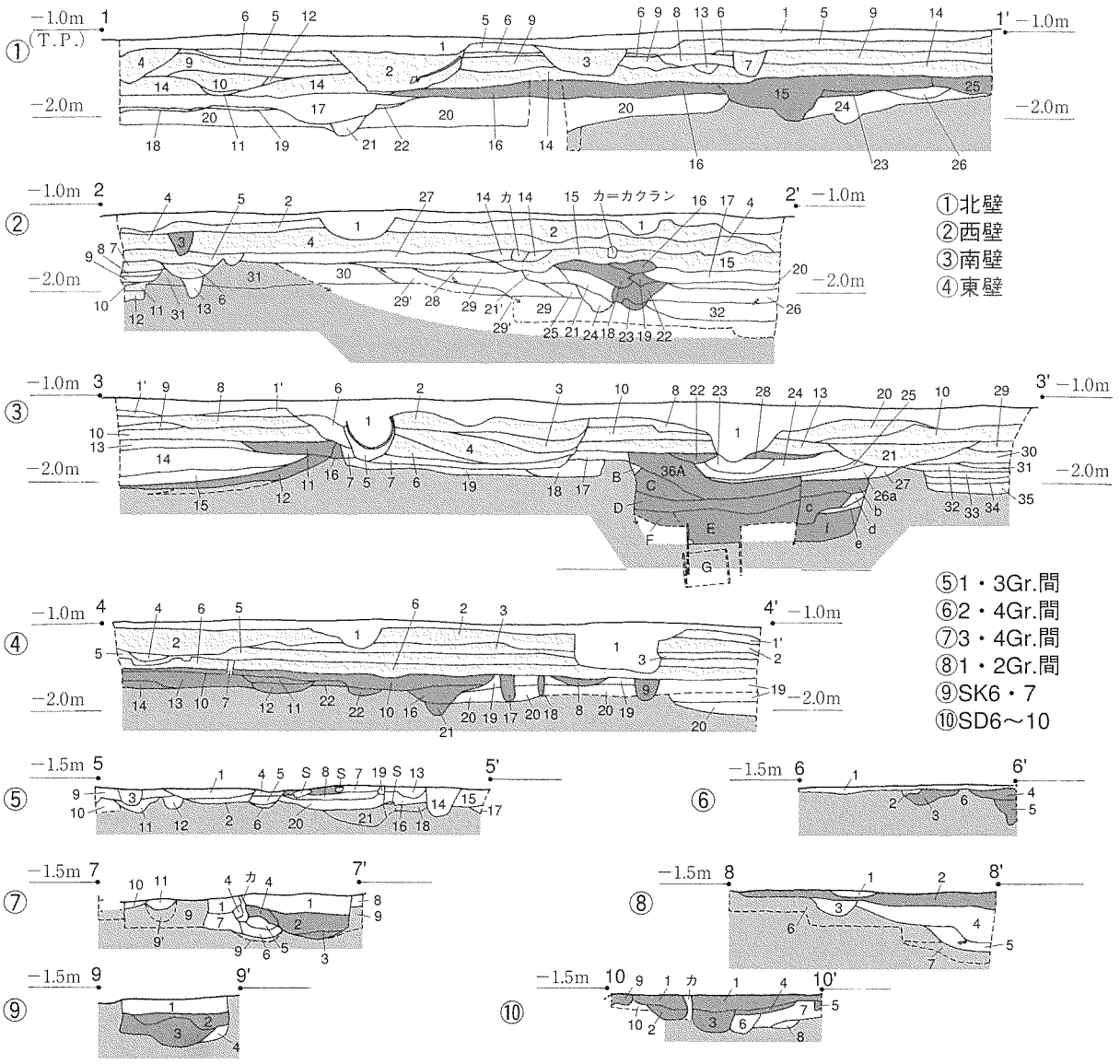
SD５は、SX１に直交する溝状の遺構である。底面は、南部の方が20cm程低いが、水流の痕跡は認められなかった。多数のピットが重複しており、開口した溝であったかは不明である。SX１の埋土Ｃ層に掘り込まれ、Ｂ層に覆われていた。埋土に貝は見られなかった。北端は不明確で、初



第３図　SK４遺物出土状況



第４図　下層遺構名称図



第5図　土層断面図

①【1－1′　調査区北壁】
1層＝砂質土　表土撹乱、白色粘土少量含む。
2層＝淡黄褐色土　砂質がかり粘性やや弱め。SK 1埋土。
3層＝淡灰褐色土　砂質がかり粘性やや弱め。近世土坑埋土。
4層＝暗灰褐色土　②2層に対応、φ2－3㎜程の炭化物粒ごくまれに含む。白色粘土を帯状に少量含む。砂質がかり粘性は弱めだがしまりあり。
5層＝淡灰褐色土　やや黄味がかる（④東壁2層に対応）、黒褐色土を Br. 状に少量含む。
6層＝暗灰褐色土　白色粘土を帯状に少量含む。粘性しまりともややあり。
7層＝淡黄灰褐色土　φ1－2㎜程の炭化物粒ごくまれに含む。粘性しまりともあり。
8層＝淡褐色土　やや砂質がかるが、粘性しまりともあり。
9層＝淡灰褐色土　④5層に対応、φ5㎜程の炭化物粒少量含む。白色粘土 Br. をごく少量含む。やや砂質がかり粘性しまりとも弱。
10層＝淡黄灰褐色土　黄味がやや薄め、SD 1埋土。粘性あるがしまりは弱め。
11層＝淡褐色土　黄味強め、10層がシルト化？、粘性しまりともあり。
12層＝淡褐色土　やや黄味がかる、10層または14層の一部か？、粘性しまりともややあり。
13層＝淡灰褐色土　混入物少なめ。粘性しまりともややあり。
14層＝暗灰褐色土　やや明るい（④6層・②15層に対応）、φ5㎜までの炭化物・焼土粒を少量含む。粘性しまりともややあり。
15層＝暗灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
16層＝暗灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝を少量含む。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
17層＝暗灰褐色土　②17層に対応、φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。
18層＝暗灰褐色土　やや白味がかる（②20層に対応）、φ5㎜程の炭化物粒を少量含む。多少砂質がかるが粘性しまりともややあり。
19層＝暗灰褐色土　18層より暗い、φ5㎜程の炭化物粒を少量含む。多少砂質がかるが粘性しまりともややあり。
20層＝暗灰褐色土　黒味強（②26層に対応）、φ5㎜程の炭化物粒少量含む。砂質がかるが粘性しまりともややあり。
21層＝暗灰褐色土　②24層に近い。φ5㎜程の炭化物粒をごく少量含む。貝はほとんど含まない。
22層＝暗灰褐色土　やや黒味強、φ5㎜程の炭化物粒を少量含む。多少砂質がかるが粘性しまりともややあり。
23層＝暗灰褐色土　SD10埋土。
24層＝暗褐色土　基盤層にあたる土層。
25層＝暗灰褐色土　遺存度の高い貝層を多量に含む。粘性ややありしまりあり。
26層＝暗灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝をごく少量含む。粘性しまりともややあり。

②【2－2′　調査区西壁】
1層＝砂質土　表土撹乱。白色粘土少量含む。
2層＝暗灰褐色土　③南壁20層に対応、φ2－3㎜程の炭化物粒ごくまれに含む。白色粘土を帯状に少量含む。砂質がかり粘性は弱めだがしまりあり。
3層＝淡灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝少量含む。御深井釉の陶器を含む。粘性しまりともややあり。
4層＝淡灰褐色土　③10層に対応、φ5㎜程の炭化物粒少量含む。白色粘土 Br. をごく少量含む。やや砂質がかり粘性しまりとも弱。
5層＝灰褐色土　やや黒味がかる（③29層）、混入物少ない。粘性しまりともあり。
6層＝暗灰褐色土　2－3㎝大の Br. 状白色シルトを含む。鉄分等の沈着目立つ。粘性しまりともあり。
7層＝暗灰褐色土　③30層に対応、φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。
8層＝暗灰褐色土　③31層に対応、混入物少ない。粘性しまりともあり。
9層＝暗灰褐色土　③32層に対応、白色シルトを2－3㎝大の Br. 状に含む。粘性しまりともあり。
10層＝暗灰褐色土　③33層に対応、粘性しまりともあり。
11層＝暗灰褐色土　③34層に対応、やや砂質がかる。粘性しまりともあり。
12層＝暗灰褐色土　③35層に対応、やや砂質がかる。粘性しまりともあり。
13層＝黄灰褐色土　暗灰褐色土と黄色シルトの混土。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
14層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。
15層＝暗灰褐色土　やや明るい、φ5㎜までの炭化物・焼土粒を少量含む。粘性しまりともややあり。
16層＝暗灰褐色土　やや黄味がかる。φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
17層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。
18層＝暗灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒を少量、φ1－3㎝の破砕貝をかなり多量に含む。粘性ややありしまり弱。
19層＝暗灰褐色土　黒味強。φ5㎜程の炭化物粒を多量に含む。φ5㎜の破砕貝を少量含む。粘性しまりともややあり。
20層＝暗灰褐色土　やや白味がかる。φ5㎜程の炭化物粒を少量含む。多少砂質がかるが粘性しまりともややあり。
21層＝暗灰褐色土　黒味強。φ5㎜までの炭化物を少量含む。φ5㎜程の焼土粒をごくまれに含む。粘性しまりともややあり。
21′層＝暗灰褐色土　21層と同様であるが、少量シルト Br. が入る。21層と比べ炭化物・焼土粒少なめ。
22層＝暗灰褐色土　18層より黒味強。φ5㎜程の炭化物粒を少量、φ1－3㎝の破砕貝をかなり多量に含む。粘性ややありしまり弱。
23層＝黒褐色土　φ5㎜の破砕貝をごく少量含む。多少砂質がかるが粘性しまりともややあり。
24層＝暗灰褐色土　黒味かなり強。貝はほとんど含まない。φ5㎜程の炭化物粒を少量含む。粘性しまりともややあり。

25層＝暗灰褐色土　21層より明るい。黄色シルトを Br. 状に少量含む。多少砂質がかるが粘性しまりともあり。
26層＝暗灰褐色土　黒味強。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。砂質がかるが粘性しまりともややあり。
27層＝暗灰褐色土　黄色シルトを Br. 状に多量に含む。粘性しまりともあり。
28層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。黄色シルトを Br. 状にごく少量含む。粘性しまりともあり。
29層＝暗灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒ごく少量含む。やや砂質がかる。粘性しまりともややあり。
29′層＝暗灰褐色土　29層と同様。鉄分等の沈着が多く、白味強。
30層＝淡灰褐色土　31層と似るが、黄味が弱く砂質がかる。一部に鉄分等沈着。粘性しまりともややあり。
31層＝淡黄灰褐色土　やや砂質土で、一部に鉄分等沈着。ベース土？
32層＝暗灰褐色土　黒味が特に強いシルト、φ5㎜の炭化物粒少量含む。

③【3－3′　調査区南壁】
1層＝砂質土　表土撹乱。白色粘土少量含む。
1′層＝砂質土　撹乱。白色粘土を密に含む。
2層＝淡灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒をごく少量含む。やや砂質がかり粘性しまりとも弱。
3層＝淡灰褐色土　2層より黒味強。2層によく似るが、鉄分の沈着が目立ち、2層より粘性が強い。
4層＝灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒をやや多量に含む。鉄分沈着、粘性しまりともややあり。
5層＝灰褐色土　甕埋設土。粘性しまりとも強。
6層＝黄褐色土　かなり黄味が強く、鉄分沈着著だしい。粘性しまりとも強。
7層＝暗灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともややあり。
8層＝淡灰褐色土　④東壁2層に対応、黒褐色土を Br. 状に少量含む。
9層＝淡灰褐色土　④3層に対応、φ5㎜程の炭化物粒少量含む。白色粘土 Br. を少量含む。やや砂質がかり粘性しまりとも弱。
10層＝淡灰褐色土　④5層に対応、φ5㎜程の炭化物粒少量含む。白色粘土 Br. をごく少量含む。ややや砂質がかり粘性しまりとも弱。
11層＝暗灰褐色土　黒味強、φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。粘性しまりともややあり。SK15。
12層＝淡黄灰褐色土　15層より黒味強。φ1－2㎝程の貝を Br. 状に含む。粘性しまりともあり。
13層＝褐色土　④6層に対応。φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともややあり。
14層＝淡黄灰褐色土　④19層に対応。シルト質で鉄分沈着密。粘性しまりとも強。
15層＝淡黄灰褐色土　14層とほぼ同じ土質だが、砂質がかり、ややしまり強。
16層＝褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともややあり。
17層＝褐色土　13層と似た土質だが、やや砂質がかる。粘性しまりともややあり。
18層＝淡褐色土　19層へと漸移的に変化。白味の強い川砂中心の層。
19層＝淡黄灰褐色土　黄味の強いシルト質土と砂質土の混土。粘性しまりともややあり。
20層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごくまれに含む。白色粘土を帯状に少量含む。砂質がかり粘性は弱めだがしまりあり。
21層＝淡黄灰褐色土　黄味強。φ2－3㎜程の炭化物粒ごくまれに含む。一部に鉄分等沈着。粘性しまりともややあり。SD1埋土。
22層＝黒褐色土　シジミを中心とした貝を大量に含む混貝土。粘性あるがしまり弱。
23層＝暗灰褐色土　砂質で、粘性しまりともややあり。
24層＝淡黄灰褐色土　砂質で、粘性ややありしまりなし。
25層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごくまれに含む。粘性しまりともややあり。
26層＝SK18埋土。
　a　暗灰褐色土　黒味強。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。白色シルトを2－3㎝大の Br. 状に含む。粘性しまりともややあり。
　b　aに似る Br. 混成土、貝をまばらに含む。
　c　暗灰色・明灰色のシルト Br. と貝が混成する。
　d　黒色砂シルト。シルトがち。
　e　灰青色砂シルト。
　f　暗灰色・黒色・明灰色のシルト Br. が混成する。貝をまばらに含む。
27層＝淡黄灰褐色土　黒味強。黄色シルトを Br. 状に多量に含む。粘性しまりともあり。
28層＝暗灰褐色土　破砕貝を Br. 状に含む。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
29層＝灰褐色土　やや黒味がかる。混入物少ない。粘性しまりともあり。
30層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。
31層＝暗灰褐色土　30層よりも黄味強。混入物少ない。粘性しまりともあり。
32層＝暗灰褐色土　黒味強。白色シルトを2－3㎝大の Br. 状に含む。粘性しまりともあり。
33層＝暗灰褐色土　黄味強。粘性しまりともあり。
34層＝暗灰褐色土　黒味強。やや砂質がかる。粘性しまりともあり。
35層＝暗灰褐色土　白味がかる。やや砂質がかる。粘性しまりともあり。
36層＝SK3埋土。
A　茶褐色土　やや黄色みをおびた暗灰～褐色の混貝土層。貝を密に含む。
B　灰色土　砂質土、シルト Br. わずかに混じる。
C　茶褐色土　砂がち砂シルト。貝をまばらにに含む。
D　暗灰色土　シルトがち砂シルト。貝をまばらにに含む。
E　黒色土　破砕貝を密に含む。
F　黒色土　砂 Br. 混じり、黒色 Br. 主体。貝をわずかに含む。
G　灰青色砂　砂層、桶が埋設されていることから二次堆積であろうが一見均質。

④【4－4′　調査区東壁】
1層＝砂質土　表土撹乱。白色粘土少量含む。
1′層＝砂質土　撹乱。白色粘土を密に含む。
2層＝淡灰褐色土　やや黄味がかる。黒褐色土を Br. 状に少量含む。
3層＝淡灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒少量含む。白色粘土 Br. を少量含む。やや砂質がかり粘性しまりとも弱。
4層＝淡灰褐色土　3層より黒味強。白色粘土 Br. を少量含む。やや砂質がかり粘性しまりとも弱。
5層＝淡灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒少量含む。白色粘土 Br. をごく少量含む。やや砂質がかり粘性しまりとも弱。
6層＝褐色土　φ2－3㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともややあり。
7層＝褐色土　6層よりも暗い。φ5㎜程の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともややあり。
8層＝暗灰褐色土　φ5－10㎜の破砕貝をやや多量に含む。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
9層＝暗灰褐色土　8層に似るが、貝が多くしまり弱。
10層＝暗灰褐色土　やや明るい。φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
11層＝暗灰褐色土　黒味強。φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。粘性しまりともややあり。
12層＝暗灰褐色土　11層より黄味強。φ2－3㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
13層＝暗灰褐色土　依存度の高い貝層を多量に含む。粘性ややありしまりなし。
14層＝暗灰褐色土　やや明るい。φ1－2㎝の破砕貝をごく多量含む。粘性しまりともあり。
15層＝暗灰褐色土　12層とほぼ同じ土質だが、黄味が強く、ややしまり強。
16層＝暗灰褐色土　12層と15層の中間的色調。φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含むが、15層よりも細かな貝が目立つ。粘性しまりともややあり。
17層＝暗灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。φ5㎜前後の炭化物粒を少量含む。粘性しまりともややあり。
18層＝暗灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝を少量含む。φ5㎜前後の炭化物粒をごく少量含む。粘性しまりともややあり。
19層＝淡黄灰褐色土　シルト質で鉄分沈着密。粘性しまりとも強。
20層＝灰褐色土　砂質土。粘性しまりともなし。
21層＝暗灰褐色土　黄色砂多く黄味がかる。φ1－2㎝の破砕貝少量含む。粘性しまりともややあり。
22層＝SD10埋土

⑤【5－5′　1・3グリッド間トレンチ】
1層＝黄褐色土　SD1埋土。
2層＝黄褐色土　SD1埋土。
3層＝暗灰褐色土　ピット埋土。混入物少ない。粘性しまりともあり。
4層＝褐色土　焦げ茶色。混入物少ない。粘性しまりともややあり。SD5埋土？
5層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。SD5埋土。
6層＝淡黄灰褐色土　鉄分の沈着あり。粘性しまりともあり。SD5埋土。
7層＝暗灰褐色土　黒味強。φ2－3㎜の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。SK4上層。(混貝層)
8層＝淡黄灰褐色土　φ2－3㎜の炭化物粒ごく少量含む。粘性しまりともあり。SK4下層。
9層＝暗灰褐色土　②27層に対応。黄色シルトを Br. 状に多量に含む。粘性しまりともあり。
10層＝暗灰褐色土　②29層に対応。φ5㎜程の炭化物粒ごく少量含む。やや砂質がかる。粘性しまりともややあり。
11層＝暗灰褐色土　混入物少ない。粘性しまりともややあり。
12層＝暗灰褐色土　ごくまれにφ1－2㎜の炭化物粒を含む。粘性しまりともあり。
13層＝暗灰褐色土　焦げ茶色。φ2－3㎜の炭化物粒、白色粘土 Br. を少量含む。粘性しまりともあり。
14層＝暗灰褐色土　焦げ茶色。13層より暗い。φ2－3㎜の炭化物粒、白色粘土 Br. を少量含む。粘性しまりともあり。
15層＝淡黄灰褐色土　やや砂質がかるが粘性しまりともあり。
16層＝淡黄灰褐色土　やや砂質がかるが粘性しまりともあり。
17層＝淡黄灰褐色土　黒味強。砂質がかるが粘性しまりともあり。
18層＝淡黄灰褐色土　黒味強。φ2－3㎜の炭化物粒をごく少量含む。砂質がかるが粘性しまりともあり。
19層＝淡黄灰褐色土　やや砂質がかるが粘性しまりともあり。
20層＝暗灰褐色土　白味強。シルト質で粘性しまりとも強。
21層＝暗灰褐色土　かなり砂質がかり、黒味強。

⑥【6－6′　2・4グリッド間トレンチ】
1層＝淡黄灰色土　φ2－3㎜の炭化物粒ごく少量含む。やや砂質がかるが、粘性ややあり、しまりあり。
2層＝暗灰褐色土　1層と3層の中間的な色調であるが、混入物はなし、粘性しまりともややあり。
3層＝暗灰褐色土　φ2－4㎝の貝をやや多量に含む。φ1－2㎜の炭化物を少量含む。粘性しまりともややあり。(SD9埋土)
4層＝暗灰褐色土　黄灰色シルトをごく少量 Br. 状に含む。φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。φ1－2㎜の炭化物を少量含む。粘性しまりとも弱め。
5層＝暗灰褐色土　4層より暗い、φ1－2㎝の貝をやや多量に含む。φ1－2㎜の炭化物を少量含む。粘性しまりともややあり。
6層＝淡黄灰色土　1層よりもやや暗い。砂質がかるが、粘性しまりともややあり。

⑦【7－7′　SD10・SD2・SK6】
1層＝暗灰褐色土　色調は黄味がかる。淡黄色シルトをごく少量 Br. 状に含む。φ5㎜までの炭化物を少量含む。φ1－2㎝の貝も少量含む。粘性しまりともややあり。
2層＝暗灰褐色土　色調はかなり黒味強。φ1㎝前後の破砕貝をやや多量(20%程)に含む。やや砂質が仮、粘性しまりとも弱め。
3層＝暗灰褐色土　2層より明るい。2層よりも貝が少なく、粘性が高い。
4層＝暗灰褐色土　2層よりも黄味強。2層と同様の貝を少量(10%未満)含む。ごく稀に淡黄褐色シルトを含む。粘性しまりともややあり。
5層＝暗灰褐色土　3層と似る。φ5㎜までの炭化物をごく稀に含む。砂質がかりしまりは弱いが粘性はややあり、貝は含まない。
6層＝暗灰褐色土　3層と似る。φ5㎜程の炭化物を少量含む。淡黄褐色シルトを Br. 状に含む。粘性しまりともややあり。
7層＝淡黄褐色土　かなり砂質がかるが、粘性もややあり。貝はまったく含まない。
8層＝淡黄褐色土　混入物は少ないが、部分的に鉄分等沈着。φ2－3㎜の炭化物をごく稀に含む。粘性ややあり、しまりあり。
9層＝褐色土　部分的に黄色強。ベースの砂質土か。上面は、漸移的に淡黄褐色化する。粘性しまりともややあり。
9′層＝SD2の下でシルト化？しているが、基本的には9層と同じである。
10層＝暗灰褐色土　φ2－3㎜の炭化物を少量含む。シルト質で粘性しまりとも強。
11層＝淡黄褐色土　かなり黄味強。部分的にシルトの灰色を呈している。粘性・しまりともやや強め。SD2埋土。

⑧【8－8′　1・2グリッド間ベルト】
1層＝暗灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝、炭化物粒をごくまれに含む。(撹乱)
2層＝暗灰褐色土　①16層に対応。φ1－2㎝の破砕貝を少量含む。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともややあり。
3層＝暗灰褐色土　φ5㎜程の炭化物粒少量含む。粘性しまりともあり。
4層＝暗灰褐色土　黒味強(①20層に対応)。φ5㎜程の炭化物粒少量含む。砂質がかるが粘性しまりともややあり。
5層＝暗灰褐色土　白みがかる暗灰色シルト。φ5㎜程の炭化物粒やや多量に含む。遺物多い。粘性しまりともあり。
6層＝淡黄褐色土　鉄分の沈着が目立つ。粘性しまりともあり。
7層＝暗灰褐色土　黒味強。混入物は少ないが粘性しまりともあり。

⑨【9－9′　SK6・SK7】
1層＝暗灰褐色土　⑦土層図の1層に対応。
2層＝暗灰褐色土　1層よりもかなり暗い色調。φ1－2㎝の貝を含む。混貝土を Br. 状に含む。ややや砂質がかるが、粘性しまりともややあり。
3層＝暗灰褐色土　2層より黒い。破砕貝をやや多量に含む。⑦土層図の2層に対応。
4層＝暗灰褐色土　ややシルト質。φ5－10㎜の炭化物粒をごく少量含む。砂質がかるが、粘性しまりともややあり。地山の崩落土。

⑩【10－10′　SD6～10】
1層＝暗灰褐色土　黄灰色シルトを Br. 状に含み、やや黄味がかる。φ1－2㎝大の小降りの破砕貝を多量に含む。φ1－2㎜の炭化物をごく少量含む。粘性ややあるが、しまり弱。
2層＝暗灰褐色土　色調は1層より暗い。φ1－2㎝の破砕貝を多量、φ1－2㎜の炭化物を少量含む。粘性しまりともややあり。SD6埋土。
3層＝暗灰褐色土　2層とよく似た土であるが、多少黄灰色シルトが混じる。やや締まりの強め。SD7・8埋土。
4層＝暗灰褐色土　1層よりやや暗い。φ1－2㎝の破砕貝を少量含む。1～3層と比べてかなり少ない。φ2－3㎜の炭化物を少量含む。粘性しまりともあり。SD10埋土。
5層＝暗灰褐色土　φ1－2㎝の破砕貝をやや多量に含む。粘性しまりとも弱。ピット。
6層＝暗灰褐色土　灰色味強。貝は含まないが、φ1－2㎜の炭化物を少量含む。粘性しまりともややあり。SD6埋土ごく少量ではあるが、φ1－2㎜の焼土粒を含む。粘性しまりとも強。SK24埋土。
7層＝暗灰褐色土　6層よりも明るい。φ1－2㎜の炭化物をごく少量含む。粘性しまりとも強。
8層＝黒褐色土　黄灰色シルトを Br. 状に少量含む。粘性しまりとも強。
9層＝暗灰褐色土　φ3－4㎝のシジミ・ハマグリを中心に、遺存状態の良好な貝を多量に含む。粘性しまりともややあり。
10層＝暗灰褐色土　7層に似る。混入物が少ない。やや砂質がかるが、粘性しまりともややあり。

遺構名称	Gr.	上層	埋　土　等	検出高	底面高	遺物番号
SD01	1・3	○	断面①③⑤、古瀬戸後期～17世紀の陶片少量出土	-1.6	-1.75	113-115,147,148
SD02	3・4	○	断面⑦、SK22は続きか	-1.7	-1.8	116
SD03	1・2	○	黄灰色土(SD1より灰色味)	-1.55	-1.65	117
SD04	2		暗灰褐色土、破砕貝やや密、黄灰Br.まばら	-1.55	-1.7	121
SD05	1・3		SX1中位(貝層下)、断面⑤	-1.65	-1.9	118,119,156
SD06	2		断面⑩	-1.65	-1.9	
SD07	2		断面⑩	-1.75	-2.0	
SD08	2		断面⑩	-1.7	-1.9	120,122
SD10	2		断面①⑩	-1.65	-1.75	120,122
SD11	1		SX1中位(断面②)、複数が重複、西部は貝・破砕貝密	-1.7	-2.2	19,49
SK01	1	○	断面①	-1.25	-1.7	72,73
SK02	3	○	断面③	-1.65	-2.0	
SK03	3		井戸、断面③	-1.65	-3.2	96～108
SK04	3		断面⑤、第3図	-1.6	-1.7	77～95,149～153
SK05	4	○	灰色シルト(Br.土)＝甕埋設坑、断面②	-1.2	-1.85	
SK06	3・4	○	断面⑦⑨	-1.6	-2.15	75,109
SK07	4	○	断面⑦	-1.7	-1.85	109,111
SK11	4	○	SD2を切る、断面③	-1.2	-1.85	
SK12	2	○	暗灰褐色、破砕貝混	-1.6	-1.65	
SK13	2		断面④	-1.75	-1.8	
SK14	3		暗灰褐色、淡灰黄色混、SD1・2に切られる	-1.65	-1.8	154
SK16	3		暗灰褐色、破砕貝わずか、SD5を切る	-1.65	-1.85	
SK17	3		断面③	-1.8	-2.65	
SK19	2		混貝土、不詳	-1.7	-1.85	
SK20	3	○	暗灰褐色シルト、黒味強	-1.85	-2.1	
SK21	2		暗灰褐色シルト	-1.6	-1.7	
SK22	3	○	断面②6層、SD2の続き、SD1に切られる	-1.7	-1.85	
SK23	2		暗茶褐色土、SX2の下	-1.85	-1.95	
SK24	2		暗灰褐色土、破砕貝わずか、SD7に切られる	-1.9	-2.0	
SK25	4		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-1.9	-2.05	110
SX01	1・2		断面①②、自然流路・溝・貝層など	-1.6	-2.5？	1～18,20～48,50～71,142,143,146,155
SX02	2・4		2Gr.西部の貝層、貝塚2・SD6～10など	-1.5		74
SX03	4		断面③④、土坑または落ち込み、流路？	-1.6	-2.05	76
P01	3	○	暗灰褐色土	-1.6	-1.8	
P02	2		暗灰褐色土、破砕貝混	-1.6	-1.7	
P03	2		暗灰褐色土、破砕貝混	-1.6	-1.75	
P04	2	○	暗灰褐色土、破砕貝混	-1.6	-1.75	
P05	3	○	暗灰褐色土、黄灰シルトBr.状に混	-1.6	-2.1	
P06	3	○	暗灰褐色土、黄灰シルトBr.状に混	-1.7	-1.85	
P07	2	○	黄灰色砂シルト	-1.55	-1.65	
P08	2		破砕貝・暗灰Br.・灰色Br.混成	-1.7	-2.1	
P09	2		暗灰褐色土、破砕貝密	-1.8	-1.9	
P10	2		暗灰褐色・淡黄灰色混成、破砕貝密、SX2切る	-1.6	-1.75	
P11	3		灰色Br.主体、貝・炭まばら	-1.65	-2.2	
P12	3		暗灰色土、炭・焼土小粒わずか	-1.7	-1.9	
P13	1		暗灰色土、灰色Br.・黄灰Br.混	-1.7	-1.85	
P14	1		暗灰色土、灰色Br.・黄灰Br.まばら	-1.75	-1.95	
P15	1		暗灰色土、黒味強、炭・焼土小粒まばら	-1.75	-2.2	
P16	1		暗灰色土、炭・焼土小粒わずか	-1.75	-1.9	
P17	2		暗灰色シルト、貝やや密、P20の直上	-1.6	-1.85	123
P19	3		灰青色砂質砂シルト	-1.7	-1.85	
P20	3		暗灰青色砂質砂シルト	-1.8	-1.95	
P22	1		暗灰褐色土、Br.状に貝混	-1.75	-2.0	
P23	2		暗灰褐色土、Br.状に貝混	-1.7	-2.25	124
P24	2		黒色土、破砕貝密	-1.7	-2.05	
P25	2		黒色土、破砕貝密	-1.65	-1.85	
P26	3		SD05の一部？	-1.65	-2.0	
P27	3		暗灰色土、灰色Br.密、貝混	-1.9	-2.1	
P28	3		灰色土、黒味強、炭小粒まばら	-1.8	-2.25	
P29	3		暗灰色土、シルトBr.密、SD1に切られる	-1.8	-1.95	
P32	3		暗灰色シルト	-1.6	-1.75	
P34	2		暗灰色シルト、破砕貝密	-1.7	-1.9	
P35	2		暗灰色シルト、破砕貝密	-1.65	-1.75	
P36	1		暗灰色土、破砕貝やや密	-1.65	-1.95	
P37	1		暗灰色土、破砕貝やや密、P44切る	-1.6	-2.15	125～128
P38	2		暗灰褐色土、炭小粒まばら	-1.7	-1.8	
P39	2		暗灰褐色土、黄色味強、炭小粒まばら	-1.65	-1.8	
P41	2		暗灰褐色土、貝密、SK21切る、SK21より黒味強	-1.8	-2.0	
P42	2			-1.65	-1.95	
P43	1		暗灰色粘性土、やや黄味強、炭粒混、SD5・SX1貝層に先行	-1.8	-2.0	
P44	1		暗灰色土、黒味強、炭粒やや密、SX1下層面(P63の上部)	-1.75	-2.05	129,130
P45	2		暗灰色土、破砕貝まばら	-1.65	-1.7	131
P46	4		暗灰色土	-1.65	-1.9	
P47	4		暗灰色土、白味の強い土混	-1.7	-2.15	
P48	2		暗灰色土、やや黒味強、破砕貝まばら	-1.95	-2.25	
P49	2		暗灰色土、やや黒味強、破砕貝まばら	-1.9	-2.1	
P50	2		暗灰色土、やや黄味、破砕貝まばら、SK13下	-1.8	?	
P51	2		暗灰色土、破砕貝まばら	-1.8	-2.1	
P52	4		暗灰色土、破砕貝密、SD6を切る	-1.7	-1.8	132
P53	3		暗灰色・灰色小Br.混成	-1.6	-1.95	
P54	3		灰色土(暗灰色小Br.混成)	-1.6	-1.8	133,134
P55	2		暗灰色土、貝密	-1.7	-1.9	
P56	2		暗灰色土、破砕貝まばら	-1.8	-1.95	
P58	2		暗灰褐色土、貝密(シジミ主体)	-1.75	-1.95	
P59	2		暗灰色土、黄色味・シルト質強	-1.95	-2.05	
P60	2		暗灰褐色土、黒味強、破砕貝まばら	-1.95	-2.3	
P61	2		暗灰褐色土、破砕貝わずか、未掘	-1.9	?	
P62	1		暗灰シルト、貝密	-1.6	-1.95	
P63	1		暗灰砂質土、炭片わずか(P63と同一か)	-1.75	-2.05	135
P65	2		暗灰色土、シルトがかる、未掘	-1.9	?	
P66	2		暗灰色土、焦げ茶がかる、シルトBr.状	-1.6	-1.7	
P67	2		暗灰色土、破砕貝まばら	-1.55	-1.7	
P68	2		暗灰色土、破砕貝まばら	-1.75	-1.85	
P69	2		断面⑩	-1.85	-2.1	
P70	1		暗灰色土、破砕貝まばら	-1.8	-2.05	
P71	3		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-2.0	-2.55	
P72	3		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-1.95	-2.2	
P73	3		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-1.9	-2.3	
P74	3		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-2.0	-2.1	
P75	4		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-2.0	-2.1	
P76	4		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-2.0	-2.25	
P77	4		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-1.95	-2.05	
P78	4		基盤層削平時検出、暗灰砂質？	-1.9	-2.1	

第1表　主要遺構一覧

写真１　調査区全景（東から）

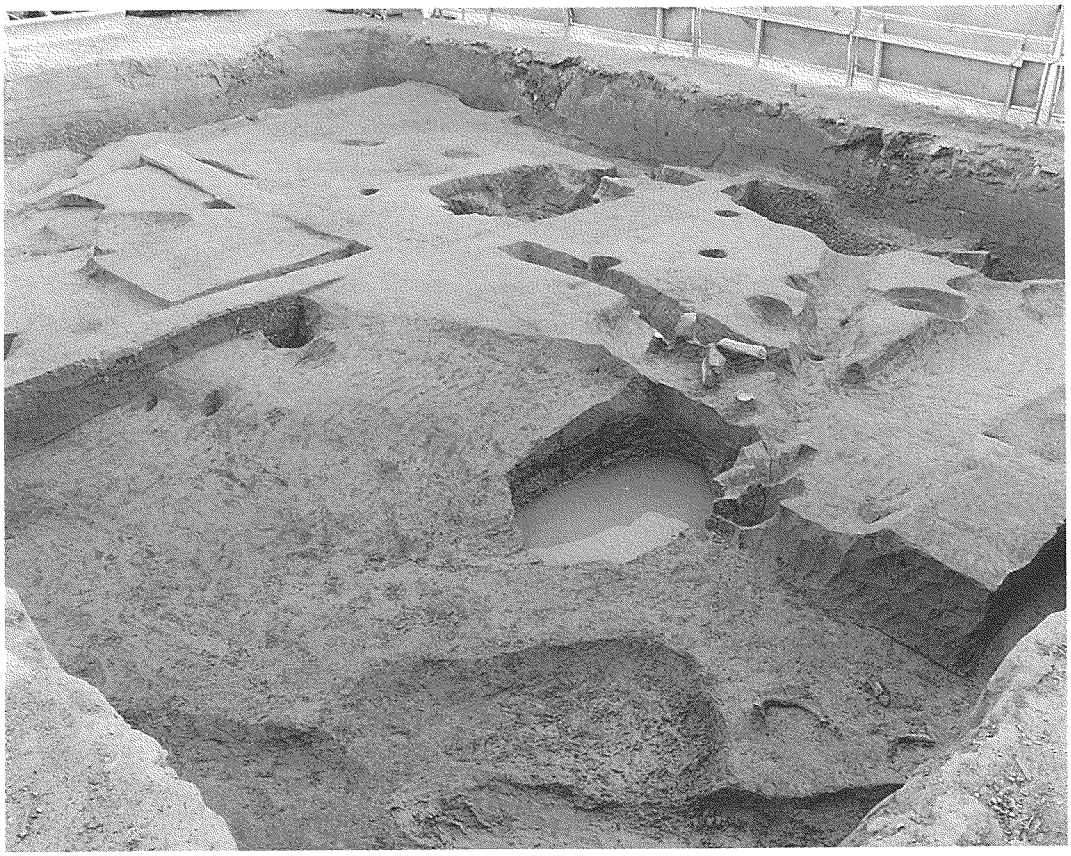


写真２　調査区全景（北西から）

写真３　全景（南西から）

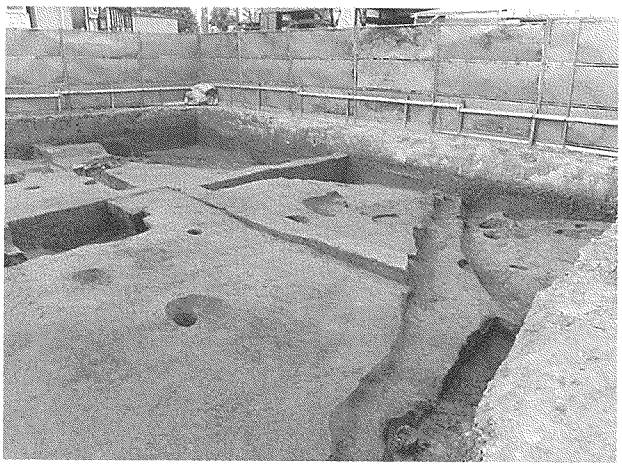


写真４　全景（南東から）

写真５　１Gr. 貝層検出状況（南から）

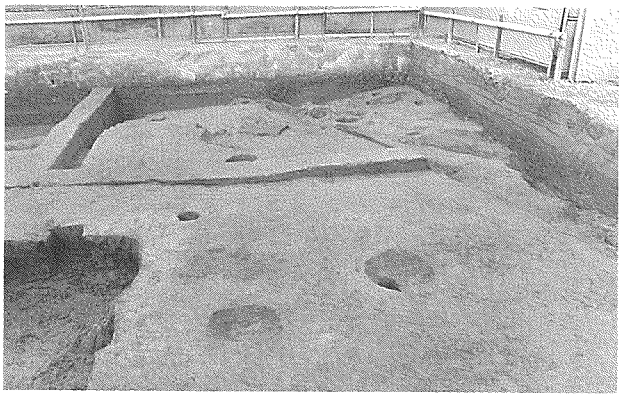


写真６　調査区東半（南から）

写真７　１Gr. 貝層検出状況（北東から）

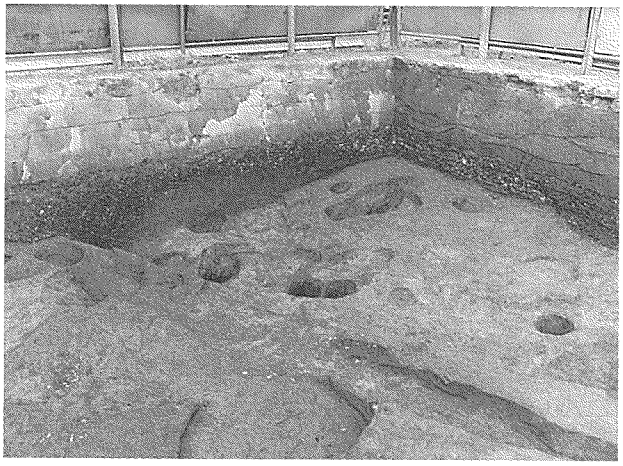


写真８　２Gr. 貝層断面（南西から）

写真９　１Gr. 西壁貝層断面（東から）

写真10　２Gr. SX２貝層断面（南東から）

写真11　SK 4 半掘状況（南西から）

写真12　SK 4 完掘状況（南西から）

写真13　SD 1 完掘状況（南から）

写真14　SD 5 完掘状況（北から）

写真15　SK 3 土層断面（北から）

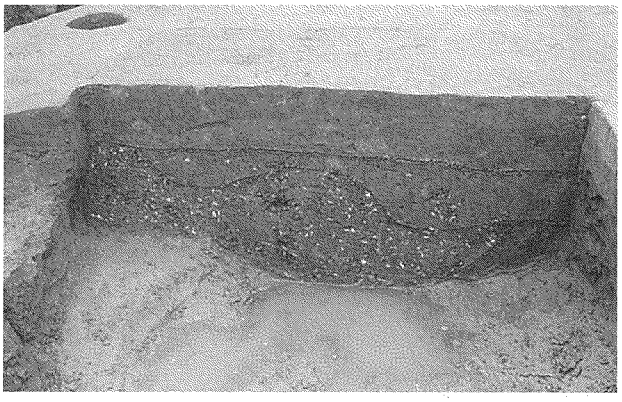


写真16　SK 6 土層断面（東から）

写真17　SK 3 下部井戸枠検出状況（北西から）

写真18　P44遺物出土・P37貝層状況（西から）

期の SD11あるいはそれ以前の流路との関係は不明である。南端は SK 3 に切られている。

SK 3 は井戸と確認したが、名称は現場記録のまま用いた。貝を大量に含む埋土は、井戸を廃棄した後の埋め戻し土と考えられた。貝混じりの黒色粘性土の下には、井戸枠と桶が残存していた。井戸枠は、方形縦板組横桟式に該当すると思われるが、廃絶時に材の抜取りがおこなわれているらしく、確定はできない。混貝土層は横桟付近まで堆積し、その下は均質な砂層で掘削当初には基盤をなすものと思われた。しかし、この砂層中から完形の桶を検出したため、この部分の砂層は二次的に堆積したことが確認された。地下水位は井戸枠材の上端付近にあって、砂層以下は湧水のため詳細が把握できなかった。しかし桶と上部の井戸枠は、平面的に重複しており、井戸枠材の下端は桶の中に30cm程食い込んでいた。この状況は、桶を埋設した井戸が改修された可能性を示すものと考えている。西側にあって SK 3 に切られた SK17は、こうした改修の名残かもしれない。SK 3 は、14世紀末頃に埋没したものと考えられる。

建物は想定できないが、P23・63・62とP27・11・28は、それぞれ等間隔で一列に並ぶ。これらに限らず、多くのピットの配列は SX 1 と同じ方向性が感じられる。用途不明の石材や陶器・土器・鉄器、混貝土を含んでいた SK 4 は、13世紀中頃の遺構である。不明瞭ながら、SD 5 と P62を切っていた可能性が強い。

注2　現在は沈静化しているが、この付近は1961～1994年に約 1 m地盤沈下している。地盤沈下は、近代以降のように極端ではないにせよ、濃尾平野の基本的な運動として継続している。遺跡形成以降の高度は海面変化との関係も複雑で、正確な復元がむずかしい。ただし、中世の生活面は、当時の海面から十分な高さにあったことは間違いない。参考：『新修名古屋市史　第 8 巻』(1997)

5　遺物

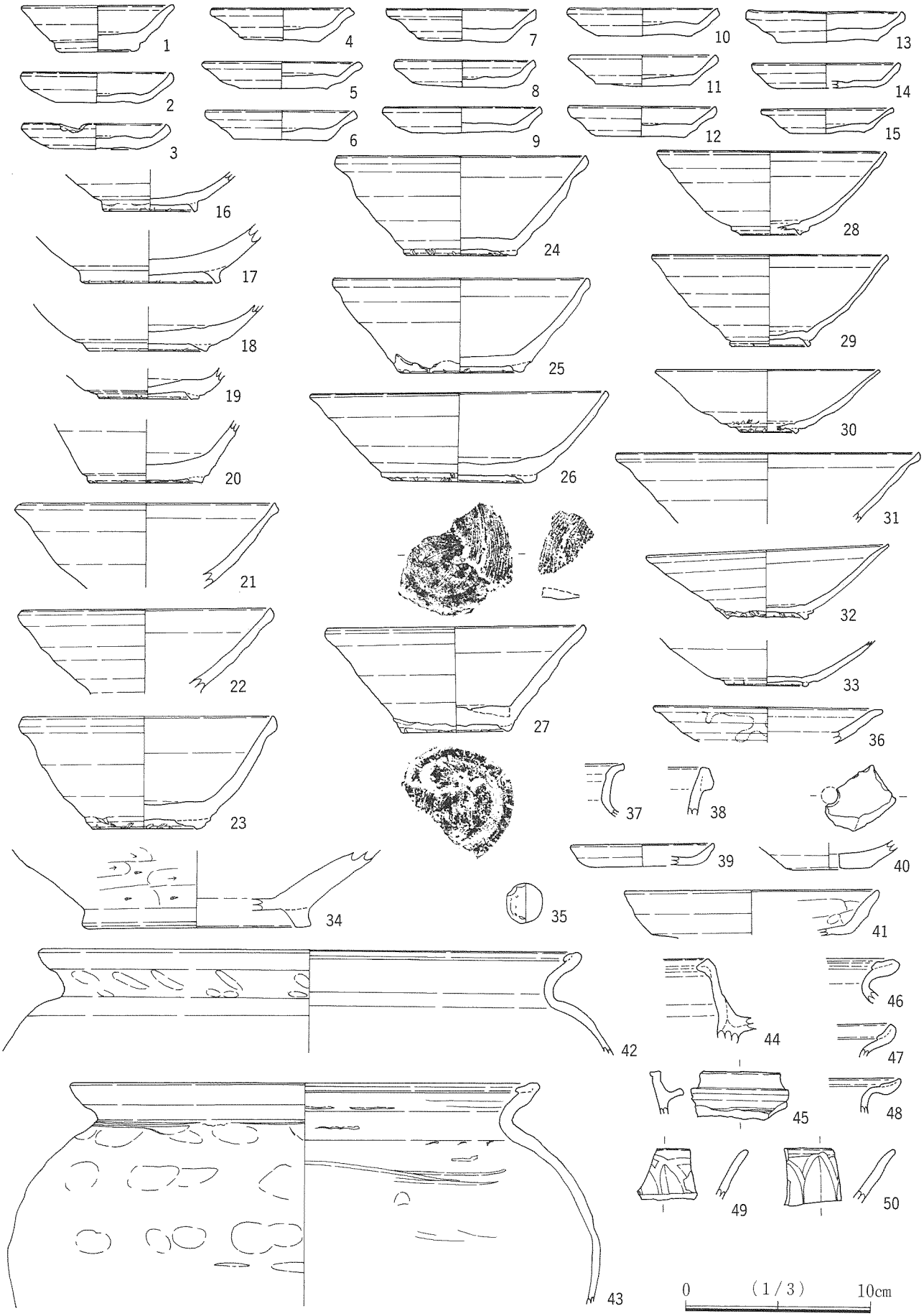
出土遺物は、コンテナケースに約10箱分（発見・認定届出数）である。主な遺物を第 6 ～ 8 図に掲載し、観察内容を第 2 ・ 3 表にまとめた。遺物写真（写真19・20）は、実測遺物の一部を掲載した。

遺物の主体は、13世紀を中心とする山茶碗類である。これに伴う土鍋類は相当量認められるが、かわらけや施釉陶器はわずかである。また壺・甕類も少ない印象がある。中国陶磁は、図示したものを含めて 5 片ほどであった。砥石・火打石・銅銭・陶丸・土錘（須恵質に近いものが多い）は、全点を掲載した。陶片円盤については、同様な意図で加工したと思われる陶片が他にも多数ある。素材は、南部系山茶碗（ほとんどが底部）と常滑産甕胴部に限られる。

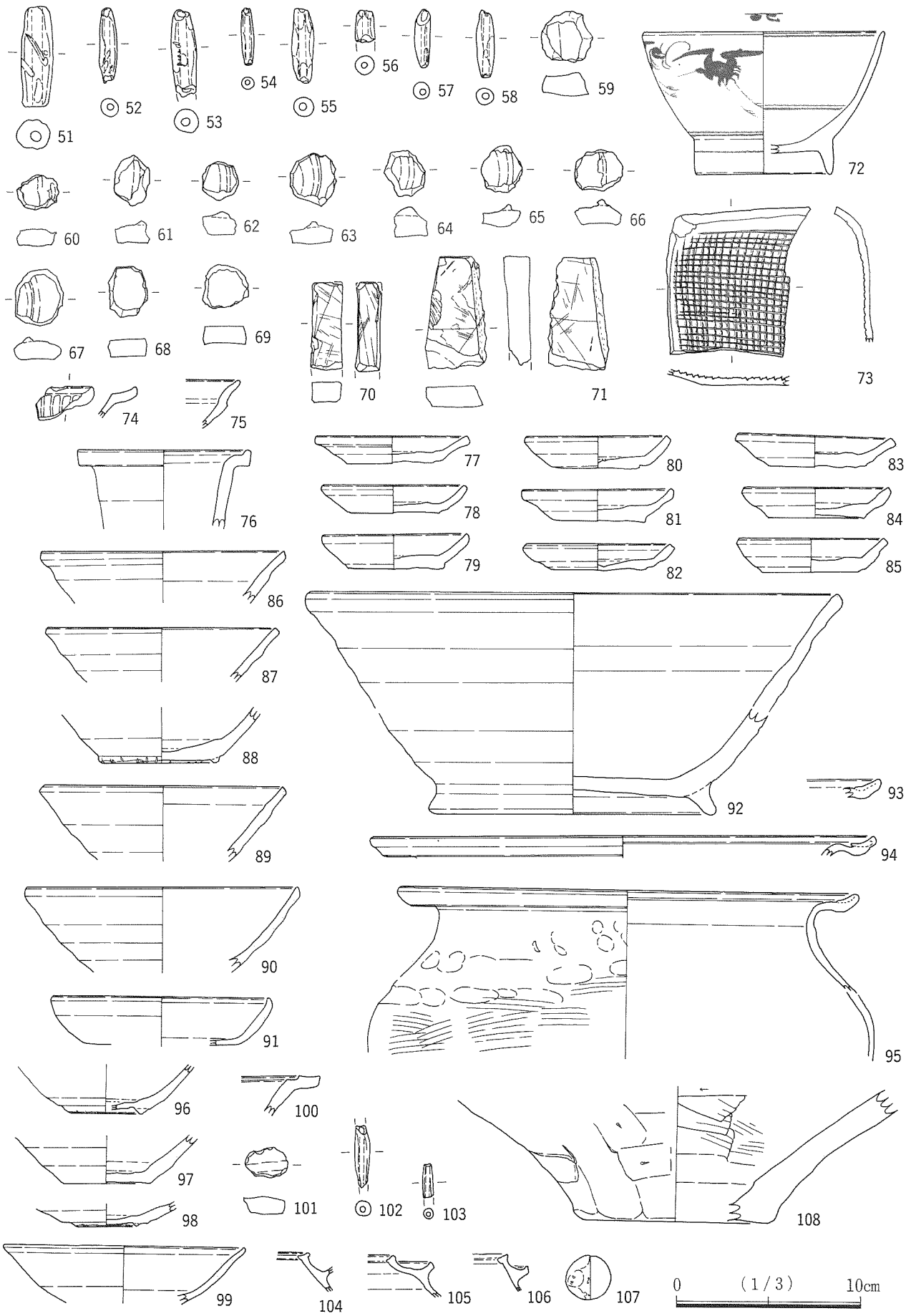
SK 4 出土の棒状の石 5 点は、チャート 1 点を除いては、柔らかい石質で風化著しい。すべて搬入品であることは間違いないが、目的・用途は不明である。SX 1 下層の火打石は、12世紀後半～13世紀のものであり、現在のところ市内で最古の出土例となる。他の 2 点は、18世紀初頭以前に位置付けられる。チャートの自然礫を用い、やや大きめで廃棄する状況は、戦国～近世前期の名古屋台地の出土例と共通する。

以上のうち特に土器・陶器については、種別や産地・型式比定など点数（数量）を把握すべきところであるが、報告書に盛り込むことができなかった。総じて日常生活用具に限られる様相であるが、濃尾平野や名古屋台地上の他の中世集落との比較など、いずれ必要となる作業である。80m²という小面積のデータの有効性が問題となるであろうが、おそらく今後積み重ねられていくであろう周辺の調査データも、同様な規模が多いと予測されるので、有効な分析方法の採用が重要である。

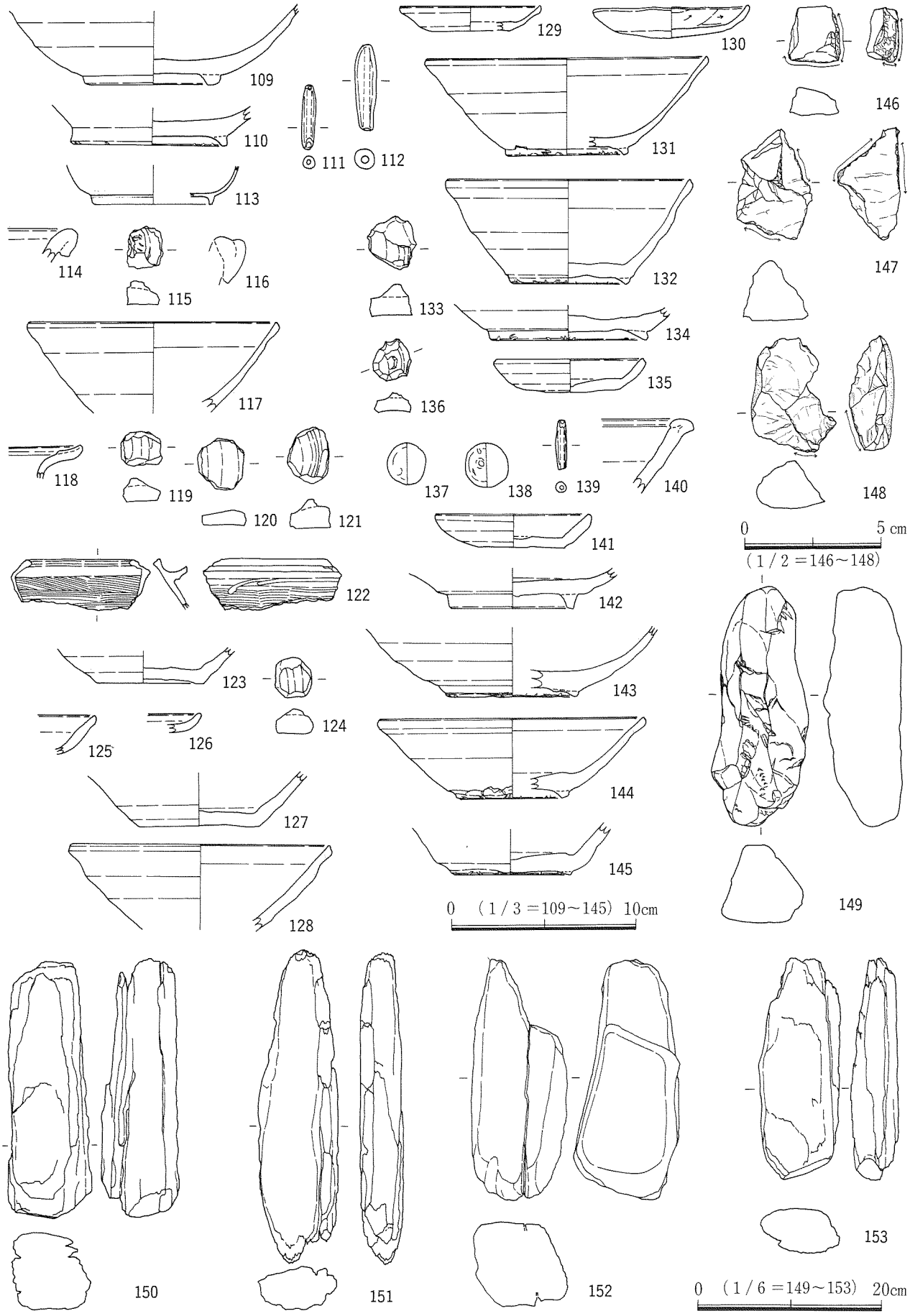
SK 3 の井戸桶および SK 4 出土の鉄器の保存処理の完了は、本書の刊行と同じく 3 月末である。このため、これらの遺物は本書に図や写真を掲載できなかった。何らかの形で追加報告を準備したい。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
(1/3)
10cm

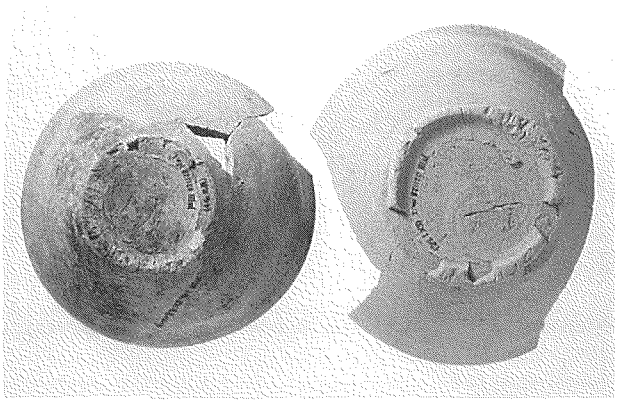
第6図　遺物実測図(1)


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0
(1/3)
10cm

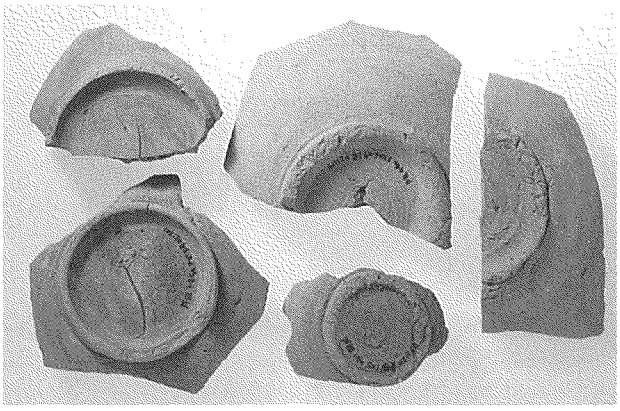
第７図　遺物実測図(2)


109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
0 5 cm
(1/2＝146～148)
0 (1/3＝109～145) 10cm
0 (1/6＝149～153) 20cm

第8図　遺物実測図(3)

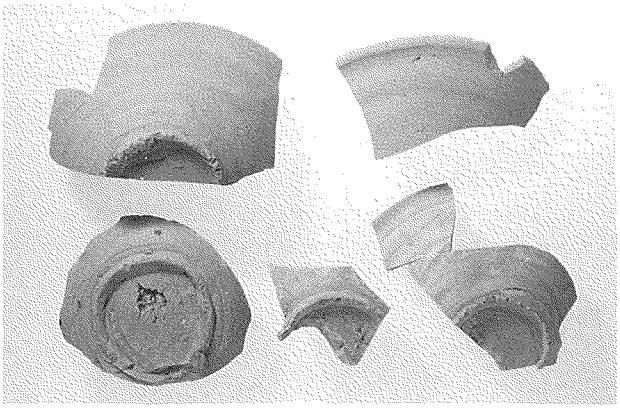


No.24・26

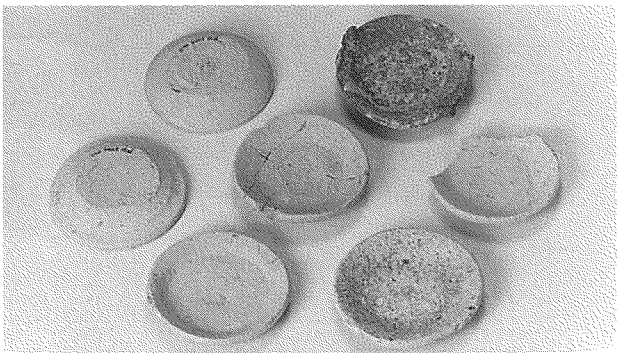


No.17・109・143・142・1

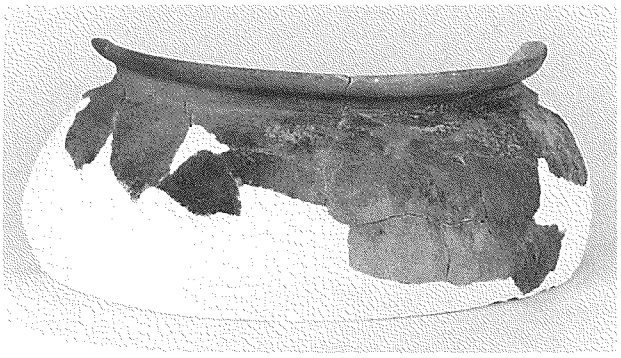
No.32・28・30・33・15・14



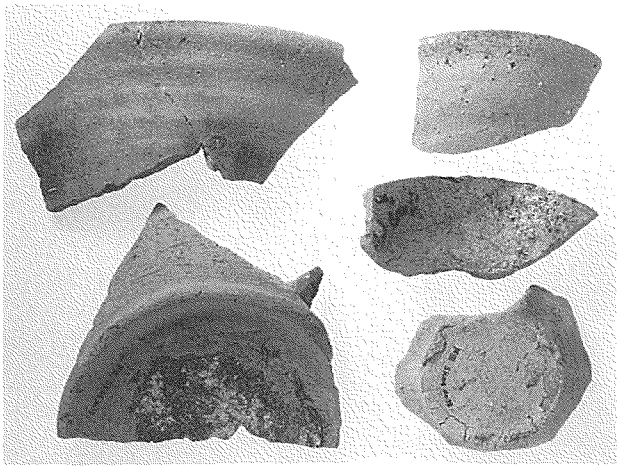
No.131・31・19・16・29



No.80・83・81・85・78・82・77



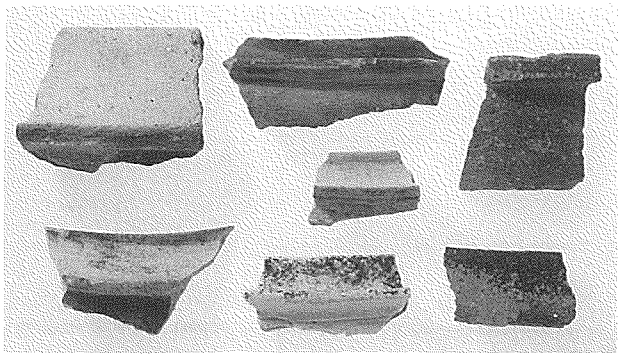
No.43



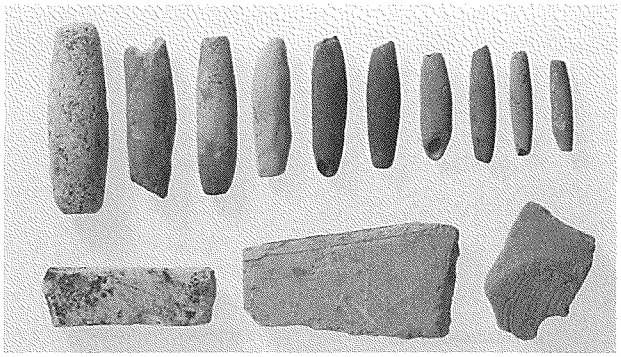
No.92（左2点）・90・89・88

No.42・94・93・46・95・48

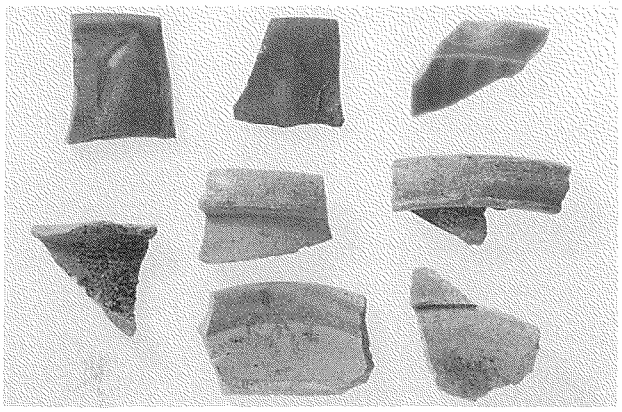
写真19　出土遺物(1)（遺物番号は上段から順に左から右への繰り返し順）



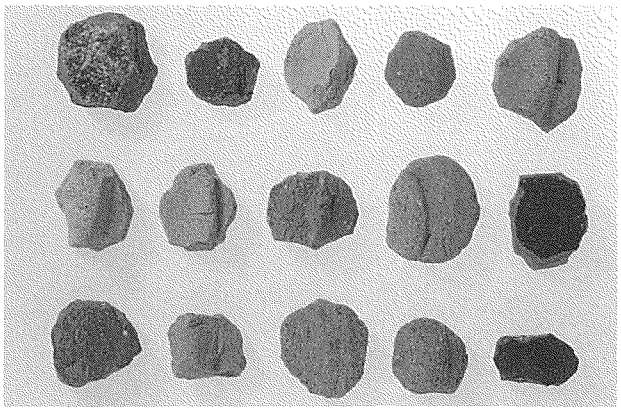
No.44・122・76・106・105・45・116



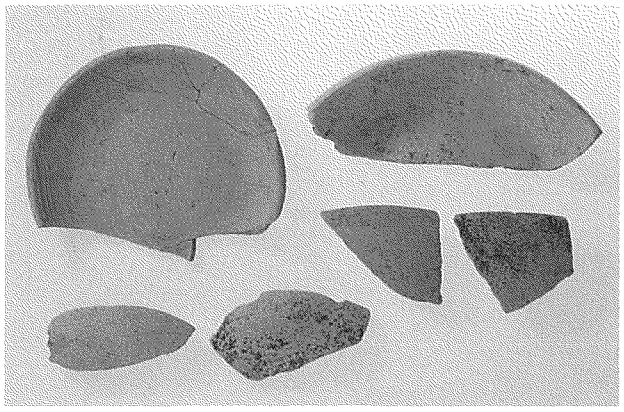
No.51・53・112・55・52・58・57・111・54・139／70・71・40



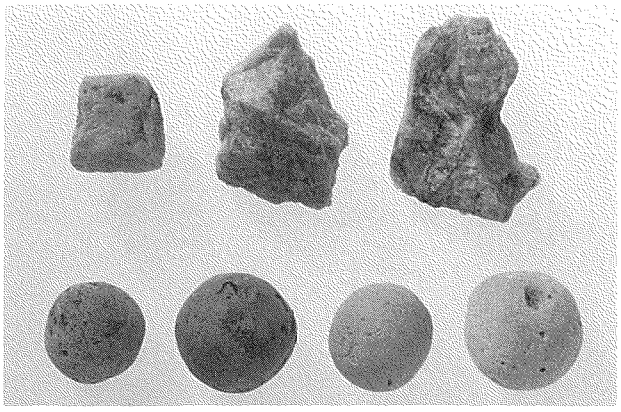
No.50・49・74・37・38・114・36・100



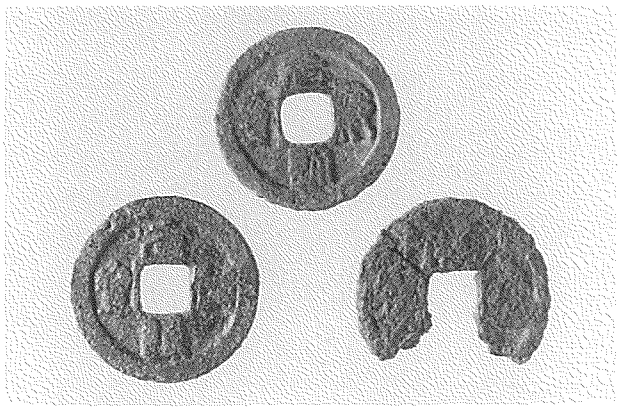
No.59～63／64～68／69・119・120・124・101



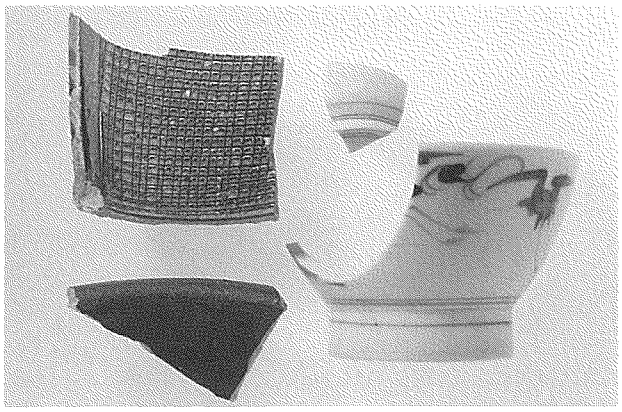
No.130・91・125・75・126・39



No.146・147・148／35・107・137・138



No.154・155・156



No.73・113・140・72

写真20　出土遺物(2)（遺物番号は上段から順に左から右への繰り返し順）

No.	器　種　名	出　土　位　置	法　　量(cm)	遺存部	観　察　内　容	写真
1	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩	口径8.4,底径4.6,器高2.6	1/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
2	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 下層No. 5	口径8.4,底径4.0,器高1.9	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：青灰	
3	山茶碗(小皿・南部系)	SD11(SX 1 中層)	口径8.2,底径5.0,器高1.4	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
4	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 (No.18)	口径7.9,底径4.4,器高1.9	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
5	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩	口径8.9,底径4.8,器高1.5	2/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
6	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩	口径8.4,底径5.0,器高1.6	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
7	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩(No.18)	口径8.2,底径4.8,器高1.8	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
8	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩	口径7.8,底径5.1,器高1.5	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
9	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩	口径8.8,底径5.4,器高1.4	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
10	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩	口径8.4,底径5.2,器高1.5	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
11	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 南肩	口径8.3,底径5.3,器高1.7	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
12	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 北壁(断面①20層)	口径8.2,底径5.2,器高1.7	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
13	山茶碗(小皿・南部系)	SX 1 下層(No. 4)	口径8.7,底径5.5,器高1.9	3/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
14	山茶碗(小皿・東濃系)	SX 1 上面	口径8.2,底径6.7,器高2.0	1/3	焼成：やや良、胎土：やや粗、色調：黄灰	○
15	山茶碗(小皿・東濃系)	SX 1 南肩	口径7.3,底径3.9,器高1.4	1/3	焼成：良好、胎土：密、色調：灰、No.129と接合	○
16	山茶碗(東濃系)	SX 1 西部貝層上位	底径5.2,残高2.3	1/4	焼成：やや不良、胎土：やや粗、色調：黄灰	○
17	山茶碗(東濃系？)	SX 1 下層(No. 2)	底径7.6,残高3.3	1/3	焼成：やや良、胎土：密、色調：淡黄～灰	○
18	山茶碗(南部系)	SX 1 下層(No. 7)	底径6.6,残高2.5	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰オリーブ	
19	山茶碗(東濃系)	SD11(SX 1 中層)	底径5.5,残高1.7	1/1	焼成：良好、胎土：やや良、色調：灰	○
20	山茶碗(南部系)	SX 1 南肩(No. 3)	底径6.2,残高3.5	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：淡黄	
21	山茶碗(南部系)	SX 1 南肩	口径14.4,残高4.6	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
22	山茶碗(南部系)	SX 1 貝層下	口径14.0,残高5.6	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
23	山茶碗(南部系)	SX 1 下層(No. 6・9)	口径14.2,底径6.4,器高6.2	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
24	山茶碗(南部系)	SX 1 南肩(4 Gr.北西No. 1 他)	口径14.0,底径6.2,器高5.5	1/3	焼成：良好、胎土：やや密、色調：淡黄	○
25	山茶碗(南部系)	SX 1 南肩	口径14.2,底径7.0,器高5.3	1/10	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
26	山茶碗(南部系)	SX 1 下層(No.12)	口径16.4,底径8.6,器高5.1	2/3	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰	○
27	山茶碗(南部系)	SX 1 南肩	口径14.4,底径6.0,器高5.8	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、糸切り修整痕あり	
28	山茶碗(東濃系)	SX 1 西部貝層上位	口径12.6,底径3.4,器高4.7	1/10	焼成：良好、胎土：やや密、色調：黄灰	○
29	山茶碗(東濃系)	SD11(SX 1 中層)	口径13.0,底径4.4,器高5.0	1/10	焼成：良好、胎土：やや密、色調：黄灰	○
30	山茶碗(東濃系)	SX 1 貝層上	口径12.4,底径3.0,器高3.5	1/4	焼成：良好、胎土：やや密、色調：黄灰	○
31	山茶碗(東濃系)	SX 1 下部	口径16.8,残高3.9	1/6	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰	○
32	山茶碗(東濃系)	SX 1 (No. 2)	口径13.4,底径4.6,器高4.1	2/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
33	山茶碗(東濃系)	SX 1 西部貝層上位	底径4.6,残高2.6	1/10	焼成：良好、胎土：やや密、色調：黄灰	○
34	鉢(南部系)	SX 1 (A層最下部)	底径12.6,残高4.3	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
35	陶丸	SX 1 南肩	径2.3,重量9.8 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
36	緑釉小皿(古瀬戸)	SX 1 西部貝層上位	口径12.6,残高2.0	1/8	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰、釉：オリーブ灰	○
37	小型壺	SX 1 (A層最下部)	残高3.0	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰、釉：自然釉	○
38	四耳壺(古瀬戸)	SX 1 (SD11貝層下)	残高2.5	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰、釉：淡オリーブ	○
39	かわらけ(小皿)	SX 1 南肩	口径8.0,底径6.0,器高1.2	1/6	焼成：良好、胎土：やや密、色調：浅黄橙	○
40	土師器？(小皿)	SX 1 南肩(1 Gr.東部)暗灰上位	底径4.2,残高1.6	1/6	焼成：やや良、胎土：粗、色調：にぶい褐、底面糸切り	○
41	かわらけ(皿)	SX 1 (No. 3)	口径14.0,底径10.8,残高2.4	1/6	焼成：やや良、胎土：やや密(砂っぽい)、色調：淡橙、手捏ね・ナデ	
42	伊勢型土鍋	SX 1 下層(43に近接)	口径29.6,残高5.6	1/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：にぶい黄橙	○
43	伊勢型土鍋	SX 1 下層(42に近接)	口径25.6,残高12.3	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：黄灰～黒褐	○
44	羽付鍋	SX 1 貝層上面	残高4.7	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：浅黄橙	○
45	羽釜型土鍋	SX 1 貝層上面	残高2.4	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：浅黄橙	○
46	伊勢型土鍋	SX 1 南肩貝層下(上位)	残高2.5	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：浅黄橙～黒褐	○
47	伊勢型土鍋	SX 1 貝層下	残高2.7	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：浅黄橙	
48	伊勢型土鍋	SX 1 南肩(1 Gr.東部)暗灰上位	残高1.8	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：淡黄灰	○
49	青磁碗(中国製)	SD11(SX 1 中層)	残高2.5	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰、釉：オリーブ灰	○
50	青磁碗(中国製)	SX 1 貝層下	残高2.9	細片	焼成：良好、胎土：やや密、色調：オリーブ	○
51	土錘	SX 1 南肩	長5.6,径1.8,孔径0.5,重量17.2 g	1/1	焼成：やや良、胎土：粗、色調：淡橙	○
52	土錘	SX 1 南肩貝層下	長4.2,径1.0,孔径0.35,重量4.0 g	1/1	焼成：良好、胎土：密、色調：暗赤褐	○
53	土錘	SX 1 貝層上	長4.8,径1.3,孔径0.45,重量7.8 g	4/5	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：赤褐～にぶい黄橙	○
54	土錘	SX 1 A層最下部	長3.2,径0.7,孔径0.2,重量1.2 g	1/1	焼成：良好、胎土：やや密、色調：橙	○
55	土錘	SX 1	長4.1,径1.1,孔径0.35,重量4.5 g	1/1	焼成：やや不良、胎土：やや密、色調：浅黄橙	○
56	土錘	SX 1	長1.8,径1.1,孔径0.35,重量1.8 g	1/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：にぶい黄橙	
57	土錘	SX 1	長3.3,径1.0,孔径0.25,重量2.0 g	2/3	焼成：やや不良、胎土：密、色調：赤橙	○
58	土錘	SX 1 南肩	長3.8,径1.0,孔径0.3,重量3.3 g	1/1	焼成：良好、胎土：密、色調：灰青	○
59	陶片円盤	SX 1 南肩	径2.7-2.8,厚1.1,重量13.2 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、釉：暗赤褐、常滑産甕	○
60	陶片円盤	SX 1 南肩	径2.0-2.3,厚0.9,重量4.7 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：にぶい褐～にぶい赤褐、常滑産甕	○
61	陶片円盤	SX 1 南肩	径2.0-2.9,厚1.2,重量6.0 g	1/1	焼成：不良、胎土：やや密、色調：浅黄橙、山茶碗	○
62	陶片円盤	SX 1 A層最下部	径1.8-2.0,厚1.3,重量5.9 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	○
63	陶片円盤	SX 1 貝層上	径2.5-2.9,厚1.2,重量8.9 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	○
64	陶片円盤	SX 1	径2.0-2.8,厚1.6,重量9.4 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	○
65	陶片円盤	SX 1	径2.2-2.6,厚1.2,重量5.9 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	○
66	陶片円盤	SX 1	径2.3-2.6,厚1.4,重量8.6 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：青灰、山茶碗	○
67	陶片円盤	SX 1	径2.7-3.1,厚1.2,重量10.2 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗(摩滅)	○
68	陶片円盤	SX 1	径2.2-2.8,厚0.9,重量9.0 g	1/1	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：赤褐、甕	○
69	陶片円盤	SX 1	径2.5-3.4,厚0.9,重量8.7 g	1/1	焼成：やや不良、胎土：粗、色調：赤褐、甕	○
70	砥石	SX 1 貝層上	長4.9,幅1.6,厚1.2,重量20.0 g		石材：凝灰岩？、棒状、五面に使用痕	○
71	砥石	SX 1　4 層	長6.3,幅3.3,厚1.3,重量42.6 g		石材：凝灰岩？、板状、二面に使用痕、折損節理面の角も使用	○
72	広東碗(瀬戸産磁器)	SK 1　北壁(①断面 2 層)	口径13.4,底径7.6,器高7.8	1/3	焼成：良好、色調：白	○
73	卸皿(瀬戸美濃産陶器)	SK 1　北壁(①断面 2 層)	残存幅8.2	1/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：淡黄、釉：鉄錆	○
74	折縁小鉢(中国青磁)	SX 2 上面	残高1.7	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰白、釉：淡青緑	○
75	かわらけ	SK 6 (⑦断面 3 層)	残高2.8	細片	焼成：良好、胎土：やや密、色調：淡黄橙	○
76	三筋壺(知多窯産)	SX 3	口径11.6,残高4.4	1/8	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、釉：にぶい赤褐	○
77	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No. 7)	口径8.6,底径4.8,器高1.5	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
78	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No.12)	口径8.1,底径5.0,器高1.6	2/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○

第 2 表　遺物観察表(1)

No.	器種名	出土位置	法量(cm)	遺存部	観察内容	写真
79	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No.11)	口径8.2,底径5.4,器高2.0	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
80	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No. 2)	口径8.1,底径5.1,器高1.9	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
81	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No. 1)	口径8.4,底径5.2,器高1.8	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
82	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No. 6)	口径8.3,底径5.2,器高1.9	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
83	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No.25)	口径8.8,底径5.3,器高1.9	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、鉄分沈着	○
84	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No.29)	口径8.2,底径5.2,器高1.7	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
85	山茶碗(小皿・南部系)	SK 4 (No. 5)	口径8.3,底径5.3,器高1.9	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
86	山茶碗(南部系)	SK 4 (No. 4・8)	口径15.6,残高2.9	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
87	山茶碗(南部系)	SK 4 (No.33)	口径13.0,残高3.0	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
88	山茶碗(南部系)	SK 4 (No.38)	底径6.7,残高3.1	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
89	山茶碗(南部系)	SK 4 (No.22)	口径13.6,残高4.2	1/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：青灰～灰	○
90	山茶碗(南部系)	SK 4 (No.34)	口径15.2,残高4.7	1/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
91	かわらけ(白色)	SK 4 (No.36)	口径12.2,残高2.7	1/4	焼成：やや良、胎土：やや密、色調：淡黄、薄手・平滑	○
92	鉢(南部系)	SK 4 (No.13・15・19)	口径29.6,底径15.8,器高12.3	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
93	伊勢型土鍋	SK 4 (No.31)	残高1.1	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：橙～灰褐	○
94	伊勢型土鍋	SK 4 (No.37)	口径27.8,残高9.2	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰褐	○
95	伊勢型土鍋	SK 4 (No. 9・10・11・14・18)	口径25.4,残高1.2	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰褐、写真は胴部片を略	○
96	山茶碗(東濃系)	SK 3	底径4.2,残高2.7	1/5	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰黄	
97	山茶碗(南部系)	SK 3	底径3.2,残高1.3	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
98	山茶碗(東濃系)	SK 3	底径5.0,残高2.7	1/3	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰	
99	山茶碗(東濃系)	SK 3	口径13.4,残高3.2	1/3	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰	
100	折縁深皿(古瀬戸)	SK 3	残高2.2	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰白、釉：淡黄	○
101	陶片円盤	SK 3	径1.6-2.5,厚1.1,重量4.5 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、釉：暗赤灰(常滑壺)	○
102	土錘	SK 3	長3.4,径0.8,孔径0.2,重量2.2 g	4/5	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰赤～浅黄橙	
103	土錘	SK 3	長1.9,径0.5,孔径0.2,重量0.4 g	1/2	焼成：良好、胎土：密、色調：灰赤	
104	羽釜型土鍋	SK 3	残高2.2	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：橙～灰	
105	羽釜型土鍋	SK 3	残高2.3	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：浅黄橙～褐灰	○
106	羽釜型土鍋	SK 3	残高2.1	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：浅黄～褐灰	○
107	陶丸	SK 3	径2.4,重量15.6 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
108	陶器甕(常滑窯産)	SK 3	底径10.8,残高7.5	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：暗赤灰～暗灰、かなり磨滅	
109	山茶碗(南部系)	SK 6・7 (1 層)	底径8.5,残高2.1	1/3	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰	○
110	山茶碗(南部系)	SK25	底径7.5,残高4.1	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
111	土錘	SK 7	長3.5,径0.7,孔径0.2,重量1.9 g	9/10	焼成：良好、胎土：密、色調：にぶい橙～灰	○
112	土錘	SK18	長4.8,径1.1,孔径0.3,重量5.9 g	1/1	焼成：良好、胎土：やや密、色調：にぶい橙～褐灰	○
113	深碗(肥前系染付)	SD 1	底径6.3,残高2.2	1/8	焼成：良好、胎土：やや密、色調：白	○
114	四耳壺(古瀬戸)	SD 1 下層	残高1.8	1/10	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰黄、釉：オリーブ灰	○
115	陶片円盤	SD 1	径2.0-2.4,厚1.3,重量6.8 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
116	陶器甕(常滑窯産)	SD 2	残高2.5	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：オリーブ黒	○
117	山茶碗(東濃系)	SD 3	口径13.8,残高5.0	1/4	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰・オリーブ、No.131と同一個体	
118	伊勢型土鍋	SD 5	残高1.9	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：黒～赤橙	
119	陶片円盤	SD 5 (P16以北)	径1.9-2.1,厚1.2,重量5.8 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	○
120	陶片円盤	SD 8・10(⑩断面 4・6・7 層)	径2.6-2.8,厚0.7,重量7.0 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗、高台は剥離？	○
121	陶片円盤	SD 4	径2.4-3.2,厚1.6,重量12.6 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	
122	羽釜型土鍋	SD 8・10(⑩断面 4・6・7 層)	残高2.9	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：黒褐～にぶい赤橙、煤付着	○
123	山茶碗(南部系)	P17	底径6.7,残高1.8	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
124	陶片円盤	P23	径2.1-2.2,厚1.4,重量6.3 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	○
125	かわらけ	P37	残高2.2	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：浅黄橙	○
126	かわらけ	P37	残高1.0	細片	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：浅黄橙	○
127	山茶碗(南部系)	P37	底径6.4,残高3.0	1/3	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
128	山茶碗(南部系)	P37	口径14.4,残高4.7	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
129	山茶碗(小皿・東濃系)	P44	口径7.8,底径9.2,器高1.4	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、No.15と接合	
130	かわらけ(小皿)	P44	口径8.5,底径6.1,器高1.7	2/3	焼成：良好、胎土：密、色調：浅黄橙、手捏ね	○
131	山茶碗(東濃系)	P45	口径15.6,底径6.8,器高5.4	1/6	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰、No.117と同一個体	○
132	山茶碗(南部系)	P52	口径13.6,底径6.6,器高5.8	1/2	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
133	陶片円盤	P54	径2.7-3.0,厚1.7,重量10.8 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	
134	山茶碗(南部系)	P54	底径8.6,残高2.1	3/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
135	山茶碗(小皿・南部系)	P63	口径8.3,底径5.3,器高1.9	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
136	陶片円盤	4 Gr.検出	径2.1-2.3,厚1.0,重量5.0 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰、山茶碗	
137	陶丸	1 Gr.(SK 4 北)	径2.3,重量10.8 g	1/1	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰	○
138	陶丸	1 Gr.混貝土	径2.5,重量12.8 g	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	○
139	土錘	3 Gr.西Tr.	長2.7,径0.6,孔径0.25,重量1.0 g	1/1	焼成：良好、胎土：やや密、色調：橙	○
140	擂鉢	4 Gr.北東　北壁 5 層(①断面)	口径35,残高4.1	細片	焼成：良好、胎土：粗、色調：淡黄、釉：黒褐(鉄錆)	○
141	山茶碗(小皿・南部系)	2 Gr.混貝土(No. 1)	口径8.6,底径5.5,器高1.9	1/1	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
142	山茶碗(南部系)	SX 1 (⑧断面 5 層)	底径6.8,残高2.2	1/1	焼成：良好、胎土：やや密、色調：灰	○
143	山茶碗(南部系)	SX 1 (②断面26層)	底径7.2,残高3.9	1/3	焼成：良好、胎土：やや粗、色調：灰	○
144	山茶碗(南部系)	2 Gr.西壁(②断面28・29'層)	口径14.8,底径6.2,器高4.5	1/6	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
145	山茶碗(南部系)	2 Gr.西壁(②断面29層上部)	底径6.6,残高2.6	1/4	焼成：良好、胎土：粗、色調：灰	
146	火打石	1 Gr.西Tr.(SX 1 下層)	大きさ1.0-1.9-2.0,重量6.3 g	1/1	石英、わずかに原礫面を残す	○
147	火打石	SD 1 下層	大きさ2.5-2.8-4.1,重量20.4 g	1/1	チャート、明褐、節理多い	○
148	火打石	SD 1	大きさ1.6-3.1-4.2,重量19.8 g	1/1	チャート、褐白に暗灰縞、原礫面を広く残す	○
149	石	SK 4 (No.20)	長26,幅9,厚9,重量2.9kg	1/1	チャート自然礫	
150	石	SK 4 (No.40)	長27,幅8,厚8,現重量3.0kg	表面剥離	変成岩(片岩)	
151	石	SK 4 (No.41・42)	長34,幅9,厚5,現重量1.8kg	表面剥離	変成岩(片岩)	
152	石	SK 4 (No.40)	長26,幅10,厚9,現重量3.8kg	表面剥離	砂岩、一部は砥石として使用？	
153	石	SK 4 (No.27)	長24,幅9,厚5,現重量1.5kg	表面剥離	変成岩(片岩)	
154	銅銭、元符通寶	3 Gr.SK14	直径2.3cm、3.6 g	1/1	北宋、篆書、1098年初鋳、図はなし	○
155	銅銭、元祐通寶	1 Gr.SX 1	直径2.4cm、3.7 g	1/1	北宋、篆書、1086年初鋳、図はなし	○
156	銅銭、開元通寶	1 Gr.SD 5	直径2.4cm、2.6 g	3/4	唐、621年初鋳、元を欠損、図はなし	○

第 3 表　遺物観察表(2)

6　戸田遺跡出土の動物遺体

新美倫子（名古屋大学博物館）

戸田遺跡では溝や土坑などの中に動物遺体が廃棄され貝層が形成されていた。そこで、各遺構の埋土から任意の量の貝層を土ごと取り上げてサンプルとし、それぞれ１㎜目のふるいで水洗選別して動物遺体を抽出した。ここでは、それらのうちのサンプル No.１・４・６・14と発掘時に採集された資料について述べる。サンプル No.１は溝状遺構 SX１埋土（１グリッド西壁18層）、No.４は貝塚２埋土（２グリッド北壁25層）、No.６は貝塚２埋土（２グリッド東壁13層）、No.14は土坑 SK４の埋土からそれぞれ採集されており、所属時期はいずれも13世紀とのことである。各サンプルの出土内容を第４表に示した。

No.１ではヤマトシジミが最小個体数で68個体（左殻出土数＋右殻出土数／２を最小個体数とした）、ハマグリが24個体、シオフキ・カキ類が１個体ずつ出土している。ヤマトシジミは殻長1.5～3.0㎝の個体が見られた。ハマグリの多くは割れて殻頂部のみとなっており、シオフキ・カキ類も殻頂部だけであった。イワシ類の椎骨１点とヘビ類椎骨１点も出土している。No.４にはヤマトシジミ257個体、ハマグリ95個体、シオフキ６個体が含まれていた。ヤマトシジミは殻長1.3～3.1㎝のものがあり、この中で大きさの偏りは見られない。ハマグリは殻長2.2～7.0㎝の個体が見られたが、小型の個体が多い。

No.６にはヤマトシジミ64個体、ハマグリ55個体、シオフキ１個体が含まれ、No.４と同じ貝塚２埋土中のサンプルであるが、ハマグリの比率が高い。ヤマトシジミは殻長1.6～3.1㎝、ハマグリは殻長2.8～6.7㎝の個体が見られ、どちらの種もこの範囲の中で特に大きさの偏りはない。No.14ではヤマトシジミ254個体、ハマグリ７個体、シオフキ１個体、カキ類１個体が出土し、ヤマトシジミがほとんどを占めている。ヤマトシジミは殻長1.4～3.0㎝の個体が大きさの偏りなく見られ、焼けたものも５点含まれていた。ハマグリは殻長10㎝程度の大型のものが１点のみ見られ、それ以外は小～中型である。他にはカニ類の焼けた爪の破片が１点と小型のスズキ前鰓蓋骨左１点が見られた。

４つのサンプルはいずれも内容のほとんどが貝類であり、１㎜目のふるいで水洗選別したにもかかわらず、魚骨等の資料は非常に少なかった。ヤマトシジミが最も多く、ハマグリがこれに次ぎ、シオフキ・カキ類がわずかに混じる点も共通し、これら４種以外の種は含まれておらず、貝層の構成は単純である。また、発掘時はスッポン脛骨左１点とカエル類尺橈骨（左右不明）１点が取り上げられている。スッポンは比較的大きく、よく成育した個体である。カエル類尺橈骨はウシガエルの現生標本とほぼ同大だが、少し形が違うのでガマガエルかもしれない。13世紀の動物遺体の出土例は全国的に見てもわずかであり、当時の動物質食料の利用状況には不明な部分が多い。その点で当遺跡の資料は非常に重要であると言えよう。

No.	種／遺構	ヤマトシジミ	ハマグリ		シオフキ		カキ類	計	その他	サンプル重量(kg)	
		左殻＋右殻	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻			水洗前	水洗後
1	SX1	136	24	11		1	1	172	イワシ類椎骨1、ヘビ類椎骨1	1.7	0.4
4	貝塚2	514	95	84	3	6		702		4.4	1.8
6	貝塚2	128	55	47		1		231		1.7	0.7
14	SK4	508	7	4	1		1	520	カニ類爪破片1焼、スズキ前鰓蓋骨左1	4.0	0.8
計		1286	181	146	4	8	2	1625	4	11.8	3.7

第４表　サンプル出土内容

註　貝類出土数は殻頂部を数えた。

7　濃尾平野南部に立地する戸田遺跡の地形環境

小野映介（名古屋大学大学院文学研究科地理学教室）
鬼頭　剛（㈶愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター）

I　はじめに

濃尾平野南部に立地する戸田遺跡において、沖積層の表層堆積物を観察する機会を得た。堆積物の観察結果および遺物の検出状況から、当地域における自然堤防の形成過程について新たな知見が得られたので報告する。

II　戸田遺跡周辺の地形・地質概観

戸田遺跡の立地する濃尾平野南部の三角州上には、木曽川や庄内川の旧河道やそれに伴う自然堤防が発達する。特に、戸田遺跡の北方約２kmには、東北東―西南西方向にのびる大規模な旧河道と自然堤防が認められる。安田（1971）は、この自然堤防を構成する堆積物より10世紀中～14世紀初の考古遺物を採取し、特に13～14世紀に自然堤防が集中的に形成されたと推定した。

戸田遺跡は、以上のような大規模な自然堤防とは異なる断片的な自然堤防群の一部に立地する。自然堤防の規模は南北約１km、東西約0.5kmで、戸田集落の範囲とほぼ一致しており、細長い紡錘形を呈する。

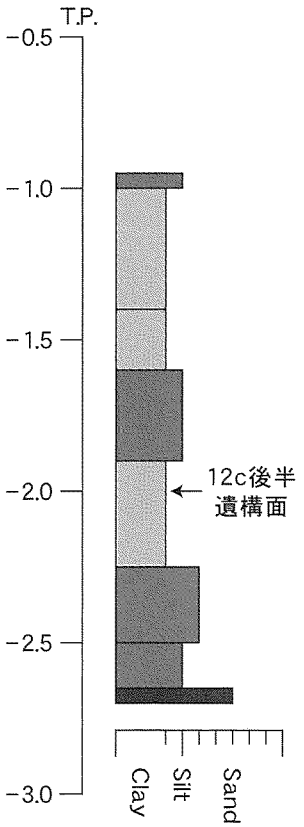
なお、濃尾平野の三角州上の沖積層は、基底礫層を含めて、下位から沖積層基底礫層、下部砂層、中部シルト・粘土層（中部泥層）、上部砂層、沖積陸成層に区分される（井関、1962）。このうち、中部シルト・粘土層から上位は、古川（1972）による区分の南陽層に相当し、縄文海進以降、内湾を埋積する形で堆積した層準であり、中部シルト・粘土層は三角州底置層、上部砂層は三角州前置層、沖積陸成層は三角州頂置層としての性格を有する。

戸田遺跡周辺では、中部シルト・粘土層は地表面下20～10ｍ（標高－21～－11ｍ）、上部砂層は地表面下10～１ｍ（標高－11ｍ～－２ｍ）、沖積陸成層は地表面下１～０ｍ（標高－２～－１ｍ）より検出される。

III　戸田遺跡における地質断面の観察結果

発掘調査区の南西においてミニバックホーで深掘を実施し、地表面（標高－0.92）から深度1.70ｍまでの堆積物を観察した。堆積物の観察結果を第９図に示す。堆積物は、その粒度と色調から８層に区分できる。以下、下位の層準よりその特徴について記載する。

標高－2.70～－2.65ｍは淘汰良好な粗粒砂層からなり、稀に木片を含む。湧水が激しいため堆積構造は確認できなかった。標高－2.65～－2.50ｍは平行葉理のみられる砂質シルト層からなり、摩耗した木片を含む。本層と下位の粗粒砂層との境界面は明瞭である。標高－2.50～－2.25ｍはシルトとシルト質砂との互層からなる。シルト質砂層はレンズ状に挟まれる。本層と下位層との境界は不明瞭で、上位に徐々に漸移する。標高－2.25～－1.88ｍは褐色を呈する塊状のシルト層である。本層と下位層との境界は不明瞭で、本層を含め標高－1.88ｍより上位の地層境界面はすべて不明瞭となる。標高－2.00ｍ付近が12世紀後半の遺構検出面（西壁セクション31層に対応）であり、



第９図　土層模式図

本層上部（標高－2.00～－1.88m）から遺物が検出されるようになる。標高－1.88～－1.58mは砂質シルト層（西壁セクション27層に対応）である。堆積構造は見られず、基質のシルト中に砂粒子が分散する。標高－1.58～－1.02mは塊状均質なシルト層からなる。全体の色調により、下部(標高－1.58～－1.38m)の赤褐色を呈する部分と、上部（標高－1.38～－1.02m）の褐色を呈する部分とに分けられる。下部層、上部層ともに堆積構造は見られない。下部層は西壁セクション4層に相当し、上部層は西壁セクション2層にあたる。標高－1.02～－0.92mは近・現代の攪乱層である。標高－0.92mが現代の地表面となる。

Ⅳ　濃尾平野南部における自然堤防の形成過程

以上の観察結果から、遺跡の基盤となる自然堤防の形成時期について若干の考察を行う。

調査断面最下部（標高－2.70～－2.65m）から検出された粗粒砂層は、その出現深度や堆積物の淘汰の状況等から、上部砂層に相当すると考えられる。この粗粒砂層の上位（標高－2.65～－1.88m）には、シルトやシルト質砂といった細粒堆積物が互層となって堆積し、微起伏を形成している。こうした細粒堆積物の互層構造は、河川による洪水堆積特有のものであることから、これらは沖積陸成層として堆積した自然堤防堆積物であると考えられる。また、シルトとシルト質砂の互層は、砂混じりのシルト層(標高－1.88～－0.92）によって覆われるが、これらは淘汰が悪く、堆積構造を持たないこと等から、溢流堆積物を母材としつつ、人為的な影響を強く受けて形成された可能性が強い。

こうした層相変化からは、海水～汽水の影響を受ける三角州の状態から、徐々に河川の堆積営力が増し、自然堤防が形成されるような環境への移り変わりを読みとることができる。なお、シルトとシルト質砂の互層の最上部の標高－2.0m付近には、12世紀後半の遺構面が認められることから、少なくともこの頃までに自然堤防が形成されていたと考えられる。

従来の古地形研究（安田1971、井関1983など）では、自然堤防の形成について13～14世紀における洪水堆積の活発化と結びつけて考えられてきた。しかし、戸田遺跡における地質断面の観察の結果、自然堤防の形成時期について、これをやや遡る年代が推定された。こうした時期の差異が何を示すのか、今回の点的な調査では十分に検討することができなかった。この点については今後の課題としたい。

なお、筆者らは深掘調査断面において微化石分析用試料および放射性炭素年代測定用の試料を採取している。これらの試料の分析結果については、機を改めて報告したい。

参考文献

井関弘太郎 1962 沖積平野の基礎的問題点　名大文学部研究論集 XXXIV　pp.51-74

井関弘太郎 1983『沖積平野』東京大学出版会　145p.

古川博恭 1972 濃尾平野の沖積層―濃尾平野の研究、その１―地質学論集７　pp.39-59

安田喜憲 1971 濃尾平野庄内川デルタにおける歴史時代の地形変化　東北地理23　pp.29-36

8　小結

調査の結果把握された地層・遺構・遺物の主なものについて、第５表に関係を整理した。表中に冨田荘に関連する事項の欄を設けたが、現在のところ他の欄の内容と連動するものではなく、参考にすぎない。以下にまとめる様相は、今回の調査地点のみの成果をまとめたものである。

発掘で捉えた層位・遺構の変遷は、いくつかの段階区分が可能である。層位の大別（Ⅰ～Ⅳ層、p.116参照）は、そのままにⅠ期＝基盤層形成期、Ⅱ期＝中世遺構形成期、Ⅲ期＝盛土遺構形成期、Ⅳ期＝現地表期に置き換えることが出来る。

Ⅰ期については、前項の分析に詳しい。Ⅱ層の基盤をなす自然堤防（微高地）成立以前は、自然地理学的な区分は可能であっても、Ⅰ層以下の遺跡の存否は確認不能である。

Ⅱ期およびⅢ期は、いくつかの小期に細分しうる。第５表では、Ⅱ期をSX１の層位を基本とした三分にⅢ期との中間期を合わせて四細分した。Ⅱａ期＝SD11の掘削以前、Ⅱｂ期＝SD11機能時（掘削～廃絶）、Ⅱｃ期＝SD11埋没以降であるが、SX１範囲外の遺構との対比は明確ではない。Ⅱｃ期～Ⅲ期の間は、細片

参考年表	段階区分		主な層位	主な遺構（アミは貝層）	主な遺物	山茶碗編年	
11世紀末 藤原氏領の荘園として成立	Ⅰ		②30層 ⑧6層	SX1(自然流路)		3 4古	1100 1150
保元元年・平治元年（1156・59） 保元の乱・平治の乱 寿永二年（1183） 尾張国が東国(源氏)政権下に 承元五年（1211） 北条義時による地頭請 弘安六年（1283） 北条時宗の円覚寺寄進 『円覚寺米銭納下帳』 冨田荘の名主16人 延慶二年（1309） 『自性院縁起』 大風逆波、冨田荘成願寺全壊 正和四年（1315）～ 貞和五年（1349） 萱野相論（境界争い） 嘉暦二年（1327）～ 暦応元年（1338）頃 『尾張国冨田荘絵図』作成 延文二年（1357） 尾張全域で、木曽川洪水被害	Ⅱ	a	⑧5層 ②29層(下部) ②24・25層 ⑤ 4～6層 ⑩4層 ①25層 ②13層	SX1(SD11以前) SD11(初期) SD5　SD10 貝塚1　貝塚2	142 42・43 1 ＋	4 新 5 古	1200
		b	② 22層 ⑩2・3層 ⑤7・8層	P54 SD11　SD8~6 P27　P62…P63 SK4 P44 P52	134　26 131 92　135 77～90　19 23～25・129 132　16	5 新 6 7	1250
		c	②16層 ③26層 ③36A層	SD11 (廃絶) SK17 (時期不詳) P37 SK3(廃絶)	14・29 97・127 28・32・33・98 100 30・36	8 9 10	1300 1350 1400
		d	③24・25層	SK2 (時期不詳) SK7~6		11	1450
寛文十一年（1671） 『寛文村々覚書』 戸田村の家数 238 人口1301 弘化四年（1847） 『戸田村絵図』	Ⅲ	a	①14層 ①10・11層 ③21層	SD1	113	(17c後半)	
		b	①9層 ①2層 ①5層(4Gr.)	SK1	72・73 140	(19c前半) (19c中頃)	
昭和三十四年（1959） 伊勢湾台風	Ⅳ		①～④1層				

第５表　遺構の変遷

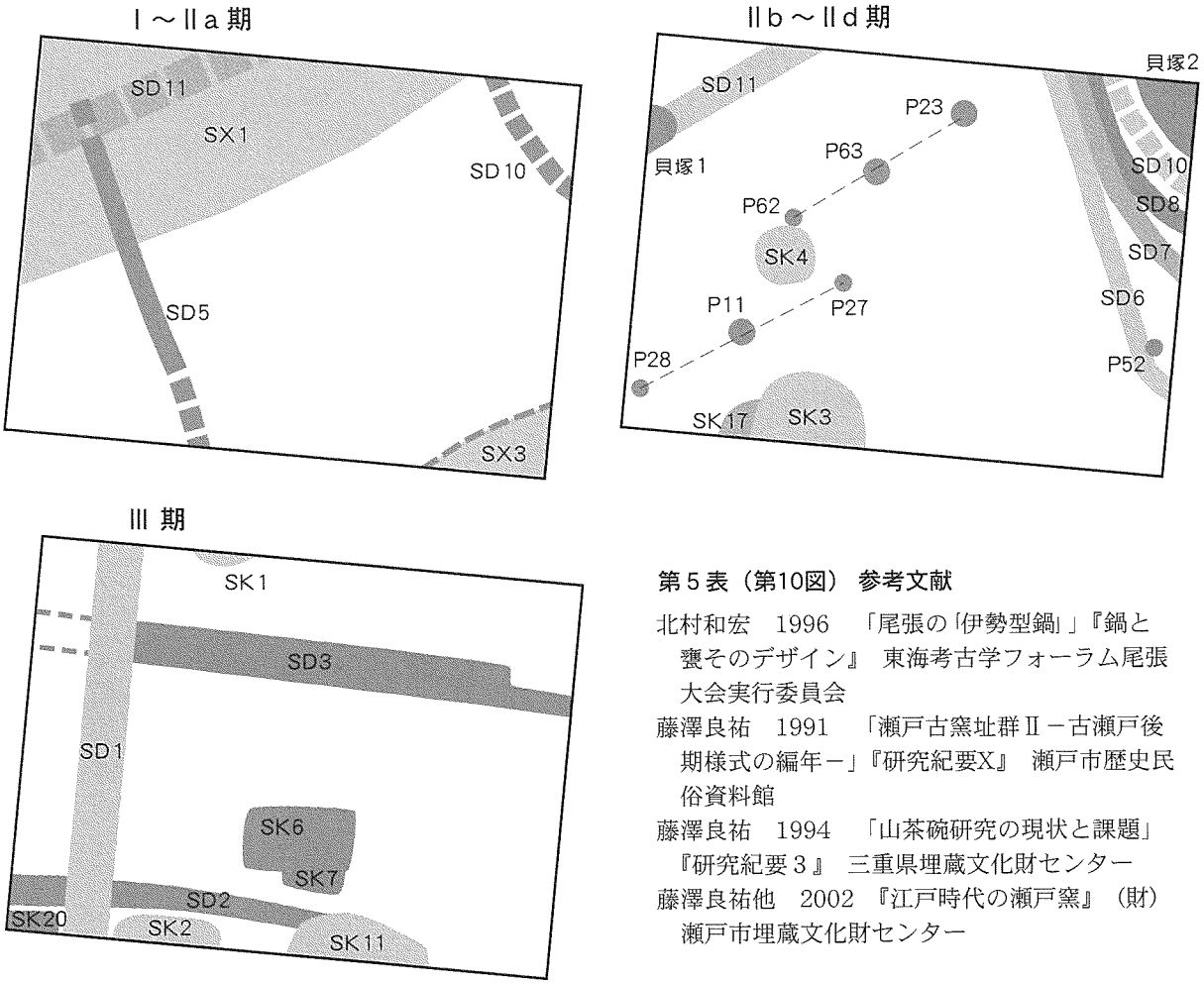
遺物がわずかに見られるのみで、遺構の空白期となる。この時期をⅡｄ期とした。Ⅱｂ期は、遺構形成活動が最も活発であり、さらに細分が可能であろう。

Ⅲ期は、顕著な盛土層の形成期で、その始まりは近世初頭を想定しているが、出土遺物のあり方からは、現在のところ戦国期に遡る可能性も否定できない。Ⅲａ期＝SD１の築造・機能・埋没以前と、Ⅲｂ期＝SD１埋没後に分けられる。Ⅲａ期はさらに細分が可能であり、Ⅲｂ期は詳細を把握していない。

各期の年代を推定しておく。Ⅱａ期の始まりは、SX１下層遺物により12世紀中頃と考えられる。Ⅱｂ期は13世紀頃、Ⅱｃ期は14世紀頃と推定される。Ⅱｄ期は15～16世紀であるが、その終末すなわちⅢａ期の始まりは特定できない。Ⅲｂ期は、18世紀前半頃～19世紀と想定している。

大きくは、西流する自然流路に方向性を規定された中世段階と、客土・盛土を多用し、現代の町並みの基礎となった南北軸により規定された近世段階に単純化される。この単純な理解が、この地点にとどまるものか、戸田遺跡あるいは周辺の開発行為に普遍化されるのか、興味が持たれる。

紙幅・整理期間の制約もあって、十分な成果を示すことができなかった。本書による調査資料の公開が、濃尾平野南部の遺跡調査や冨田荘の研究に多少なりとも役立つことを願う。原稿掲載をお願いした小野氏・鬼頭氏・新美氏をはじめ、ご教示・ご協力いただいた方々に末尾ながらお礼申し上げる。



第10図　遺構の変遷

第５表（第10図）　参考文献

北村和宏　1996　「尾張の「伊勢型鍋」」『鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

藤澤良祐　1991　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要X』　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐　1994　「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要３』　三重県埋蔵文化財センター

藤澤良祐他　2002　『江戸時代の瀬戸窯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

NN319号窯群

Ⅰ　はじめに

1　位置と立地

位置　NN319号窯群は、天白区土原１丁目に所在する。天白区は名古屋市内の東端に位置し、東は日進市に接している。土地区画整理事業・地下鉄鶴舞線の開通等により、近年急速に住宅建設が進んだ地区ではあるが、まだ緑も多く残されており、自然と調和のとれた街づくりが進められつつある。当古窯群は、地下鉄植田駅から直線距離にして南西約1.5kmの位置にあたる。

立地　地形的には、市東部の丘陵地帯に位置する。丘陵地は庄内川・矢田川・植田川・天白川・境川の５本の川によって４つの支丘に分けられるが、そのうちでは天白川と境川とにはさまれた、最も南のエリアに位置する。そして、エリア内では北端の、さらに小さな谷に仕切られた標高60ｍほどの支丘陵南斜面に立地（窯の標高は35～40ｍ）している。

なお、本古窯群は天白区内に位置するが、以上の地理的な共通から、緑区の鳴海地区鳴海支群＝NN の窯群記号を冠して呼んでいる。

周辺の窯跡（第１図）　窯の立地する支丘陵には、東に天白緑地１号窯（10-59）天白緑地２号窯（10-60）、北に天白緑地３号窯（10-61）NN318号窯（島田１号窯10-62）の、NN319号窯群とほぼ同時代（平安から鎌倉時代）の窯が散在的に知られているが、すぐ南に位置するNN103号窯（島田古窯10-66）だけは７世紀後半の須恵器を焼いた窯である(1)。従って、当地区での窯の開始が７世紀代にさかのぼることと、一旦中断し古代末頃から再開されたことが明らかとなっている。

NN319号窯群の概要　NN319号窯群は私道敷設工事中に発見され、昭和42年の７月には名古屋考古学の先達、吉田富夫氏によって緊急調査が行われた。結果、いずれも半壊ながら６基の古窯が並んで確認され、その内発掘された２基の様子から、半地下式単室の窖窯群であり、出土した小皿・碗・甕の年代観から平安時代終わりから鎌倉時代にかけての窯であると報告されている(2)。

また、昭和45年現地を踏査された三渡俊一郎氏は１号窯の西に１基、３号窯と４号窯の中間に１基の計８基の群ではないかと推定され(3)、平成２年作成の遺跡分布図にも８基の可能性が明示されている。その後、１号窯西の１基（７号窯）については実在が確認され、現在建物の下ではあるが遺存する。結果、今回の調査前の時点では７基がNN319号窯群内に確認できていた。なお、調査直前の現地の様子であるが、１号窯は窯壁の一部が露呈しているものの残存。２・３号窯は流失。調査された４号窯は調査後長らくトンネル状のまま放置されていたが数年前に一部破壊されながら埋め戻されており、一部残存。５・６号窯は推定される場所に窪地があり残存しているものと思われた。

2　調査の経過

調査にいたる経過　平成10年、市教育委員会文化財保護室に当該地での共同住宅建設予定と、その際の埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。文化財保護室では、建設予定地が古窯本体にはかからないことを確認したうえで、試掘調査を実施。窯下には灰原が広がっていること確認し、灰原の調査は必要である旨を事業者に伝えた。その後事業計画の変更（最終的には病院建設となる）等を経て、最終協議の結果、平成12年４月より発掘調査を行うこととなった。調査の対象は、昭和42年に明らかとなった窯の位置から

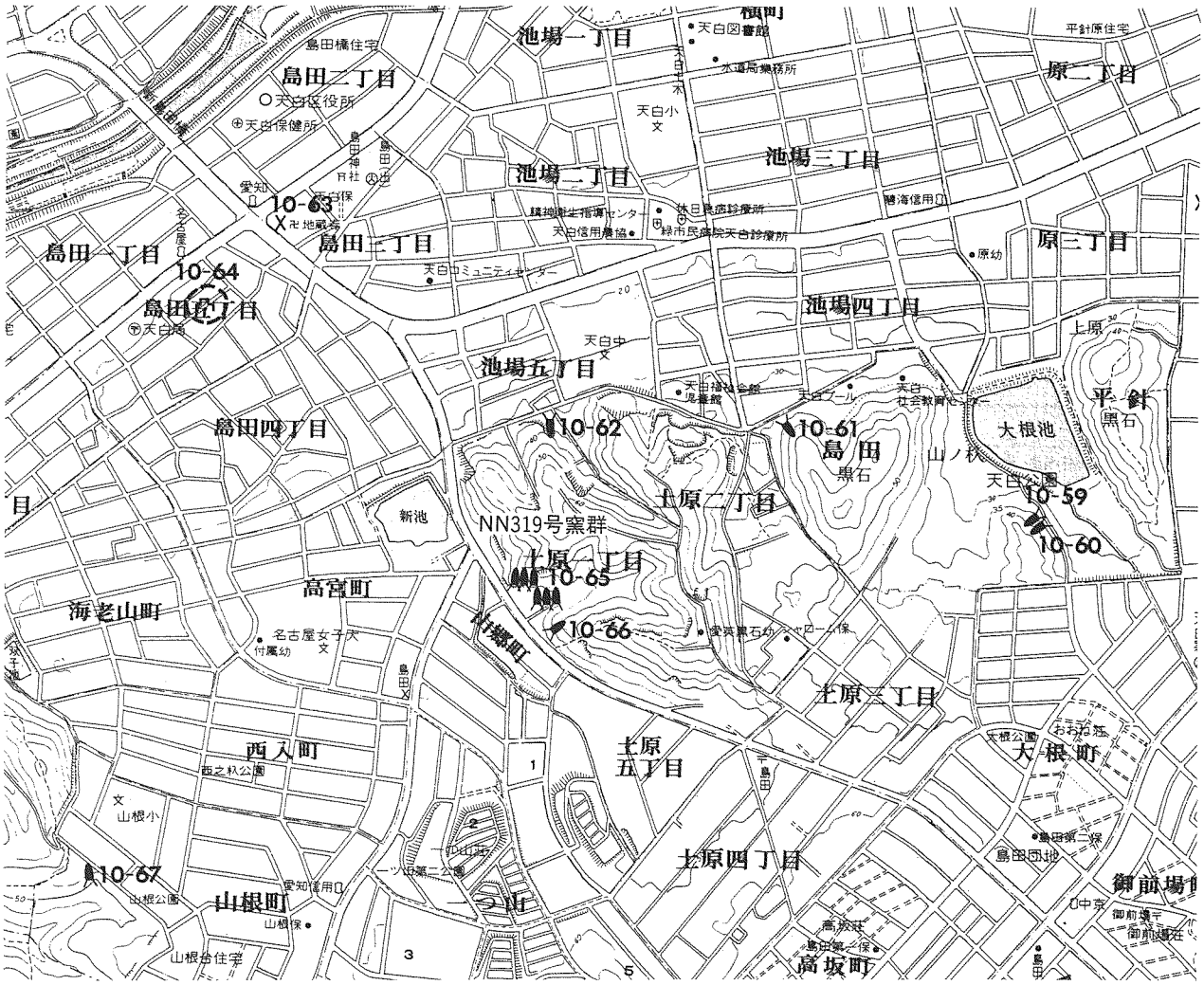
推定される灰原の範囲とし、建設予定地の南半約300㎡とした（第２図）。

調査の経過　調査は４月１日の伐採に始まり、４月10日から東区より表土掘削を開始した。排土置き場を確保する必要から、東・西・南区の３回に分けての折り返し調査を予定したが、東区掘削開始早々、湧水が著しいことがわかり、調査は４回（１区～４区）に分けて行うことに変更した。２区にて灰原を検出したが、他の地点でも、表土・包含層中に多量の陶器片が含まれており、最終的にはコンテナケース80箱分の破片を採取することとなった。５月20日には４区の埋め戻しを完了し、その後の跡片付けを経て現地の調査を終了した。

II　調査の内容

1　遺構

今回の調査目的は、窯から掻出された灰原の調査と窯周辺の関連施設の有無の確認にあった。調査を開始してすぐに明らかになったことは、調査地のほぼ半分にあたる１・３・４区は谷奥から流れる出る水の通り道となっていることであり、当時も水の確保は容易であったであろうことは推定できたが、形成されていたかもしれないこの地点での灰原は流失したものと思われた。また、２区の北西側（窯のある側）は畑地や宅地のためにカットされており、本来の地形は失われていた。結果として灰原は２区の中央付近に、



第１図　位置と周辺の遺跡（１：12500）

第2図　古窯群と調査区（1：800）

5ｍから6ｍの幅を8ｍ分検出できたにすぎなかった。また、窯に関連した施設も検出できなかった。

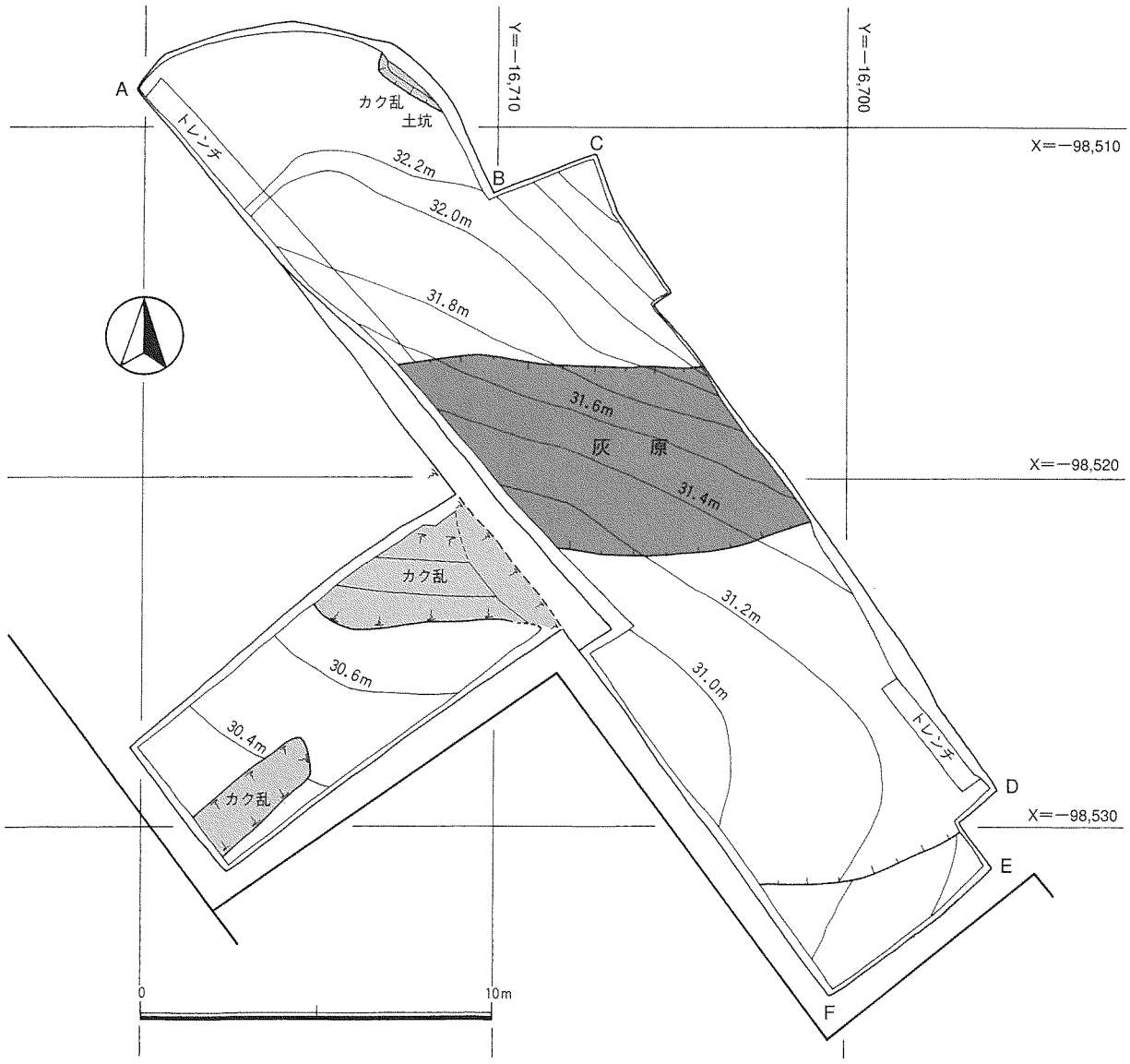
灰原は、砂礫を僅かに含む暗灰色土であり、「灰原＝真っ黒」のイメージには合わない。最も厚い個所は北西部で厚さ約50cmを測った。灰原層内での分層は不可能である。

この他の遺構は、2区で1箇所、4区で2個所の攪乱土坑を検出したにすぎないが、2区で検出した攪乱については、その延長上に4号窯が丁度位置しており、4号窯の焚き口付近の窪地を利用した廃棄穴(数年前埋没）の可能性がある。ただし、被熱した部分はなかった。

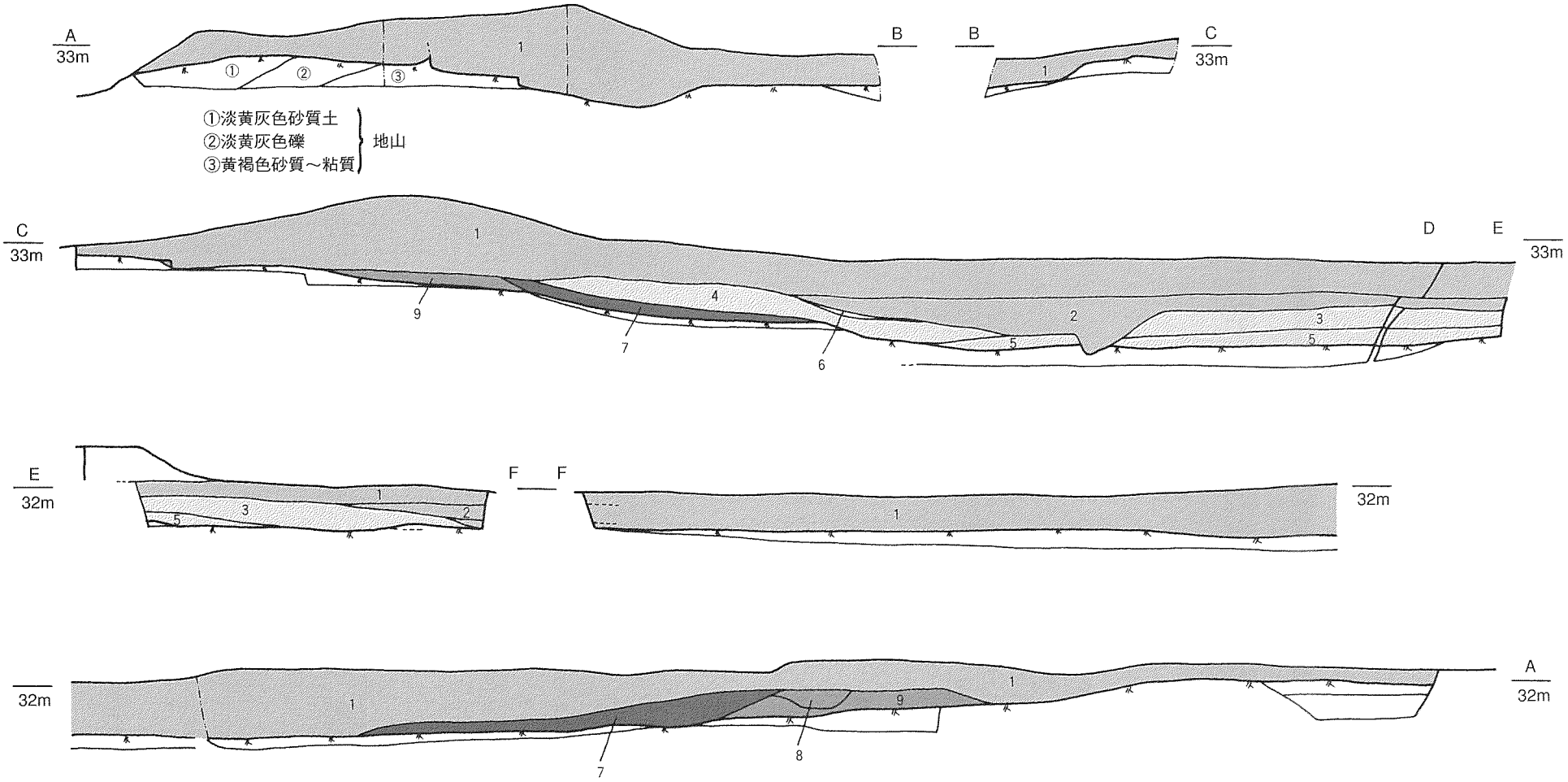
2　遺物

図版は灰原出土を第5～7図、それ以外を第8～10図として区別したが、出土地点別での器種・器形にはっきりとした差異はない。出土遺物はすべて瓷器系中世陶器で、器種には壺（広口壺と短頸壺）・甕・碗（碗・玉縁碗）・小碗・段皿？・鉢がある。この他、窯道具として馬爪焼台が出土している。

広口壺（第5図5・35・34・第8図7・21・22・17・19）口頸部がラッパ状に大きく外反し、口縁端部は内側をわずかにつまんで段をなす。胴部は上部で肩が張り、一部に粘土紐の積み上げ痕を残す。底部は無



第3図　調査区平面図（1：200）



1・2…表土およびカク乱土
3……暗茶灰色礫層
4……黄灰色土
5……暗灰色砂礫層
} 包含層
6……淡灰白色土（砂利含まない）
7……暗灰色土（礫ごく僅か。山茶碗多く含む）灰原
8……淡茶灰色土（締まりに欠ける。礫含まない）
9……明黄褐色土（締まりに欠ける。礫含まない。窯壁片をわずかに含むため、操業後の堆積）

第４図　調査区断面図（１：100）

高台の平底で、外面は未調整で糸切り痕もない。

短頸壺（第５図６・38・第８図24・37・20）短く直立する口縁と球形の胴部を持つ。底部は不明であるが、平底であろう。なお、18はやや丸底風の底部であり上部形状は不明。

甕（第５図33・39・40・第８図25・36）強く外湾する口縁部をもち、口縁端部は広口壺と同様に内側をわずかにつまんで段をなす。体部にはタタキ目を残している。

碗（第６・７・10図）いわゆる山茶碗。すべてに断面三角形の低い高台が貼り付けられており、端部にはモミ殻の圧痕を残すものが多い。底部外面には糸切痕が残る。口径153㎜～182㎜、平均170㎜。器高46㎜～61㎜、平均53㎜。底径72㎜～90㎜、平均80㎜である。

玉縁碗（第６図27・28）中国製白磁玉縁碗を模したといわれるもの。27は玉縁直下まで丁寧なケズリ調整がなされている。胎土も精緻。偶然ではあろうが内面の口縁端から外面の玉縁にかけて薄い灰釉がかかる。28は端部が玉縁状のため可能性として抽出したが、27とは調整胎土ともに異なる。

小碗（第６・７・10図）碗同様の断面三角形の低い高台が貼り付けられるものがほとんどであるが、ごく僅かに無高台のものもある（第７図103）。高台端部にはモミ殻の圧痕を残すものが多い。底部外面には糸切痕が残る。口径88㎜～111㎜、平均103㎜。器高23㎜～36㎜、平均30㎜。底径40㎜～65㎜、平均54㎜である。なお、第８図23は特殊品の小皿で、内面には小型品の重ね痕が残る。

段皿？（第８図26）口縁部内面に明瞭な段をもつ。形状的には碗ともいえようが、他の碗とは法量を異なえる。断面三角形の高台が貼り付けられいるが、端部にモミ殻の圧痕はない。

鉢（第５・９図）片口部の確認できたものはないが、多くは片口鉢と思われる。碗とは異なり、丁寧なナデ調整の高い高台が貼り付けられる。体部下部にはケズリ調整が施されたものが多い。

III　おわりに

今回の調査は　NN319号窯群の形成した灰原の調査で、コンテナケース80箱分の資料を得た。ただし、NN319号窯群は10基前後からなる古窯群と推定され、今回の調査地点においても複数の窯の製品が混在していることは確実である。年代についても、こうした混在を前提としての検討となるが、これら製品の年代を確認してまとめにかえたい。

年代のポイントとなるであろう器種・器形の特徴をあげれば、小碗は有高台であること、壺類は広口壺があり四耳壺は無いこと、玉縁碗はあるが耳皿・輪花碗は無いことなどである。これらの特徴からは、さほどの年代差は認められず、斎藤編年Ⅶ期第２型式（古）[4]、藤澤編年第４型式（古）[5]におさまり、実年代では12世紀前半から中頃（第２四半期頃）となる。結果的に時期幅が認められないことで、本調査区に近い４・５・６号窯はほぼ同時期に並存した可能性が高いといえよう。

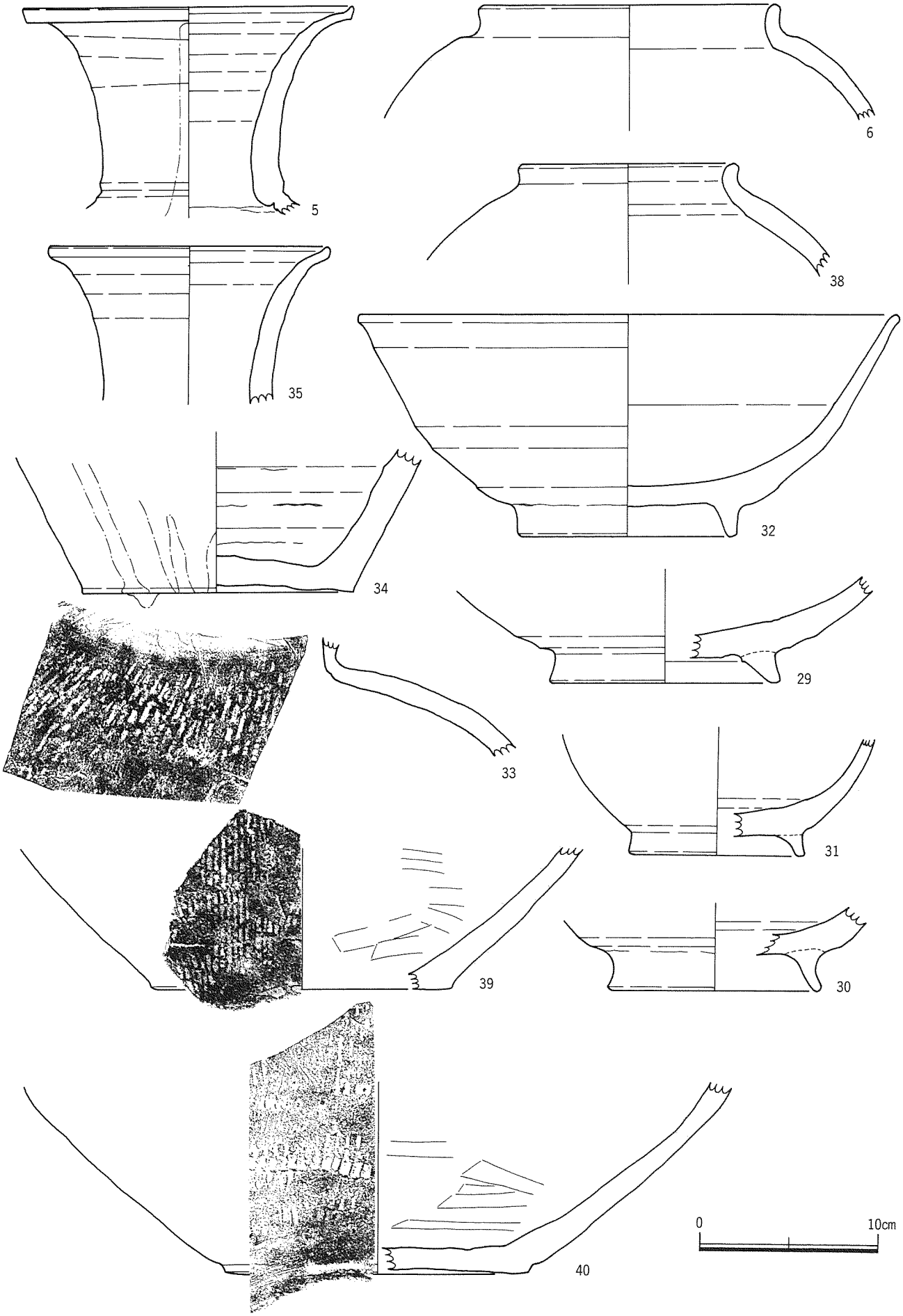
また、逆に今回の調査地点からはやや離れた３号窯からは無高台小皿の報告があり[6]、４・５・６・９号窯が先で、やや遅れて北西の一段高い場所に１・２・３・７号窯の操業が始まった可能性が推定できよう。

第1表　出土遺物法量一覧

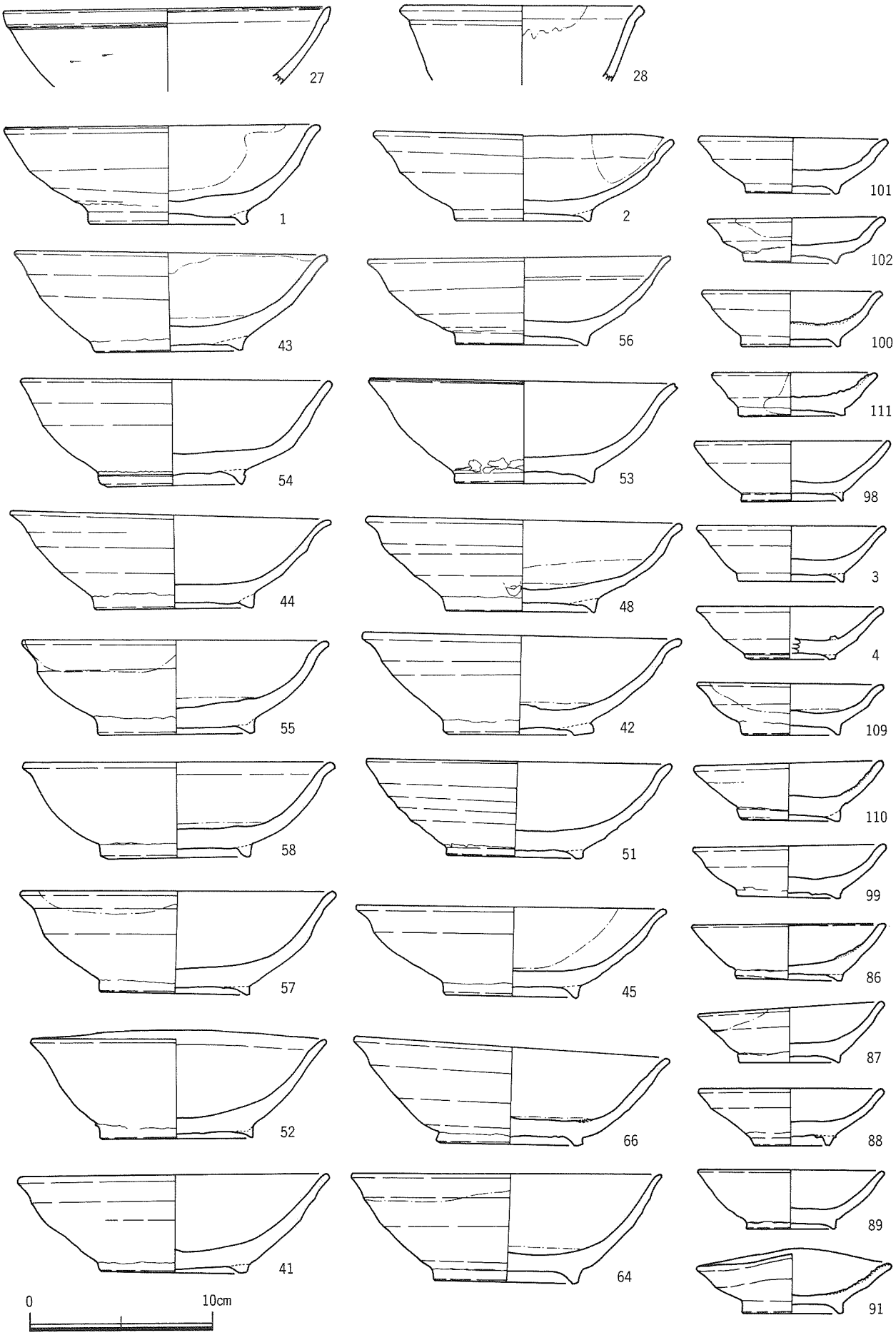
No	出土地点	器形	口径	器高	底径
5	2灰原	壺	184		
34	2灰原	壺			152
35	2灰原	壺	●156		
6	2灰原	壺	●164		
38	2灰原	壺	●120		
39	2灰原	甕			●170
33	2灰原	甕			
40	2灰原	甕			●170
27	2灰原	碗	●179		
28	2灰原	碗	●130		
29	2灰原	片口鉢			●126
32	2灰原	片口鉢	●302	126	●118
30	2灰原	片口鉢			●115
31	2灰原	片口鉢			● 98
1	2灰原	碗	164	54	84
2	2灰原	碗	162	48	73
43	2灰原	碗	172	55	82
42	2灰原	碗	176	55	83
41	2灰原	碗	172	54	81
44	2灰原	碗	177	52	88
45	2灰原	碗	171	50	74
46	2灰原	碗	170	53	84
47	2灰原	碗	172	47	80
48	2灰原	碗	174	52	83
49	2灰原	碗	169	50	80
50	2灰原	碗	172	55	82
51	2灰原	碗	169	53	● 75
52	2灰原	碗	163	55	● 84
53	2灰原	碗	170	57	78
54	2灰原	碗	172	60	81
55	2灰原	碗	169	52	87
56	2灰原	碗	167	48	74
57	2灰原	碗	174	57	83
58	2灰原	碗	172	53	83
59	2灰原	碗	168	49	81
60	2灰原	碗	173	57	85
61	2灰原	碗	171	55	90
62	2灰原	碗	182	52	80
63	2灰原	碗	170	52	83
64	2灰原	碗	171	60	80
65	2灰原	碗	176	54	76
66	2灰原	碗	175	54	● 80
67	2灰原	碗	177	56	87
68	2灰原	碗	171	49	88
69	2灰原	碗	178	53	76
129	2灰原	碗	●164	53	80
130	2灰原	碗	●172	53	82
131	2灰原	碗	●189	61	86
132	2灰原	碗	●170	50	81
133	2灰原	碗	●174	58	81
134	2灰原	碗	●172	58	76
135	2灰原	碗	●181	55	82
136	2灰原	碗	●155	53	75
3	2灰原	小碗	●102	31	57
4	2灰原	小碗	●100	● 59	29
86	2灰原	小碗	107	31	59
87	2灰原	小碗	103	31	56
88	2灰原	小碗	102	31	42
89	2灰原	小碗	103	33	48
90	2灰原	小碗	101	27	52
91	2灰原	小碗	106		55
92	2灰原	小碗	106	34	51
93	2灰原	小碗	106	29	52
94	2灰原	小碗	99	28	58
95	2灰原	小碗	110	32	65
96	2灰原	小碗	99	30	53
97	2灰原	小碗	105	30	52

No	出土地点	器形	口径	器高	底径
98	2灰原	小碗	108	34	57
99	2灰原	小碗	107	28	58
100	2灰原	小碗	100	31	55
101	2灰原	小碗	104	31	52
102	2灰原	小碗	98	24	53
103	2灰原	小碗	102	23	51
104	2灰原	小碗	108	33	65
105	2灰原	小碗	103	33	48
109	2灰原	小碗	103	28	55
110	2灰原	小碗	104	32	55
111	2灰原	小碗	90	24	59
7	2表土	壺	192	● 35	116
21	2表土	壺	●178		
17	2表土	壺			146
18	2表土	壺			91
19	2表土	壺			142
24	2表土	壺	●174		
37	2表土	壺	●139		
25	2表土	甕			
12	2表土	片口鉢	●250	94	126
13	2表土	片口鉢			93
8	2表土	片口鉢	●290	121	142
16	2表土	片口鉢	●258		
14	2表土	片口鉢			128
80	2表土	小碗	101	28	55
81	2表土	小碗	103	28	60
82	2表土	小碗	106	30	56
83	2表土	小碗	100	34	54
84	2表土	小碗	105	25	52
85	2表土	小碗	107	36	52
23	3包含層	小皿	74	19	37
70	3包含層	碗	●177	48	80
71	3包含層	碗	176	57	87
72	3包含層	碗	167	53	75
73	3表土	碗	173	54	78
26	3表土	碗	●162	46	77
112	3包含層	小碗	109	34	56
113	3包含層	小碗	110	31	53
114	3包含層	小碗	109	33	58
115	3表土	小碗	103	33	56
116	3表土	小碗	105	32	57
117	3表土	小碗	111	34	55
118	3表土	小碗	107	35	56
22	4表土	壺	●176		
20	4カク乱SK	壺	●125		
36	4カク乱SK	甕	●360		
15	4表土	片口鉢	●256		
11	4カク乱SK	片口鉢	●302	117	138
9	4表土	片口鉢	●292		
10	4カク乱SK	片口鉢	●322		
74	4表土	碗	153	52	72
75	4カク乱SK	碗	158	54	74
76	4カク乱SK	碗	158	51	73
77	4カク乱SK	碗	166	51	81
78	4カク乱SK	碗	157	52	74
79	4表土	碗	●163	● 51	75
119	4表土	小碗	108	29	63
120	4表土	小碗	88	27	42
121	4表土	小碗	88	27	40
122	4カク乱SK	小碗	94	29	46
123	4カク乱SK	小碗	102	28	53
124	4表土	小碗	102	32	58
125	4号窯内	碗	●164		
126	4号窯内	碗	●145		
127	新窯3層	碗			
128	新窯3層	碗			79

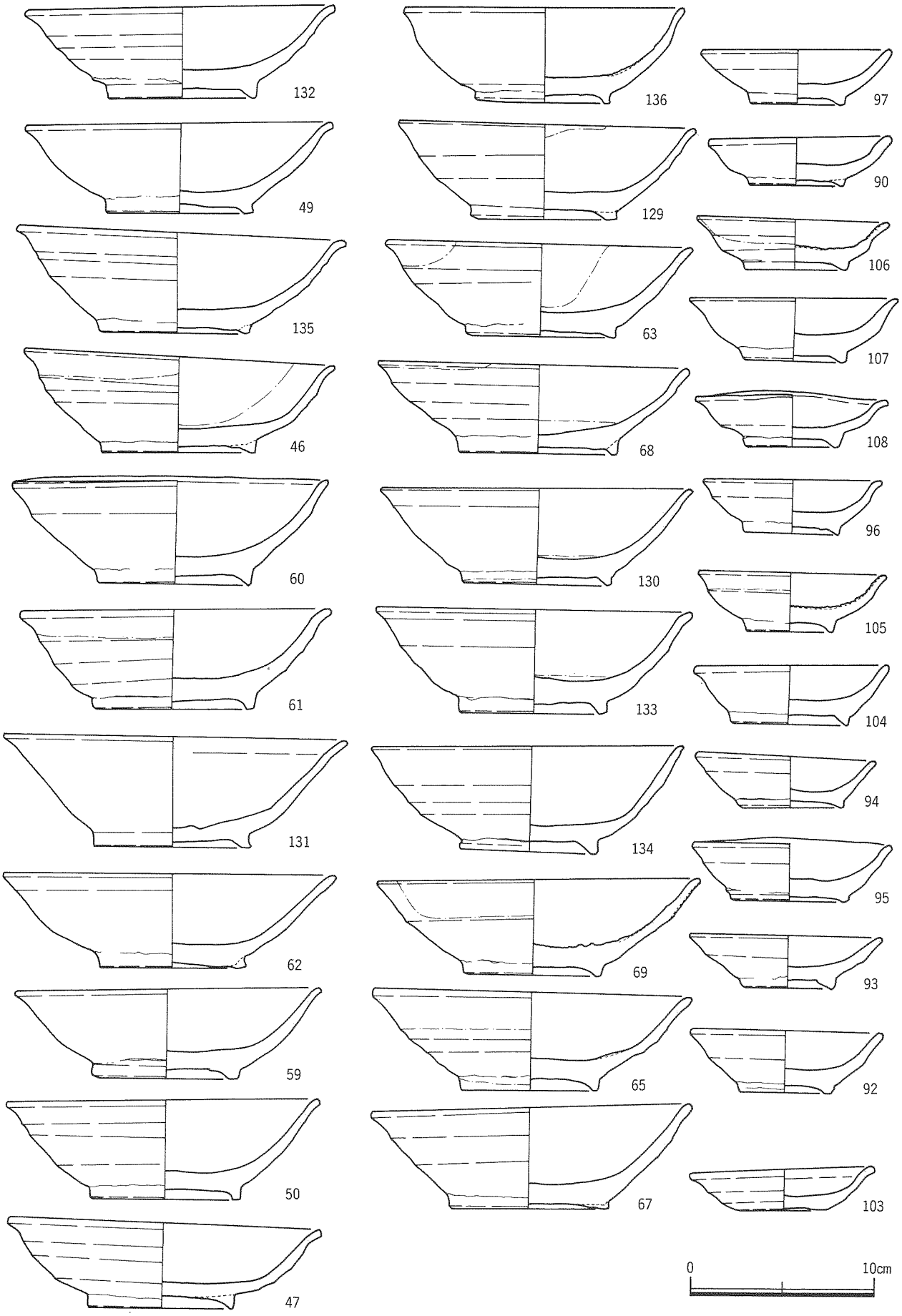
※　●は復原数値



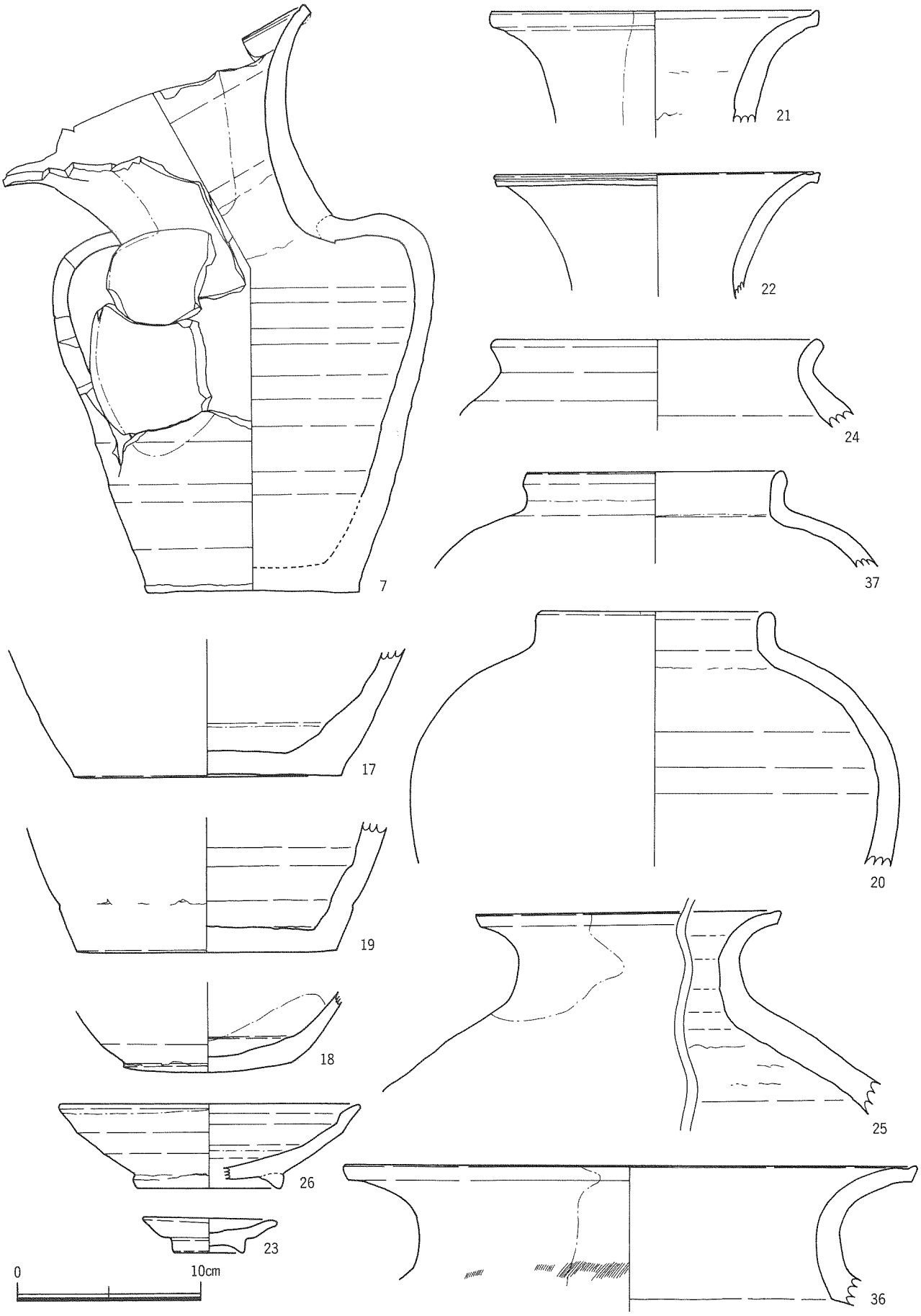
第5図　灰原出土壺・甕・鉢（1：3）



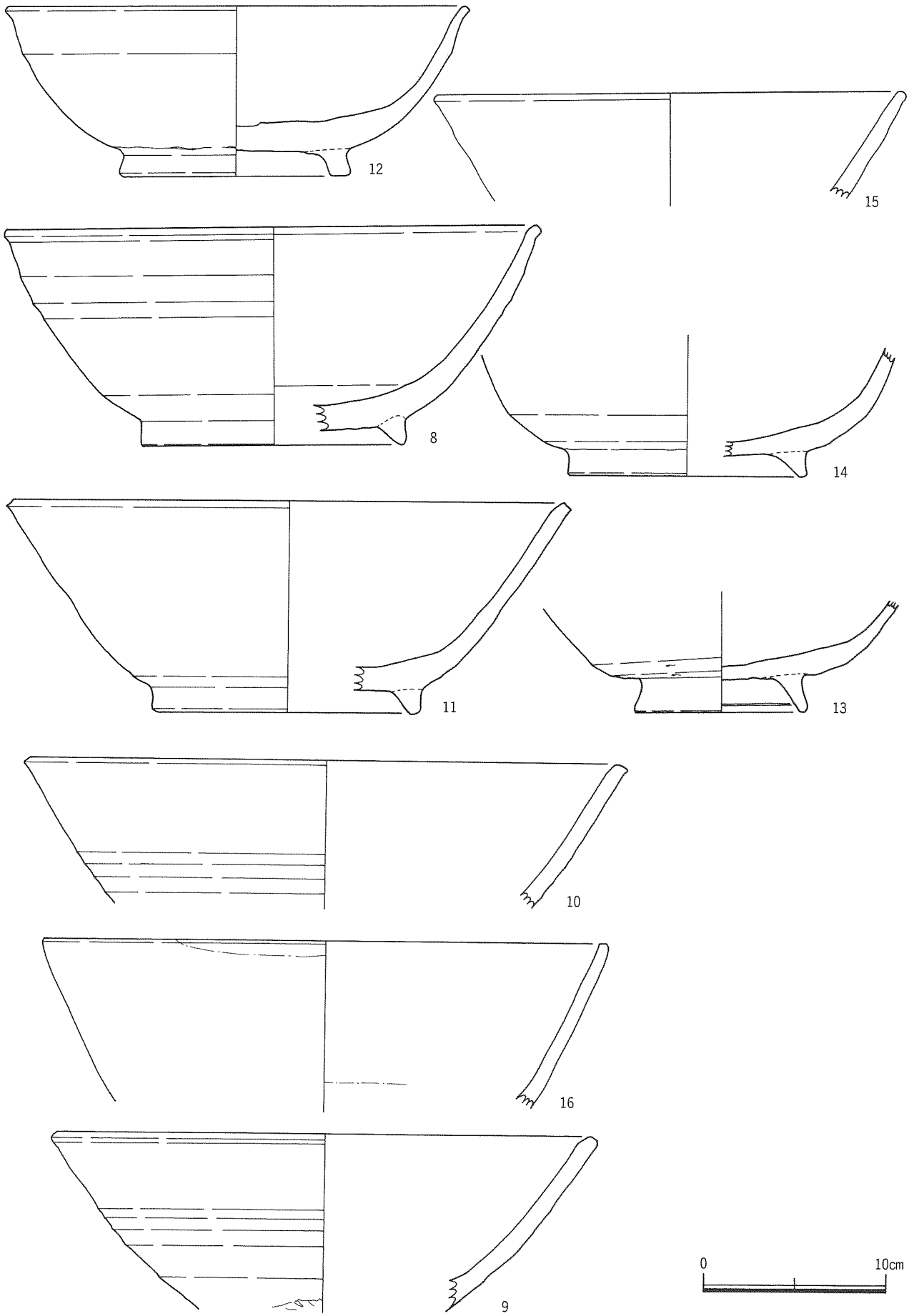
第６図　灰原出土碗・小碗１（１：３）



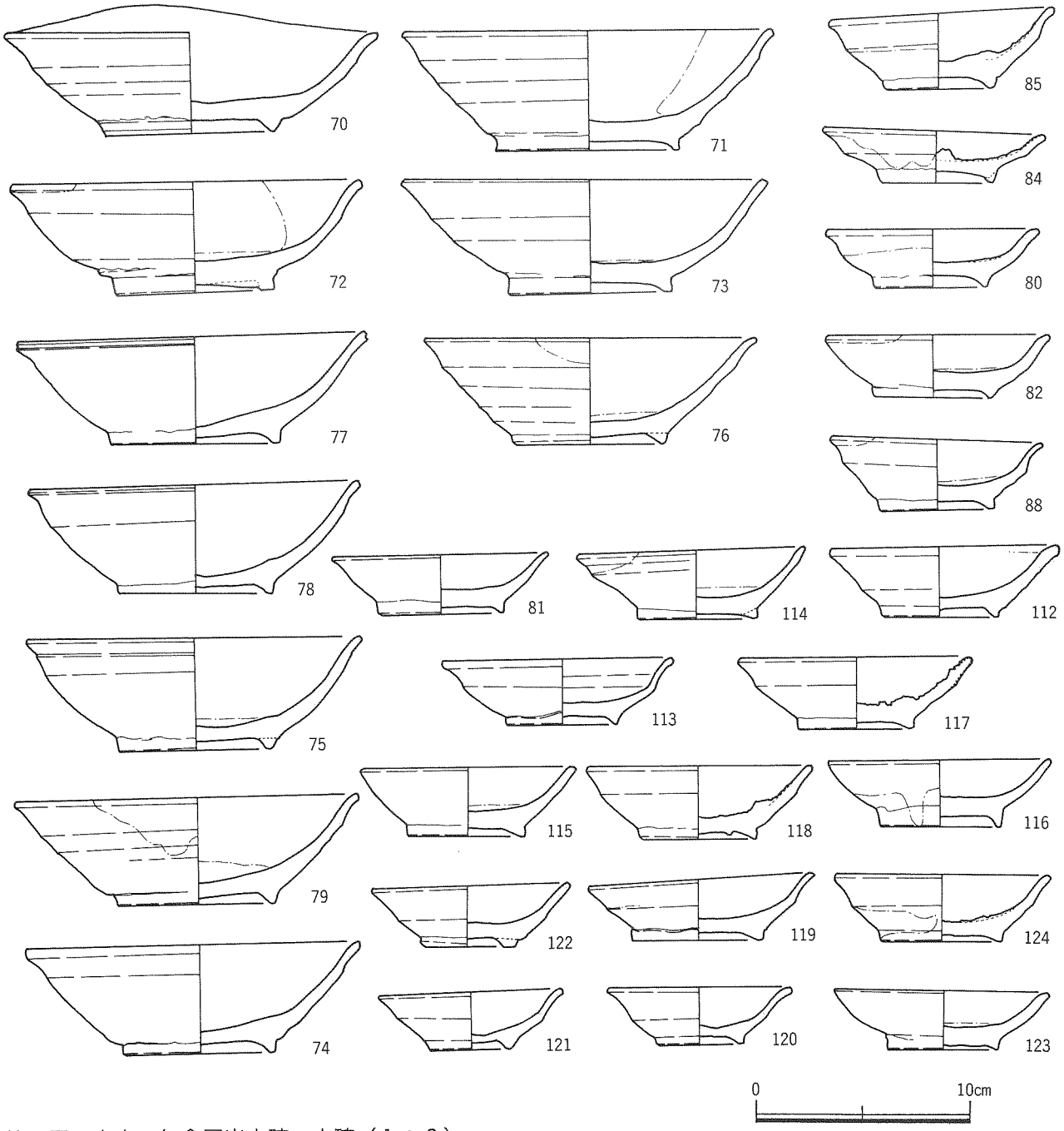
第７図　灰原出土碗・小碗２（１：３）



第8図　表土・包含層出土壺・甕・その他（1：3）



第9図　表土・包含層出土鉢（1：3）



第10図　表土・包含層出土碗・小碗（1：3）

註

(1)　三渡俊一郎 1985『島田古窯（NN103号）発掘調査報告書』

(2)　吉田富夫 1973「島田黒石窯発掘調査報告」『名古屋の遺跡百話』文化財叢書第61号

(3)　三渡俊一郎 1989『昭和・天白区の考古遺跡』文化財叢書第89号

(4)　斎藤孝正 1988「中世猿投窯の研究―編年に関する一考察―」『名古屋大学文学部研究論集史学34』

(5)　藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター

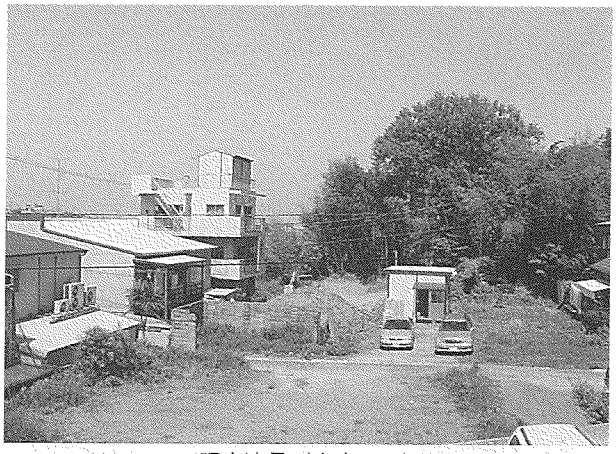
(6)　注２に同じ

参考文献

三好町教育委員会 1984『八和田山古窯跡群発掘調査報告書』

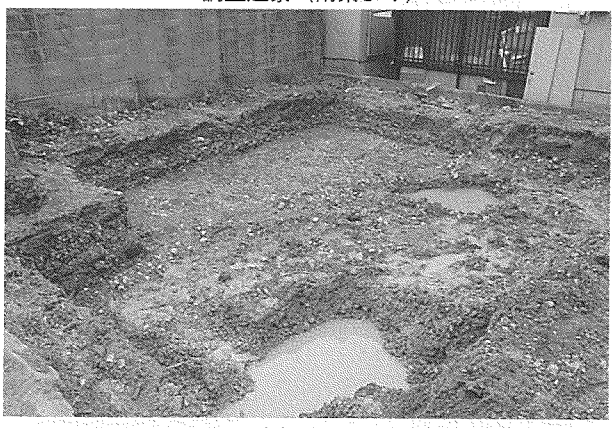
尾野善裕 1992「八事裏山窯址群の基礎的再検討」『古代人』第53号

調査前遠景（南より）

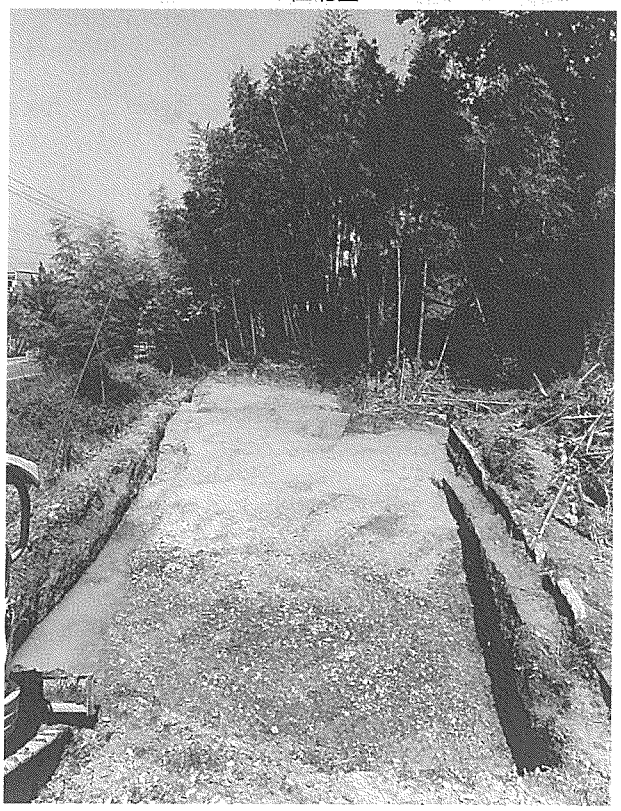


調査遠景（南東より）

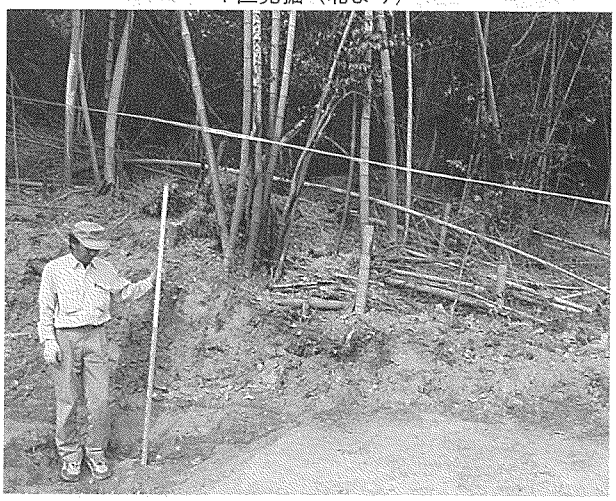
1区北壁



1区完掘（北より）

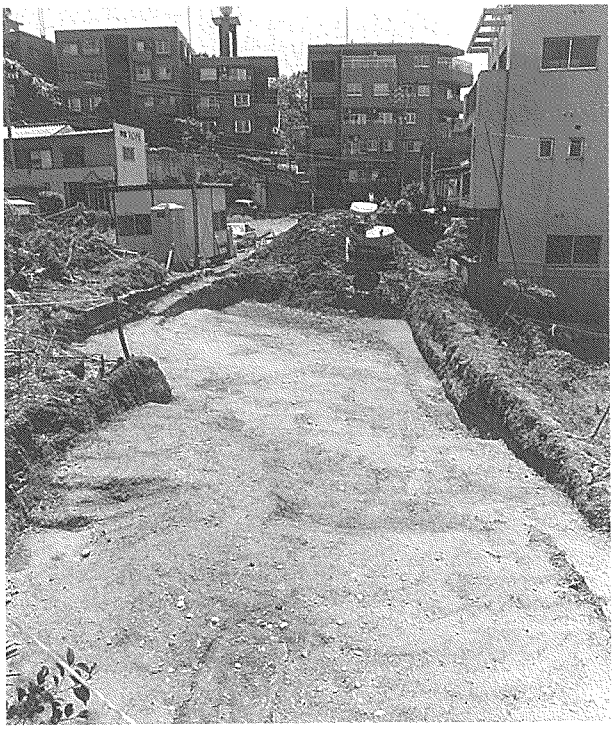


2区完掘（東より）

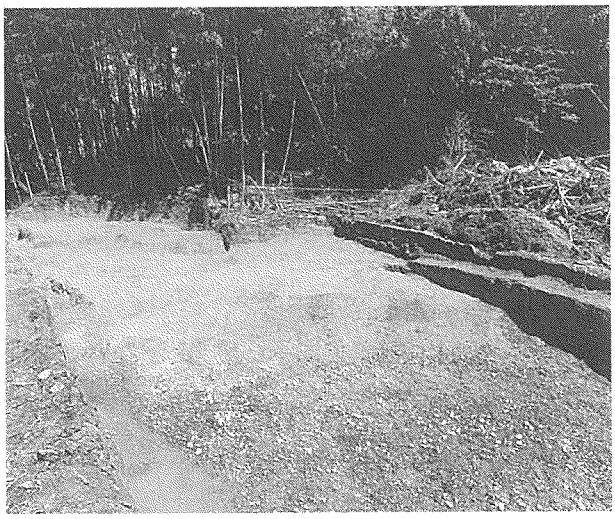


2区カク乱土坑

調査風景



2区（北西より）

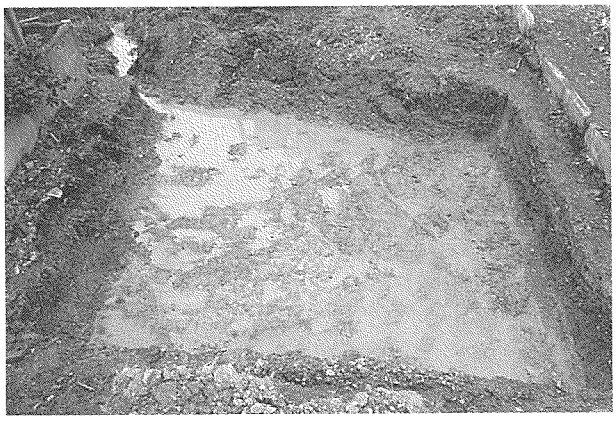


2区（南より）

2区灰原（南壁）

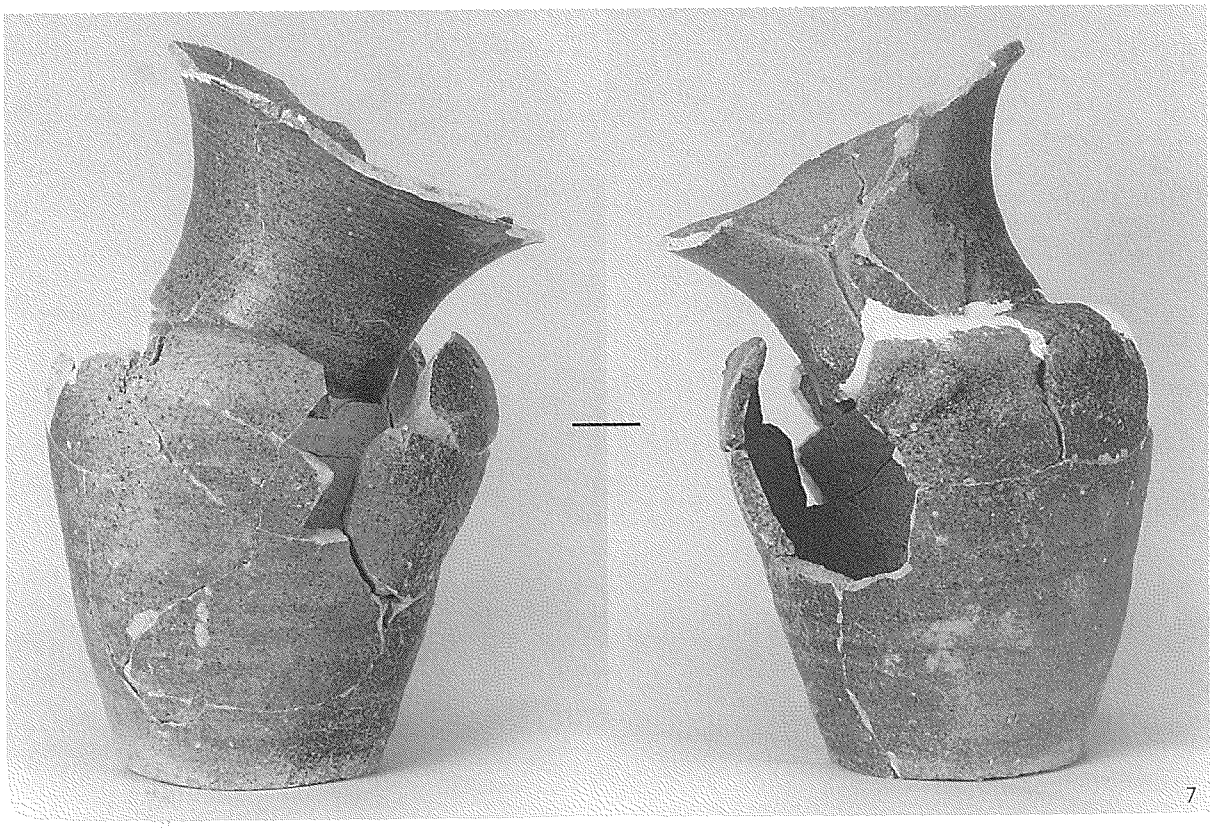
2区灰原（北壁）

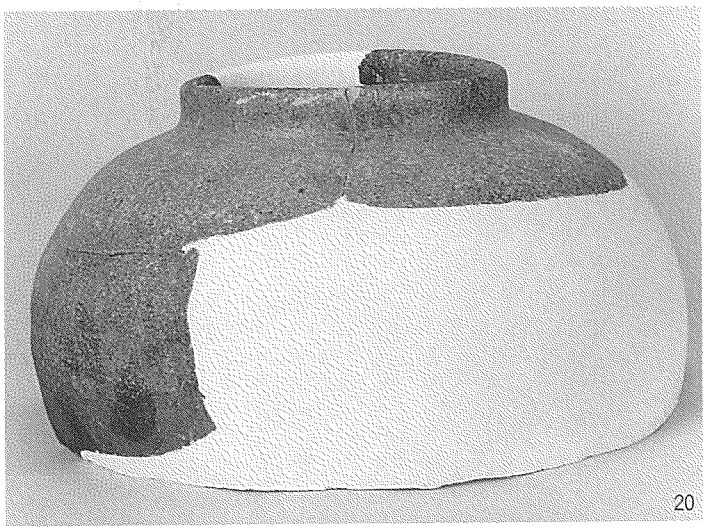
窯本体位置を望む（南より）

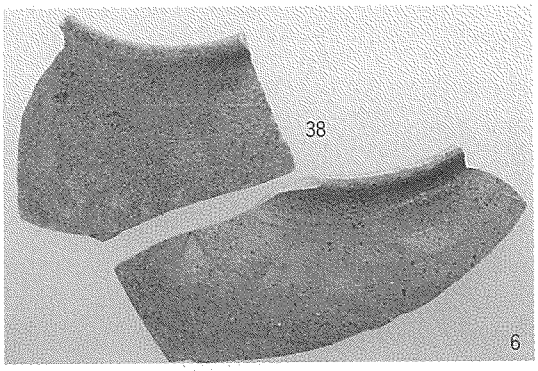


3区（東より）

4区（南より）







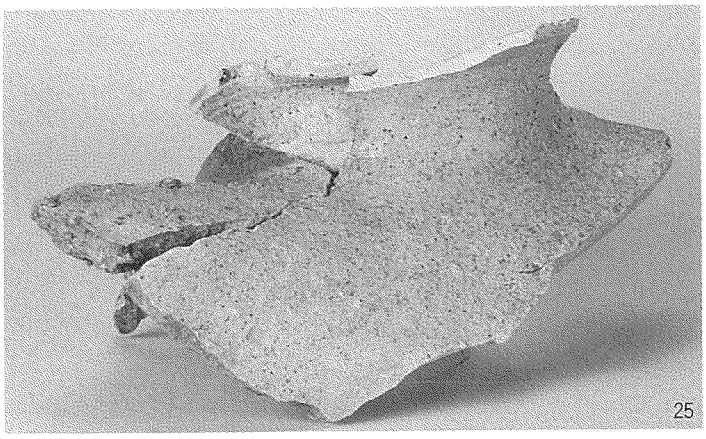
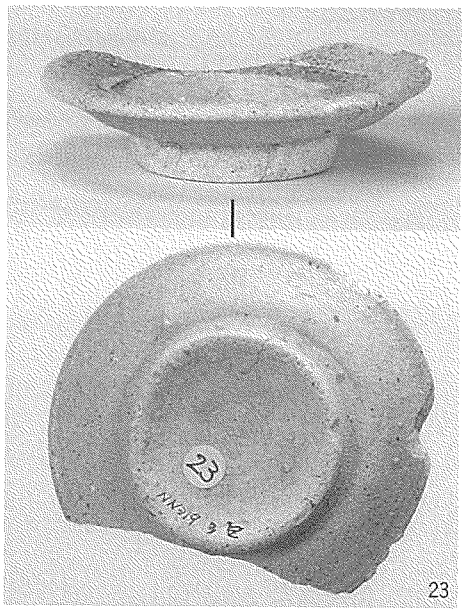
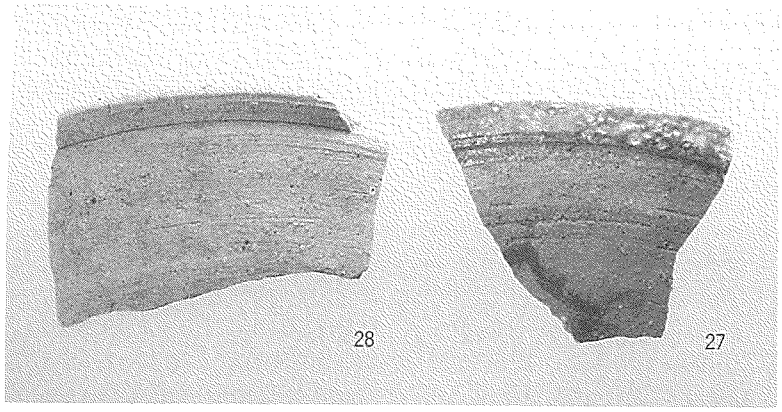
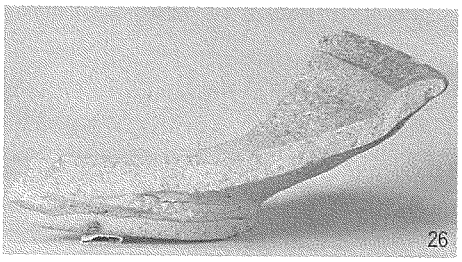
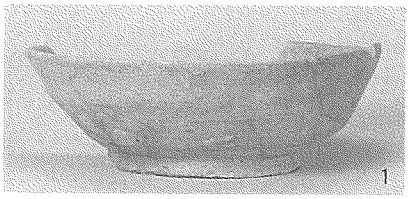


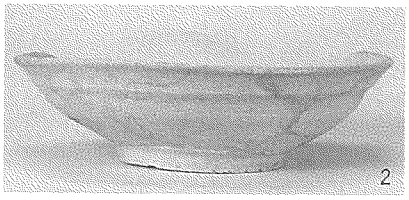
写真　壷・甕

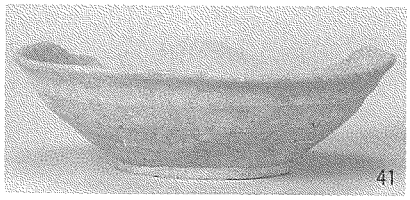


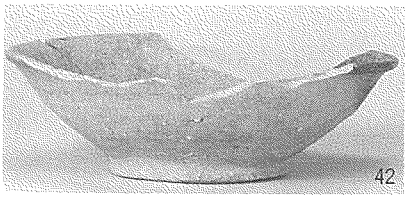


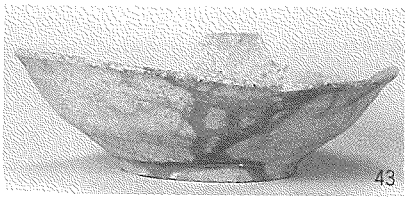


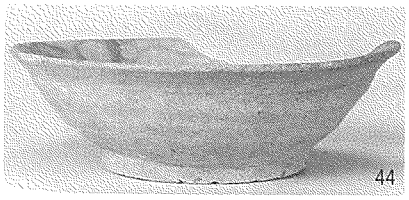


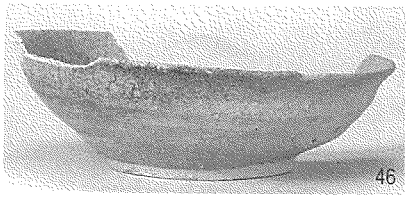


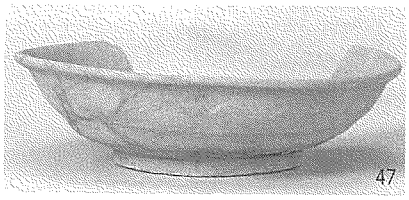


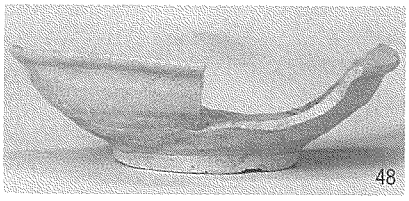


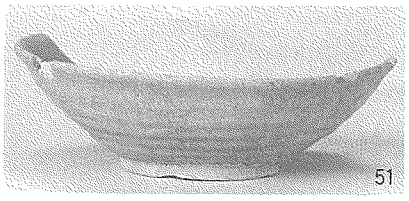


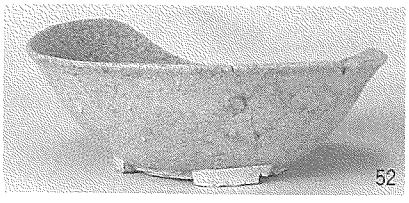












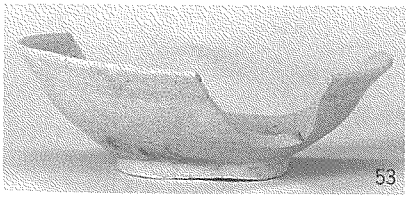
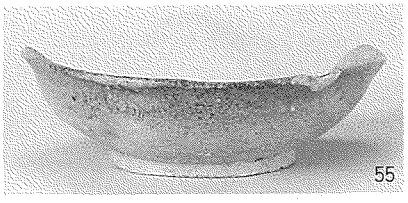
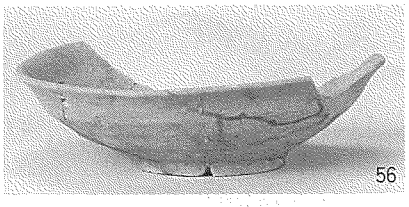
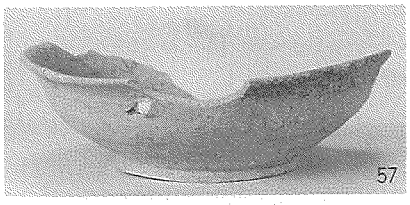
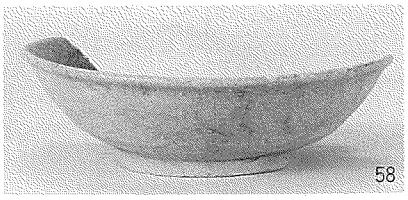
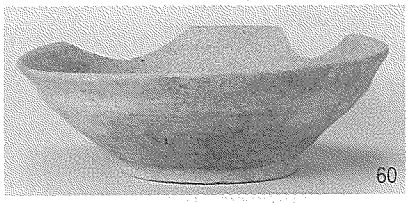
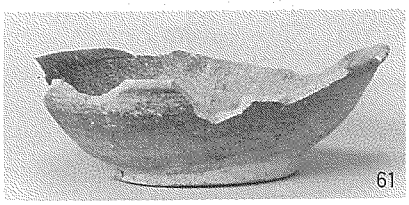
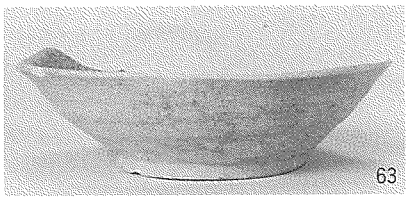
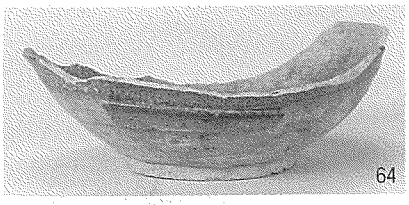
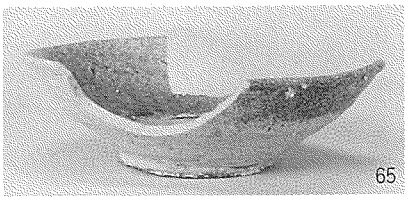
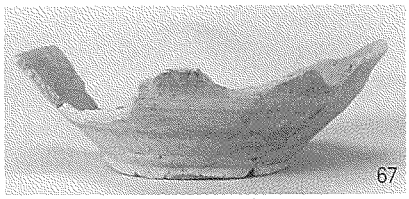


写真　片口鉢、王緑碗、その他、碗１

54

55

56

57

58

60

61

62

63

64

65

67

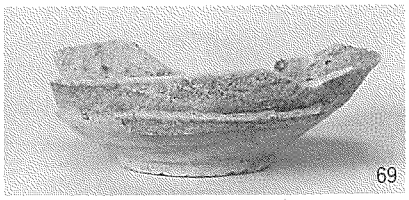
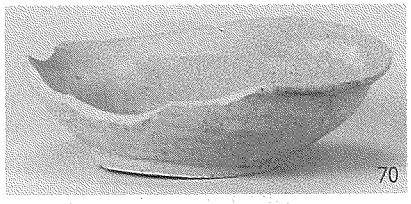
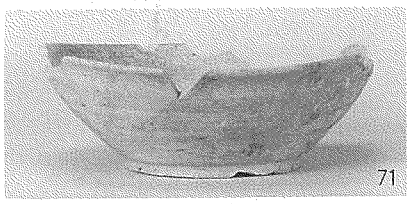
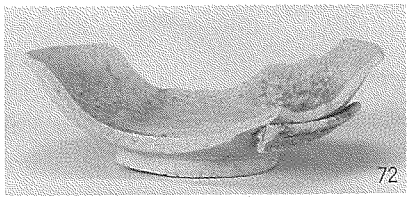
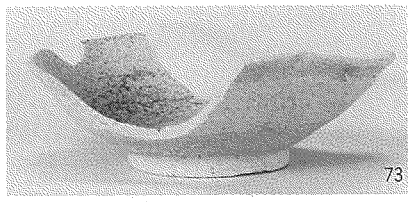
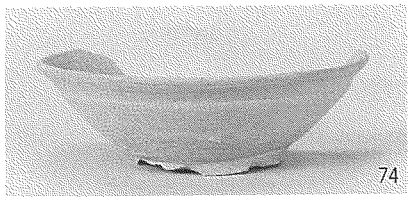
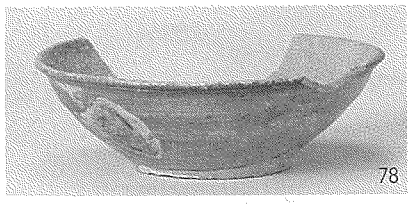
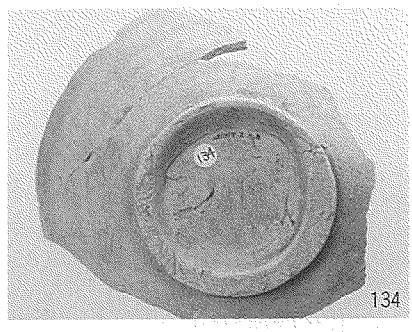
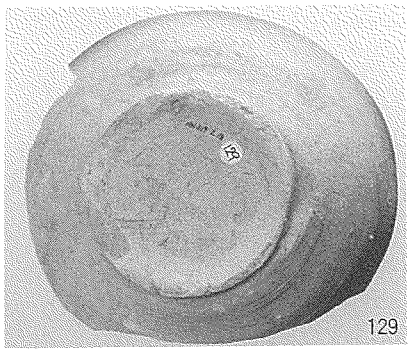
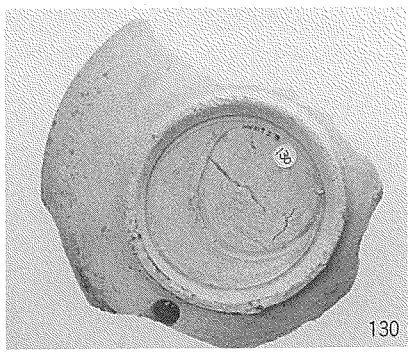
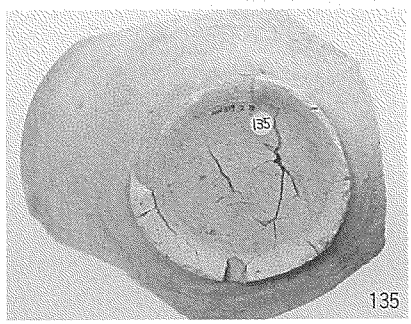
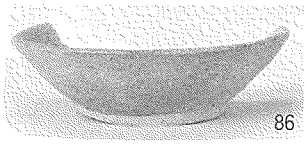
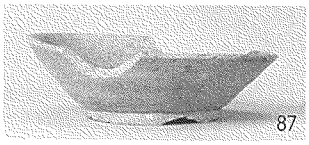
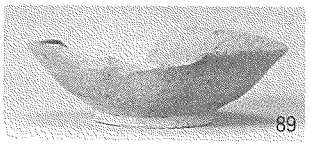
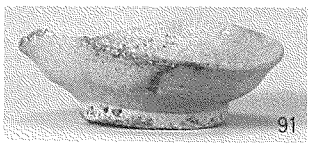
68

69

70

71

72

73

74

78

134

129

130

135

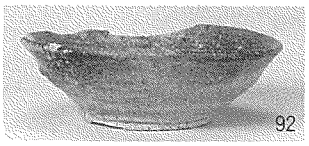
写真　碗 2

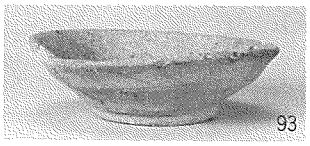

86

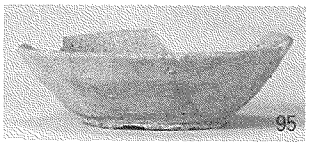

87

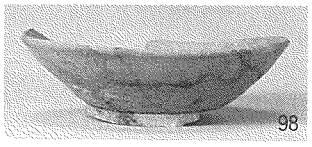

89

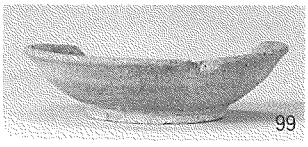

91

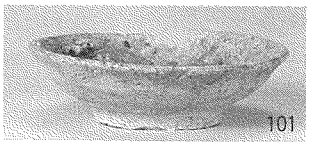

92

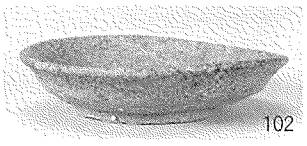

93

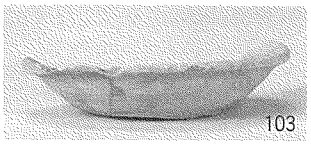

95

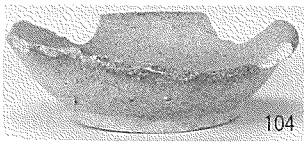

98

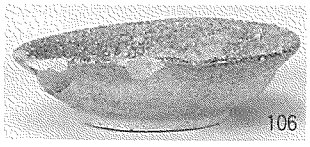

99

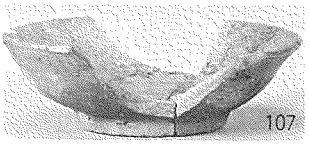

101

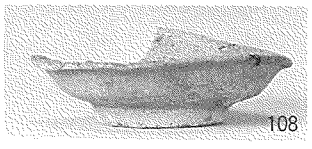

102

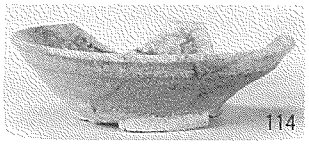

103

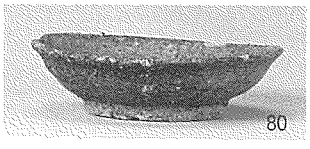

104

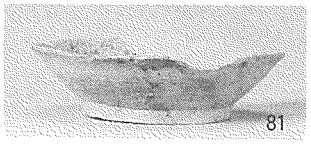

106

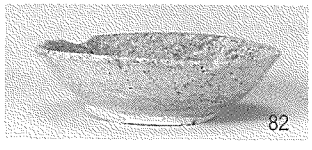

107

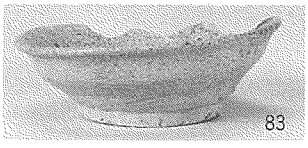

108

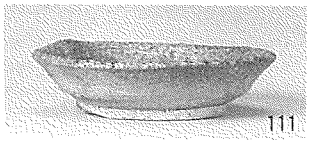

114

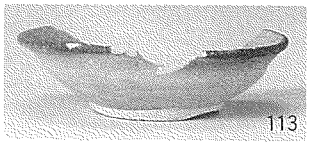

80

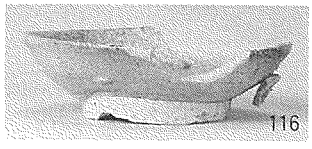

81

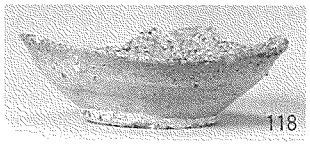

82

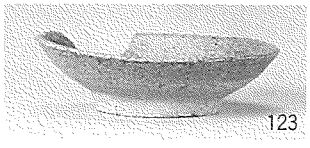

83

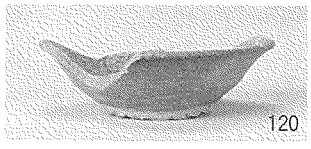

111

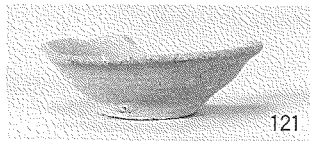

113


116

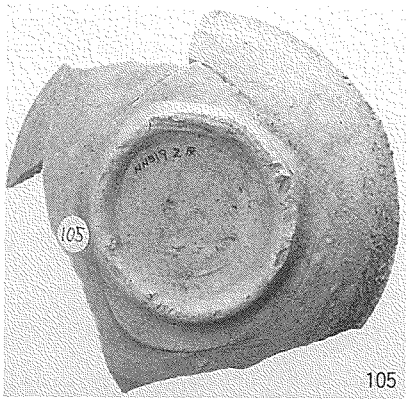

118

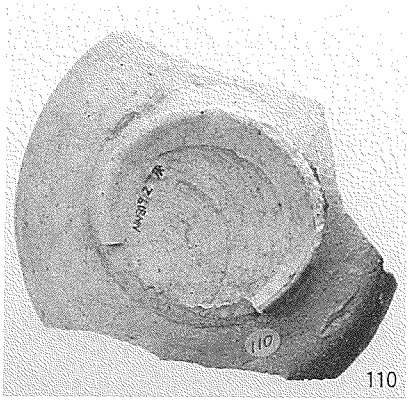

123

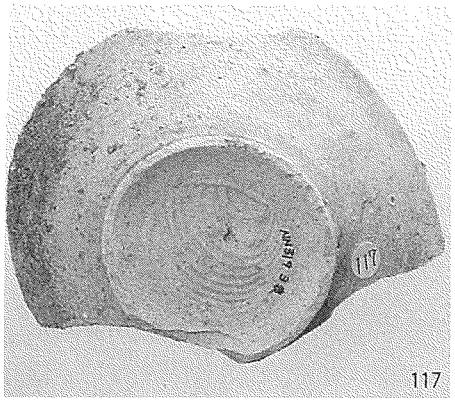

120

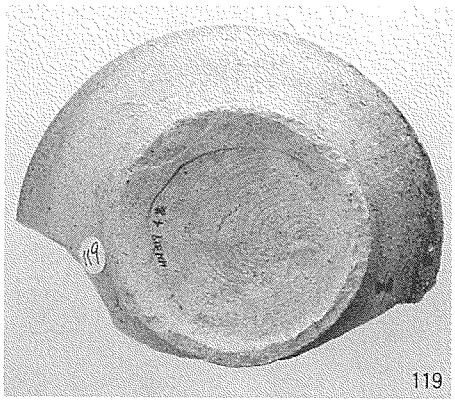

121

88


105


110


117


119

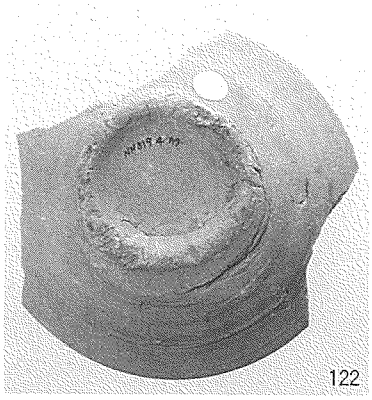
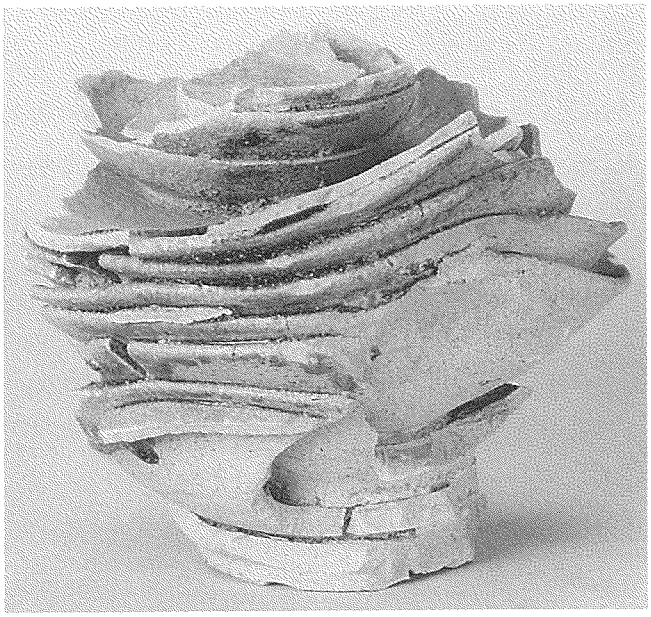
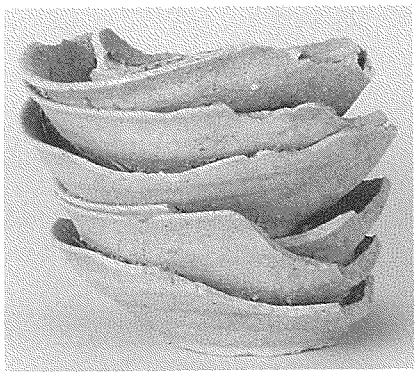

122

写真　小碗





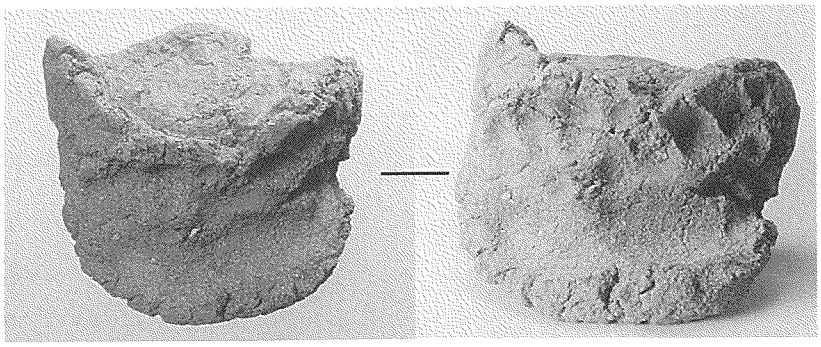


写真　重ね焼き　焼台

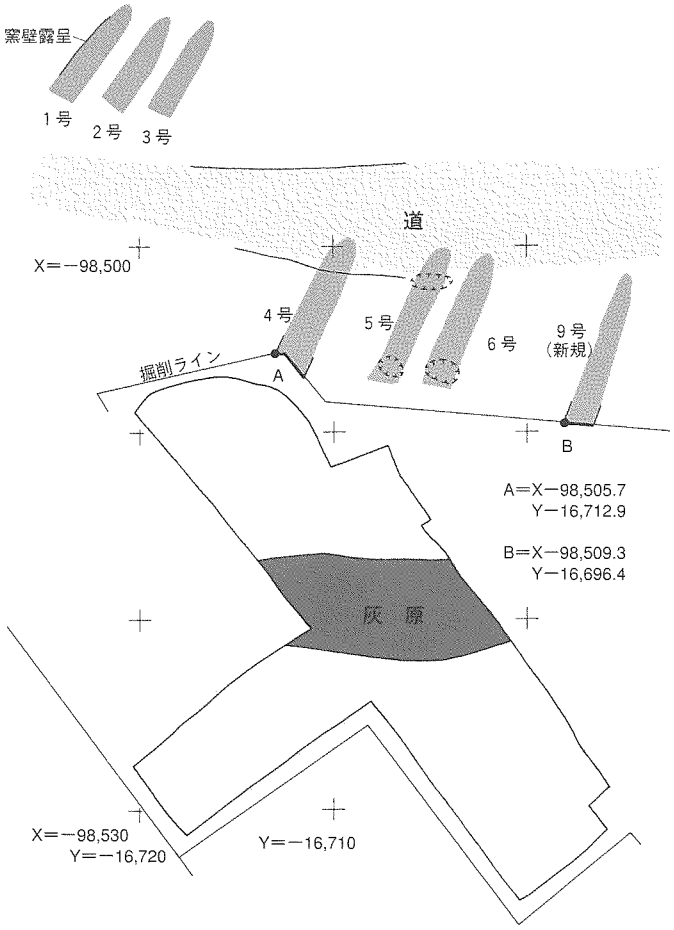
付　緊急調査

建設工事の始まった７月、当該地内にて古窯の断面が見えているとの連絡を受けた。窯本体には工事が及ばないはずのため、急いで現地を確認したところ、露呈した窯体はこれまでわかっていた７基より、さらに北側であることが判明した。三渡俊一郎氏が推定した３号窯と４号窯の中間の８号窯とも位置が違うため、新規の９号窯とした。これ以上の掘削は行わないとのことから、写真撮影と断面図（第12図）の作成、そして窯の位置を測量し終了とした。

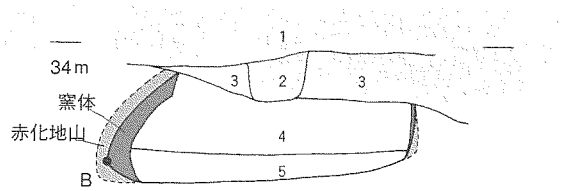
ところが、10月にまた別の地点で窯体断面が見えているとの連絡を受けた。今度は施工方法の変更により予定より数ｍ奥へ掘削が及んだためであり、設計・施工の両業者に厳重注意した。これ以上の掘削は行わない確約の上、写真撮影と断面図（第13図）の作成、窯体位置の測量をもって終了とした。測量の結果、露呈した断面は昭和42年に吉田富夫氏が調査した４号窯の一部であることがわかった。

９号窯（新規）幅1.6ｍ、高さ55cmの規模を測る。窯体は左右の壁に１面あったが、底には硬化面や赤化土無い。

４号窯　斜めにカットされている可能性が高いが、幅1.9ｍ、高さ55cmの規模を測る。窯体は左右の壁に１面であったが、被熱のための硬化した地山は底にもいたっている。

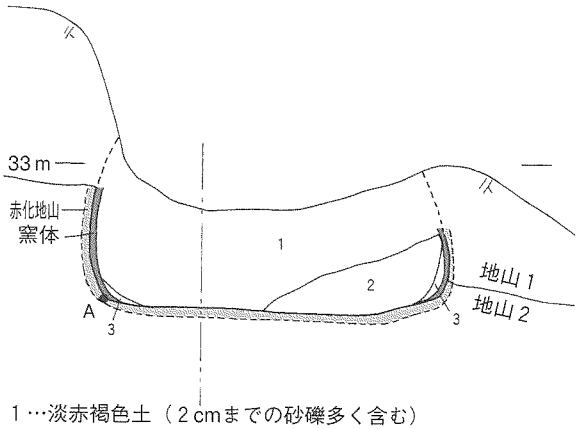


第11図　NN319号窯群位置図（１：400）



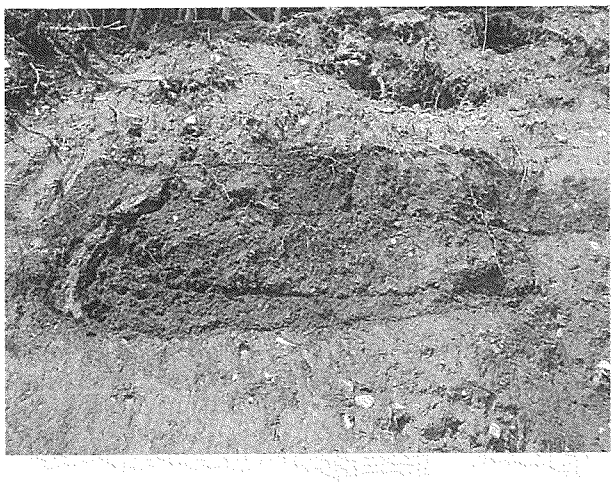
1…灰色砂礫層
2…黒色炭化物層
近現代
3…赤褐色粘質土層（灰色ブロック土多く含む）
4…赤灰色土（灰色・赤褐色ブロック土多く含む、窯体カス・焼台含む）
5…暗色色土（炭化物多く含む。灰色・褐色ブロック土多く含む。下位に窯体片わずか）

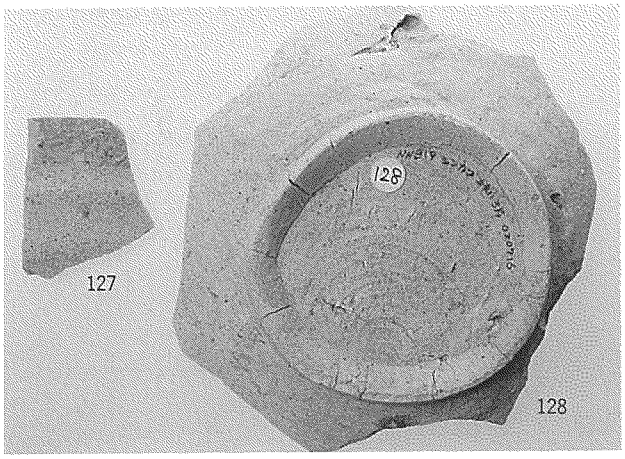
第12図　９号窯（新規）断面図（１：40）

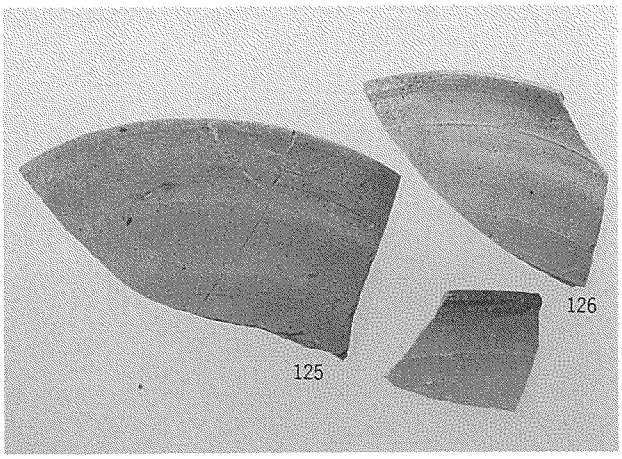


1…淡赤褐色土（２cmまでの砂礫多く含む）
2…淡赤褐色土（窯体片多く落ち込む）
3…黒色炭化物層
地山１…淡赤褐色砂礫土
地山２…灰色白～黄褐色砂質土

第13図　４号窯断面図（１：40）







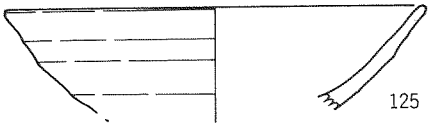
写真

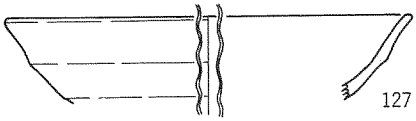
上　9号窯

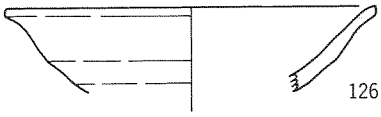
中　4号窯

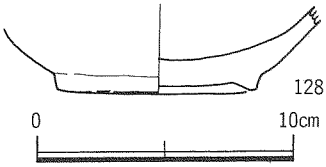
右下　9号窯内遺物

左下　4号窯内遺物

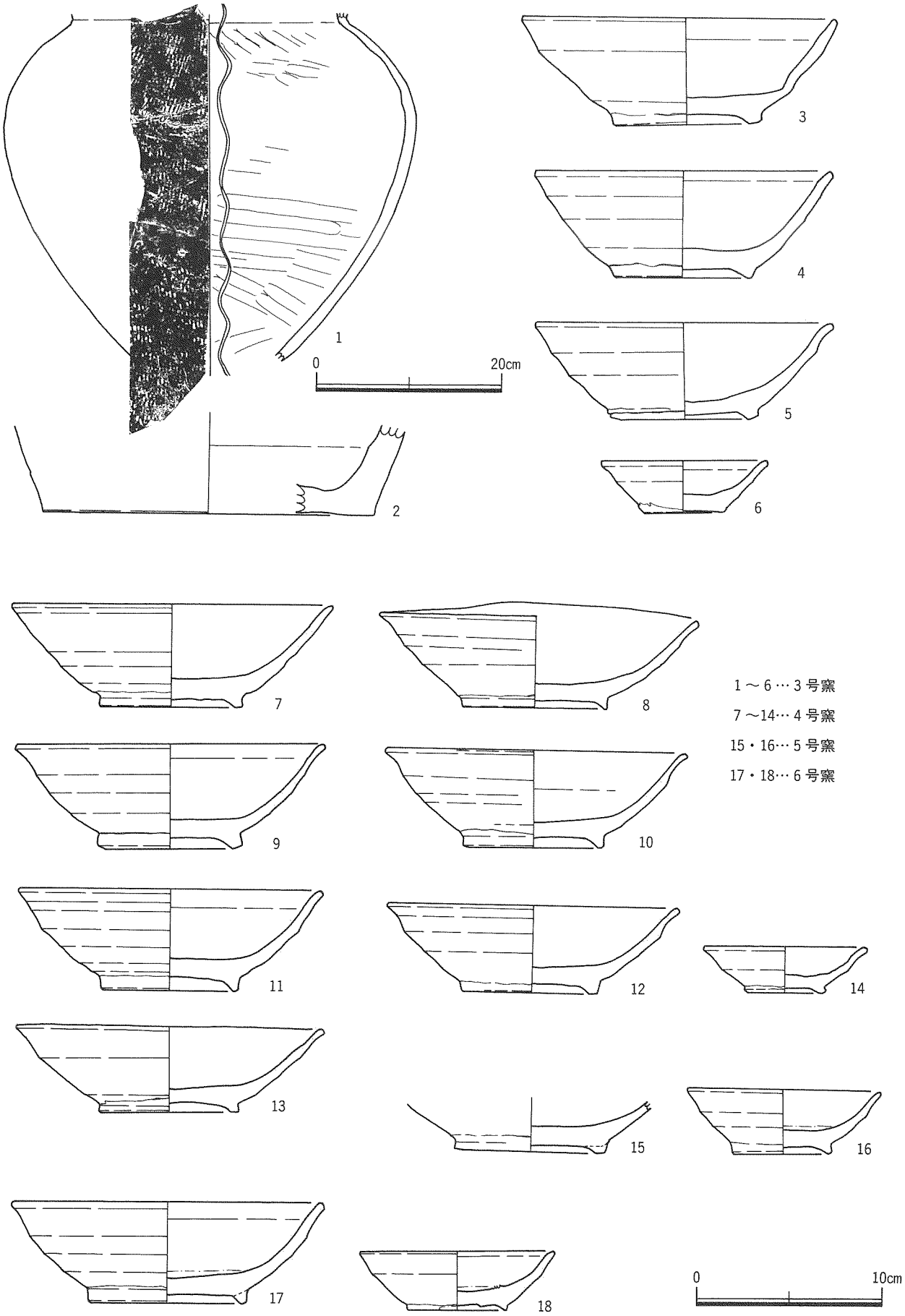








第14図　4号窯内（125・126）9号窯内（127・128）出土遺物（1：3）



第15図　昭和42年調査時の出土資料

報 告 書 抄 録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	尾張元興寺跡第10次・伊勢山中学校遺跡第10次・津賀田古墳・戸田遺跡・NN319号窯群
巻　次	48
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	62
編著者名	木村有作・服部哲也・伊藤厚史・藤井康隆・伊藤正人・新美倫子・小野映介・鬼頭剛・藤根久・古橋美智子
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026　名古屋市南区見晴町47　TEL 052-823-3200　FAX 052-823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508　名古屋市中区三の丸三丁目１番１号　TEL 052-972-3268
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おわりがんごうじあと 尾張元興寺跡	なかくまさき 中区正木4-908	23100	7-22	35° 8′ 33″	136° 53′ 53″	2002.1.10 ～2002.2.26	120m²	個人住宅
いせやまちゅうがっこういせき 伊勢山中学校遺跡	なかくまさき 中区正木3-901-4	23100	7-20	35° 8′ 46″	136° 53′ 50″	2002.7.17 ～2002.8.16	110m²	個人住宅
つがたこふん 津賀田古墳	みずほくつがたちょう 瑞穂区津賀田町 2-75・76	23100	11-41	35° 7′ 23″	136° 55′ 55″	1998.6.1 ～1998.8.28	290m²	土地造成
とだいせき 戸田遺跡	なかがわくとだ 中川区戸田2-2016-1	23100	13-23	35° 8′ 19″	136° 48′ 24″	2002.11.5 ～2002.12.6	80m²	個人住宅
えぬえぬ319ごうかまぐん NN319号窯群	てんぱくくつちはら 天白区土原1	23100	10-65	35° 6′ 54″	136° 58′ 49″	2002.4.1 ～2002.5.24	300m²	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾張元興寺跡	寺院跡	古墳～近世	竪穴住居跡・土坑	瓦・土師器・須恵器・近世陶磁器類	第10次調査
伊勢山中学校遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡	土師器・須恵器	第10次調査
津賀田古墳	古墳	古墳時代	木棺直葬	鉄器・須恵器	
戸田遺跡	散布地 貝塚	中世・近世	溝・土坑・井戸・貝塚	陶磁器・井戸桶(曲物)・鉄器・土錘・火打石	
NN319号窯群	古窯	平安時代	灰原	陶器	

名古屋市文化財調査報告62

埋蔵文化財調査報告書48

尾張元興寺跡（第10次）
伊勢山中学校遺跡（第10次）
津賀田古墳
戸田遺跡
NN319号窯群

2003年３月31日

編集　名古屋市見晴台考古資料館
名古屋市南区見晴町47番地
TEL 052-823-3200
発行　名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目１番１号
TEL 052-972-3268
印刷　西濃印刷株式会社